熊本県文化財調査報告　第46集

車塚古墳
川田京坪遺跡
川田小筑遺跡
塩塚古墳

1980

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第46集

車塚古墳
川田京坪遺跡
川田小筑遺跡
塩塚古墳

1980

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では九州縦貫自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋〜八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代市の「車塚」、「川田京坪遺跡」、「川田小筑遺跡」に関するものであります。この遺跡群は八代平野の微高地に立地するもので、とくに川田京坪遺跡からは古代の高田郷に関連するとみられる「川大」の文字を書いた土器がみつかり、古代史究明の重要な手がかりを得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸せです。

発掘調査の実施に当たりましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。

ここに心からお礼を申しあげます。

昭和55年3月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

調査に至る経緯

九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋〜八代）建設計画にともない、熊本県教育委員会では、昭和46年度に国庫補助を受けて計画地内の幅200mの範囲について文化財分布調査を実施し、松橋〜八代間に33カ所をチェックした。その時点では、八代市川田町では車塚（前方後円墳・東川田）だけが対象であった。『九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋〜八代）文化財分布調査報告書』（熊本県教育委員会　昭和46年3月）によると「国道3号の西、水田の中にある古墳で墳形は甚しく変貌していて、原形を殆んど留めないが、もともとは前方後円墳で、現在残っているのは後円部が主である。圃場整備事業によって周溝の形がわかりにくくなったが、長さ約40m、幅約20mの前方後円墳であったと思われる。」と記載されている。その後、路線が決定された段階で、昭和49年2月文化課が再度踏査したところ、車塚の墳丘は路線外にあるが、周溝の一部がかかると考えられた。この踏査の際車塚の南方で、新たに土師器片の散布する地点が2カ所あり、川田遺跡・片町遺跡として登録した。しかし、両遺跡は字名からそれぞれ川田京坪遺跡、川田小筑遺跡と改名した。

発掘調査は熊本県教育庁文化課が実施し、調査組織は下記のとおりである。（隈）

調査責任者	岩崎　辰喜	文化課長
	合志　太助	前文化課長
調査総括	隈　　昭志	文化財調査係長
調査員（車塚）	江本　　直	学芸員
〃（京坪）	野田　拓治	学芸員
〃（小筑）	高木　正文	学芸員
整理	上野　辰男	主幹
	山城　仁恵	嘱託
調査事務局	田辺　宗弘	課長補佐
	真弓袈裟勝	前課長補佐
	村上　孝司	管理係長
	望野　正雄	前管理係長
専門調査員	内藤　芳篤	長崎大学教授（医学部解剖第二教室）
	松下　孝幸	同　助手
	村上　豊喜	県立人吉高等学校教諭
陶磁器調査	馬場　　強	長崎県立美術博物館調査員
植物遺体調査	吉田喜久子	尚絅高校教諭

車　塚　古　墳

——八代市川田町東所在古墳の調査——

例　言

1. この報告書は、昭和52・53年度に日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査として実施した八代市川田町東、車塚古墳の発掘調査に関する報告である。
2. 発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり実施したもので、調査及び本稿の執筆・編集は江本直があたった。
3. 調査地での測量及び実測は豊崎晃一・沢田宗順・江本が行った。
4. 写真撮影は江本が行い、遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫で行った。出土した遺物は熊本県文化財収蔵庫に保管している。

（江本）

本　文　目　次

例　言……1
Ⅰ　調査の経過……5
Ⅱ　遺物の立地と環境……7
Ⅲ　調　　査……10
1.　トレンチの設定……10
2.　各トレンチ調査の結果……11
3.　墳丘について……22
4.　Ｂトレンチについて……22
5.　Ｃトレンチについて……23
6.　出土遺物……31
Ⅳ　ま　と　め……34

挿　図　目　次

第１図　車塚古墳位置図……6
第２図　車塚古墳と各トレンチ位置図……9
第３図　Ａ-１・Ａ-２トレンチ層位図……12
第４図　Ｅ-00・Ｅ-20・Ｅ-40トレンチ層位図……14
第５図　Ｅ-80・Ｃ-00・Ｃ-20トレンチ層位図……16
第６図　Ｃ-20・ＥＣ-00・ＥＣ-20トレンチ層位図……18
第７図　ＥＣ-20・ＣＷ-06・ＥＣ-40・ＣＷ-20トレンチ層位図……20
第８図　車塚古墳墳形図……22
第９図　Ｂトレンチ南側断面図（１）……24
第10図　Ｂトレンチ南側断面図（２）……24
第11図　Ｂトレンチ遺物出土状況実測図 (1)……26
第12図　Ｂトレンチ遺物出土状況実測図 (2)……26
第13図　Ｃトレンチ西側断面図（１）……28
第14図　Ｃトレンチ西側断面図（２）……28
第15図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図 (1)……30

第16図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図 (2)……30
第17図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図 (3)……30
第18図　Ｂトレンチ出土土器実測図 （１～６）……33
第19図　Ｂトレンチ出土土器実測図 （７～９）……34

図 版 目 次

図版１　上：竜峰山から見た車塚……36
　　下：北側から見た車塚……36
図版２　上：前方部方向から見た車塚……37
　　下：Ｃトレンチの調査風景……37
図版３　右：Ｂトレンチの調査風景……38
　　左：Ｂトレンチ南側壁面の清掃作業……38
図版４　上：前方部方向から見た車塚・Ｂトレンチ設置場所……39
　　下：Ｂトレンチ調査終了後……39
図版５　右：Ｂトレンチ調査終了（墳丘側から）……40
　　左：Ｂトレンチ南側層位……40
図版６　上：周溝（墳丘側から）……41
　　下：周溝と南側層位……41
図版７　上：周溝落ち込み部分……42
　　下：周溝中央部……42
図版８　上：周溝中央部……43
　　下：周溝中央部……43
図版９　上：植物遺体……44
　　下：植物遺体……44
図版10　上：植物遺体……45
　　下：植物遺体……45
図版11　上：植物遺体……46
　　下：植物遺体……46
図版12　上：植物遺体……47
　　下：植物遺体……47
図版13　上：車塚の墳丘とＣトレンチ……48
　　下：Ｃトレンチ（墳丘側から）……48

図版14　右：Ｃトレンチ土器出土状況……49
左：Ｃトレンチ土器出土状況……49
図版15　上：Ｃトレンチ土器出土状況……50
下：Ｃトレンチ土器出土状況……50
図版16　上：Ｃトレンチ土器出土状況……51
下：Ｃトレンチ土器出土状況……51
図版17　上：Ａ－１ トレンチ土層 ……52
下：ＥＣ-20 トレンチ土層 ……52
図版18　上：Ｃトレンチ土層……53
下：Ｃトレンチ土層……53
図版19　上：ＣＷ-06 トレンチ土層 ……54
下：ＣＷ-20 トレンチ土層 ……54
図版20　上：ＥＣ-00 トレンチ調査風景 ……55
下：Ｅ-00 トレンチ ……55
図版21　右：ＥＣ-00 トレンチ土層 ……56
左：ＥＣ-20 トレンチ土層 ……56
図版22　右：Ｅ-20トレンチ、Ｃ-00トレンチ（南側から）……57
左：Ｃ-20トレンチ、Ｃ-00トレンチ（南側から）……57
図版23　右：ＣＷ-20トレンチ（手前）……58
ＥＣ-20トレンチ（西側から）……58
左：Ｅ-20トレンチ、Ｅ-40トレンチ（北側から）……59
図版24　右：ＥＣ-40 トレンチ ……59
左：Ｅ-20 トレンチの 調査風景……60
図版25　Ｃトレンチ出土土器（１～６）……60
図版26　上：Ｃトレンチ出土土器（７～９）……61
下：Ｂトレンチ出土植物遺体……61

Ⅰ 調査の経過

昭和53年１月23日、調査地にプレハブを建設し、翌１月24日発掘器材を熊本県文化財収蔵庫から運び発掘調査を開始する。

調査地は九州縦貫自動車道東側幅杭と二本の直行する農道とに挟まれた三角形を呈する水田である。最初の作業として全体を網羅するように13本のトレンチを設定した。

１月中はＡ－１・Ａ－２トレンチの掘り込みを行う。

２月はＣ－00・Ｃ－20・ＣＷ－20・Ｅ－00・Ｅ－20・Ｅ－40・ＥＣ－20・ＥＣ－40トレンチの掘り込みを行った。これらの作業と並行して、すでに１月中に掘り終えたＡ－１・Ａ－２トレンチの土層の実測と写真撮影をまず行った。次いで、掘り込みの終了したトレンチから順次、土層の実測と写真撮影を行っていった。300分の１の縮尺による平板測量も終えておいた。

３月上旬には、12本のトレンチの掘り込み作業や土層の実測・写真撮影・それに車塚古墳の100分の１の縮尺による墳形図を終えることができた。

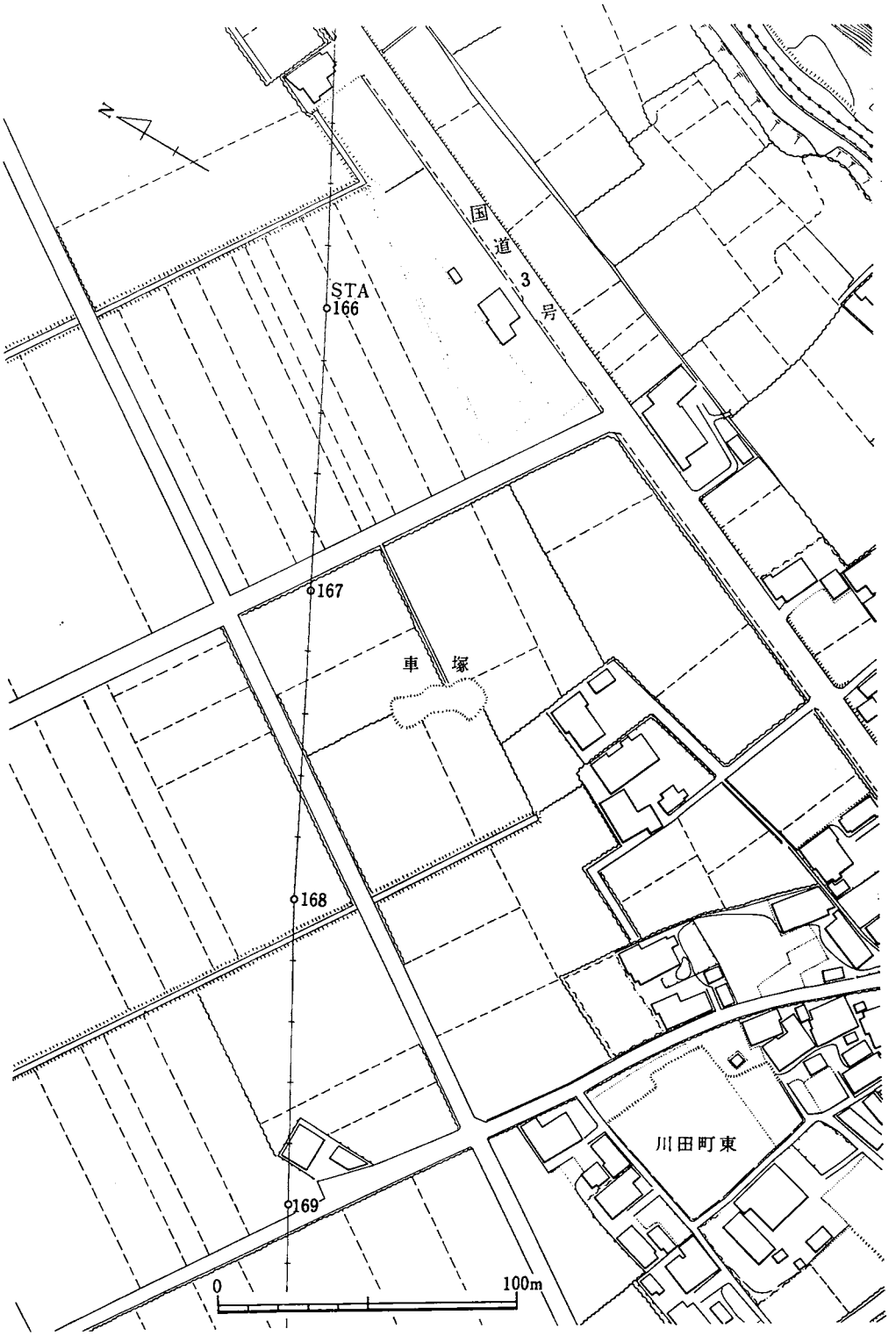
以上のように調査を行って来た結果、12本のトレンチのいずれからも顕著な遺構や遺物は出土せず、当初懸念された車塚古墳の周溝も路線内までは伸びていないことが判明した。

３月３日、土地所有者の承諾を得て、新たにＢ・Ｃトレンチを設定して、車塚古墳の周溝を確認することになった。

３月６日にＢトレンチを設定し、掘り込み作業をはじめた。結果的には前方部西側に周溝を検出した。周溝の西側の周縁は東側道路幅まで約１ｍに近接したところであった。３月下旬から４月中旬にかけては、年度末、年度始めのためいくぶん調査の中断があった。Ｂトレンチで検出した周溝からは植物遺体が多く出土した。細片であるが土器片も出土し、写真撮影・実側作業を残すだけであったが、心ならずも土器片だけが盗難にあってしまった。

４月中旬にはくびれ部と考えられたところに北に向って設けたＣトレンチでも周溝の存在を確認した。周溝からは土器片も出土した。遺物の出土状況や土層の実測を行い、写真撮影を続いて行った。４月21日には遺物の取り上げを行い一部埋め戻し作業を行った。

４月24日・25日、Ｂ・Ｃ両トレンチの埋め戻し作業を進め、25日午前中にすべての作業を終了した。午後、器材と遺物を整理し熊本県文化財収蔵庫に運び発掘調査を終了する。



第1図 車塚古墳位置図

Ⅱ 遺跡の立地と環境

車塚古墳の行政区は熊本県八代市川田町東である。国土地理院昭和51年10月発行「八代」に求めれば図幅の北から33.3㎝、東から17.3㎝にあたる。九州縦貫自動車道は「熊本インターチェンジ」から「御船インターチェンジ」「松橋インターチェンジ」を過ぎる。ついで下益城郡松橋町、小川町、八代郡竜北町、宮原町を過ぎ八代市にはいる。「松橋インターチェンジ」を過ぎて八代市に至る間は山麓づたいのルートである。やがて、八代市興善寺町を過ぎると国道3号と交差し水田地帯へと姿を伸ばし、滑るようにして「八代インターチェンジ」へとつながる。この九州縦貫自動車道と国道3号とが交差するところが、八代市川田町東で、交差して水田を約200m過ぎた左側に車塚古墳は存在している。

九州縦貫自動車道建設に係る埋蔵文化財の事前の発掘調査が行われた遺跡が近くに多くある。北には興善寺四郎丸・馬場・志水遺跡[註1]があり、南には川田京の坪・小築遺跡[註2]があり、昭和51年から53年にかけて熊本県教育委員会が発掘調査を行っている。興善寺馬場遺跡は奈良時代〜平安時代の寺院が建立されていたとされるところで、発掘調査によって築地跡と思われる遺構が検出され、多くの布目瓦や土器が出土している。川田京の坪遺跡からは主に平安時代の土器が出土し、近くに住居跡が存在していたことを裏づけしている。

県下有数の水田地帯をなす八代平野は八代海に向かって大きく広がっている。東側は九州山脈の西端にあたる山地がとざしている。山地には城山（282m）、油谷山（541.8m）、竜峰山（517.2m）、八峰山（574m）、八竜山（500m）などが南北につながり、急傾斜しながら海抜3〜4mの平野部と境している。

水田には水稲と藺草が主として栽培され、野菜のハウス栽培も行われている。特に藺草の栽培は盛んで、国内でもっとも高い生産量を誇っている。東側の山麓丘陵一帯には、畑作と果樹栽培が行われている。果樹はほとんどが柑橘類で、八代ザボンや晩白柚は有名である。

このように広大な水田地帯をはじめとした豊かな生産基盤を有し、古くから生活の場とされ、古代の多くの遺跡が見られる。

先年、熊本県教育委員会が実施した九州縦貫自動車道関係の発掘調査によって、立神ドトク遺跡[註3]や岩立C遺跡[註4]から先土器時代遺物が出土しており、今後、先土器時代をはじめとした古代の遺跡数が増加していくに違いない。従来、縄文時代中期から後期にかけての西平貝塚や大野貝塚・有佐貝塚などがよく知られていたが、前記の立神ドトク遺跡や岩立C遺跡、それに平原瓦窯址[註5]や境遺跡[註6]から縄文時代早期押型文土器の出土が確認されている。弥生時代についても境遺跡で住居跡の発掘例があり、これを契機として今後遺跡が増加していくであろう。

古墳時代の遺跡はとくに多く、県下で有数の古墳群地帯を形成している。竜北町に所在する壮大な前方後円墳を有する野津古墳群や大野窟古墳をはじめとした古墳群が、東側山麓丘陵地

一帯にそって南北につながっている。その主なものだけを述べてみれば、宮原町に立神古墳群・早尾古墳群があり、八代市にはいると岡谷川古墳群・岡中古墳群・岡小路古墳群・東川田古墳群・西川田古墳群などがある。さらに南にくだれば片町古墳群や八代大塚古墳・大鼠蔵古墳・小鼠古墳などが知られている。

車塚古墳群は東川田古墳群に含まれている。東川田古墳には、車塚古墳のほか岡塚第１号・第２号古墳、川上第１号・第２号・第３号古墳がある。このほかにもすでに消滅してしまった多くの古墳があり、元々は15基を越える古墳があったものと考えられる。車塚古墳群も３基あったと伝えられるが、現在は１基だけが残っているものである。地元で長く埋蔵文化財の保護に貢献されている中田好則氏の話によれば、現在車塚古墳と呼んでいる古墳はゼニ塚古墳であり、近くに合計３基の古墳が所在していたという。１基は現在の車塚古墳の北約150ｍの地点に存在していたもので、墳形は全く形をなさないが、農道の横に畑地として残っている。一帯の水田より１～２ｍ高く、ミカン畑となっている。残りの１基はさらに北側の水田の中にあったということであるが、圃場整備のため墳丘は全く消滅してしまっており確認できない。

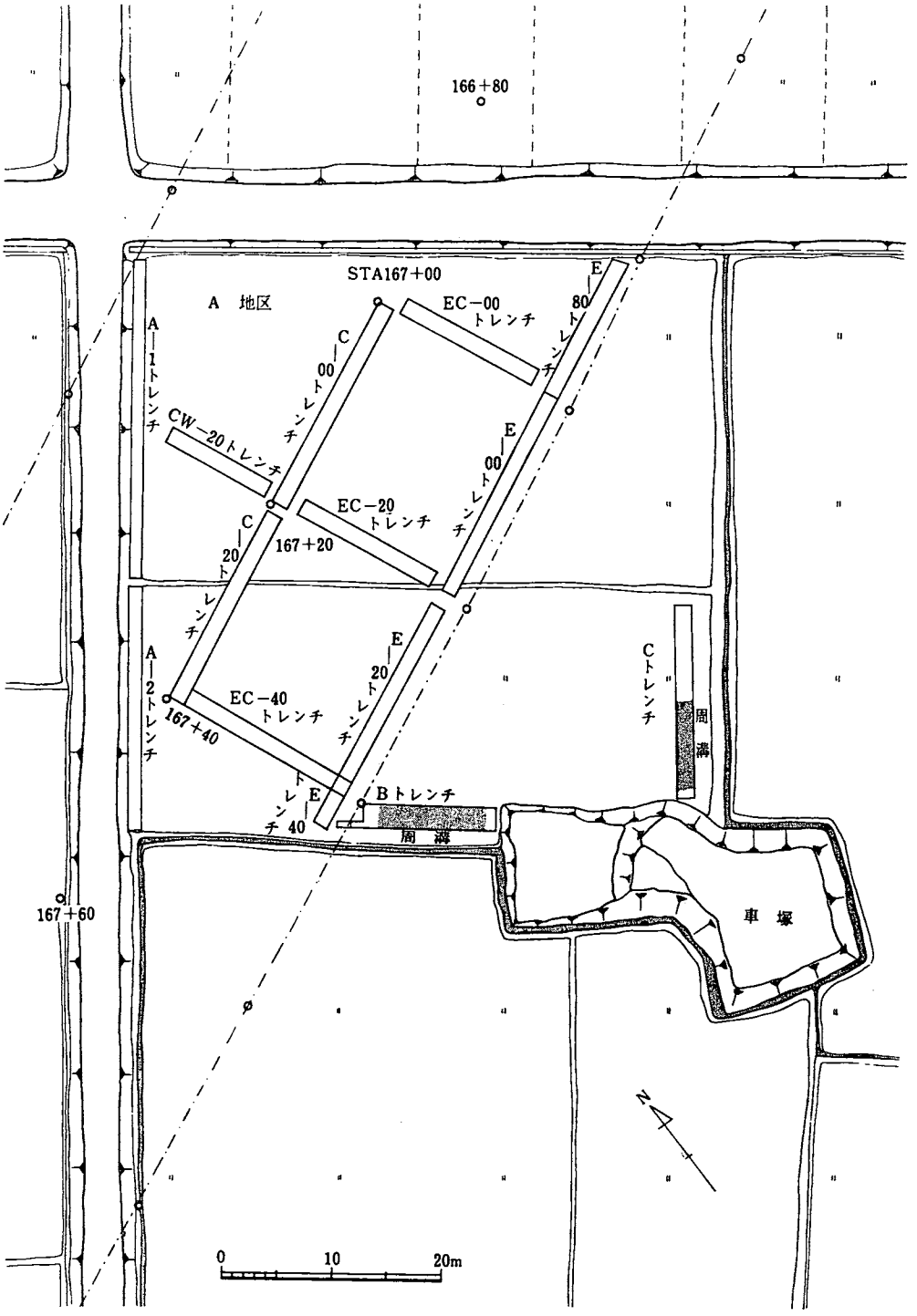
前方後円墳は、前記野津古墳群の物見櫓古墳・姫の城古墳・天堤古墳・中の城古墳・端の城古墳が最も知られている。片町古墳群には八代大塚古墳や高取山古墳・長塚古墳がある。八代大塚古墳は昭和42年に発掘調査が行われている。全長55.8ｍ、後円部径28ｍ、前方部幅49ｍを計り、横穴式石室を有するものと考えられている。くびれ部の周溝の調査によって多くの須恵器や埴輪を出土している。特に女性の頭部の埴輪の出土でよく知られている。

距離的にもっとも近く、関連が深いと思われるのは東川田古墳群にある岡塚第２号古墳である。国道３号のすぐ横に位置している。開墾のため墳丘は著しく壊されている。主軸の長さ約40ｍ、前方部幅約20ｍを計る。

車塚古墳の真東には竜峰山があり、西麓丘陵下に民家が建てられている。国道３号を境に西側に水田が広がる。車塚は国道３号から西側の水田にはいって約100ｍのところにあたる。

註

註１　野田拓治・江本直他「興善寺Ⅰ・Ⅱ」熊本県文化財調査報告第45集　1980
註２　野田拓治・高木正文他本書に報告　1980
註３　橘昌信・江本直他「立神ドック遺跡」熊本県文化財調査報告第35集　1979
註４　村井真輝「五ツ穴横穴群」熊本県文化財調査報告第34集　1979
註５　島津義昭他「平原瓦窯址」熊本県文化財調査報告第40集　1980
註６　村井真輝他「境遺跡」熊本県文化財調査報告第42集　1980



第2図 車塚古墳と各トレンチ位置図

Ⅲ 調　　査

1. トレンチの設定

今回の調査は道路用地内に車塚古墳の周溝が存在するのかどうかということを第一の調査の目的とした。このほかに古代の生活跡遺構等の存在の有無をトレンチを設定して調査することになった。道路公団がすでに設けていた道路用地を示す中心杭・幅杭によれば、調査地は STA 167＋00～ STA 167＋40 と交差する 二本の農道とに挟まれた水田である。 三角形を呈する調査地の総面積は約200㎡で、 全体を網羅するように13本のトレンチを設定した。

南北に走る農道にそってA－1、A－2トレンチとした。東側の幅杭から中心杭へ東西に結ぶものを EC トレンチとし、20mごとにそれぞれ EC—00 トレンチ。EC—20トレンチ、 EC—40トレンチとした。東側の幅杭にそったものをE－00トレンチ、E－20トレンチ、E－40トレンチ、E－80トレンチとした。同じく中心杭にそったものをC－00トレンチ、C－20トレンチとした。 STA 1 67＋20の中心杭から西側のA－1トレンチに接するまで延長したものを CW—20トレンチとした。なお、車塚の周溝を調べるために道路用地外に設けたトレンチは、前方部から西側に設けたものをBトレンチ、くびれ部から北側に設けたものをCトレンチとした。

各トレンチの長さと幅、それに掘り込んだ深さは次のとおりであった。

	長さ	幅	深さ
A－1 トレンチ	28m	×1m	×0.95m
A－2 トレンチ	22m	×1m	×1.28m
E－00トレンチ	20m	×1.5m	×0.75m
E－20トレンチ	17m	×1.5m	×1.26m
E－40トレンチ	3.5m	×1.5m	×0.73m
E－80トレンチ	14m	×1.5m	×0.82m
C－00トレンチ	19m	×1.5m	×0.80m
C－20トレンチ	19m	×1.5m	×0.75m
EC－00トレンチ	13m	×1.5m	×1.05m
EC－20トレンチ	13m	×1.5m	×1.05m
EC－40トレンチ	13m	×1.5m	×1.00m
CW－06トレンチ	8m	×1.5m	×0.95m
CW－20トレンチ	10m	×1.5m	×1.00m
B　トレンチ	12m	×2.0m	×1.05m
C　トレンチ	17m	×1.5m	×0.82m

2. 各トレンチについて

A—1トレンチ・A—2トレンチではいずれも遺構や遺物は認められなかった。東側の断面で土層を説明したい。

第Ⅰ層（17cm）耕作土で黒褐色を呈する。現在の耕作はほとんど機械力を用いたものであるため、地表からくい込む深さは15〜16cm程度で、深いところで20cm程度が撹乱を受けている。

第Ⅱ層（16cm）灰褐色粘質土。第Ⅲ層の茶褐色土が混じっている。小石が混じっている。

第Ⅲ層（7cm）茶褐色粘質土。水田耕作地に多く見られる鉄分が堆積した土質である。鉄分は第Ⅳ層や第Ⅴ層にもしみ込んでいる。

第Ⅳ層（10cm）黒灰褐色粘質土。規則的な堆積状態を示している。

第Ⅴ層（10cm）明灰褐色粘質土。第Ⅳ層と同じく規則的な堆積状態を示し、土質の成分に大きな変化はない。等Ⅲ層の茶褐色の鉄分のしみ込みがうすくなり色調は明るくなり明灰褐色を呈している。第Ⅵ層とも規則的な堆積状態を示している。

第Ⅵ層　青灰色砂礫層、上部はほとんどが砂質と小石である。下部にいくにしたがい礫石が多く混じり、礫石が大きくなっている。礫石はいずれもローリングを受けたもので、丸石である。A—2トレンチにおける第Ⅳ層から第Ⅸ層はほかのトレンチの第Ⅵ層に相当する。第Ⅵ層と第Ⅷ層は砂層であり、第Ⅶ層と第Ⅸ層は砂礫層である。また第Ⅷ層は色調にもいく分変化が見られる。上部が粘質土を多く含んでいる。

EC—00トレンチはA—2トレンチとほぼ同じ状態を示す。第Ⅱ層に土器の細片を含んでいる。細片のため群しくはわからない。第Ⅷ層　第Ⅸ層の砂礫層に鉄分を多く含んだ黄褐色を呈する帯状の層が認められる。

EC—20トレンチ、第Ⅲa層は灰褐色土層で他のトレンチの第Ⅲ層に相当する。第Ⅲb層は第Ⅲa層にくらべて鉄分の含まれる量が少ない。

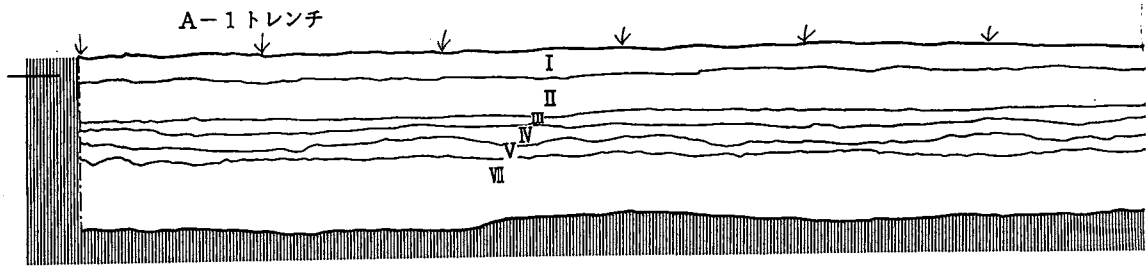
CW—20トレンチ、他のトレンチと同じく規則的な堆積状態を示す。遺物や遺構は認められない。第Ⅰ層から第Ⅲ層までビニールの小片が含まれている。

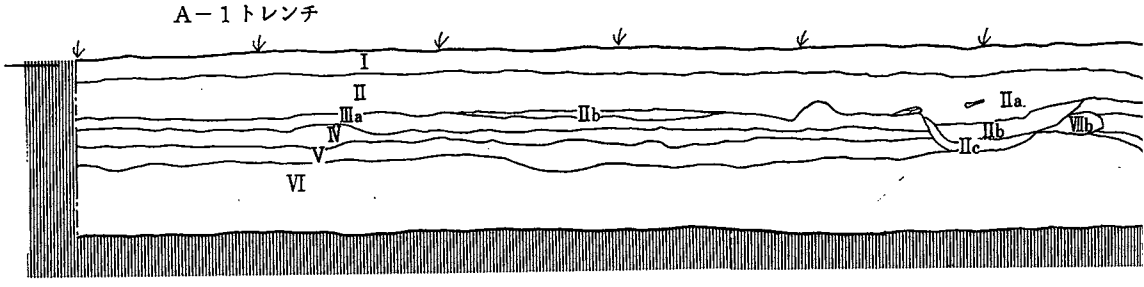
EC—40トレンチ、CW—20トレンチとほとんど同じ層序状態を示している。

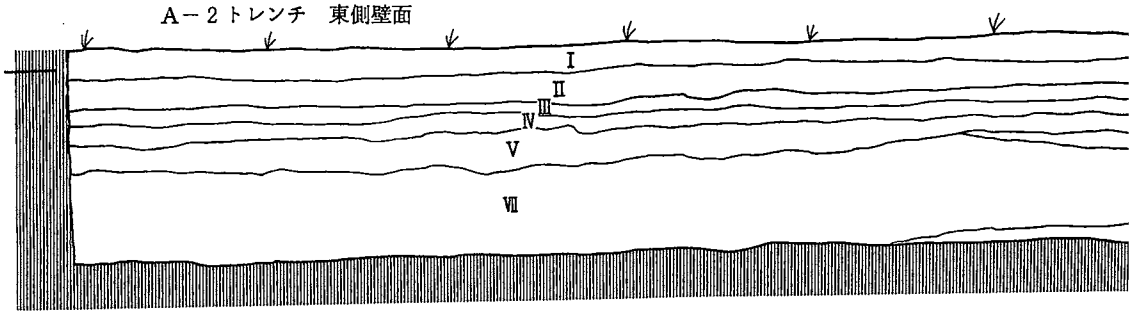
E—00トレンチ、第Ⅰ層から第Ⅴ層までは規則的な堆積状態を示し、他のトレンチと同じである。第Ⅵ層にいく分乱れが見える。第Ⅵa層は砂層で、第Ⅵb層は砂礫層である。第Ⅵa層にはいく分ブロックで土が混じる。第ⅥC層は第Ⅵa層に類以するが、小石や土の混じりが多い。いずれも自然の作用によって生じたものと考えている。

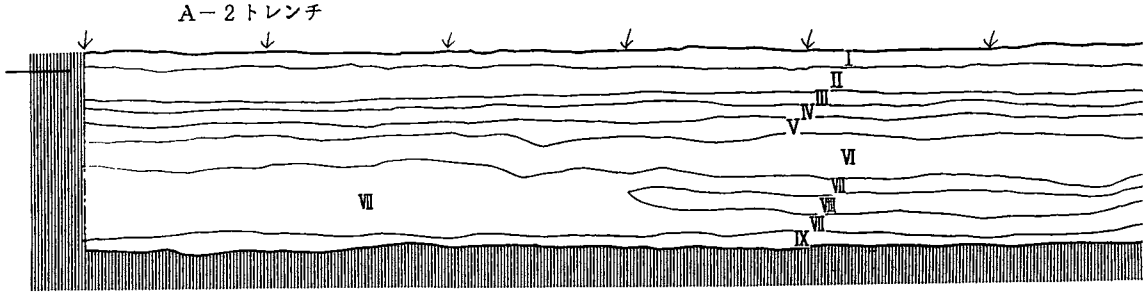
E—20トレンチ、第Ⅰ層から第Ⅵ層まで規則的な堆積状態を示す。E—00トレンチで見られた第Ⅵ層の乱れはなくなっている。

E—40トレンチ、E—20トレンチにひきつづき大きな変化は見られない。第Ⅵ層に一部落ち込みがあった。砂層と砂礫層の違いである。

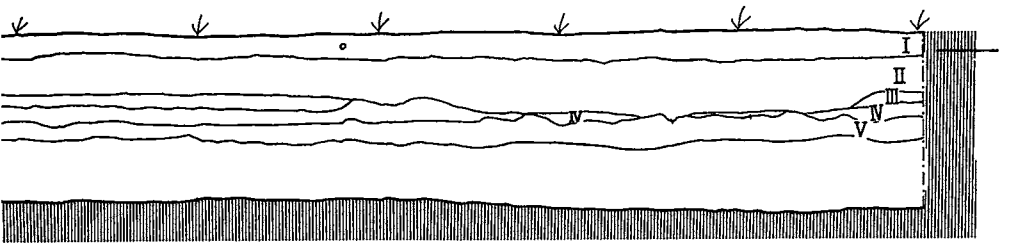

A－1トレンチ
I
II
III
IV
V
VII

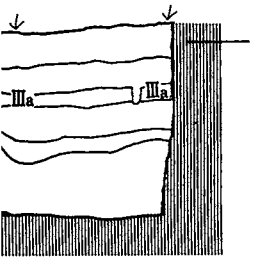

A－1トレンチ
I
II
IIIa
IIb
IV
V
VI
IIa
IIb
IIc
VIIb

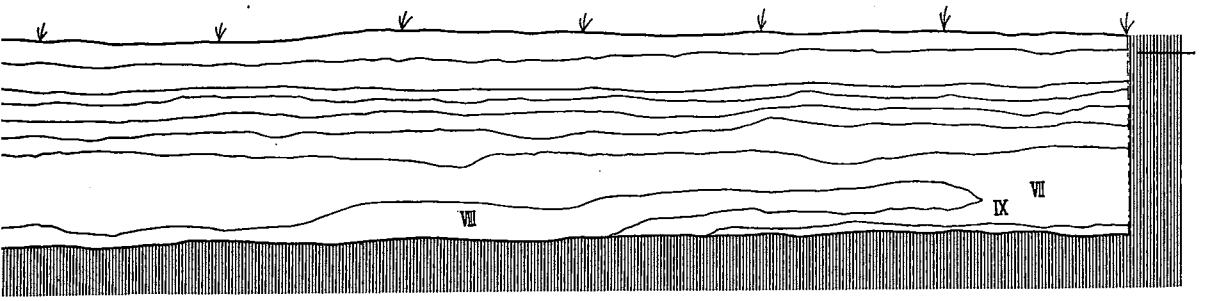

A－2トレンチ　東側壁面
I
II
III
IV
V
VII

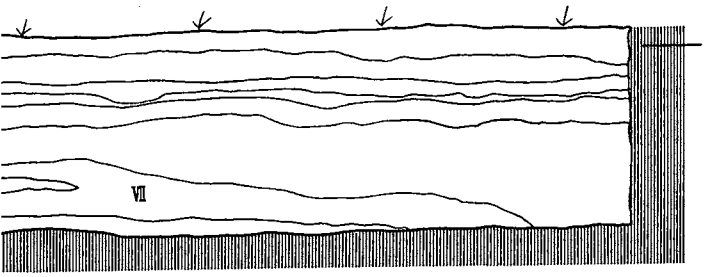

A－2トレンチ
I
II
III
IV
V
VI
VII
VII
VIII
VII
IX

第3図　A－1・A



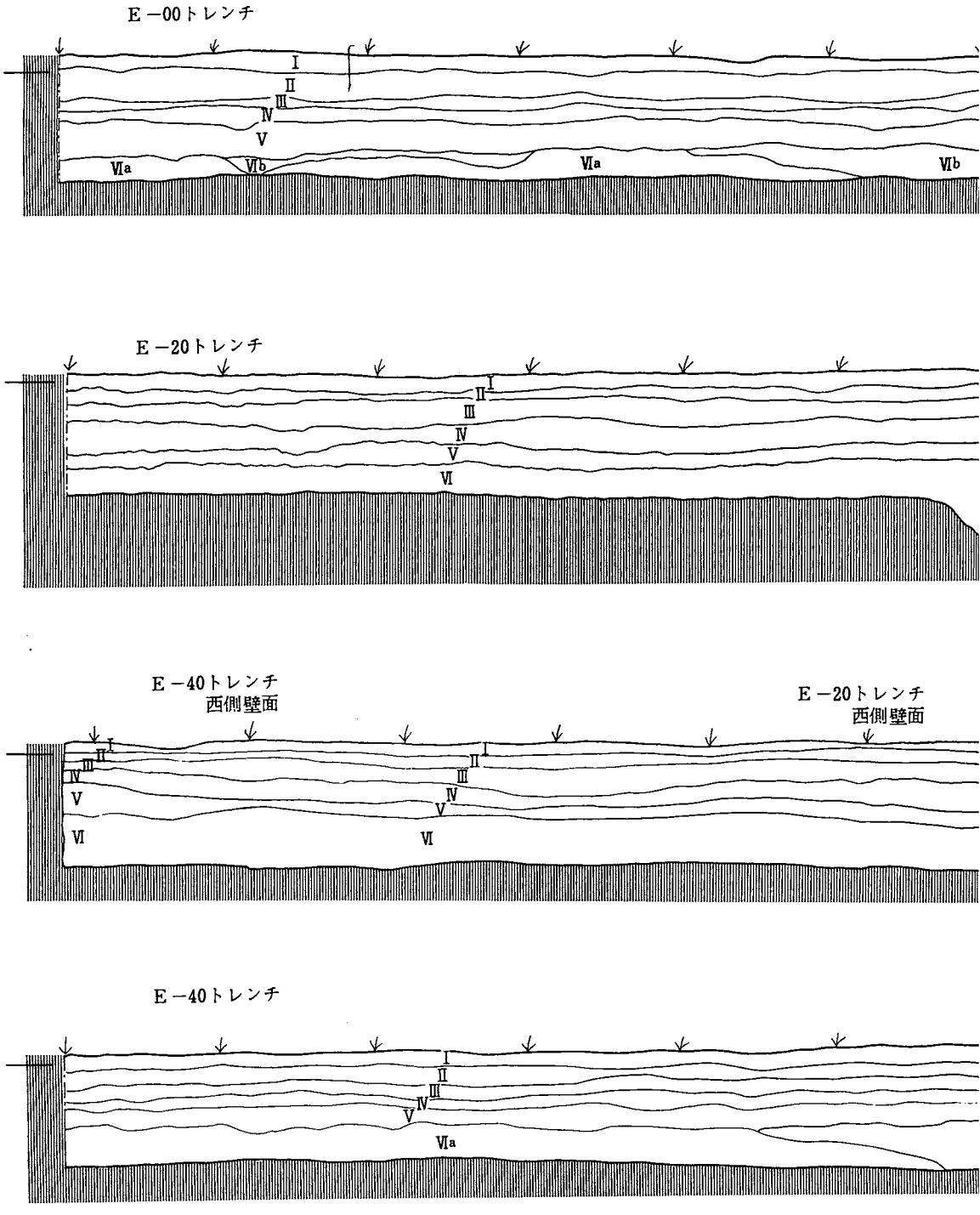






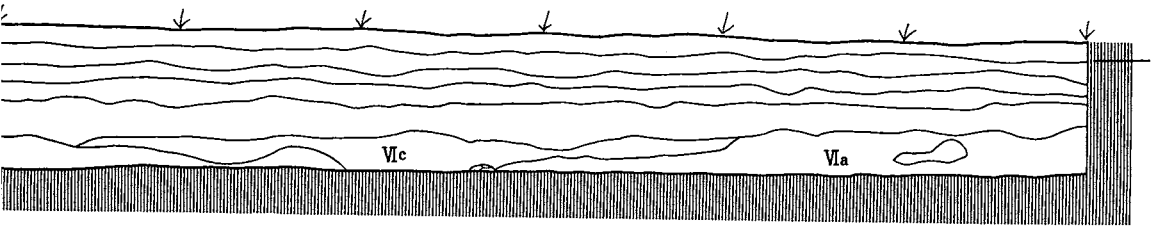
0　　2 m　水系レベル 2.95m

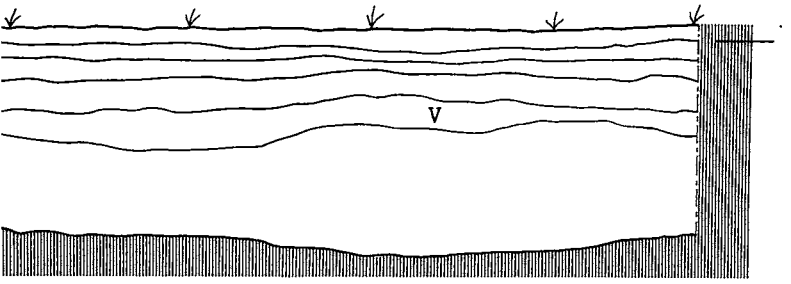
— 2 トレンチ層位図

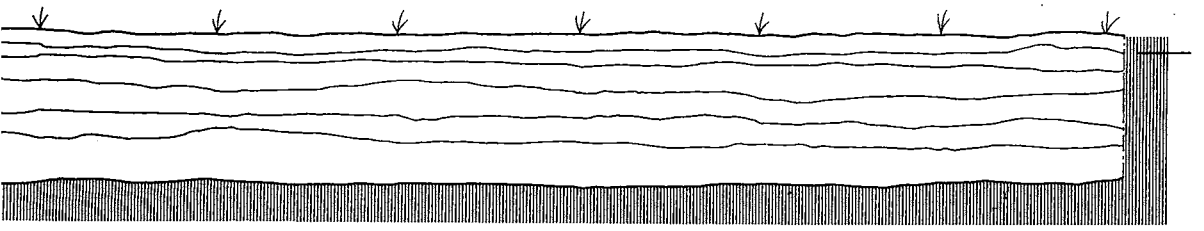

E－00トレンチ
I
II
III
IV
V
VIa
VIb
VIa
VIb
E－20トレンチ
I
II
III
IV
V
VI
E－40トレンチ
西側壁面
E－20トレンチ
西側壁面
I
II
III
IV
V
VI
I
II
III
IV
V
VI
E－40トレンチ
I
II
III
IV
V
VIa

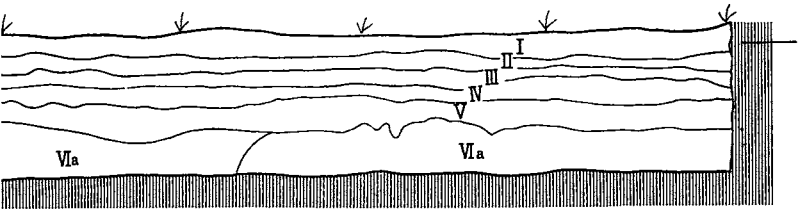
第4図　E－00・E－20

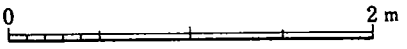
E－80トレンチ　西側壁面







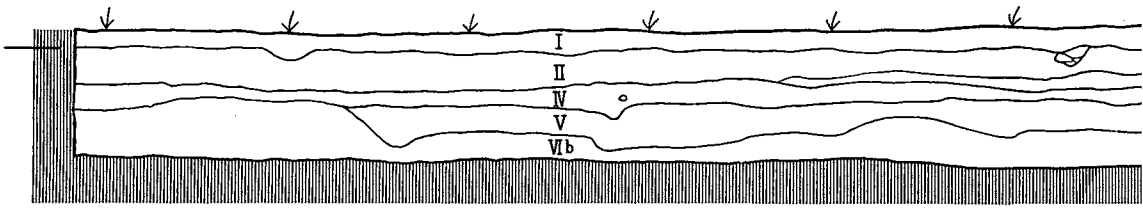




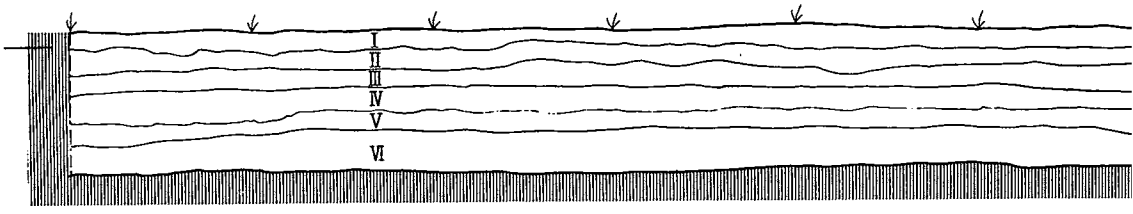
水系レベル 2.95m

・E－40トレンチ層位図

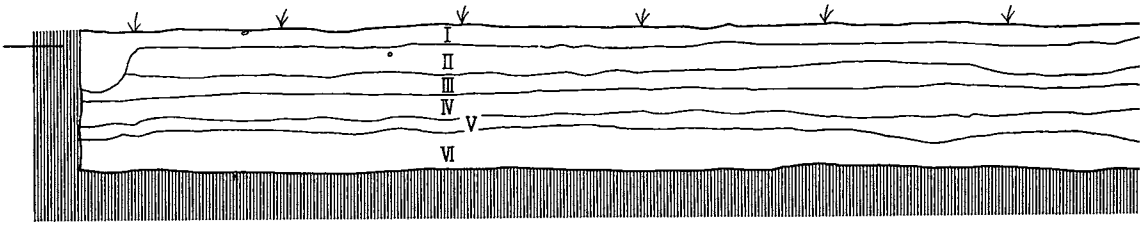
E－80トレンチ西側壁面



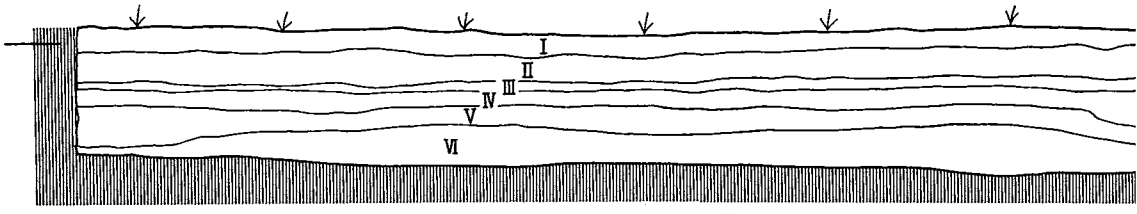
C－00トレンチ



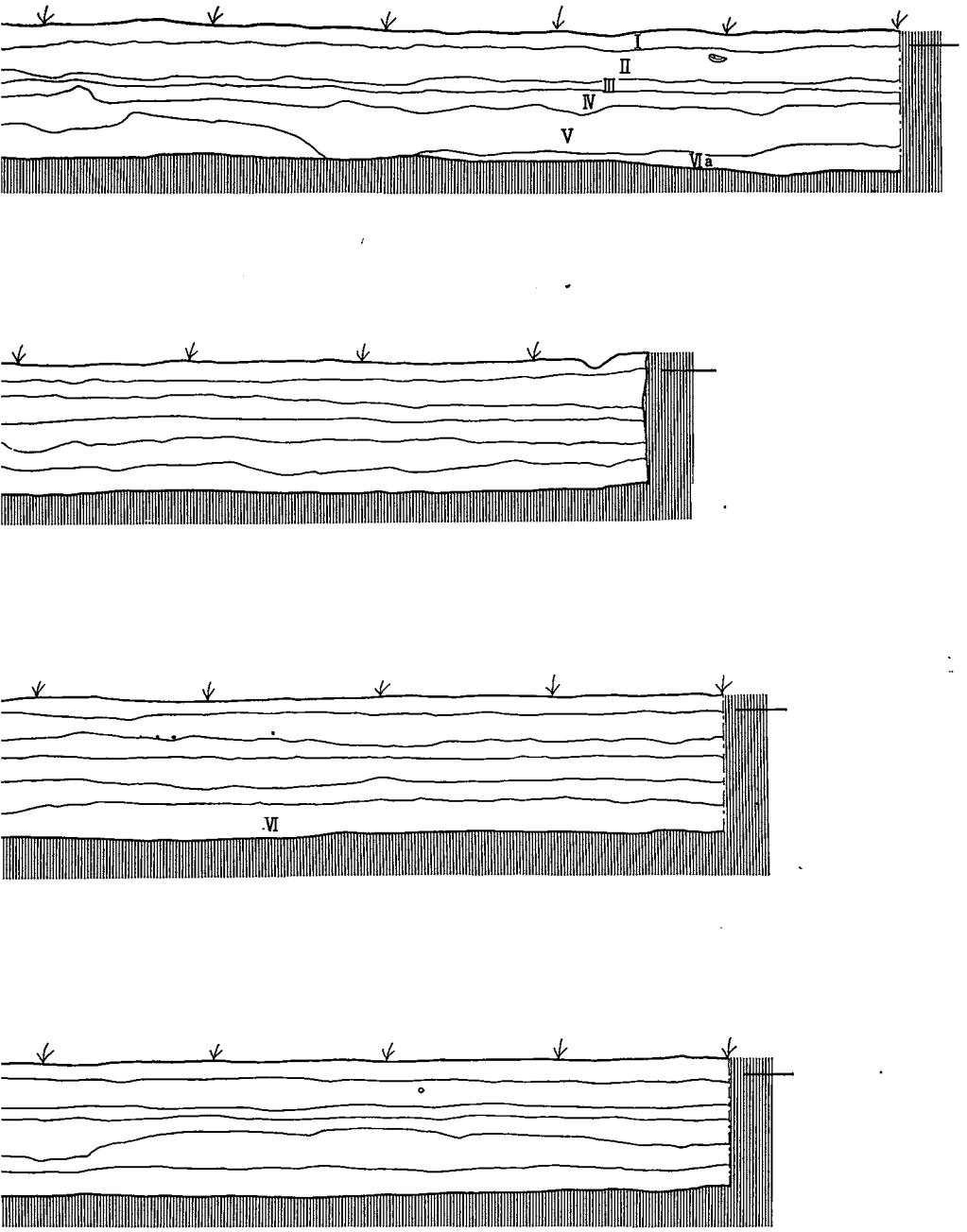
C－00トレンチ西側壁面



C－20トレンチ西側壁面



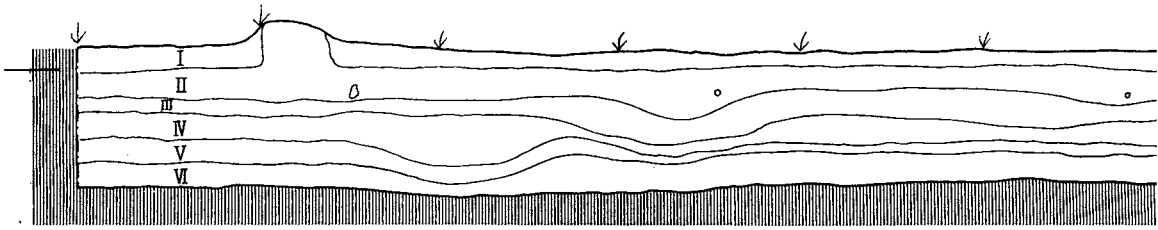
第5図　E－80・C－00・C－



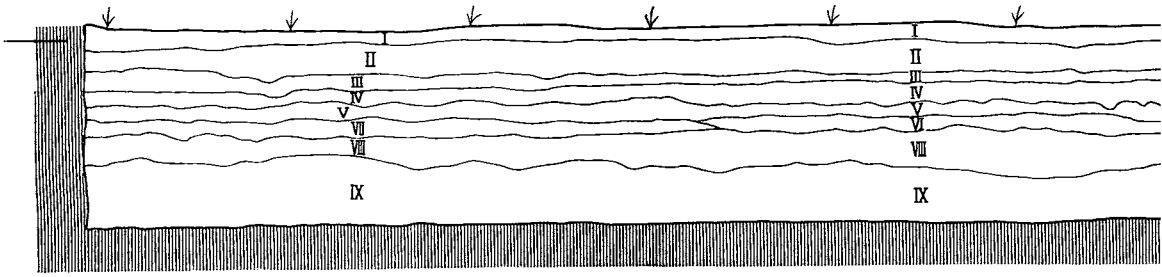
0 1 2m 水系レベル 2.95m

)トレンチ層位図

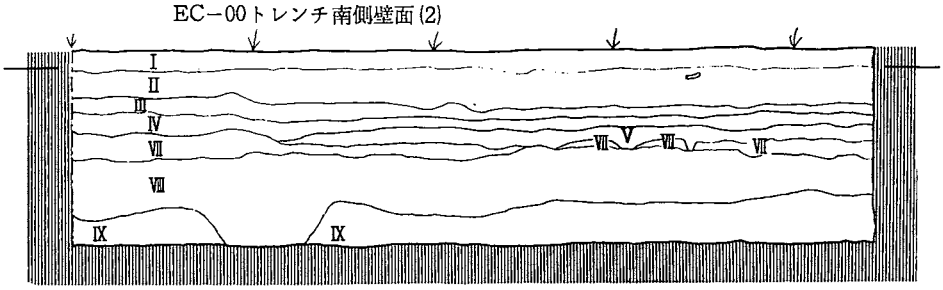
C－20トレンチ



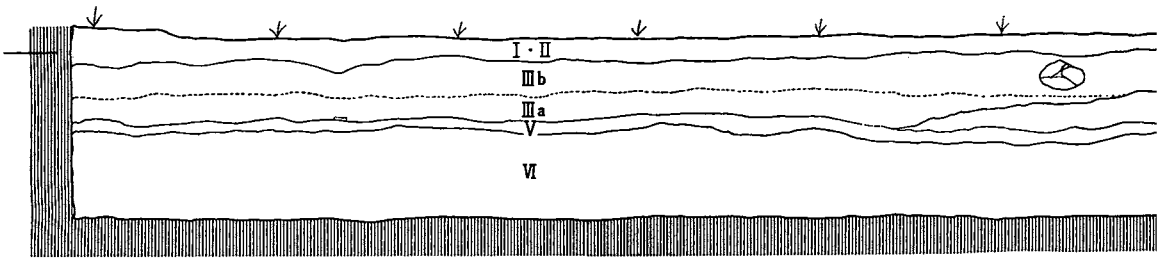
EC－00トレンチ南側壁面(1)



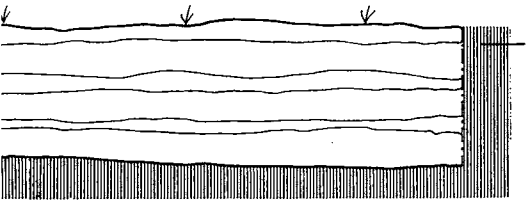
EC－00トレンチ南側壁面(2)

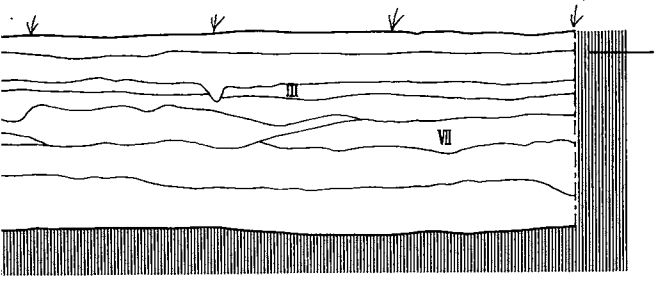


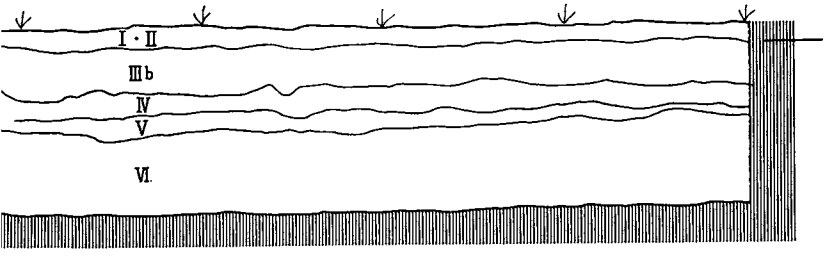
EC－20トレンチ南側壁面



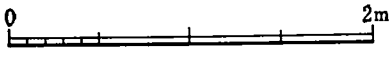
第6図　C－20・EC－00・EC－20トレ





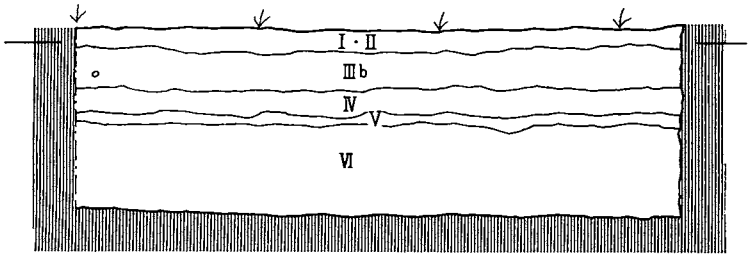


水系レベ ル2.95m

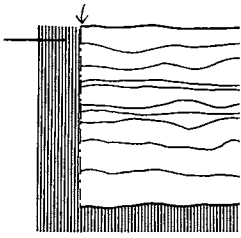


ン チ 層 位 図

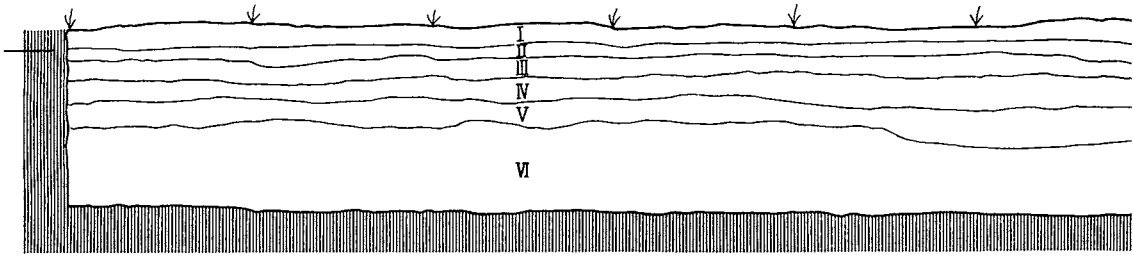
EC－20トレンチ



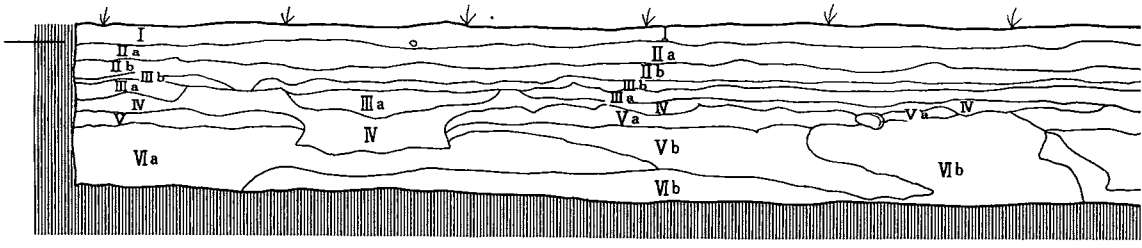
CW－06トレ



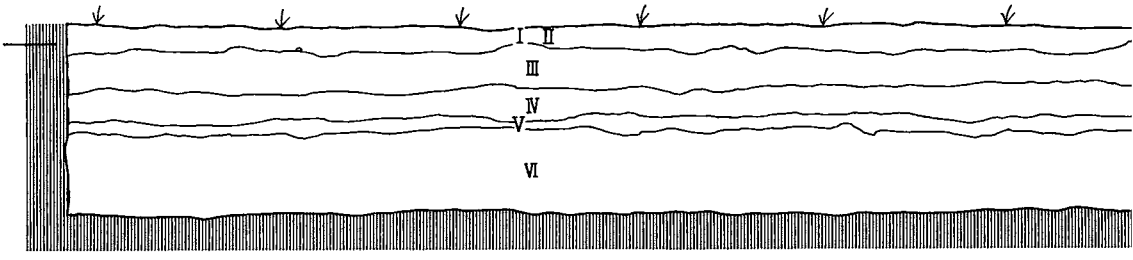
EC－40南側壁面



CW－06トレンチ南側壁面

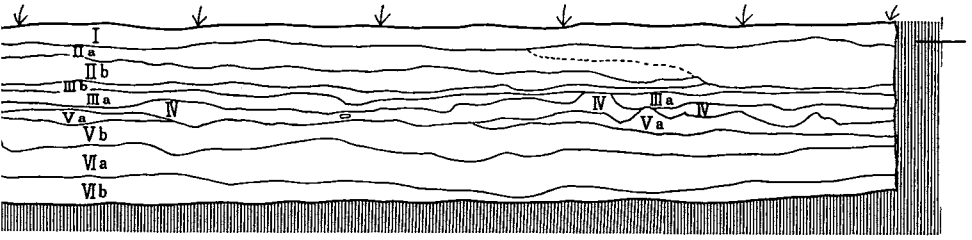


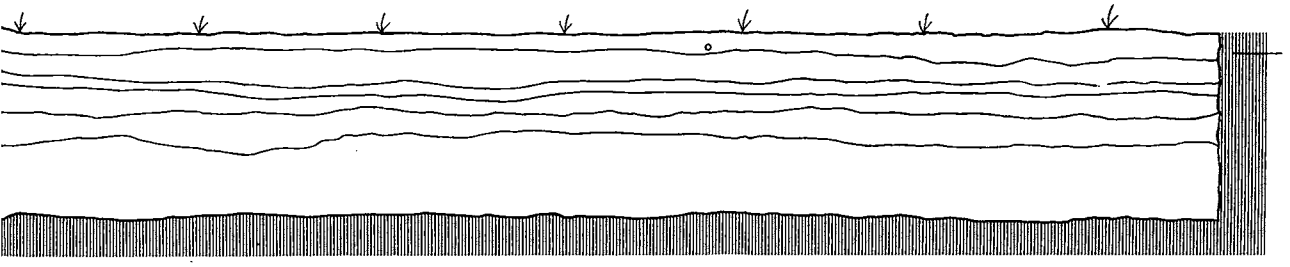
CW－20トレンチ南側壁面

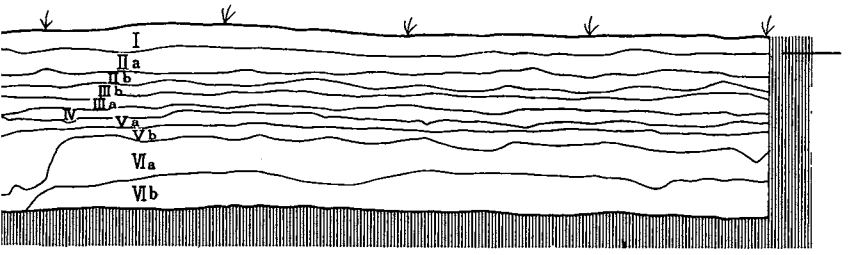


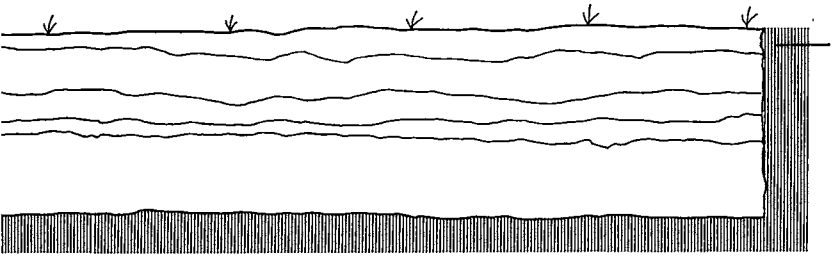
第7図　ＥＣ－20・ＣＷ－06

ンチ



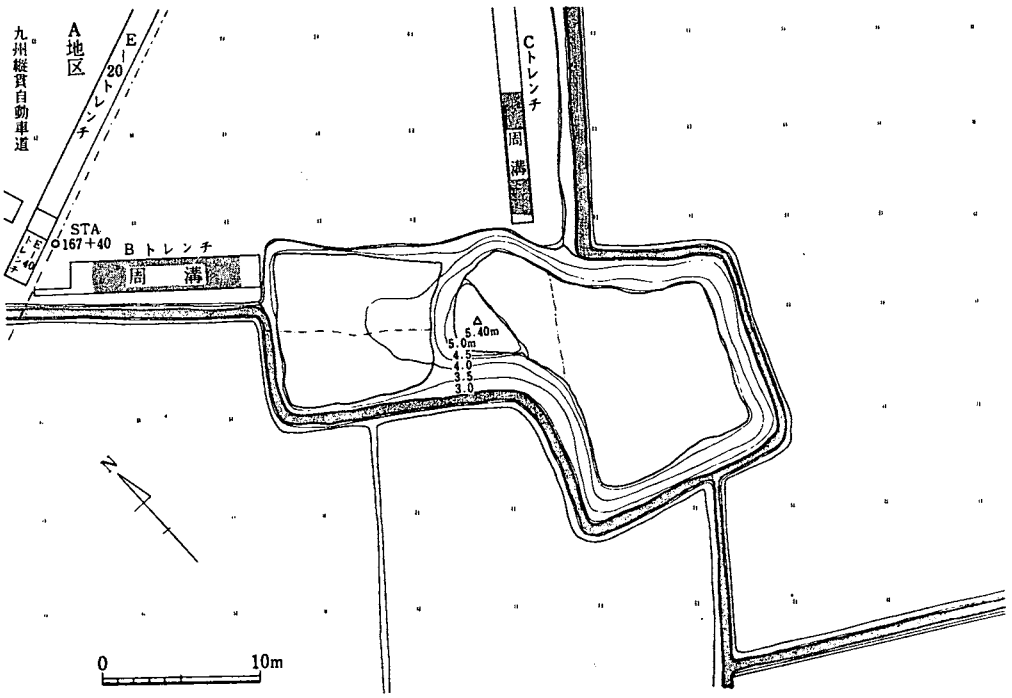






0 2m 水系レベル 2.95m

・ＥＣ－40・ＣＷ－20トレンチ層位図



第8図　車塚古墳墳形図

C—00トレンチ・C—20トレンチ。いずれも他のトレンチと同じく規則的な堆積状態を示す。

以上のような土層の状態を示し、いずれのトレンチにおいても顕著な遺構遺物は認められない。したがって車塚古墳の周溝も存在はしていない。第Ⅰ層・第Ⅱ層は撹乱があることから除くとして、第Ⅲ層から以下は規則的な堆積状態を示し、自然的作用によるものと判断できた。

3.　墳丘について

車塚古墳の周囲は水田である。水田の中に墳丘が残されているが、周囲は著しく破壊されている。墳丘は畑地とされ平担にならされ、周囲は水路がめぐらされている。現況で、全長約32.5m、後円部径12.4mを計る。後円部の北則が最も高く2.40mの比高がある。

前方部は後円部よりもさらに1.40m低くなり、さらに1mの段落ちになって水田面である。

本格的な発掘は行われておらず内部主体は不明である。

4.　Bトレンチについて

Bトレンチは前方部に接する部分から水路にそって西側に長さ12m、幅2mを設けた。最終的にはさらに西側へ幅50mで長さ1m拡張した。

トレンチの東壁から1.34m地点で周溝の落ち込みが確認され、浅いU字状の形状を呈する。落ち込み部分から西側へ23.5m地点が周溝の中で最も深くなっている。トレンチの東壁から6.

44m地点から立ち上がりがはじまり、ゆるやかな角度をもって立ち上る。周溝の西端はBトレンチの東壁から8.50m～9.00m内になるものと判断できる。8.50mとすれば周溝の横幅は7.16mをはかることになる。

次いでBトレンチの南壁により土層を述べておきたい。

第Ⅰ層は耕作土層で黒褐色を呈する。第Ⅱ層は灰褐色粘質土である。第Ⅲ層は茶褐色粘質土で、鉄分が多く堆積した土質である。第Ⅳ層は黒褐色粘質土である。第Ⅴ層は灰白褐色粘質土である。

以上のように第Ⅰ層～第Ⅵ層はそれぞれにA地区の各トレンチに見られた土質に類似している。周溝の西側の立ち上がりがどのようにして終わるかは不明であった。

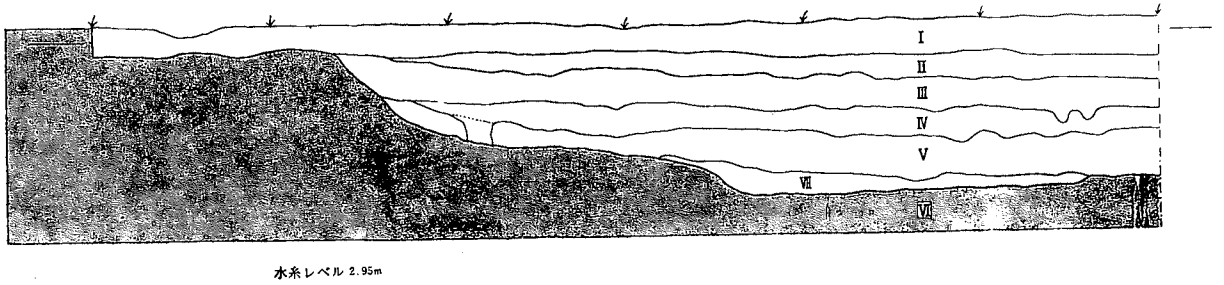
考えられることとしては、古墳が築造された時点においては、第Ⅵ層が当時の地表面であり、古墳の周溝は第Ⅵ層に掘り込まれたものであろう。周溝は浅く掘られていたため、古墳の築造後に第Ⅵ層の上面に堆積作用がはじまり、現在の地形になったと考えられ、周溝が浅くつくられていたため、その時に古墳の周溝の外側と同じく、周溝内にも第Ⅰ層から第Ⅴ層の土が堆積したものと思われる。

5. Cトレンチについて

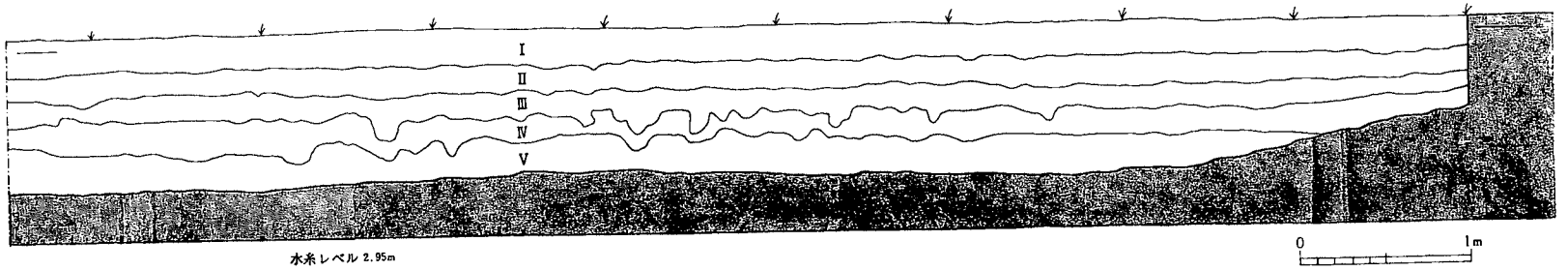
Cトレンチはくびれ部と推定される部分から水田の水路に平行して北側に向かって設けた。幅1.5mで長さ17mである

このトレンチの南壁から0.35m地点から落ち込みがあり、6.05m付近からゆるやかに立ち上がり8.25m付近まで続いている。この落ち込みを周溝と判断した。周溝内から土器や植物遺体が出土している。西側断面による土層について説明しておきたい。

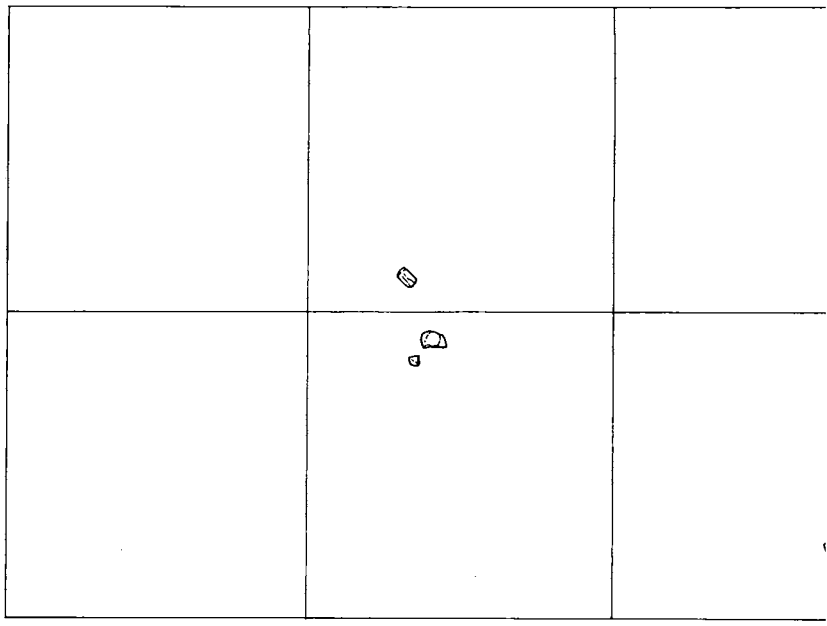
①は耕作土層で黒褐色を呈している。②③④が周溝の堆積土である。②は茶褐色を呈する粘質土で全体的にうすい。③は黒褐色粘質土である。砂粒の混入は少なく粘性の方が強い。鉄分分の浸透は少ない。有機質が強い。④灰褐色粘質土である。鉄分の浸透もいくぶん見られる。砂粒の多い部分と粘質の強い部分とがあり、下部にいくにしたがい砂粒の含まれる量が多くなる。④′は④にくらべて黄色が強い。⑤は黄褐色粘質土である。砂粒が多く含まっておりさらさらとしている。黒褐色の班点を呈する鉄分が多く付着している。⑥は濃茶褐色砂質土である。周溝の底にあたり上面まで土器が出土している。鉄分の付着が非常に多い。砂粒がほとんどであり下部にいくにしたがい礫石が含まってくる。⑦は青灰褐色砂質土である。粒のそろった砂質土で、この部分から南側へのゆるやかな立ち上がりが見られる。⑧は青灰褐色粘質土である。⑨は茶褐色砂質土である。⑥によく似ているが濃茶褐色の班点が大きく最も多く混じっており区別できる。非常に固い土質である。⑩は茶褐色粘質土層である。部分的に細かなカーボンを含んでいる。⑪は茶褐色砂礫層で小さな礫石を含んでいる。⑪′は色調に変化がみられ灰褐色砂礫層である。礫を含むが絶対量は砂の方が多い⑫は①の黒褐色土層に黄褐色土が混じりあっている。小さな河原石を含んでいる。⑬黒褐色粘質土、⑫に混じるような黄褐色粘質土



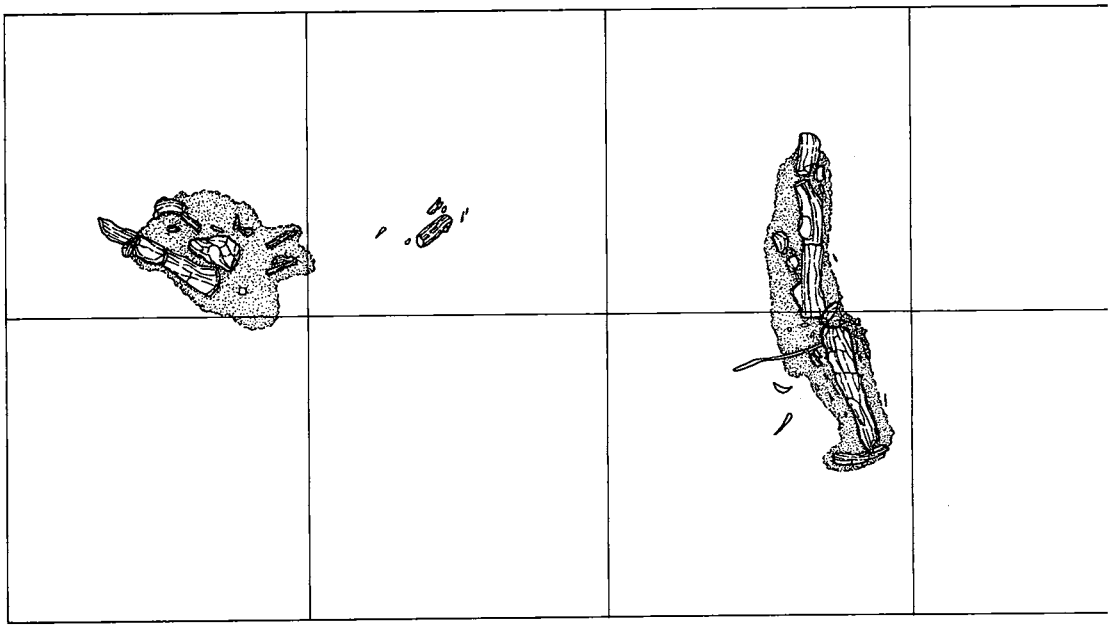
第9図　Bトレンチ南側断面図(1)



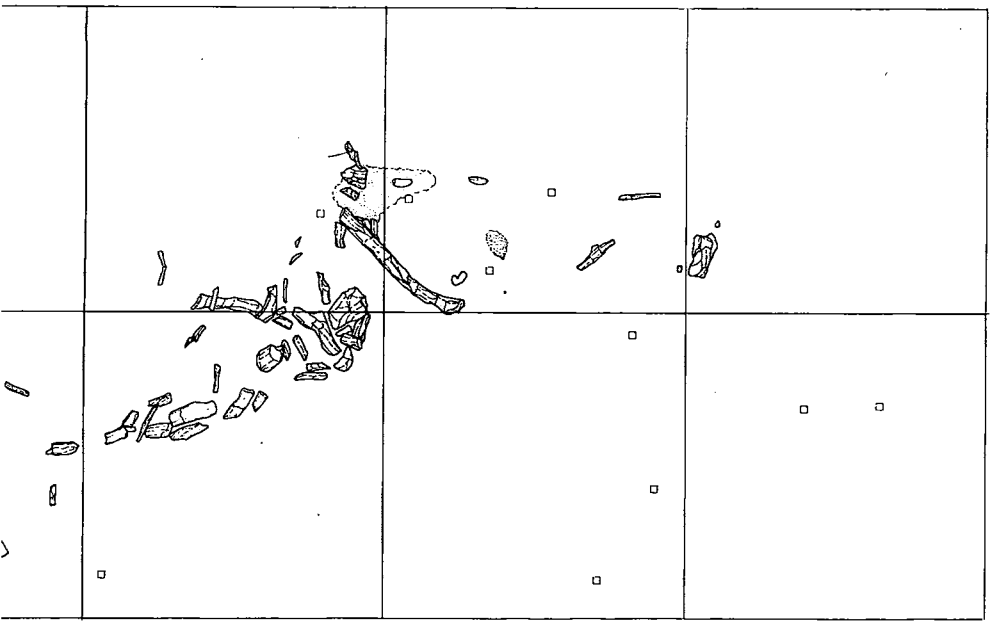
第10図　Bトレンチ南側断面図(2)



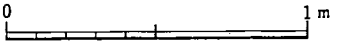
第11図　Ｂトレンチ遺物出土状況実測図(1)

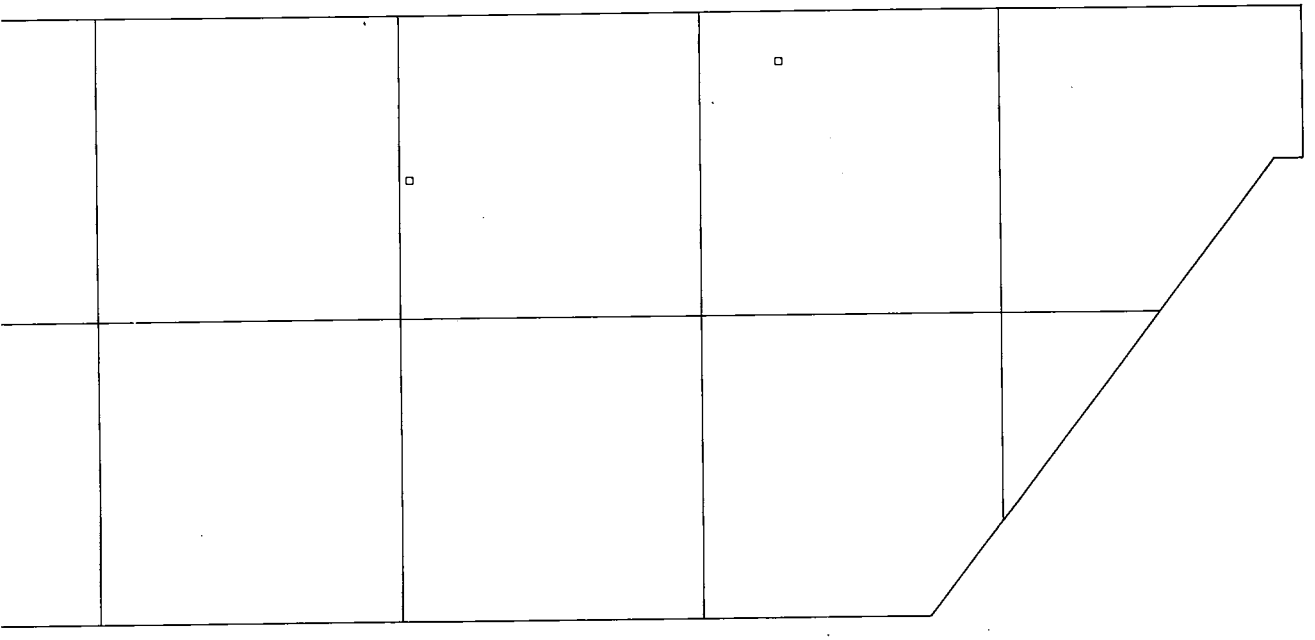


第12図　Ｂトレ

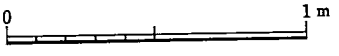


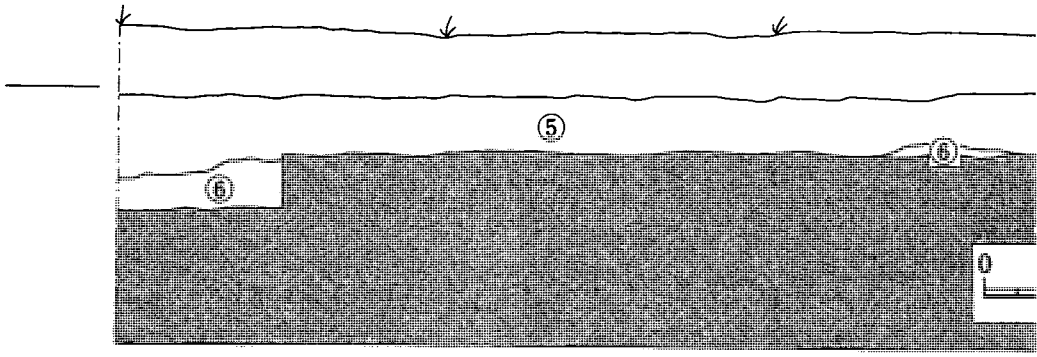
□印は土器のスタンプが残るもの



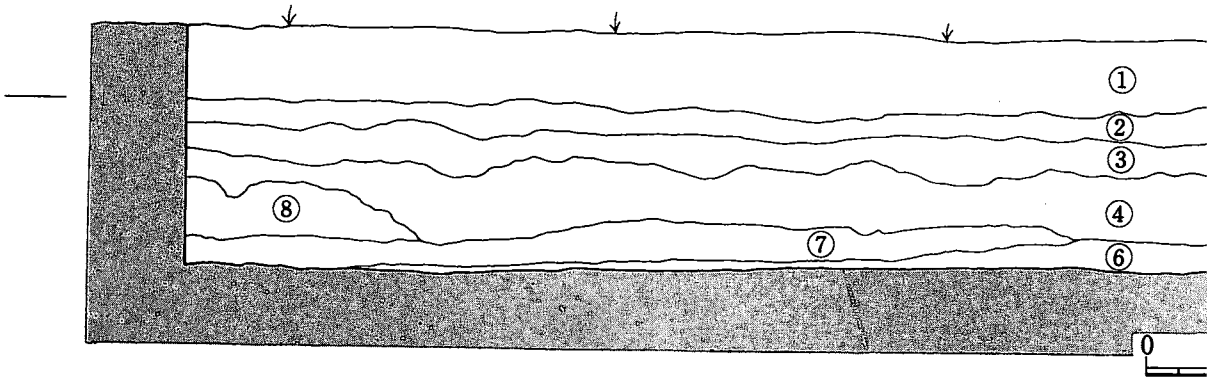


ンチ遺物出土状況実測図(2)

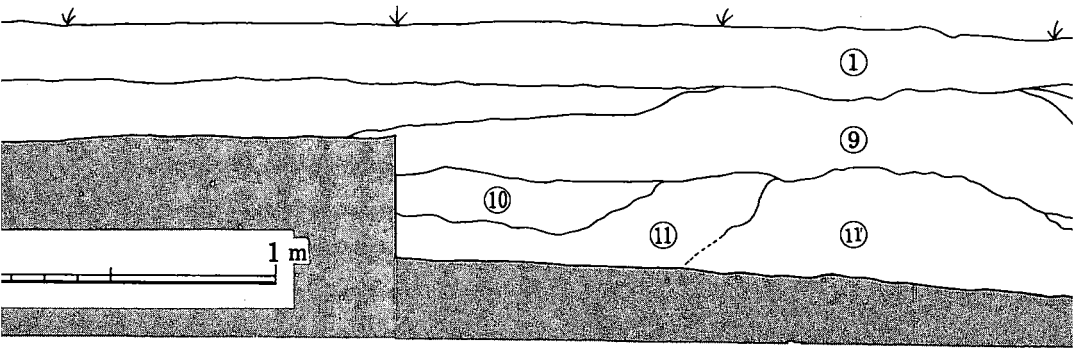




水糸

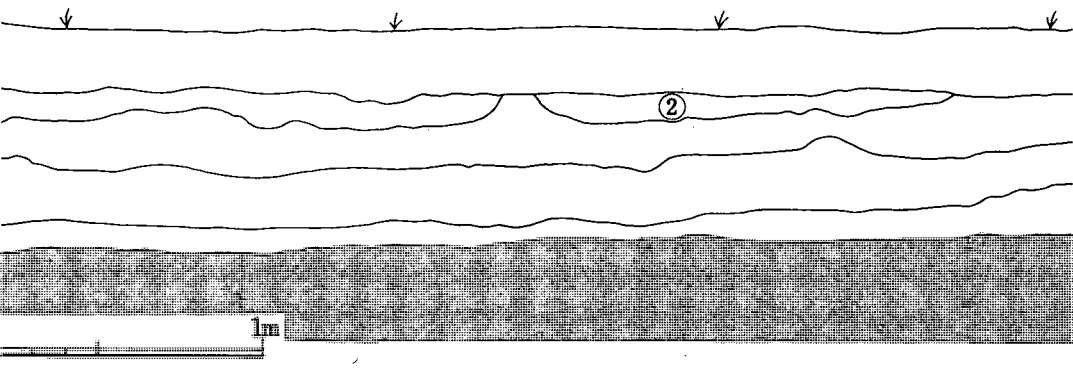


水糸



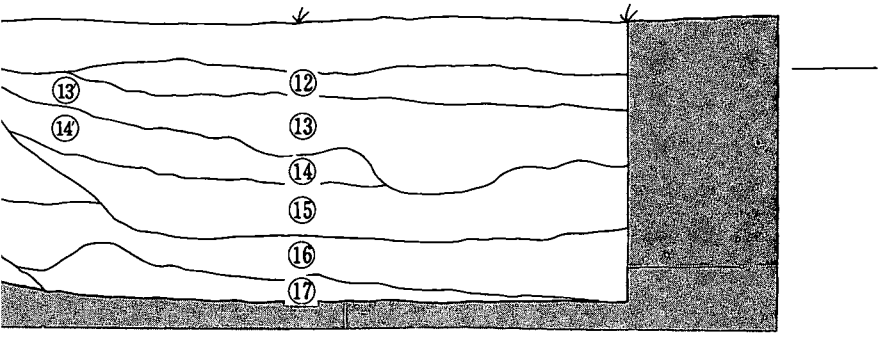
レベル2.804m

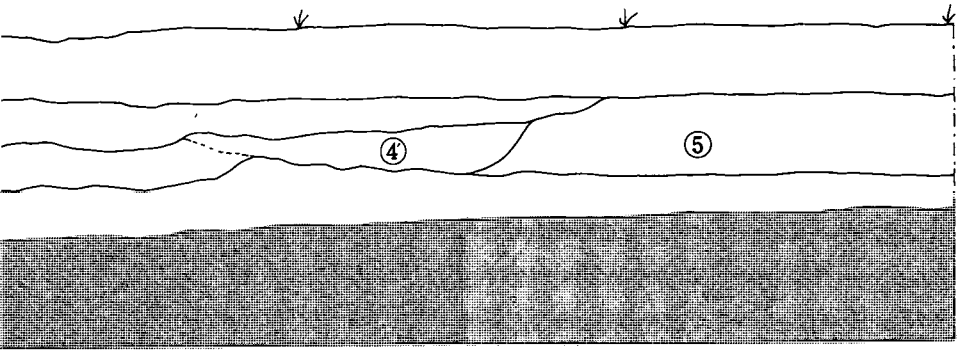
第13図　Ｃトレンチ西側断面図(1)

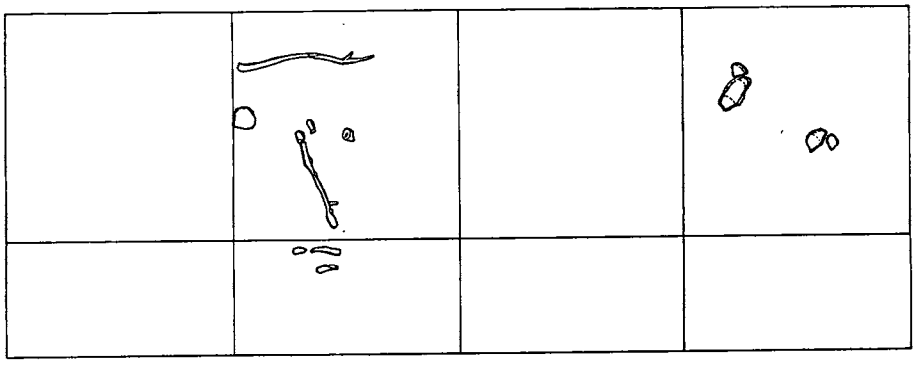


レベル2.804m

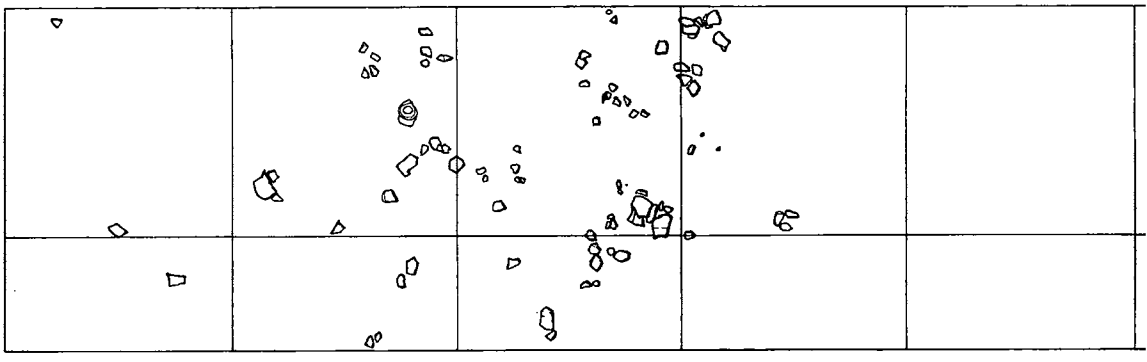
第14図　Ｃトレンチ西側断面図(2)


⑬
⑭'
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰

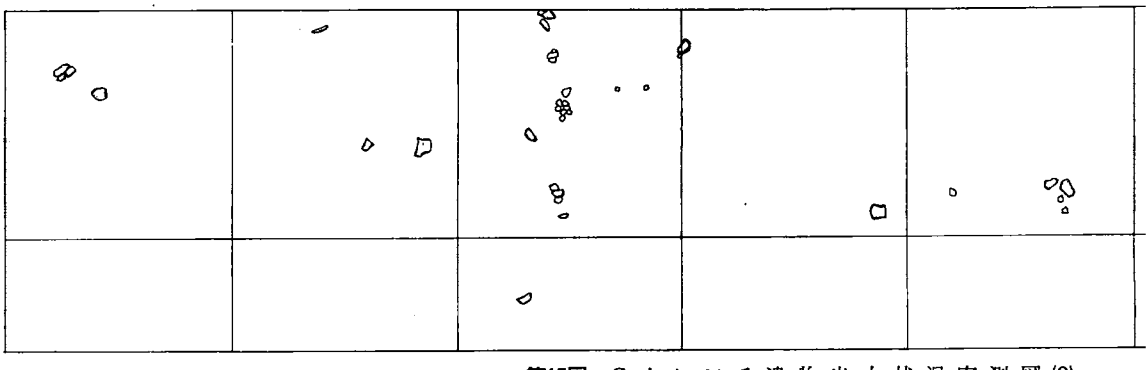

④'
⑤



第15図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図(1)



第16図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図(2)



第17図　Ｃトレンチ遺物出土状況実測図(3)

が5～6㎜程の班点としてはいっている。小さな河原石を含んでいる。⑬′、南側は黄褐色の色調が強くなる。⑭、灰褐色粘質土である。⑰に非常に類似する。小さな河原石を含んでいる。⑮は灰褐色粘質小礫石層である。⑭とほぼ同じ土質であるが礫石の含有が多く固い。有機質を含んでいる。⑯は黒色土層である。Bトレンチの第Ⅵ層に類似する。植物遺体を含んでいる。⑰は灰褐色粘質土である。

以上のような土層であり、二ケ所の落ち込みが確認できる。南側の落ち込みは先に述べたように車塚古墳の関係であると判断できよう。北側における落ち込みは、⑫⑬⑭⑮の堆積状態を見るかぎり各層に乱れがあることから新しい時期の撹乱と思われる。しかし、⑯はBトレンチの第Ⅵ層のピート層に非常に類似することから、車塚古墳とは別の古墳が存在し、その周溝に当る可能性を有している。

6. 出土遺物（第18・19図）

周溝およびトレンチから土器片が出土している。いずれも小さな破片であるが、可能な限り復原し実測を行った。9点を報告しておきたい。

1は壷形土器である。頸部がしまり、口縁は外反する。胴部が大きくふくらんでいる。外面はクシ目調整を施しているが、胴部以下は粗い調整である。内面にもクシ目調整を施している。内面の頸部および口縁は横方向にクシ目調整を行っている。胎土は砂粒・細石が混じっている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

2は甕形土器の口縁部である。外界はクシ目調整を行っている。口唇部は平たい、外面には媒が付着し、ローリングを受けている。同一個体の胴部片にはタタキが施されている。胎土は砂粒混じりで、焼成は良好。色調はにぶい黄橙色を呈する。

3は小型の甕形土器である。口径は推定で13.5㎝である。口縁はいくぶんそりながら外反している。口唇部はまるい。外面・内面ともクシ目調整を施している。胎土は砂粒混じりで、焼成は良好である。器面は荒れている。色調は外面が暗赤褐色で内面は明赤褐色を呈する。

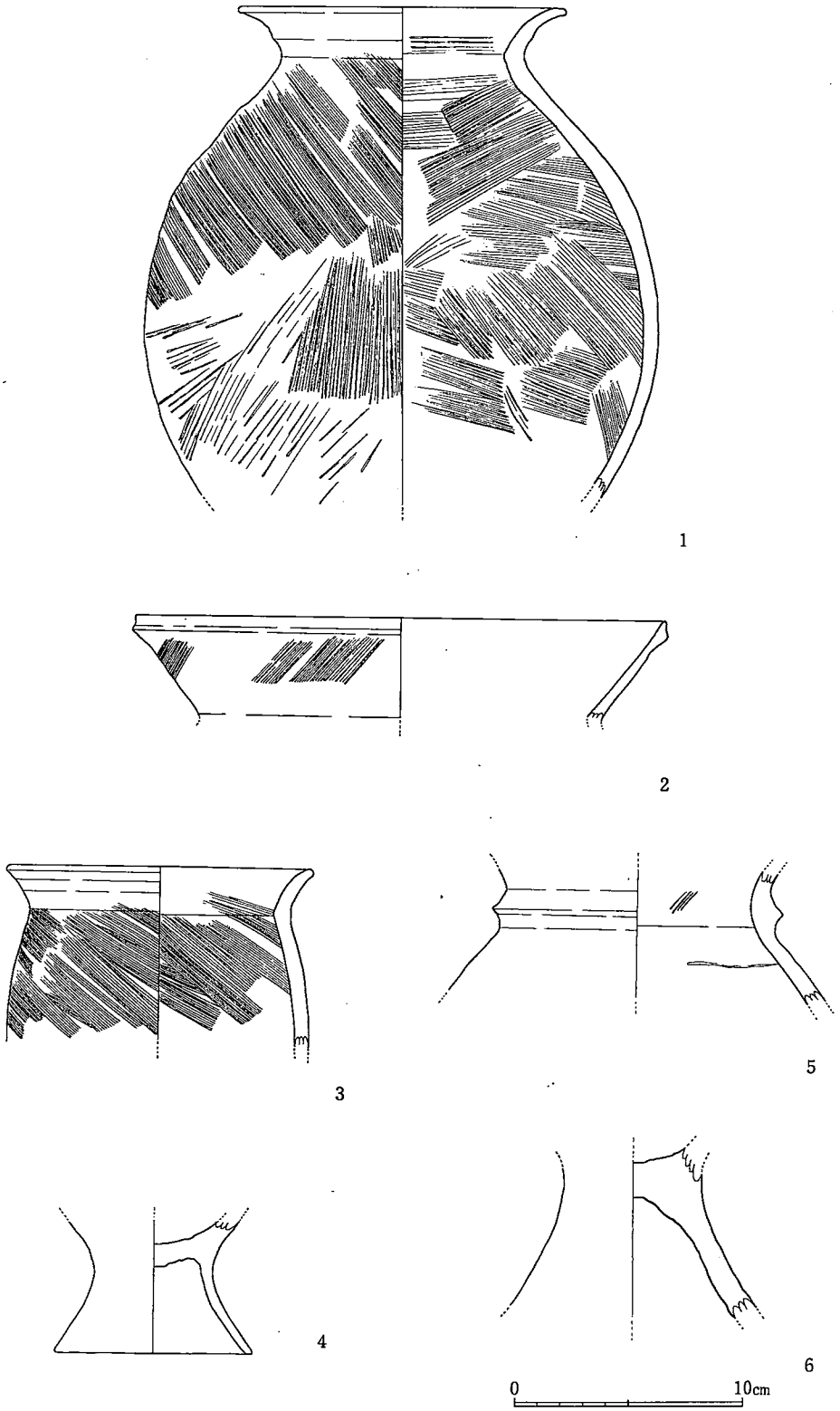
4は甕形土器の脚部である。内面には接合痕がある。器面は荒れており調整痕は定かでない。砂粒混じりの胎土で焼成は良好である。色調は橙色を呈する。

5は壷形土器の一部である。頸部に特徴的に突帯が巡っている。器面は荒れており調整は不明である。内面にクシ目調整をかすかに認めることができる。胎土は砂粒混じりで焼成良好である。色調は橙色を呈している。

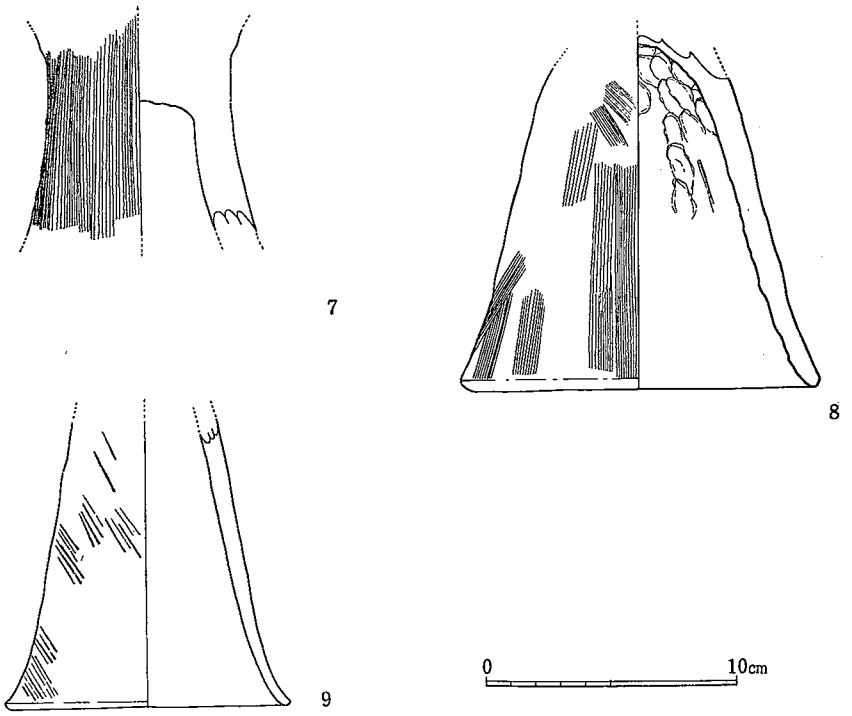
6は大型の高坏の脚部片である。外面は荒れており調整は定かでない。内面は手ナデとクシ目調整を施している。胎土は砂粒混じりで、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

7も大型の高杯の脚部片である。外面はクシ目調整を施している。内面調整ははっきりしない。胎土は小石混じりで焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈している。

8も同じく大型の高杯の脚部片である。ラッパ状に広がり端部は丸みをもつ。外面はクシ目



第18図　Ｂトレンチ出土土器実測図（１～６）



第19図　Ｂトレンチ出土土器実測図（７～９）

調整を施し、内面は指による接合痕と手ナデが行われている。胎土は小石を含み粗い。焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈している。

９は器形が定かでないが、器台と見られようか。８と同じくラッパ状に開き、脚端の近くで裾開きになる。外面にはクシ目の調整を施している内面も裾部はクシ目調整と思える。胎土は砂粒混じりで焼成は良好である。色調は橙色を呈する。

Ⅳ ま と め

A地区にもうけた13本のトレンチでは顕著な遺構や遺物は確認できず、当初懸念された車塚古墳の周溝も九州縦貫自動車道の用地内には存在していないことが判明した。

Bトレンチと Cトレンチ の調査によって、それぞれ車塚古墳の周溝を確認することができた。周溝はいずれも浅い皿状を呈するもので、幅はBトレンチで約7m、Cトレンチで約8mであった。深さは50cm～70cmであったが、上部をカットされているので築造当時の周溝の深さの中半程度のものと考えられる。

前方部およびくびれ部とも立ち上がりは、現存する墳丘に非常に近いところであり、トレンチを設けた二ケ所に関しては、墳丘の破壊は少ないものと考えられよう。

今回の調査は面積的に限られた二本のトレンチによる調査であり、古墳の全体図を復原するまでには至らなかった。二本の周溝の状態から墳形は前方後円墳であることが確認できたことを報告するにとどめておきたい。

Bトレンチで出土した土器の細片が全て盗難にあうという不幸なアクシデントが生じたため出土した遺物による古墳の時期は、Cトレンチから出土した遺物に頼らざるを得ない状況にある。

Cトレンチから出土した遺物を可能な限り実測を行い9点の土器を報告した。いずれの土器の器形も技法の特徴は、県内の土器論から述べれば弥生時代後期の後半に位置づけられてしかるものである。したがって、周溝から出土したこれらの土器をもって車塚古墳の時期と直接的に述べるのには危険性を有している。土器はローリングを受けたものも少なくなく、近くに弥生時代の生活跡が存在し、それが周溝内にはいり込んだものと考えておくべきであろう。

今後の 本格的な 発掘調査の 実施によって、 墳形や周溝それに内部主体の実態を明らかにして、総合的な見地で最終的な判断をなすべきであろう。 （江本）

車　塚　古　墳

図　版

竜峰山から見た車塚

北側から見た車塚

図版　2

前方部方向から見た車塚

Cトレンチの調査風景

Bトレンチ南側壁面の清掃作業

Bトレンチの調査風景

図版　4

前方部方向から見た車塚・Bトレンチ設置場所

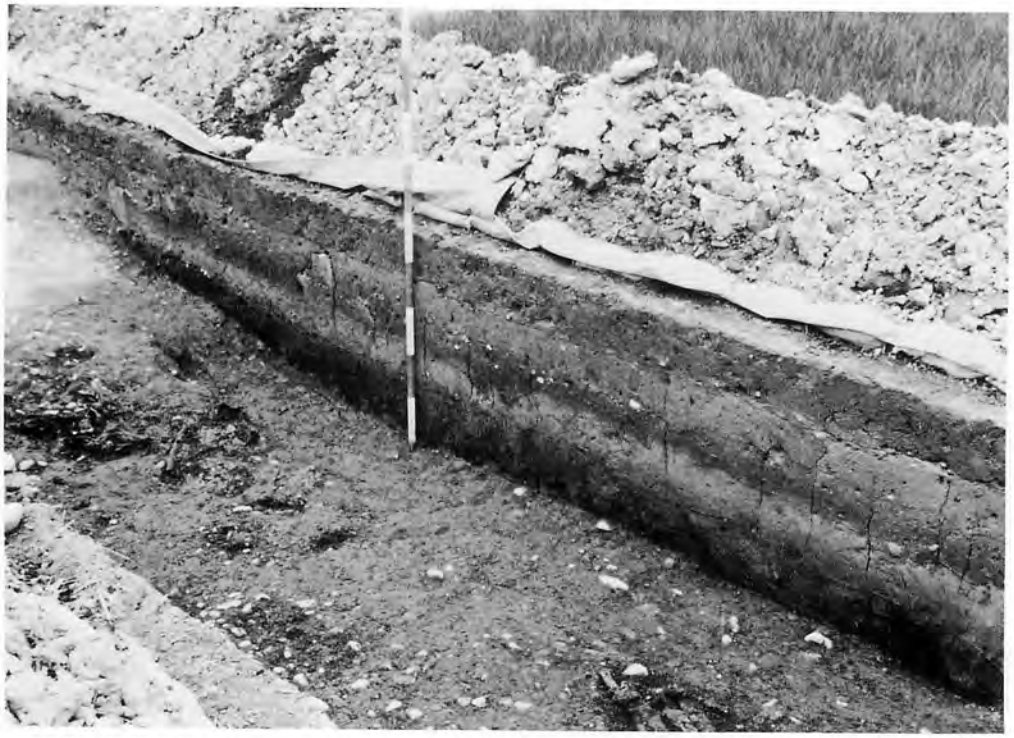
Bトレンチ調査終了後

Bトレンチ南側層位

Bトレンチ調査終了(墳丘側から)

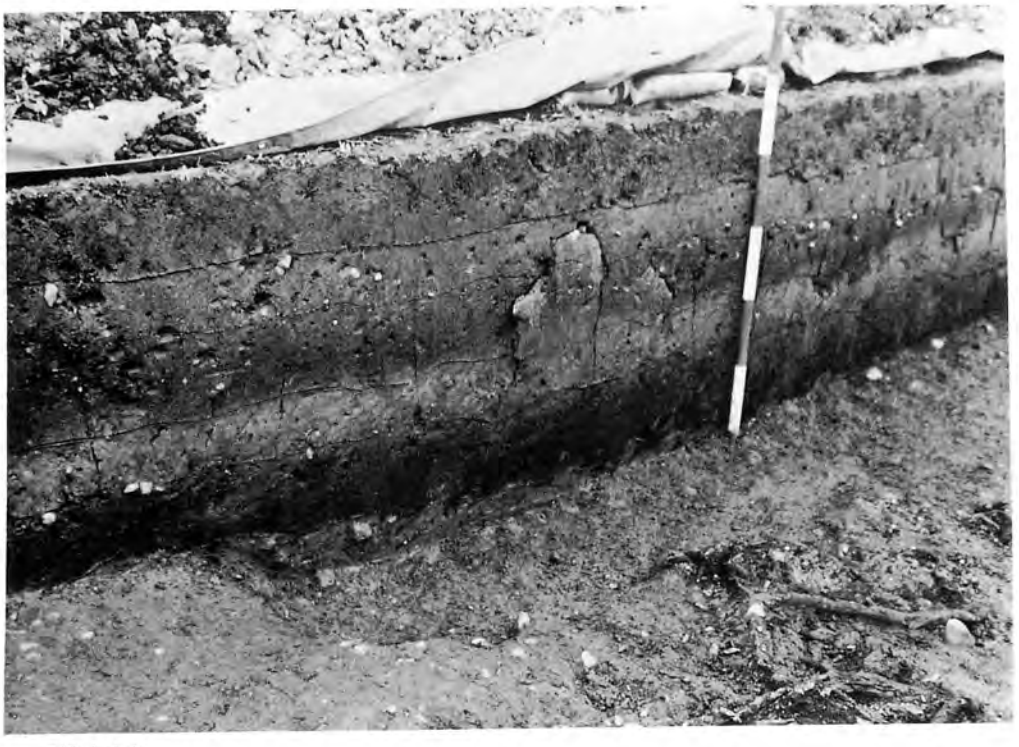
図版　6

周溝(墳丘側から)



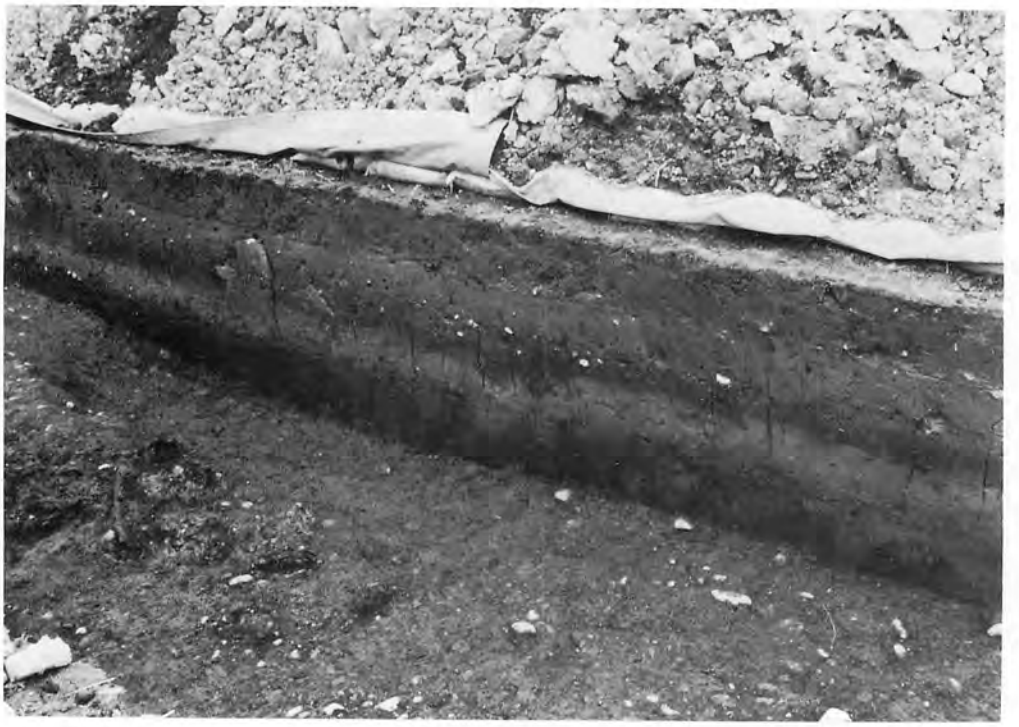
周溝と南側層位

周溝落ち込み部分

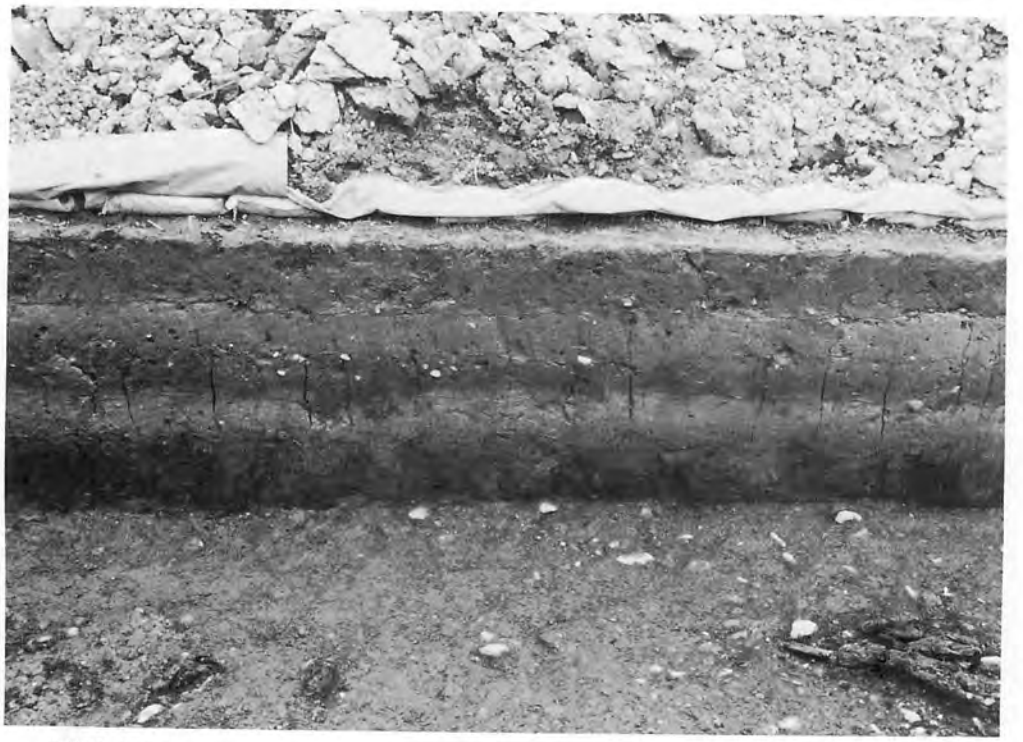


周溝中央部

図版　8



周溝中央部

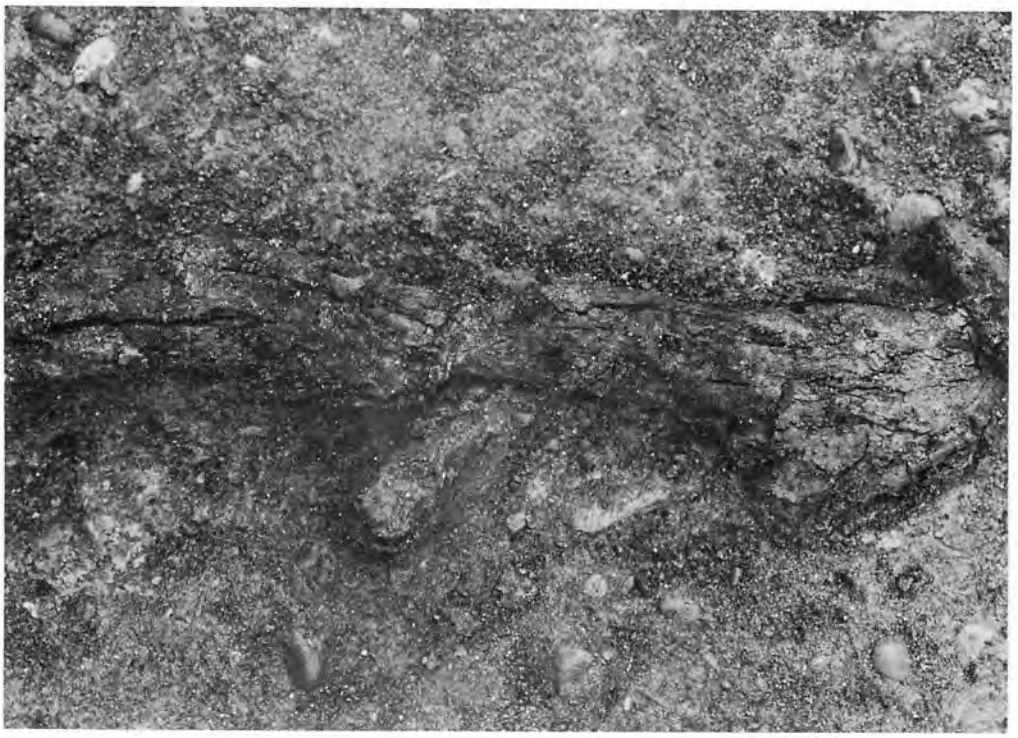


周溝中央部

植物遺体

植物遺体

図版　10



植物遺体

植物遺体

植物遺体

植物遺体

図版　12

植物遺体

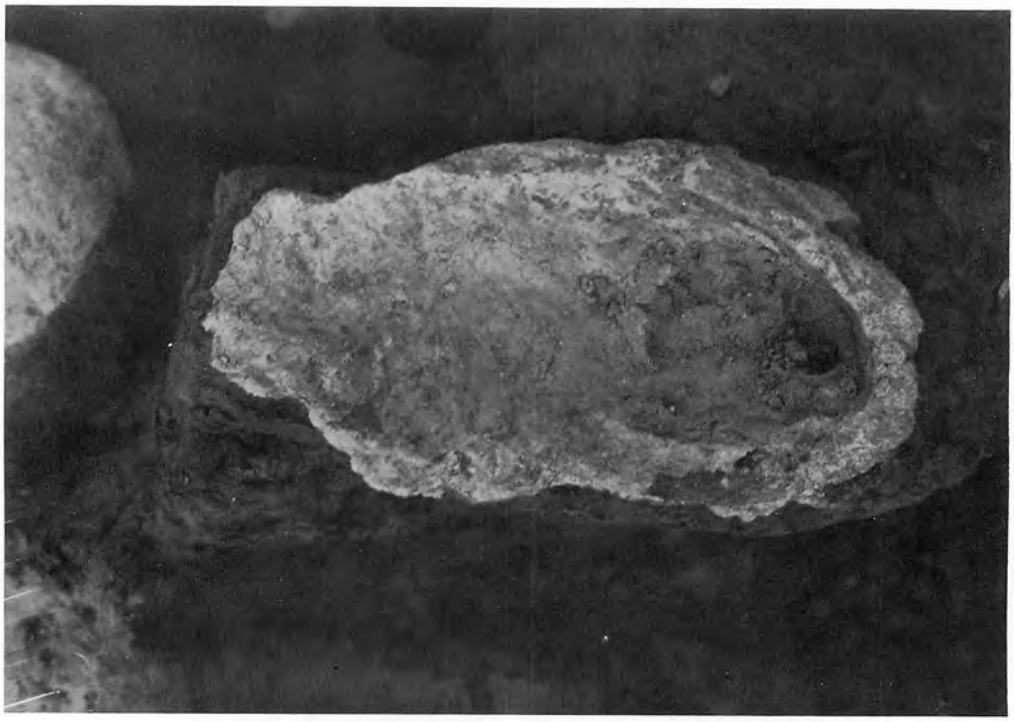
植物遺体

車塚の墳丘とCトレンチ

Cトレンチ(墳丘側から)

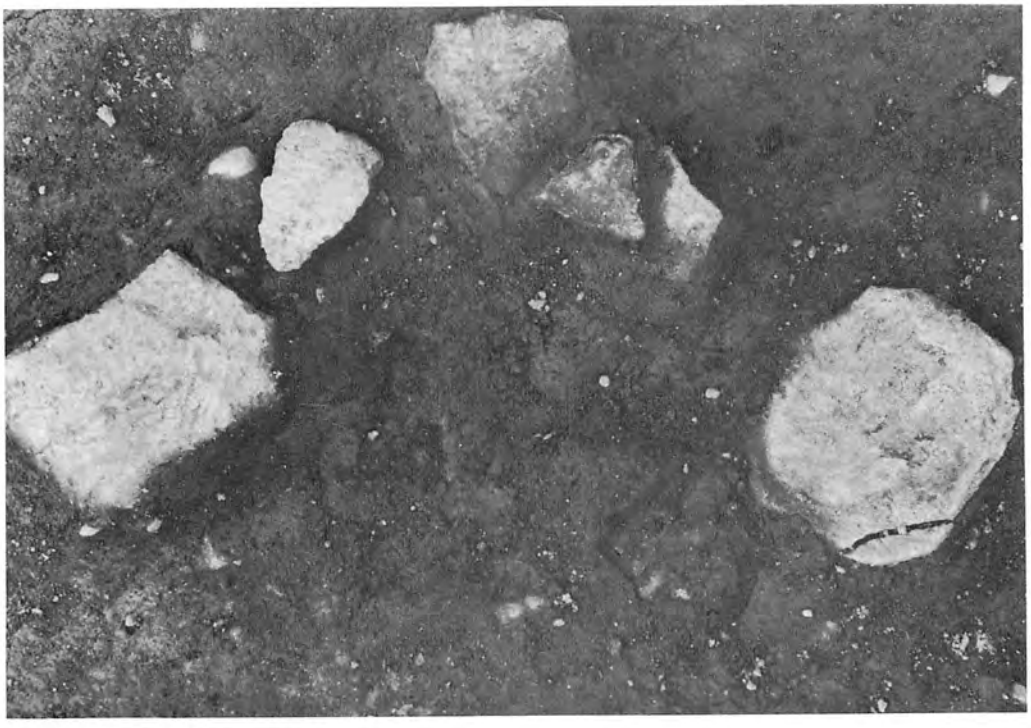
図版　14

Cトレンチ土器出土状況



Cトレンチ土器出土状況

Cトレンチ土器出土状況



Cトレンチ土器出土状況

図版　16

Cトレンチ土器出土状況

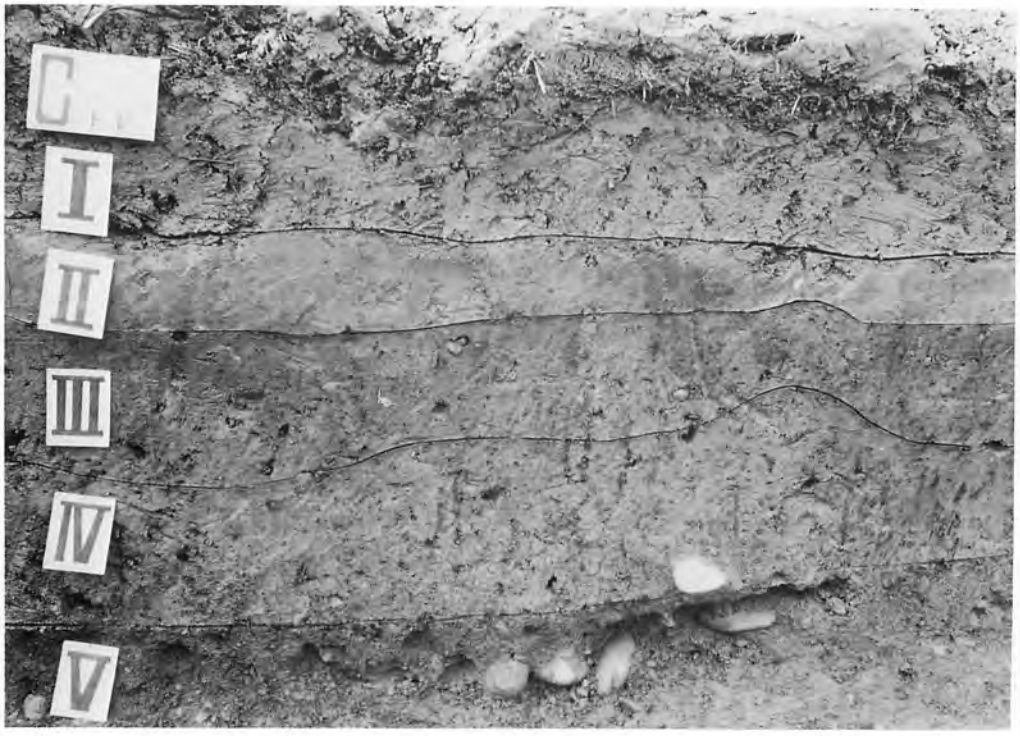
Cトレンチ土器出土状況

A—1トレンチ土層

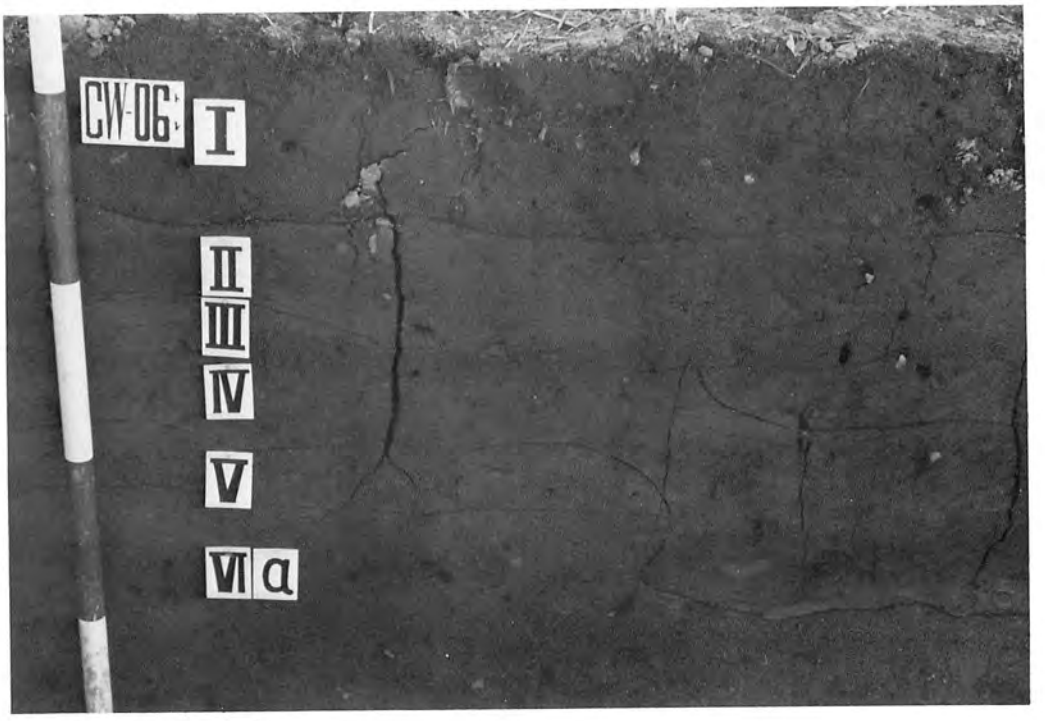
E C—20トレンチ土層

図版　18

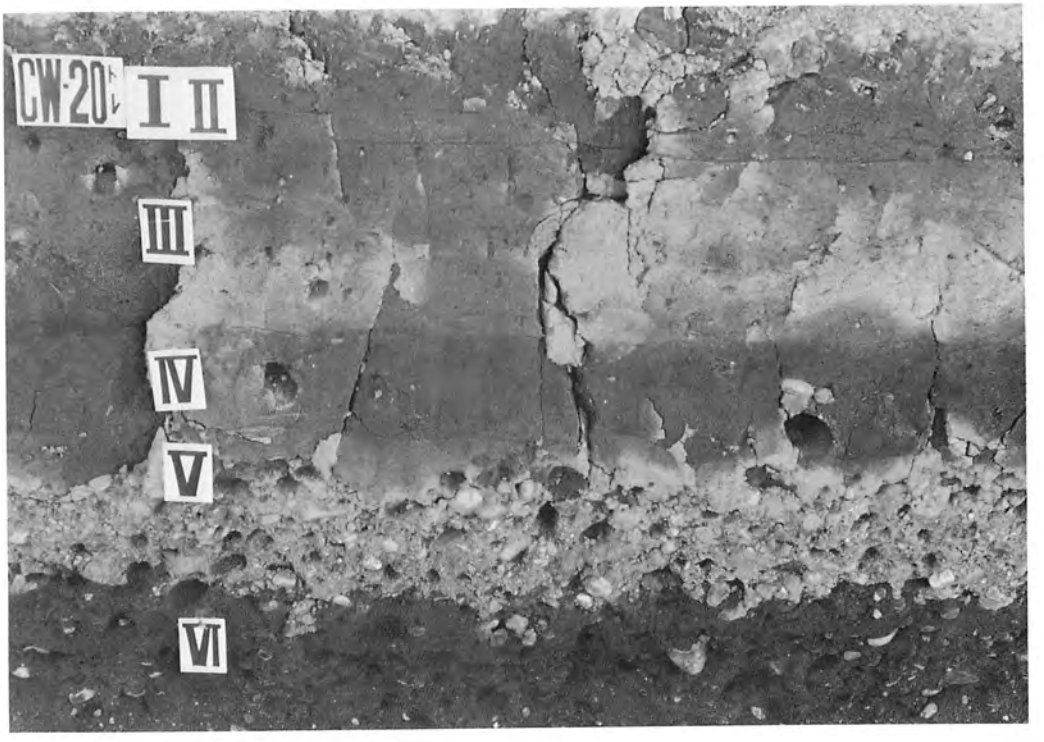
Cトレンチ土層



Cトレンチ土層



CW—06トレンチ土層



CW—20トレンチ土層

ＥＣ—00トレンチ調査風景

Ｅ—00トレンチ

ＥＣ—00トレンチ土層

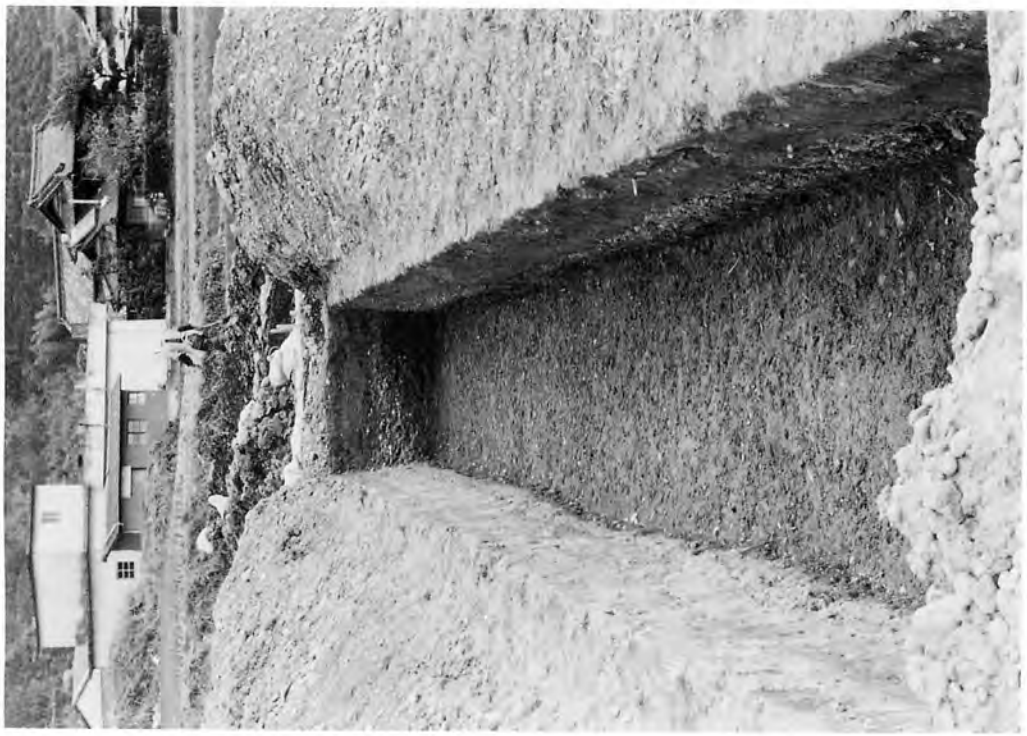
ＥＣ—20トレンチ土層

E—20トレンチ・E—00トレンチ（南側から）

C—20トレンチ・C—00トレンチ（南側から）

CW—20トレンチ(手前)　EC—20トレンチ(西側から)

E—20トレンチ・E—40トレンチ(北側から)



E C—40トレンチ・向うはBトレンチ

E—20トレンチの調査風景

1

2

3

5

4

6

約$\frac{1}{3}$

Cトレンチ出土土器(1—6)

7

7

8

9

Cトレンチ出土土器(7—9)　約$\frac{1}{3}$

Bトレンチ出土植物遺体

川田京坪遺跡

—熊本県八代市川田町西所在川田京坪遺跡の調査—

例　　言

1. 本書は、熊本県教育委員会が日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴って調査を実施した八代市川田町西所在川田京坪遺跡の調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第46集として刊行するものである。
2. 近世墓の検出に伴って長崎大学医学部第２解剖学教室の松下孝幸、分部哲秋、田代和則の各氏に人骨の調査を依頼した。その調査成果は、本報告書の付論１として収録した。
3. 本遺跡に関連して、北条暉幸、村上豊喜の両氏に玉稿をいただいた。それぞれ付論２および付論３として収録した。記して謝意を表する次第である。
4. 本書に使用した図の作成は、池田栄史、森山栄一、野田拓治がこれにあたり、またこれらの製図は主として森山が行った。
5. 本書の執筆は、第２章４の(6)を森山が、その他は野田が行った。
6. 本文挿図中の遺物番号と巻末図版の番号とは一致させた。
7. 本書の編集は熊本県教育庁文化課が行い、江本直、高木正文、島津義昭の各執筆責任者と協議して、野田が担当した。

目　　次

第１章　序　説 …… 1
1．遺跡の位置と環境 …… 1
2．発掘調査の経過 …… 1
第２章　調査の概要 …… 3
1．調査地区 …… 3
2．調査区の層位・層序 …… 5
3．遺物の出土状態と遺跡の性格 …… 7
4．出土遺物 …… 7
(1)弥生式土器 …… 7
(2)土師器 …… 8
(3)文字ある土師器 …… 13
(4)須恵器 …… 13
(5)軒平瓦 …… 24
(6)陶磁器 …… 24
第３章　近世墓の調査 …… 33
1．調査の概要 …… 33
2．木棺土壙墓の類別 …… 35
第４章　まとめ …… 49

挿　図　目　次

第１図　川田京坪遺跡と九州縦貫道関連遺跡 …… 2
第２図　川田京坪遺跡調査地点位置図 …… 3
第３図　川田京坪遺跡調査区全図 …… 4
第４図　調査地区の層序対比図 …… 5
第５図　Ⅱ区３Ｔ南壁（東一西）土層断面図 …… 6
第６図　弥生式土器実測図 …… 8
第７図　土師器実測図―(1) …… 10
第８図　土師器実測図―(2) …… 11
第９図　土師器実測図―(3) …… 12
第10図　文字ある土師器実測図 …… 14
第11図　須恵器実測図―(1) …… 15
第12図　須恵器実測図―(2) …… 16
第13図　須恵器実測図―(3) …… 18

第14図　須恵器実測図―(4)……20
第15図　須恵器実測図―(5)……22
第16図　須恵器実測図―(6)……23
第17図　軒平瓦実測図……25
第18図　青磁実測図……25
第19図　陶磁器実測図（古伊万里、唐津、嬉野焼）……26
第20図　陶磁器実測図（波佐見系）……29
第21図　陶磁器実測図（波佐見系）……30
第22図　陶磁器実測図（武雄南部系その他）……32
第23図　近世墓配置図……34
第24図　近世墓木棺模式図……36
第25図　近世墓実測図……39
第26図　近世墓実測図……40
第27図　近世墓実測図……41
第28図　近世墓実測図……42
第29図　近世墓実測図……43
第30図　近世墓実測図……44
第31図　近世墓実測図……45
第32図　近世墓実測図……46
第33図　近世墓実測図……47
第34図　近世墓実測図……48
第35図　近世墓実測図……49

図　版　目　次

図版１　遺跡の景観，（上）遺跡の遠景(東より)，（下）調査区全景（南より）
図版２　湿地の調査（上）１区２Ｔ調査風景（下）１区２ＴＲ）（流木）出土状態
図版３　遺物出土状態（上）Ⅲ区５Ｔ（北より）（下）Ⅲ区５Ｔ（西より）
図版４　出土遺物（弥生式土器，土師器，須恵器）
図版５　出土遺物（須恵器）
図版６　出土遺物（軒平瓦，越川窯青磁）
図版７　出土遺物（文字ある土師器）
図版８　近世墓全景　（１）Ａ群　　（２）Ｂ群
図版９　近世墓出土状態　（Ａ群）
図版10　近世墓出土状態　（Ａ群）
図版11　近世墓出土状態　（Ｂ群）

第1章　序　　説

1.　遺跡の位置および環境

川田京坪遺跡は八代市川田町西字京坪にあり、八代平野の中央、球磨川下流の前川との分岐点の北東約3.5㎞の地点に位置している。遺跡の東側は水田地帯をはさんで竜峰山（標高517m）の裾部の丘陵へと連なっている。県の北部から中部・南部にかけて，ほぼ山地・丘陵と貫いてきた九州自動車道は遺跡の北東約1㎞の地点でようやく水田地帯に入ってくる。

遺跡の北東約1.5㎞には車塚（前方後円墳）をはじめ二基の円墳、また東側0.4㎞の地点には「岡の坊」と呼ばれる前方後円墳があり，いずれも丘陵に平行するように南北に並んでいる。また南側の東片町片野川の水田地帯には，八代大塚、上ノ山古墳の2基の前方後円墳をはじめとして大小11基の古墳が南北に連なり，さらに宮地の乙丸の古墳群へと続いている。このように竜峰山山麓一帯の古墳群は地形的条件により山麓線に沿って直線的に並ぶという、特異な分布状態をなしている。

また、八代市上片町・東片町・西片町付近には片野駅が想定され，球磨駅以南、豊向一片野一朽網一佐職とつづく幹線のうち八代平野の政治・経済的拠点としても極めて重要な位置を占めていたものと思われる。

2.　発掘調査の経過

調査は昭和53年1月23日に開始し、同年7月7日までの、ほぼ5ケ月余りを費した。

1月23日、現地におもむき、調査事務所の建設のために準備を行う。調査予定地を踏査し、トレンチ設定個所などを検討する。

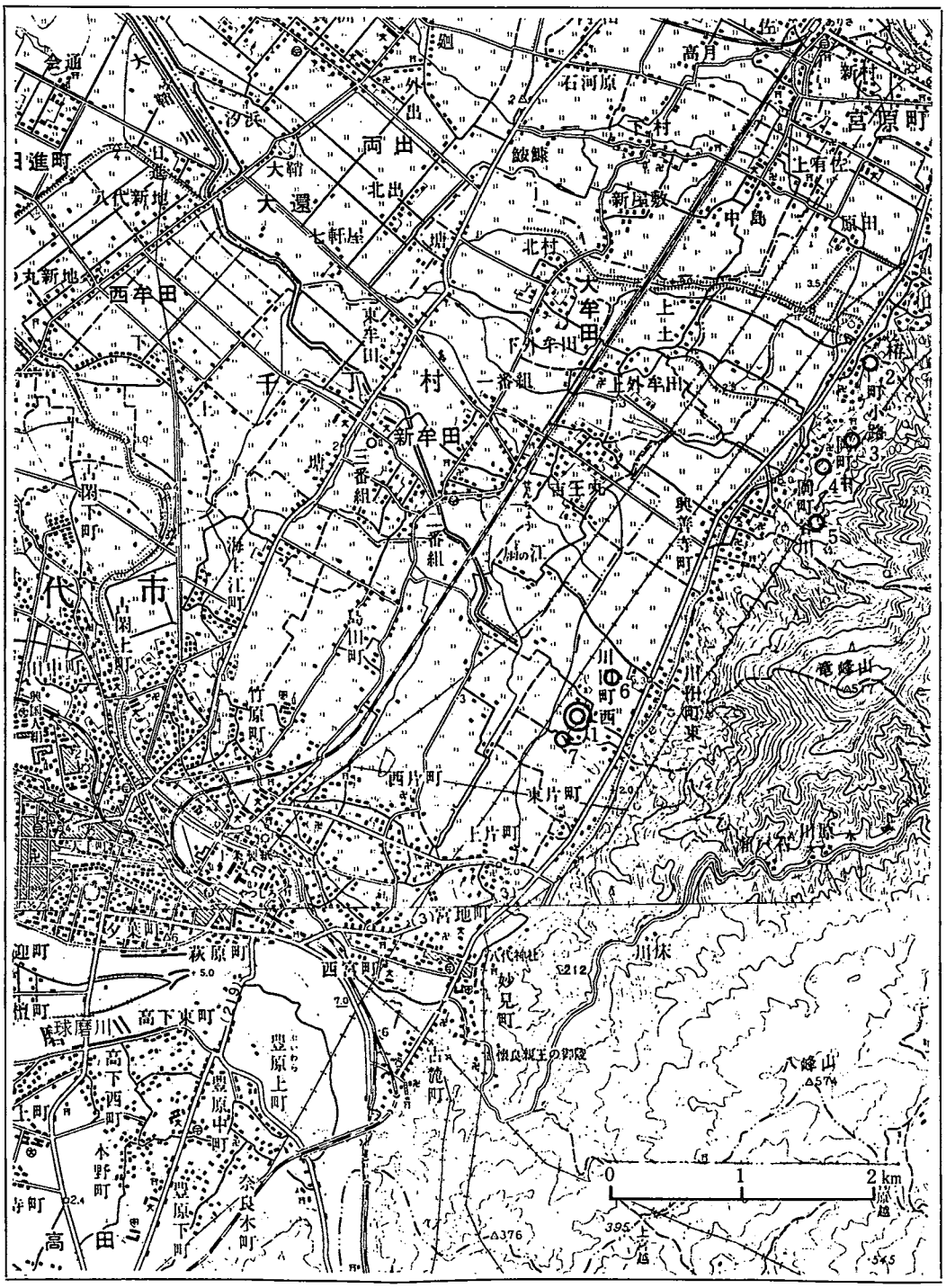
1月24日、熊本県文化財収蔵庫より調査器材を搬入。

1月25日、調査区一帯の現況を写真により記録し、第Ⅰ区に1T設定、さっそく発掘作業を開始する。

2月3日～15日、第Ⅰ区に2Tを設定し、掘り下げを行う。

2月16日、2Tの中央部、水田の下は厚い粘土層におおわれ、1.3mの地点で流木などが厚く堆積したピート層に達する。ピート層の一部を掘り下げたとたん、水が湧き出し、作業を中断する。排水ポンプを設置して作業再開。

2月17日～20日、同作業を継続する。Ⅱトレンチは全面に流木等の植物遺体の露出を完了、写真による記録を行ない、資料を採集する。トレンチは湧きでる水で、いたるところ両壁がくずれおち、危険な状況のため埋めもどす。



1. 川田京坪遺跡　2. 境古墳群　3. 平原古墳群
4. 王泉寺古墳群　5. 清水古墳群　6. 車塚遺跡　7. 川田小筑遺跡

第1図　川田京坪遺跡と九州縦貫道関連遺跡

3月2日～8日、Ⅱ区に3Tを設定、ひきつづきⅢ区にトレンチを設定する。

3月10日～16日、Ⅲ区4Tを設定、10m四方を全体的に掘り下げ、遺構検認を行う。各層より須恵器・土師器が出土するが、遺構はまったく認められず、4Tを放棄する。

3月17日～4月20日、Ⅲ区5T・6T・7T・8Tを設定、いずれも10m四方を面的に広げ掘り下げる。4Tと状況変らず、かなりの量の遺物が出土したが、大半は磨滅したものである。

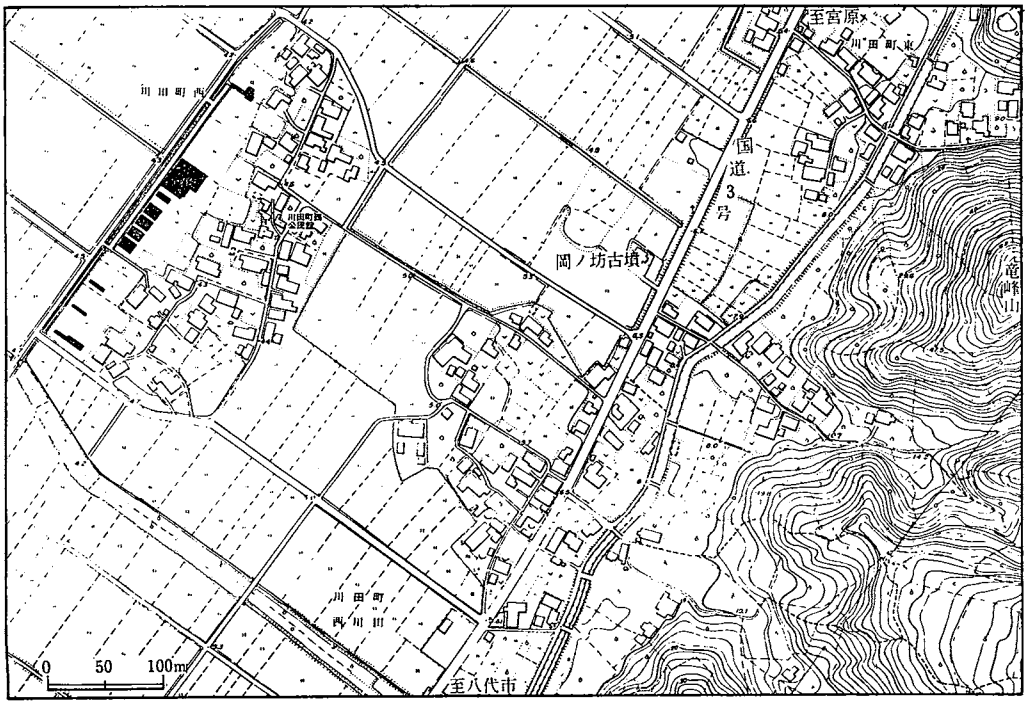
4月25日～5月10日、Ⅲ区9T南東部に土壙を発見、一部人骨も出土した。連日の雨で作業進まず。

5月11日～7月7日、土壙墓の調査を継続。7月7日、すべての作業を終える。

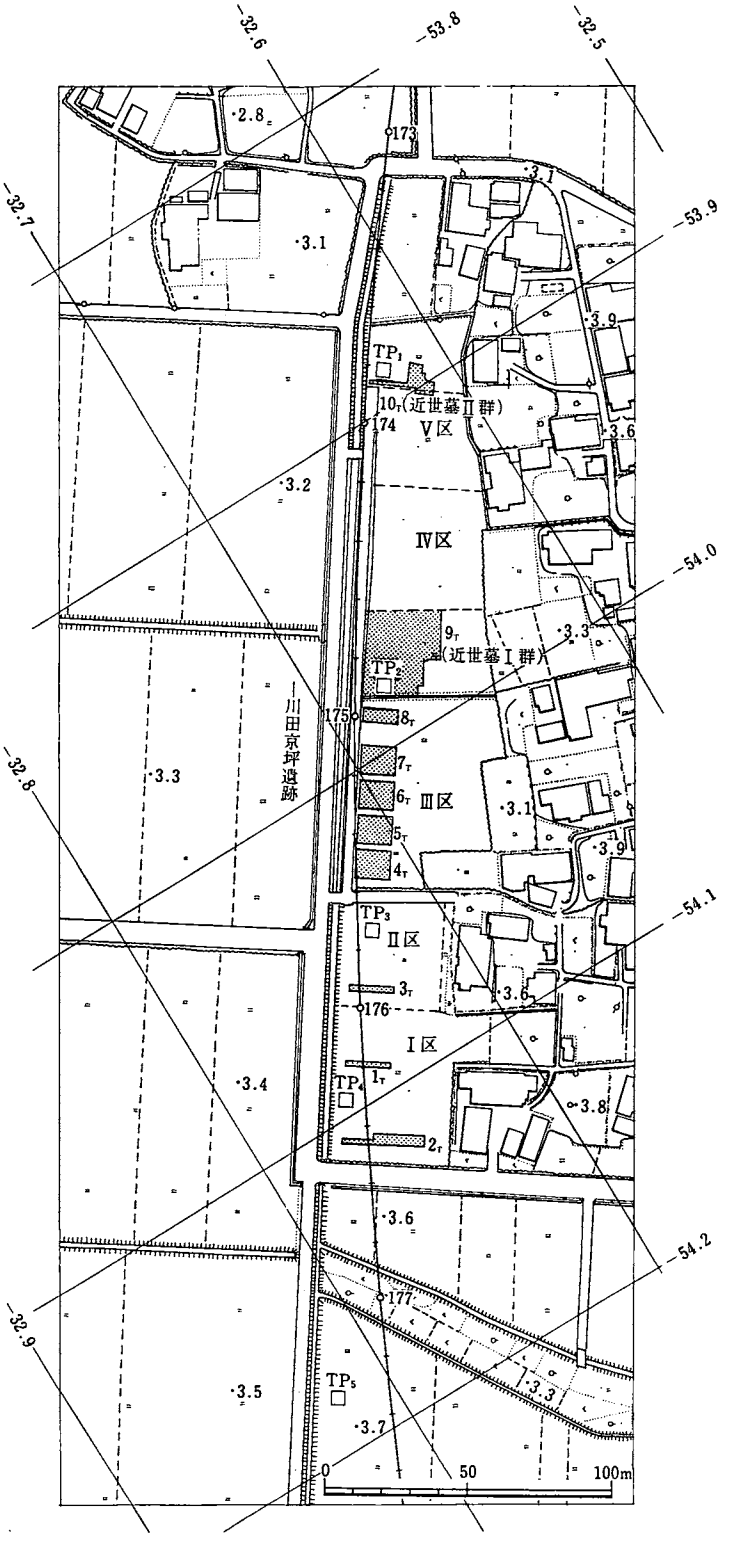
第2章　調　査　の　概　要

1.　調査地区

九州縦貫道の路線は、八代市興善寺町から国道3号線を横切り、八代平野に入る。さらに川田町西の字車塚（車塚遺跡）、字溝添、字京坪、字小筑（川田小筑遺跡）を経て、八代インターチェンジに達する。路線は字京坪の東側部分を通過するが、調査地区はそのうち長さ275mにわたる範囲を対象とした。一帯はすべて水田地帯で、水田の枚数ごとに南よりⅠ～Ⅳ区に分



第2図　川田京坪遺跡調査地点位置図



第3図　川田京坪遺跡調査区全図

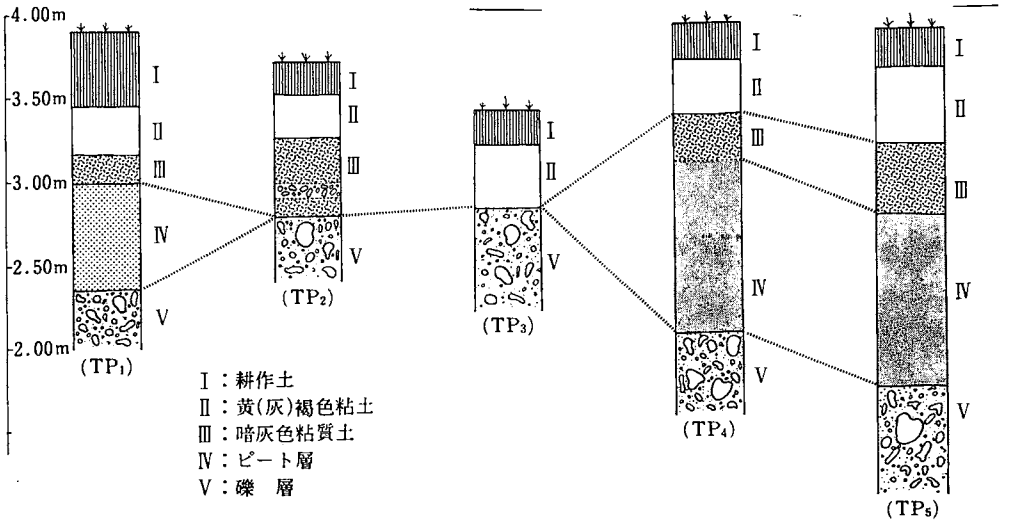
け、Ⅰ区に１Ｔ・２Ｔ、Ⅱ区に３Ｔ、Ⅲ区に４Ｔ・５Ｔ・６Ｔ・７Ｔ・８Ｔ、Ⅳ区に９Ｔ、Ｖ区に10Ｔの計10ケ所にトレンチを設定し、必要に応じて拡張し遺構の検出を行った。

各トレンチのうち、Ⅰ～Ⅲ区では、多量の土師器・須恵器・近世陶磁器等が出土したが、これらを伴う遺構は全く検出することが出来なかった。各出土遺物の多くは、小破片で磨滅したものが多く、遺物の分布、出土状態からも、調査区東側の微高地（川田町西東坪集落）から流れてきて再堆積したものであることは容易に判断できた。とくにⅠ区１Ｔでは、地表下1.3ｍの地点で厚さ50～60㎝の範囲に、流木が再堆積したピート層が確認された。これは微高地と微高地との間隙に出来た流路ないし古く球磨川の氾濫原のうち、低湿地に生じたかなり一般的な現象であったと思われ、これは八代平野とくに球磨川下流右岸の水田地帯に散在する古墳の周溝底にも同様の現象が認められ、その形成時期についてもおおよその年代が明らかになりつつある。

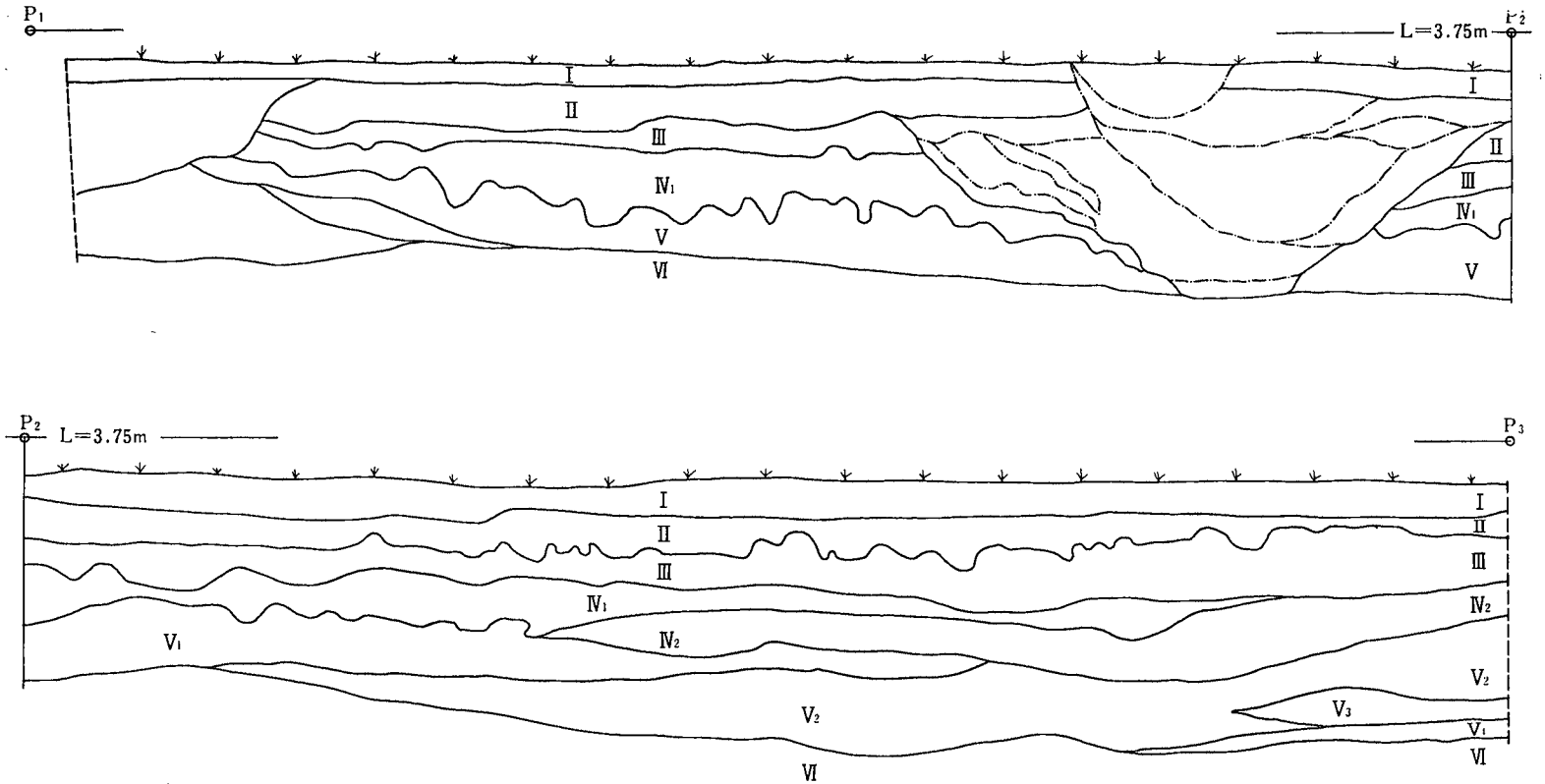
第Ⅳ区の９Ｔに35基、さらに第Ｖ区の10Ｔに18基の計53基の近世墓を検出した。これらの墓地は、すでに土地の人々の記憶からは全く消え去っていた。調査し掘りあばくことに疑問視するむきもあったが、将来の為に調査し記録を残すことにした。これらの墓は、ほぼ方形の墓域を形成しており、両群の主軸方向が一致するなど、当時の墓制を解明するうえで、少なからず貴重な資料となるものと考え、調査し記録にとどめることにした。

2. 調査区の層性・層序

調査の北端部から南端、さらに南側に隣接して調査中であった川田小筑遺跡にかけての、計５ケ所に土層観察のためのテスト・ピットを設定して、各土層の観察を行った。各ピットとも



第４図　調査地区の層序対比図



Ⅰ：耕作土
Ⅱ：黄(灰)褐色粘質土
Ⅲ：暗灰色粘質土
Ⅳ1：灰褐色砂質土
Ⅳ2：暗灰色砂質土
V1：ピート層(暗黒色)
V2：黄褐色砂層
V3：黄褐色砂層
V4：黄褐色砂層
Ⅵ：礫　層

第5図　Ⅱ区3T南壁（東―西）土層断面図

表土層から礫層上面までを確認した。その結果は第4図に示すとおりである。

調査地のベースは礫層となっていて、その上部に粘土層・砂層が互層となって堆積している。Ⅰは表土層、Ⅱは黄褐色粘質土で、現水田の床土となっている。Ⅲは青灰色粘土層で、Ⅳは青灰色砂層で、Ⅴは礫層である。遺物はⅠ～Ⅳ層まで出土し、Ⅴ層は無遺物層である。Ⅱ～Ⅲ層までは、古墳時代～歴史時代の遺物を含み、Ⅳ層は古墳時代の遺物のみ包含する。出土遺物の多くは、Ⅲ層およびⅣ層から出土したもので、遺構に伴ったものは皆無であった。なお近世墓はⅡ層上面で検出したものである。

調査地区の北側Ⅳ区9Tの砂礫層ベースの海抜は1,945mを測った。TP_2・TP_3でやや高くなり、TP_4 および TP_5（川田小筑遺跡）ではさらに低くなっている。

3. 遺物の出土状態と遺跡の性格

調査地区の現況は水田で、海抜3.1～3.4mと低く、調査地区東側の集落の立地する微高地は周辺部で3.7～3.8m、最も高い部分で5.7～6.0mである。したがって調査地区も東から西へとゆるやかに傾斜をもっている。

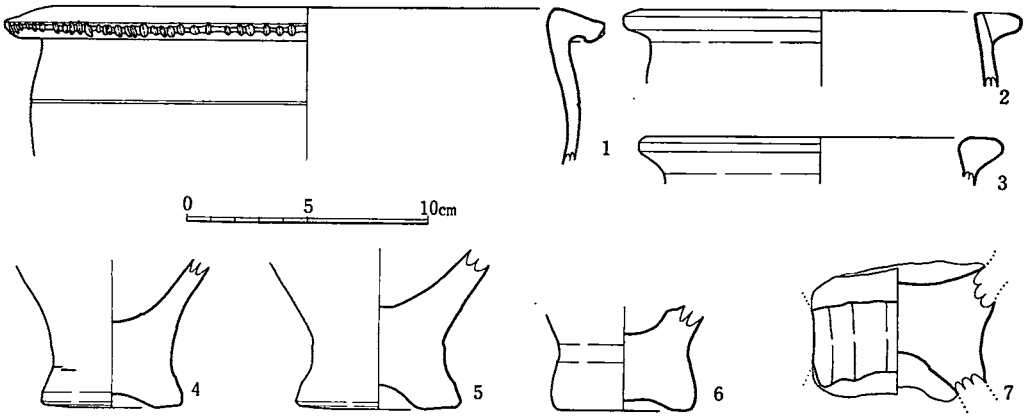
出土遺物の中心をなす須恵器・土師器は、Ⅰ～Ⅳ層までの各層より出土したが、これらは各層に散発的に出土し、細片が多くかなり磨滅が進行していたものが大半を占めていた。こうした出土状況から、かなり長い期間に序々に流されてきたもので、それらの遺物の原位置は調査区東側一帯の、現集落が立地するあたりにあったものと想定された。したがって今回の調査では、種々の重要な遺物の発見があったにもかかわらず、これらの遺物に伴う遺構については、何ら検出することが出来なかった。

4. 出 土 遺 物

出土遺物は計2,000点余りを数えるが、大部分は細片であり、図化可能なもの200点を選んで図示した。これらは、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器からなり、以下順を追って説明を加える。

(1) 弥生式土器（第6図1～7）

いずれも甕形土器の口縁部破片（**1**～**3**）、底部破片（**4**～**7**）である。**1**は強く屈曲したL字状の口縁をもつが、外方でかなり下がり、端部に刻目をほどこしている。胴部上半が比較的強く張り、口縁上端から約4cmのところに一条の沈線をめぐらしている。胎土は砂粒を多く含み、内外面茶灰色を呈している。比較的堅緻な焼成をなす、**2**・**3**は内傾気味の胴部上端に断面三角形の口縁をもつものである。特に**2**では接合部が明瞭である。内外面とも横ナデによ



第6図　弥生式土器実測図

り仕上げている。黄褐色を呈し、やや堅緻な焼成である。**4～7**は、甕形土器の底部破片である。**4～6**は、肉厚で上げ底をなしているものである。上げ底は指先等で強くナデて調整し、外面も面取り状に調整するが、器面が磨滅して稜は不明瞭である。大小の砂粒を多量に含み、赤褐色を呈している。**7**も底部破片であるが、脚端部を欠失している。やや高い脚台を有する甕形土器であったと思われる。外面はタテ方向のヘラ削りにより調整し、内面はナデ調整している。黄褐色を呈するが、内外面ともかなり磨滅し、砂粒が多く露出している。

(2)　土師器

坏（第7図1～10）

坏はその形態・手法上の差異により3つに類別される。

A類（**1～6**）

口径13cm大のもの（**1**）、12cm前後のもの（**2・4～6**）がある。いずれも体部は大きくラッパ状に広がり、口縁部がやや外弯するものと、直線的に立ち上るものとがある。端部は丸まる。底部は回転ヘラ切り離しされたのち、体部の下端が指頭でナデつけられて、底との境が不明瞭なもの（**4・6**）がある。体部内外面は横ナデ調整し、内底部は不定方向のナデ調整により仕上げている。全体としてていねいなつくりのものが多い。色調は例外なく黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。

B類（**7～10**）

口径は**9**で11.3cm、**10**で11.7cm。器高は**9**で4.7cm、**10**で5.55cmで、A類に比べ口径は小さいが深めの坏である。体部の立ち上りは、A類に比べて急である。底部はヘラ切り離しの際の余分な粘土が体部下端に残っている。この部分を横ナデ調整するが、突出部分はそのまま残し、かえって器の安定感を増している。全体としてうすくつくられているが、調整はやや荒い。特に**7**では内面に黒色が残り、わずかにヘラ磨きも認められる。色調はいずれも黄褐色を

呈し、焼成はやや不良である。

C類（27～28）

全体的に扁平な半球形状をなし、体部下半を手持によるヘラ削りにより調整したのち、口縁部内外を横ナデ調整により仕上げている。口縁部は内弯気味に立ち上るもの（27）と、内弯したのち内傾するもの（28）とがある。いずれも口縁端部は面取りされ内傾している。赤褐色を呈し、大小の砂粒を含むが、焼成は比較的堅緻である。

高台付坏（第7図11～25）

高台付坏は、体部・高台の形態により次の2類に分けることができる。

A類（11～24）

坏部の形態は、体部は大きくラッパ状に開き、前述した坏B類と極めて類似している。底部周縁にやや外方に広がる高台が貼りつけられるが、高台には広いものから（11～16）高いもの（17～24）まで多くのものがあるが、破片が多いため、坏部の形態との比較が出来ない。今後、この一群の土器については、資料の増加を待って細分が必要であろう。

B類（25）

口径15.3cm、器高5.4cmを測る丸底気味の坏部に断面三角形のやや底い高台を有するものである。体部は内弯気味に立ち上り、端部はやや内傾する。底部は回転ヘラ切り離し痕が認められ、体部下半にまでおよんでいる。高台は底部周縁よりやや内側に貼りつけられている。

以上A・B類ともに底部はすべて回転ヘラ切り離しによるものである。底部の破片を主に図示したが、器面が磨滅したものが多く、細部の観察は出来ない。

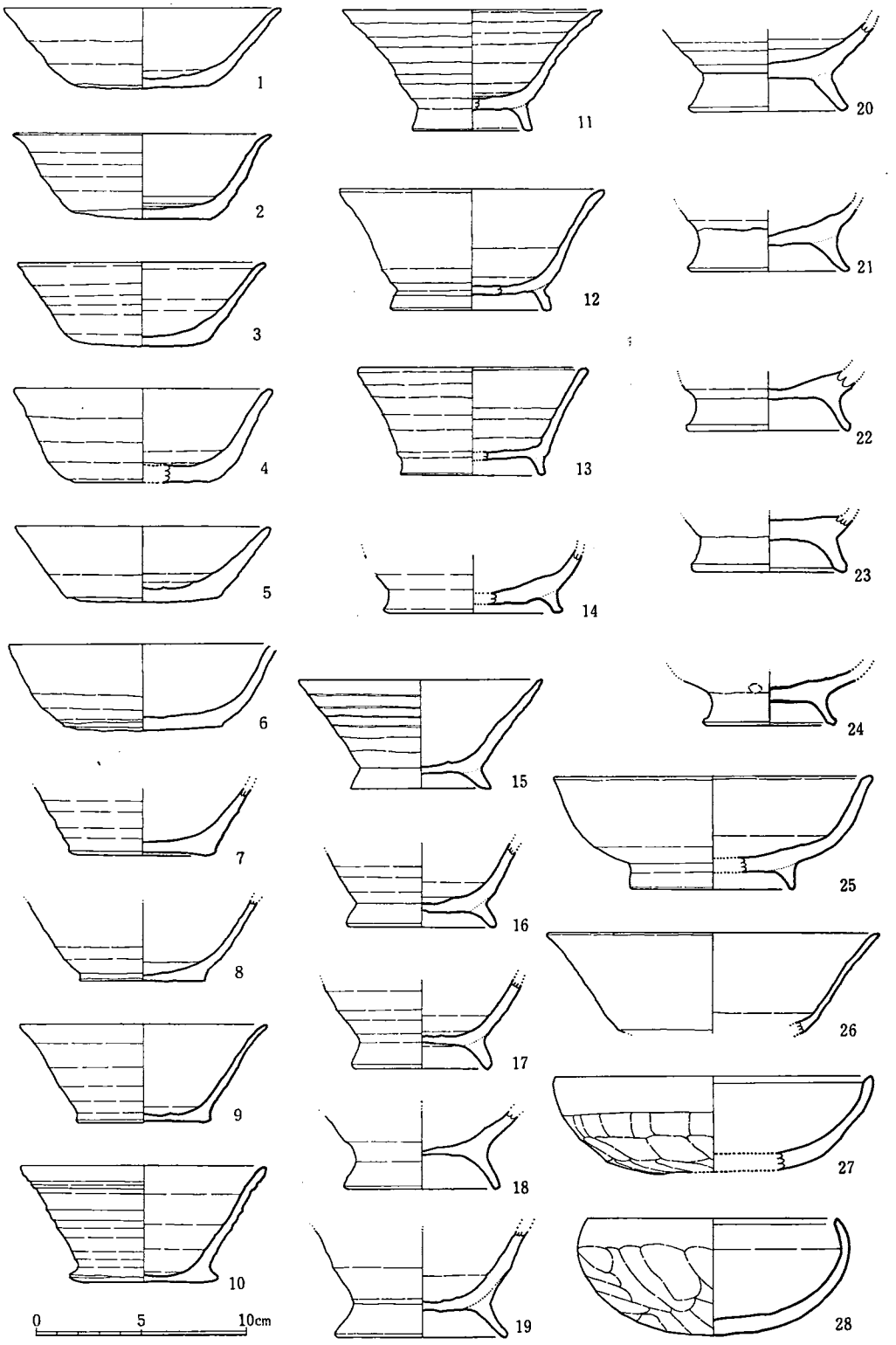
高坏（第8図29～35）

29は高坏の坏上半部破片である。坏部は浅く、口縁部は大きく開く。坏部の上半部と下半部の接合部外面は、稜をなし境が明瞭である。坏部の内面はクシ状工具により成形したのち、横ナデ調整している。30・31は高坏脚部の破片である。脚柱状部はラッパ状に広がり、裾部は外方にハネている。柱状部内面はヘラ削りされ、他は内外面とも横ナデ調整される。31では柱状部から裾部の外面に刷毛目が施されている。29～31はいずれも古墳時代（5世紀末～6世紀初頭）の土師器である。

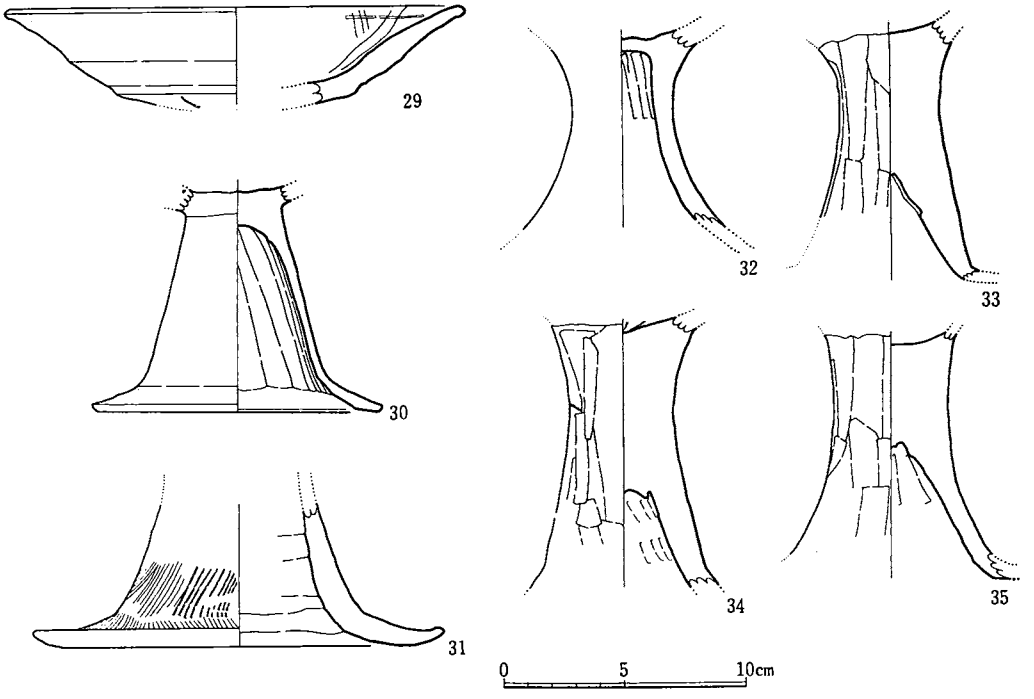
32～35は、いずれも高坏脚部の破片で、裾部を欠失している。脚部が中空のもの（32）と、脚の上半部がつまったもの（33～35）とがある。後者では脚部内面をヘラにより削り取っていて、外面はタテ方向のヘラ削りにより調整している。32は黄褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。33～35は褐赤色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

甕形土器（第9図36～39）

4点とも口縁部の破片により復原したものである。36・37は、頸部のくびれは弱く口縁部は外反し、端部は角ばっている。全体として薄いつくりである。頸部以下は刷毛目調整され、口縁部内外面を横ナデにより仕上げている。頸部内面はヨコ方向のヘラ削りにより器壁を減して


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5
10cm

第７図　土師器実測図―(1)



第8図　土師器実測図―(2)

いる。**38**はストレートの胴部から、反転気味に外反する口縁を有し、端部はやや肥厚し角ばっている。頸部外面はタテ方向の刷毛目調整したのち、口縁部外面は横ナデ調整する。口縁部内面には荒いクシ目状（ヘラ削り）の調整が施され、頸部から胴部上半にかけてはタテ方向（下→上）のヘラ削りが認められる。**36・37**同様薄いつくりである。39は、やや内傾する胴部から口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおわる。

鉢（第9図**40**）

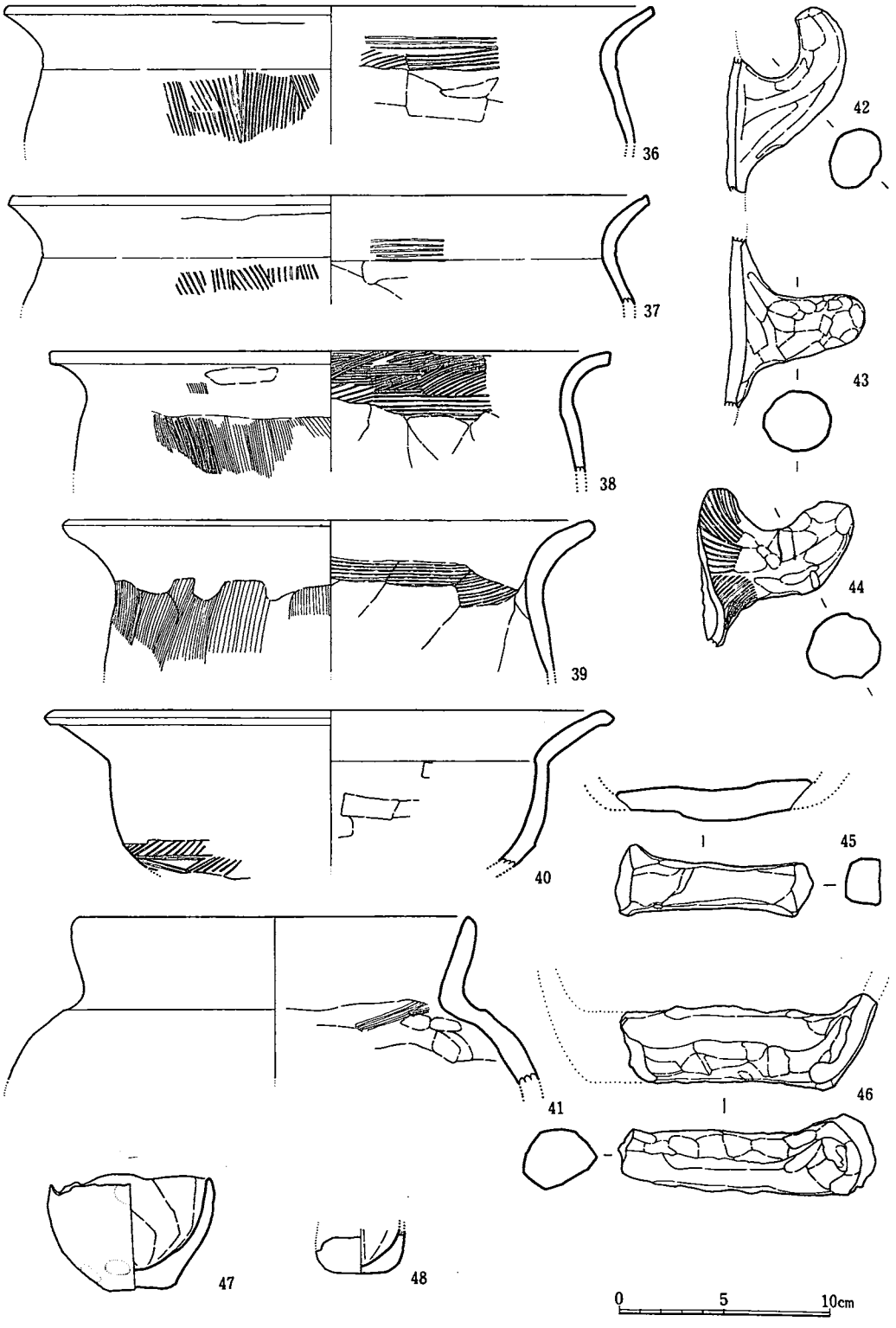
胴部は扁平で丸味をもっている。底部を欠失するが、胴部の下位でやや屈曲気味となり稜を有し、底部へ移行すると思われる。胴部は稜を境に内弯気味に立ち上り、反転して口縁部は大きくラッパ状に広がり、端部は面取りされ角ばっている。口縁部内外面から胴部にかけては横ナデ調整し、さらに底部にかけてはヘラ削り調整している。胴部内面はヨコ方向のヘラ削りが認められる。

壷（第9図**41**）

やや強く張った肩部から、頸部は強くくびれ、口縁部はほぼ垂直に立上る。全体的に厚いつくりである。口縁部内外面は横ナデ調整し、特に頸部は強く横ナデされ、肩部に稜を生じている。内面は頸部から肩部にかけて指頭圧痕が認められる。

甑（第9図**42～46**）

42～44は甑の把手で、上方へ弯曲が強いものと弱いものとがある。いずれもヘラ状工具によ



第9図　土師器実測図―(3)

り調整している。**45・46**は底部に半円形の孔を2個穿つ甑の破片とみられる。ヘラ状工具により調整している。

手づくね土器（第9図**47・48**）

47は鉢形を模した手づくね土器で、体部最大径8.0cm、器高5cmを測る。赤褐色を呈し、焼成不良である。**48**は底部破片であるが、何を模したものか不明である。体部の最大径は4.2cmを測る。

(3) 文字ある土師器（第10図）

土師器高台は坏および坏の外底部にヘラ状工具により文字を刻んだものが計8点出土した。8点のうち4点（**1**～**4**）については「川大」の2文字が明瞭に残り、他の3点（**5**～**7**）については「大」「犬」の字の上におそらく「川」の字の一部が残るものである。また他の1点は判読できない。

1は比較的高い高台を有する坏で、前述した高台付坏A類に類似する。文字は高台部内面から外底部にかけて力強く刻まれている。**2**は高台付坏B類の高台に類似し、文字は高台部内面から外底部いっぱいに細い細で刻まれている。**3**は丸底気味の底部にやや外反気味に開く低い高台を有している。内底部いっぱいに「川大」の2文字が力強く刻まれている。字体としては最も整っている。**4**は外反に開く低い高台を有し、文字は内底部のやや内側に刻まれる。**5**は肉厚で高い高台を有するもので、「川大」の左半以上を欠失している。**6**・**7**は坏の外底部に「川」の一部および「大」の一部を残すものである。なお**7**の「犬」と見えるのは後のきずかもしれない。**8**は判読できないが、「大」の字の一部ではなかろうか。

(4) 須恵器

出土した須恵器は、古墳時代のものから歴史時代以降のもので、かなり時間的な巾をもっている。ここでは例外を除き、比較的古いものから新しい時期のものの順に図示した。

坏蓋（第11図**1**～**6**）

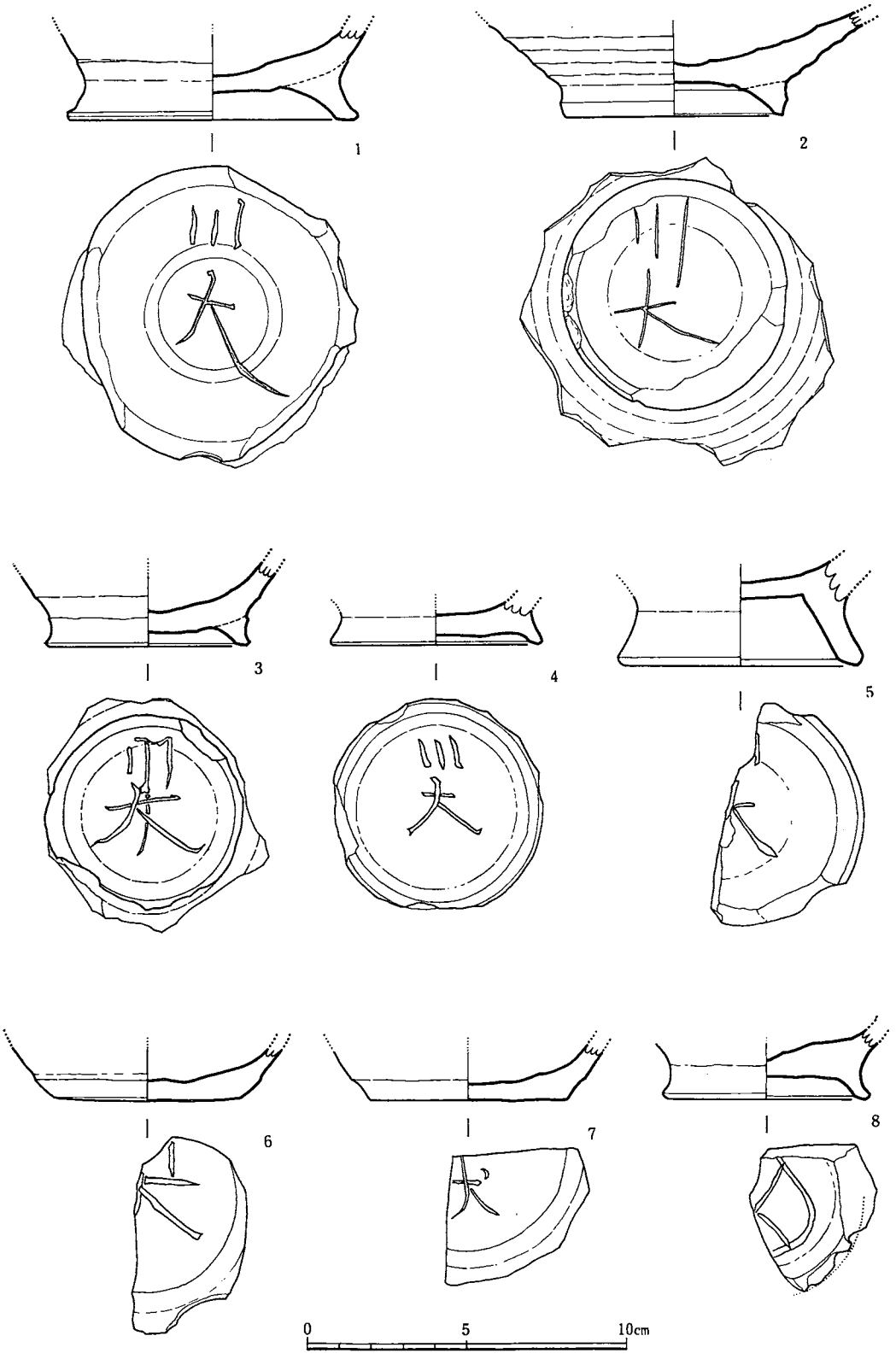
口縁端部に明瞭な段を有するもの（A類）と稜のみ残すもの（B類）がある。

A類（**1**・**2**・**4**）

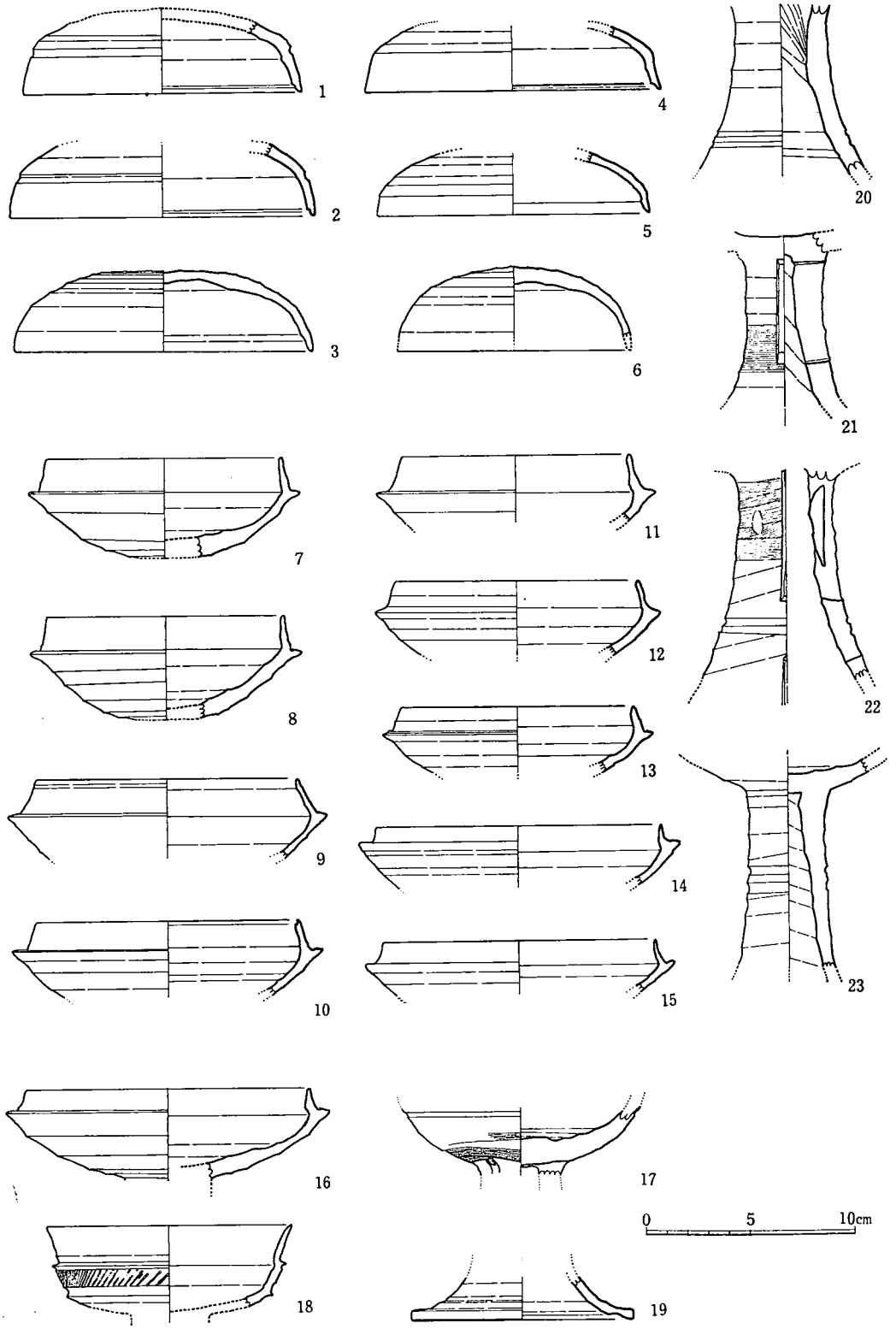
いずれも天井部を欠失する小破片により復原した。天井部と体部との境に明瞭な凹線をめぐらすもの（**1**・**2**）と屈曲して口縁部が下方へ開くもの（**4**）とがある。口縁部内面に明瞭な段を有する。**1**は口縁部がやや外方に開いている。復原口径は**1**が13.5cm（内法）、**2**が14.7cmを測った。**1**・**2**とも青灰色を呈し、焼成良好である。

B類（**3**～**5**）

器全体が丸味たもち、天井部と体部の境は不明瞭で、口縁端部内面に稜を有する。天井部は約⅔を回転ヘラ削り調整される。**6**は口縁端部を欠失するが、全体的な形からB類に属すも



第10図　文字ある土師器実測図



第11図　須恵器実測図―(1)

のと思われる。

坏身（第11図**7～13**）

図示できたものは７点であるが、口径および立ち上りの角度・高さによりＡ・Ｂ・Ｃ類に分けた。

Ａ類（**7**・**8**）口径11.3～11.4cm、器高4.8～5.0cm。立ち上りは高く、垂直気味に鋭く伸びている。受部は水平方向に小さくのび、立ち上りとの境（基部）に凹線がめぐるもの（**8**）がある。

Ｂ類（**13**）口径11.2cmでＡ類に近い。立ち上りは低く内傾している。体部の張りは弱い。

Ｃ類（**9**～**12**）口径11.0～12.6cm、いずれも底部を欠失するが、立ち上りは高いが内傾し、受部が水平方向に伸びるもの（**10**）と、やや外方に下るもの（**9**・**11**・**12**）がある。また**10**では口縁端部内面に稜を有している。

高坏（第11図**14**～**23**）

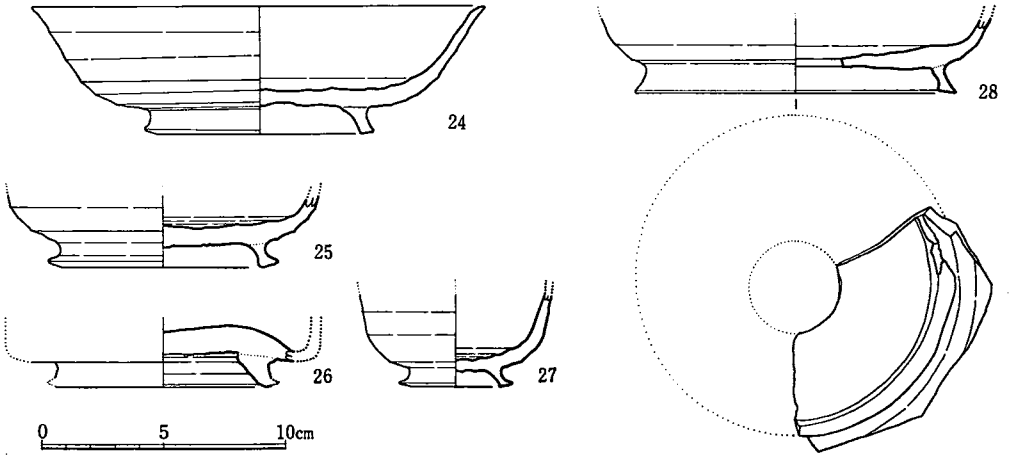
高坏には、有蓋（Ⅰ類）・無蓋（Ⅱ類）のものがあり、脚部には透しをもつもの（Ａ）、もたないもの（Ｂ）がある。

Ⅰ類（**14**～**16**）口径13.2～13.8cm。立ち上りはやや内傾気味に小さく伸びる。体部の張りは弱い。**14**の受部は水平方向に、**15**はやや上方に、16はやや下方に伸びている。

Ⅱ類（**17**・**18**）**17**は底部以下、**18**は口縁部と底部を欠失しているため不明な点が多い。**18**は復原口径11.8cmで、底部と体部の中位に２条の凹線をめぐらし、この間にクシ描き列点文を配する。全体的にシャープな仕上げで、暗青灰色を呈し、堅緻な焼成である。

Ａ（**21**・**22**）**21**は１段・**22**は２段の透しを施し、**22**では上下の透しの間に２条の凹線をめぐらしている。また上方の透しは、完全に切り取っていない。

Ｂ（**20**・**23**）脚部に２条の凹線をめぐらすが、透しは省略されている。**20**では脚内側にシボ



第12図　須恵器実測図―(2)

リ目がみられる。

なお**19**は高坏脚裾部の破片であるが、小破片であるため不明瞭な点が多い。

高台付坏（第12図**24**～**28**）

高台が比較的高く、強く外弯し、底部周縁のやや内側に取りつけられるものである。5点のうち、全体の形が明らかなのは**24**のみであるので、底径の法量により次のA・B・C類に分けた。

A類（**28**）底径13.4cmと最も大きい。高台はやや高く外方にハネていて、底部周縁よりわずかに内側に取り付けられている。体部は大半を欠失し不明である。なお底部中央に径約3.3cmの孔があけられている。焼成前に施されたものである。通常窯跡等生産跡でその出土例が多い。

B類（**24**～**26**）底径9.5～9.6cm。**24**は口径18.7cm、底径9.5cm、器高5.3cmである。高台はやや高く、外方に強くハネていて、端部は角ばっている。高台の取り付け位置は底部周縁よりかなり内側である。体部はやや丸味をもちながら、大きく開きながら立ち上っている。**25**の高台は、外方に強く開くが高台の中程でややくびれ、端部でまた肥厚し角ばっている。**26**は焼きひずみがあり不明瞭であるが、高台はやや肉厚で、底部周縁よりかなり内側に取り付けられている。

C類（**27**）底径4.3cm。小型の高台付坏で、高台の形態・取り付け位置はA・B類と同じような特色をもっている。

坏蓋（第13図**29**～**35**）

坏蓋はつまみをもたないもの（Ⅰ類）もつもの（Ⅱ類）にわけられ、さらに法量によってA・Bに分けることができる。

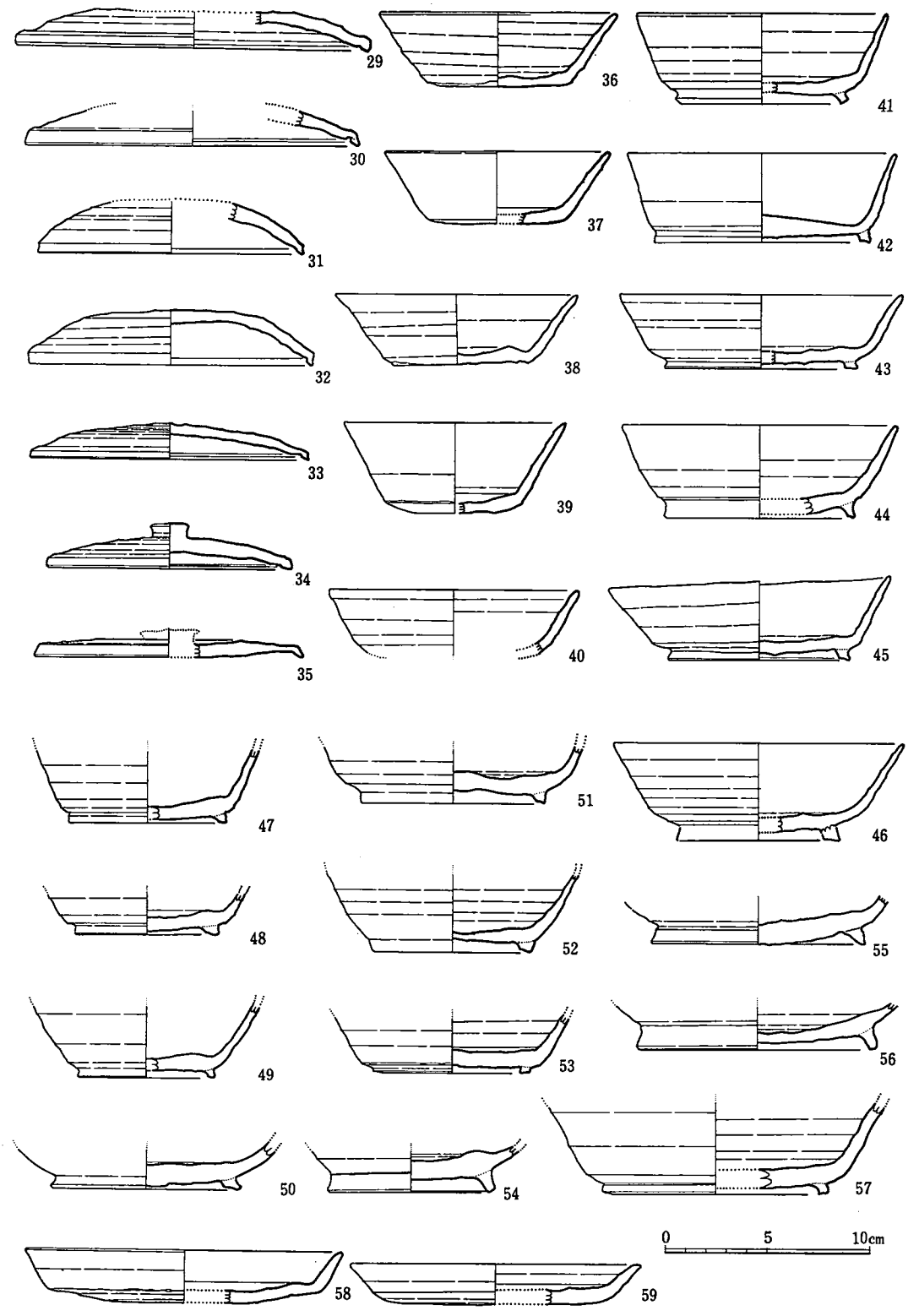
ⅠA類（**32**・**33**）口径13.7～14.0cm。**32**は天井がやや高く平らで、**33**は**32**に比べ天井が低く扁平である。天井部は全体の⅔を回転ヘラ削りされている。口縁部は小さく屈曲し、内面に稜を有している。

ⅡA類（**34**・**35**）口径12.0～13.2cm。ⅠA類に比べやや小型の蓋に、扁平なつまみを有している（**34**）。口縁部は**34**は屈曲が不明瞭で、**35**では、屈曲ののち外方へ開き、端部を失っている。

なお**29**～**31**はいずれも天井部を欠失するため、つまみの有無は不明である。**29**は口径17.4cm、30は16.4cmでB類とし、**31**は口径13.0cmでA類とすることができる。口縁端部の形態は、屈曲が明瞭で内面に稜を有するもの（**30**）、屈曲が明瞭で端部が外方へ開くもの（**31**）、さらに屈曲が不明瞭なもの（**29**）がある。

坏（第13図**36**～**39**）

坏の口径にはあまり大きな差はないが、器高との比較において器高の高低すなわち浅めの坏（A類）と深めの坏（B類）に分けた。



第13図　須恵器実測図―(3)

A類（**36～38**）口径11.3～12.0cm、器高3.1～3.5cm。体部から口縁部にかけて直線的に大きく外反する。底部は回転ヘラ切り離しのまま無調整で体部内外面横ナデ調整し、内底部は不定方向のナデにより仕上げる。

B類（**39**）口径11.0cm、器高4.4cm。体部はA類に比べ急に立ち上るが、底部の調整は一致する。

なお**30**は底部を欠失しているため、高台の有無は判明しないが、坏にすればA類になるだろう。

高台付坏（第13図**41～57**）

須恵器の中で最も多く出土したが、全体の形が明らかなもの、あるいは復原できたものは6点にすぎない。ここではまず高台の形態によりA～Eに分けた。なお高台付坏して分類した中に、当然高台付埦（たとえば**55～57**など）も含まれると思われるが、今は類別に根拠として、類別の規準を見い出せないので、一括して取り扱うことにする。

A類（**41・54・56**）高台は外方に開くように取り付けられ、端部が外傾し角ばっているもの。底径では**41**が8.4cm、**54**が8.3cm、**56**が11.8cmを測り、かなり大小の差が認められる。

B類（**55**）高台はやや低いが、A類同様外方に開くように取り付けられる。断面が三角形をなし端部が尖ったもの。

C類（**53**）高台は著しく低く、断面形は横長の長方形をなすもの。高台の端部はほぼ水平に近い。

D類（**42～45・47～52**）高台は全体として低く、断面形は逆台形をなし、端部は内傾し角ばっているものが多い。

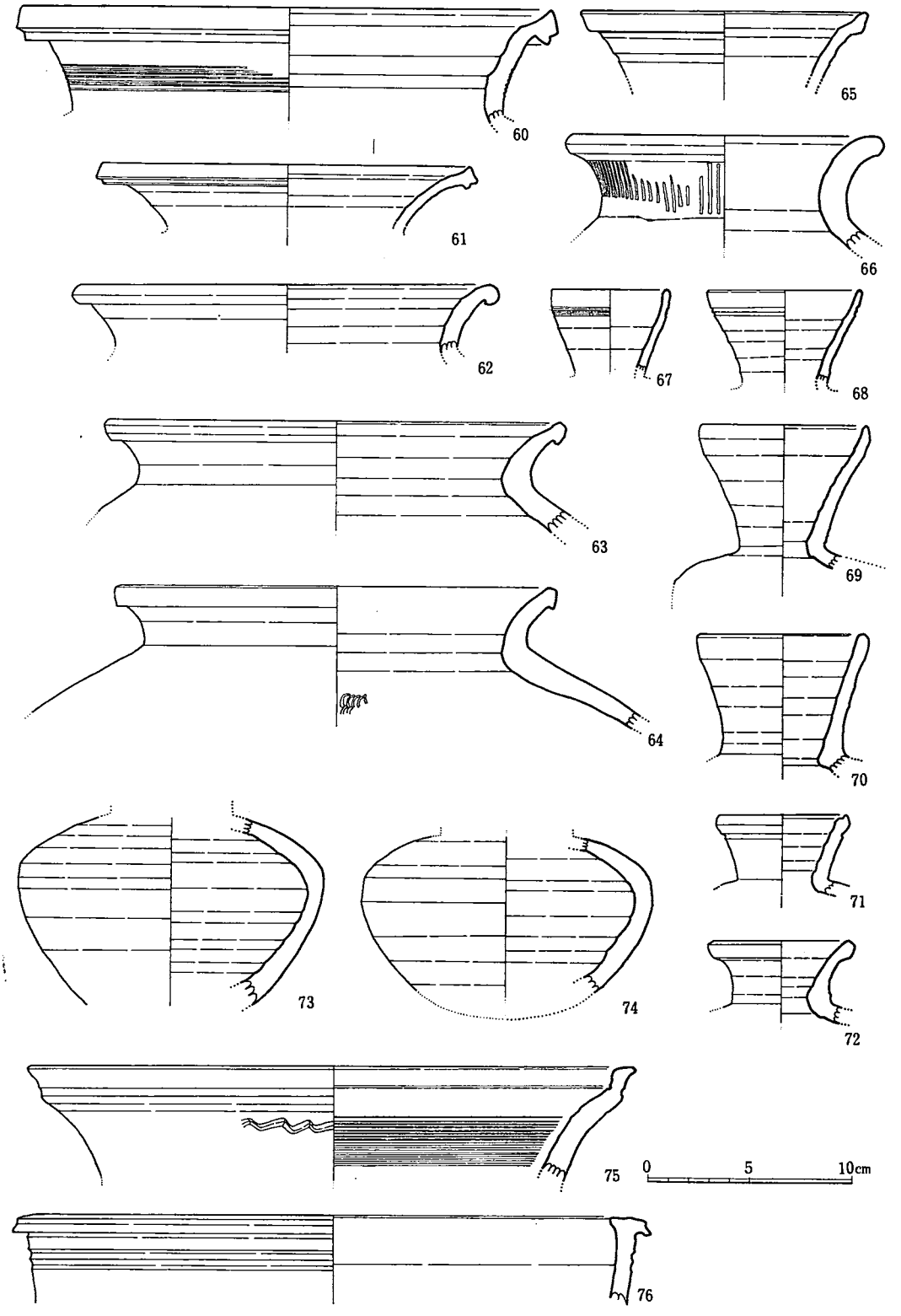
E類（**57**）高台は低く、やや内弯気味に下方に取り付けられ、端部は角ばって水平面を保っている。

皿（第13図**58・59**）

皿は2点のみ復原できた。**58**は底部の中央がふくらむが、体部と底部の境は明瞭である。体部から口縁部にかけては直線的に外反する。底部は回転ヘラ削りされ、体部内外面は横ナデ、内底部は不定方向のナデ調整により仕上げられる。復原口径15.6cm、器高2.6cmを測る。**59**は底部はほぼ平らで、体部と底部の境は不明瞭である。体部は**58**に比べるゆるやかに立ち上る。調整方法は**58**と一致する。

甕（第14図**65**、第15図**78・79**）

65・78は口頸部の破片である。**65**は口頸部がラッパ状に大きく開き、口縁下部で屈曲し、口縁部は直立気味に短かく立ち上る。屈曲部の下位外面に浅い凹線がめぐっている。**78**も口頸部がラッパ状に大きく開き、口縁下部で屈曲し、口縁部は内弯気味に外反し、端部はつまみ上げられる。屈曲部外面に明瞭な凹線一条がめぐっている。また屈曲部から頸部にかけての外面には、櫛目波状文が施されている。**79**は甕の体部破片と思われるが、円孔部は残存していない。



第14図　須恵器実測図―(4)

体部は扁平で肩部から底部にかけての外面は、静止状態による手持ちヘラ削り（時計まわり）により荒い調整が行なわれる。いずれも古墳時代後期の所産ある。

甕形土器（第14図**60～64**）

甕形土器には口縁部、特に端部の形態によりA・B・C・D・E類に分けた。

A類（**60・61**）口頸部はやや高く基部から直線的に外反する。口縁部は外方に肥厚し段をなす。**60**は頸部はカキ目調整し他は横ナデにより仕上げる。**60**は口径26.0cm、**61**は18.7cmを測った。

B類（**75**）口縁部は外弯気味に開くが、口縁部で屈曲したのち、さらに直線的に立ち上り、端部がやや肥厚している。頸部外面には櫛目波状文が一条めぐり、内面にはヨコ方向のカキ目調整が施される。復原口径29.8cmを測る大形の甕である。

C類（**62～64**）口頸部は低く、強くくびれた頸部から口縁部は強く外弯し、やや端部が肥厚するが段はなく、やや下方に折り曲げるものがある。**64**の体部内面には同心円文タタキが残っている。口径は**62**が21.1cm、**63**が22.8cm、**64**が21.8cmを測った。

D類（**66**）口縁部はB類同様強く外反するものの、端部は丸くおわる。全体的に肉厚で、口頸部外面にタテ方向のカキ目調整が施される。

E類（第15図**77**）体部はほぼストレートで口縁部は「く」の字状に外反する。大形の甕である。体部外面と内面にも平行タタキ痕が認められ、また体部内面はタテ方向のヘラ削りが施される。形態および手法は土師器のそれに極めて類似する点が多い。特異な遺物と言える。

壺（第14図**61・73・74**）

61は、口縁部が大きく開き、端部が肥厚し段をなす。**73・74**は底部および口縁部を欠失する小型の壺である。いずれも肩が強く張っている。

平瓶・提瓶（第14図**67～72**）

平瓶あるいは提瓶の口頸部破片であると思われるが判明しない。これらは口縁の形態によりA・B類に分けた。

A類（**67～70**）口頸部が漏斗状をなすものである。

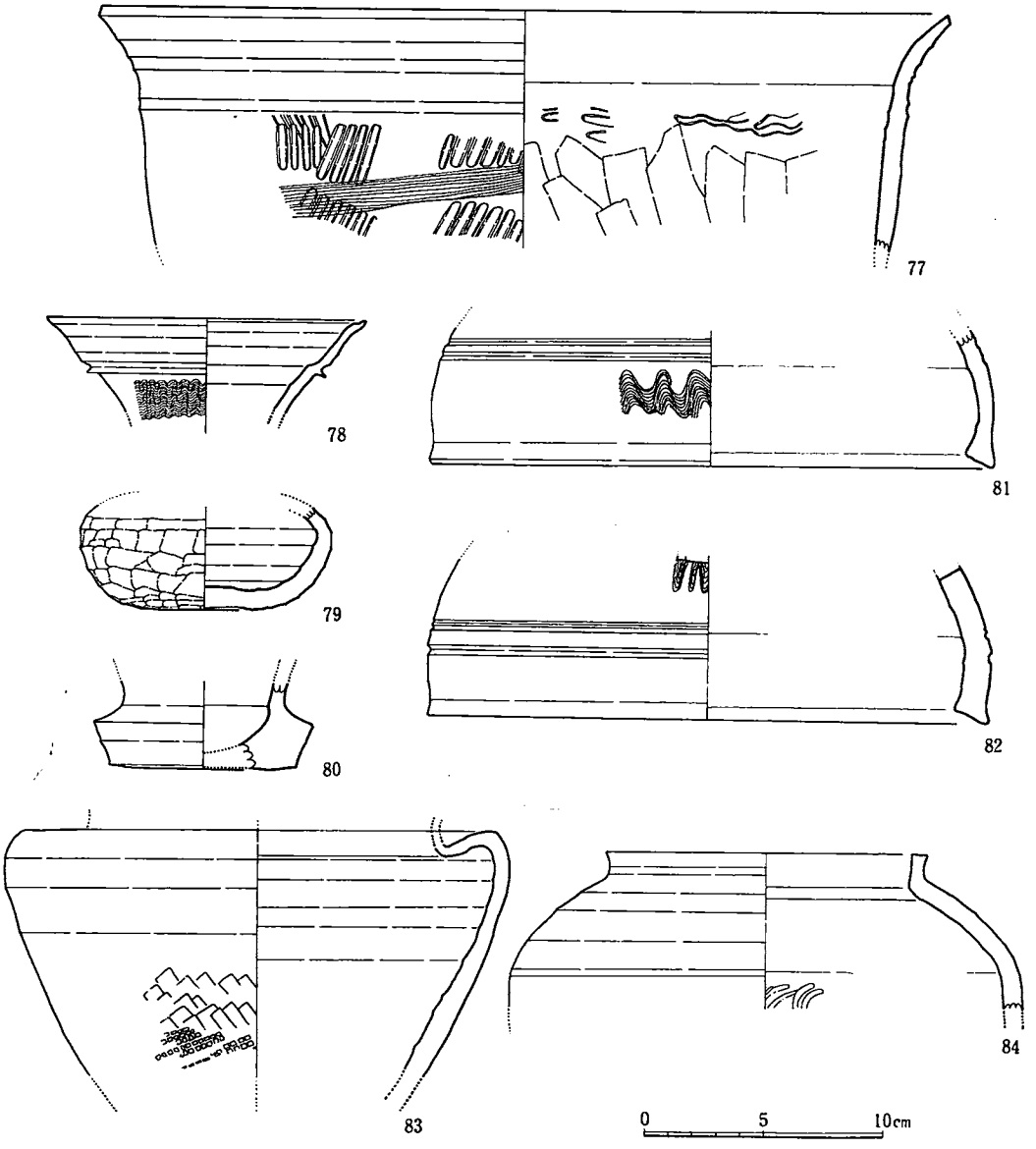
B類（**71～72**）口頸部が低く、端部の外面が肥厚するものである。

器台（第15図**81・82**）

いずれも器台の脚裾部の小破片による復原である。裾部内弯気味に広がるもので、端部は肥厚して角ばっている。また端部内面は内傾している。外面に二条の凹線がめぐらされ、**81**では凹線の下部に、**82**では凹線の上部に櫛目波状文が一条めぐらされている。また**82**では裾部から約6cmのところに透しの下端が認められる。

鉢形土器（第16図**85～91**）

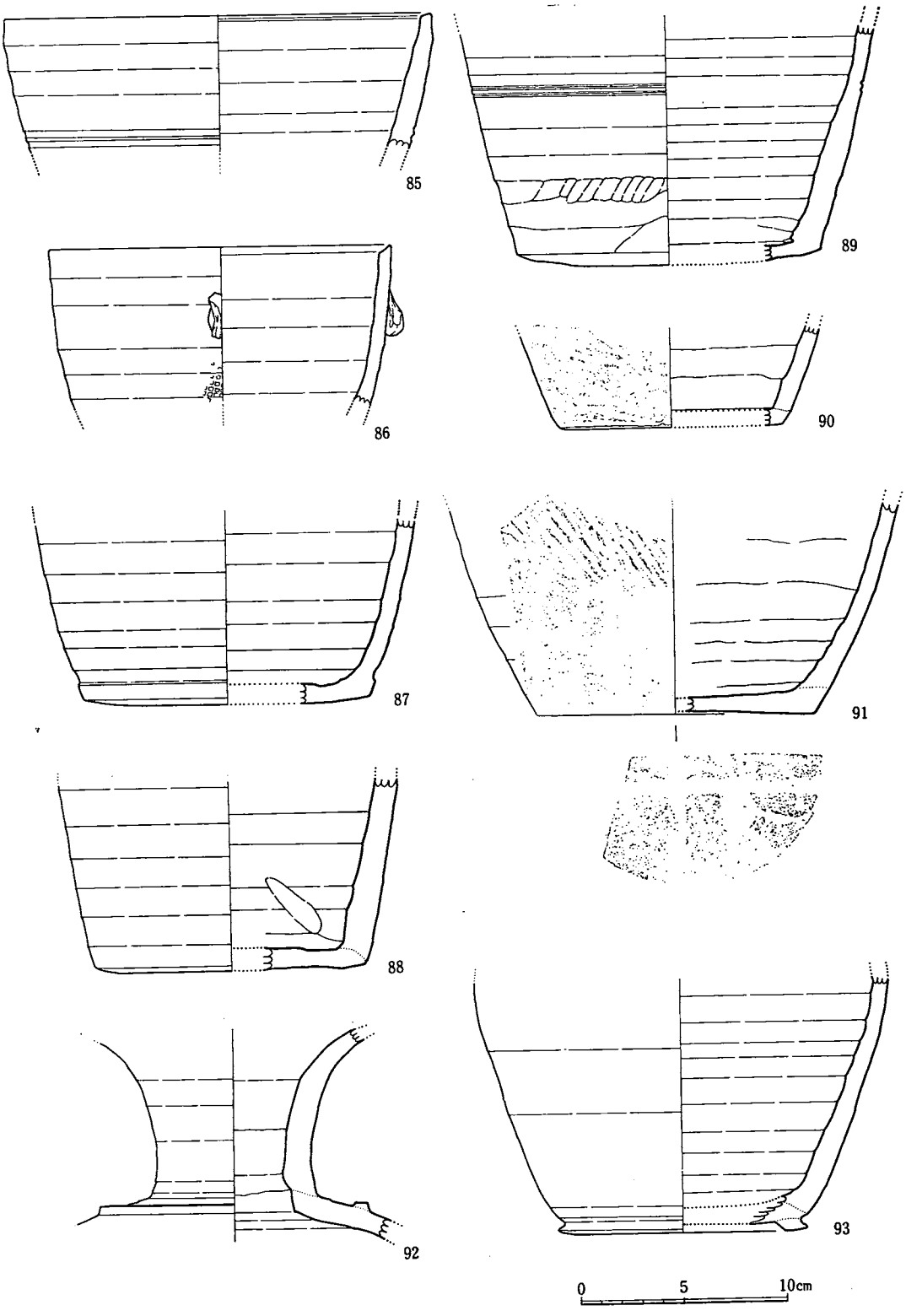
前述した鉢形土器と区別する意味で「鉢」とした。計7点出土したが、これには把手のつくもの（A類）と、つかないもの（B類）がある。



第15図　須恵器実測図―(5)

A類（第16図**86**）口径16.8cm。口縁端部から約4cmのところに細い粘土紐を貼り付け、さらに上方に折り曲げている。把手は完全に穴がつぶれていて把手の機能ははたしていない。体部はストレートで、端部は角ばり内傾する。内外面とも横ナデ調整を施している。なお把手の数は小破片のため判明しない。

B類（第16図**85・87～91**）A類と形態上の差異は認められない。体部下半から底部にかけては回転を利用したヘラ削りにより調整するのが一般的である。全体的に肉厚である。なお底部に回転ヘラ削りのあと同心円文タタキにより調整されたもの（**91**）があり、類例と比較する場



第16図　須恵器実測図―(8)

合一つの目安となりうる。

A・B類の6点はいずれも青灰色を呈し、焼成は極めて良好である。

短頸壷（第15図**84**）

胴部下半を欠失するが、ほぼ球形の胴部に、短かい直立した口縁をもつものである。体部および口縁部内外面は横ナデ調整し、体部内面には同心円文タタキがわずかに残っている。

その他　（第15図**83**）

口縁部を欠失し、頸部から肩部にかけては、焼きひずみを生じて変形しているため、形態は不明な点が多い。体部外面の下半には、細かな格子目タタキのあとタテ方向のヘラ削により調整している。

突帯付長頸壷（第16図**92・93**）

92は口頸部の破片で、口縁部を欠失する。頸部は強くくびれ、肩部との間に断面方形を呈する突帯をめぐらしている。頸部は直立気味に立上るが、口縁部近くで急に外反する。内外とも横ナデ調整で仕上げている。青灰色を呈し、胎土緻密で、焼成も極めて良好である。**93**は肩部以上を欠失するが、おそらく**92**と同様突帯を有する長頸壷であろう。底部周縁に沿って扁平で巾の広い高台がやや外方に開くように取り付けられている。体部は直線的に立ち上り、肩部は強く屈曲するものであろう。色調・胎土・焼成とも**92**と極めてよく類似している。

(5)　軒平瓦（第17図）

瓦当面の右半、瓦全体の約¼を残す破片で、顎部をもたない型式の軒平瓦である。Ⅲ区5T第Ⅲ層から出土した。

瓦当文様は均正唐草文で、心飾から下向き5葉の唐草文が連続する。心飾の右葉と右外区に重復する1葉を加えると、中心より左右に連続7葉の下向き唐草文が走ることになる。上下（左）右区は凸線で区画されるが、珠文等は完全に省略されている。瓦当面の中央での巾は5.2cm、長さは約24cm位になるものと思われる。

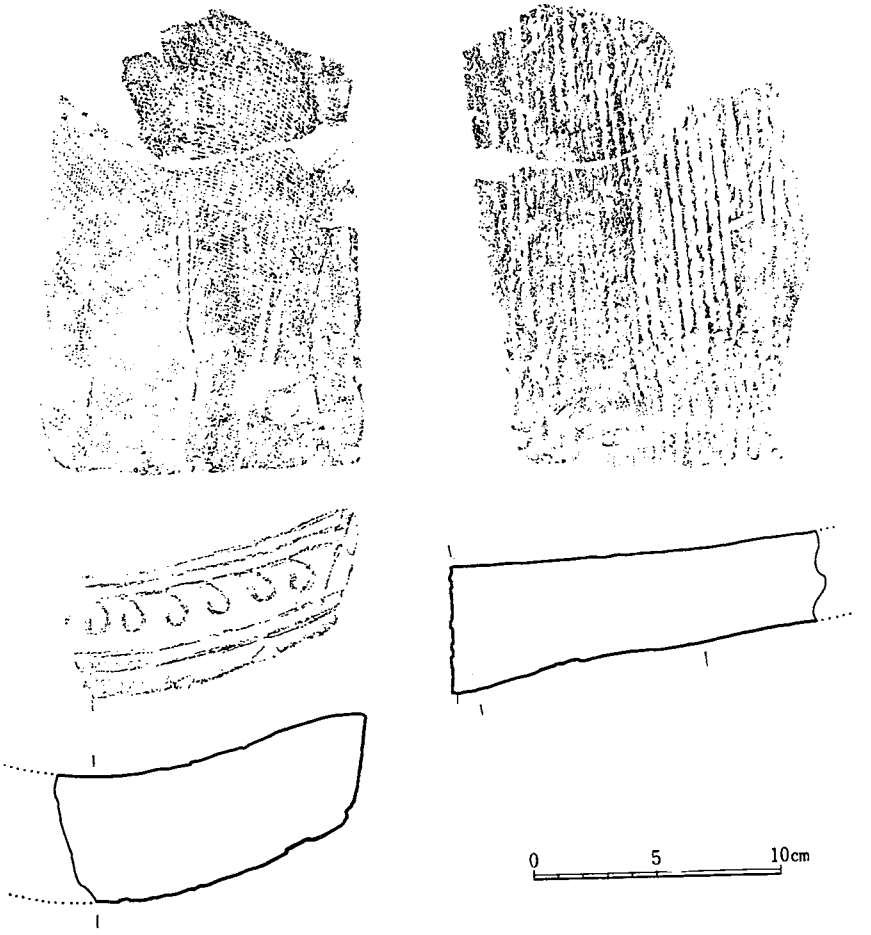
平瓦部凸面は側端部に平行する縄目叩き文（右撚り）が残り、瓦当面との境まで認められる。凹面には布目在痕の他に桶枠痕・糸切痕が残つている。側端部・側端面はヘラ状工具により面取り調整されている。灰白色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好である。

(6)　陶磁器

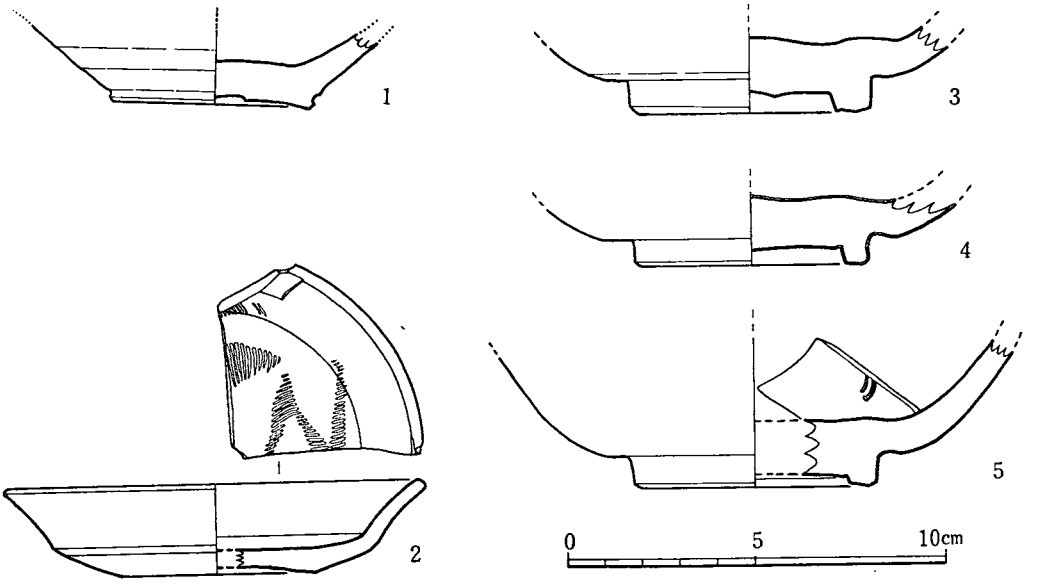
青磁（第18図**1～5**）

1は越州窯青磁碗である。いわゆる蛇目高台をなすもので、全体的にやや上げ底気味となる。底径5.4cmを測る。内外面とも灰緑色の釉が認められ、目痕は畳付部分に残る。露胎部分の色調は灰白色を呈する。

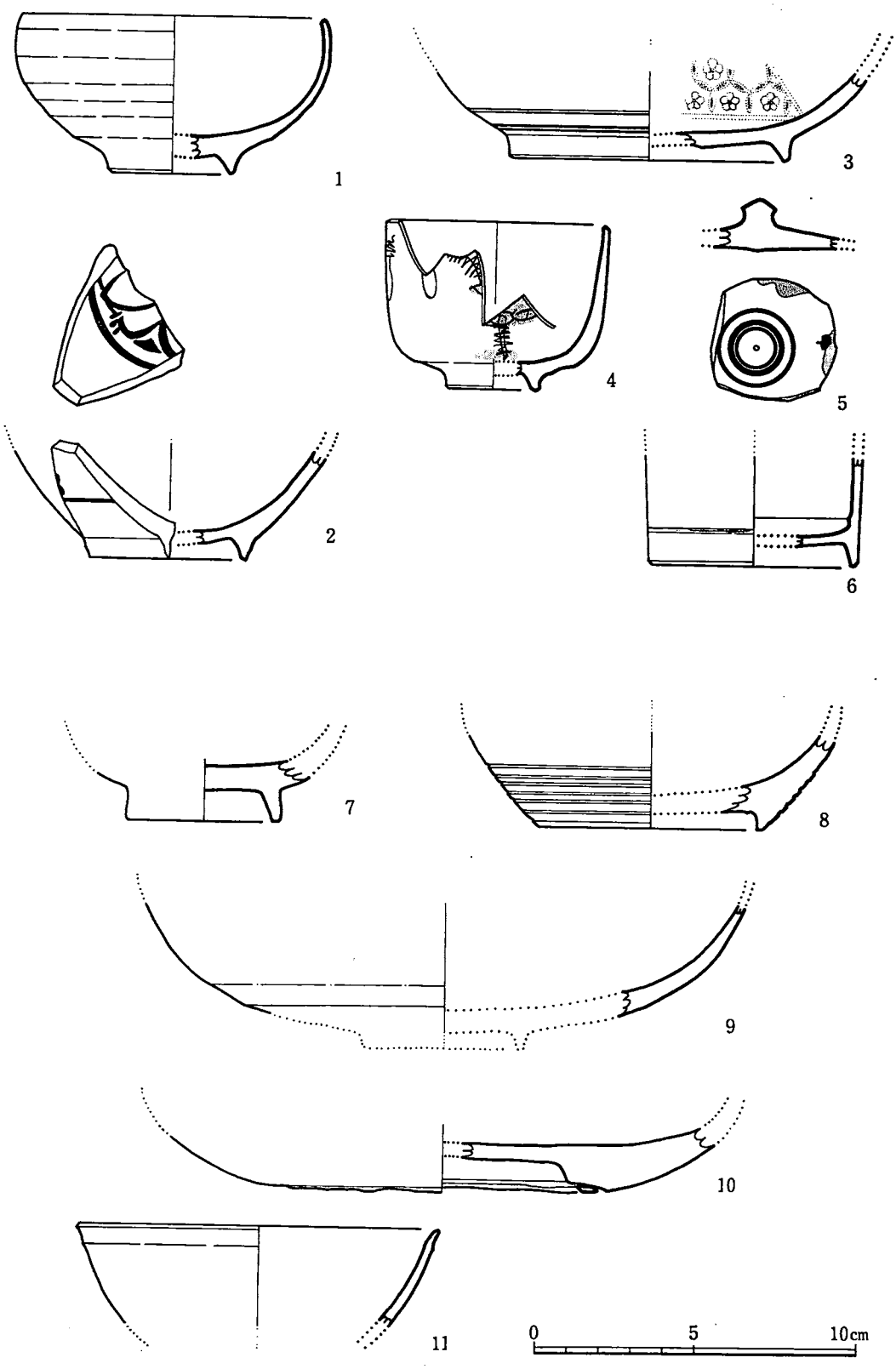
2～5は同安窯系青磁である。**2**は皿で、口径11.2cmを測る。体部中程で屈曲し、さらに外



第17図　軒平瓦実測図



第18図　青磁実測図



第19図　陶磁器実測図（古伊万里、唐津、嬉野焼）

弯して大きく開く。内底面には櫛による文様が施されている。胎土は灰白色を呈し、底部外面以外に淡い灰緑色の釉を施している。**3～5**は碗で、いずれも底部から体部下位までの破片。底部は低く直立する高台が削り出されている。高台と体部の境はいったん窪み稜を有し、体部は内弯気味に立ち上がる。底部は肉厚である。**3**は底径6.4cm、胎土灰白色を呈し、外底部を除き灰黄色の釉を施す。**4**は底径6.2cm、胎土灰白色を呈し、外底部を除き緑灰色の釉が施されている。**5**は底径6.4cm、胎土灰白色を呈し、外底部を除き明緑灰色の釉が施されている。

古伊万里染付磁器（第19図**1～6**）

1は碗で、約⅓の破片。口径9.5cm、器高4.9cm、底径4.0cmを測る。削り出し高台は尖り気味。体部は内弯して延び、口縁端は丸くおわる。胎土は灰白色。全面に薄い緑灰色の釉を施すが、畳付部は露胎し周辺に砂粒が付着している。

2も碗で、約⅓の破片。削り出しの高台はやや尖り気味。体部は内弯気味に立ち上がる。見込み部分に薄い藍色で花文が描かれ、体部外面にも認められる。胎土は灰白色、釉は薄い緑灰色を呈する。畳付と高台外面下位は無釉。底径4.9cm。

3はやや大型の皿で、約¼の破片。底径8.8cm。削り出しの高台はやや尖り気味。体部外面下位に4条の線が薄い藍色で描かれている。体部内面には粉色で描かれた花文の痕跡が認められる。胎土は白色、色調は光沢ある白色を呈する。

4は湯呑で、約⅓の破片。復原口径7.2cm、器高5.1cm、底径3.0cm。削り出し高台は内に付き小さい。体部は底部から屈曲し、口縁まで直延する。体部外面に暗青灰色の文様がめぐる。胎土は灰白色。釉は全面に施され、色調乳白色を呈する。

5は小さなつまみが付く蓋である。つまみ最大径1.1cm。外面はつまみ周辺に3条の線文とそのまわりに文様が暗青色で描かれている。釉は内外面に施されるが、内面白色に対し外面薄い緑灰色を呈する。胎土白色。

6は銚子で、約⅓の破片。体部は削り出し高台から上方へ直延する。体部内面下位に一条の稜を有する。体部外面下位に薄い藍色の線が一条めぐる。胎土は褐灰色。釉は畳付以外の外面に施され、鈍い乳白色を呈する。内面は黒色。復原底径6.6cm。

以上の他、花文の高台付小皿破片1点、急須口1点が出土している。

唐津系陶磁器（第19図**7～10**）

7は献上唐津手茶碗で、約¼の破片。復原底径4.8cm。胎土はやや黄色味がかった灰白色、色調は灰黄色を呈する。底部無釉。

8は唐津系碁笥底徳利で、約¼の破片。底部は内面だけを削り出し、上げ底である。体部外面に数条の浅い沈線がめぐる。復原底径7.1cm。胎土は灰色。体部外面に鈍い赤褐色の釉が施され、細かい貫入がみられる。全体の色調はむらがある。

9は唐津系台鉢で、約¼の破片。体部は内弯気味に上へ延びる。胎土は灰白色、釉の色調は薄い灰黄色を呈する。底部無釉。細かい貫入がみられる。

10も唐津系台鉢で、約¼の破片。復原底径10.4cm。底部は消られ肉薄、高台から体部は肉厚である。畳付部分に粘土紐が付着。水平な底部から、体部は内弯気味に延びる。胎土は灰白色。釉は全面に施され、色調黄褐色を呈する。全面に細かい貫入がみられる。

嬉野焼陶磁器（第19図11）

11は碗で、復原口径11.4cm。体部は内弯気味に延び、口縁下でやや外反する。胎土は灰白色。釉は全面に施され、色調は内面灰黄色、外面暗緑灰色を呈する。内面に貫入がみられる。

波佐見系くらわんか手染付磁器（第20図1～10、第21図11～19）

1～10は茶碗である。1は約⅓の破片。復原口径10.7cm、器高4.9cm、底径4.4cm。削り出し高台から体部下位にかけて内釉し、中位以上は直に外傾する。染付は縦横2条ずつの線を交叉させた格子目状の文様を体部外面に描く。高台外面と体部内面にも横線がめぐる。染付は横線が緑青色、縦線が藍色を呈する。胎土は灰白色。釉は全面に施され、色調灰白色を呈する。内底面外周に重ね焼きの跡がみられる。

2は約½の破片。復原口径11.3cm、器高5.3cm、底径4.6cm。高台は削り出し整形。底部から内弯気味に延び、体部中位からやや外反して口縁に達する。1と同様、格子目状の染付を有するが、内底面と体部内面上位に曲線文が描かれている。染付は薄い緑灰色。胎土は灰白色。色調は赤味がかった白色を呈する。内底面は気泡痕がみられる。

3は約¼の破片。復原口径10.8cm。体部は内弯気味に外傾し、口縁端で短かく直立する。体部外面の染付は網目文様、薄藍色。胎土は灰白色を呈する。釉は内外面にみられ、色調は白っぽい緑灰色を呈する。

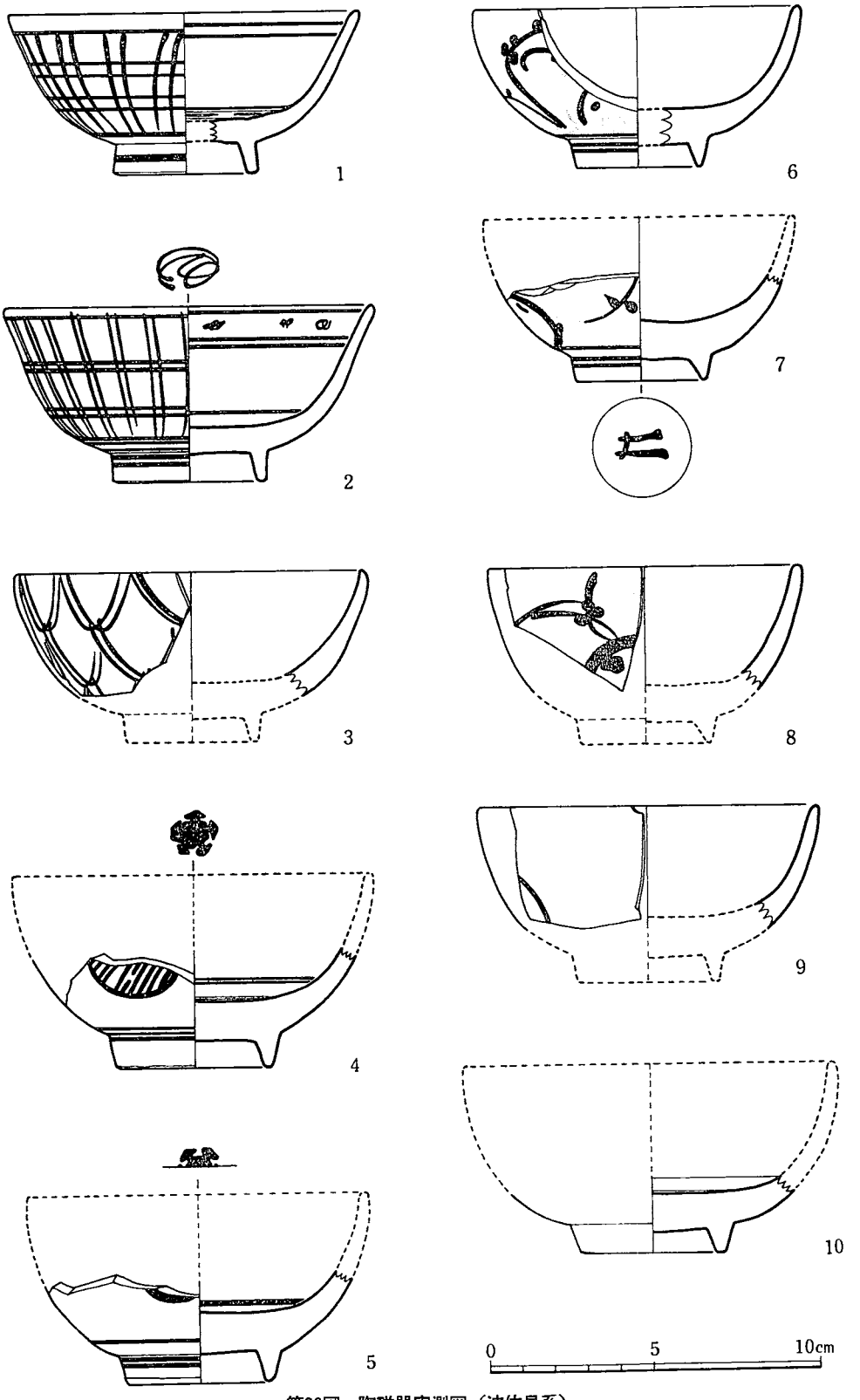
4は底部と体部一部の破片。削り出しの高台端部は丸味をおびる。肉厚な底部から内弯して体部は延びる。底径4.8cm。染付は内外面にみられ、内底部中央に五葉文、内底部外周に2条の線文、体部外面に数本の斜線を入れた円文、高台周辺に3条の線文を薄い藍色で描いている。胎土は灰白色を呈する。釉は全面で、色調は白っぽい緑灰色を呈する。内底部に重ね焼きの痕が残る。

5は底部約½の破片。4同様に底部肉厚、同じ器形である。復原底径4.4cm。染付は外面高台周辺に3条の線文、内底部外周に1条の線文、内底部中央に五葉文が描かれている。胎土は灰白色、色調は白っぽい緑灰色を呈する。

6は約¼の破片。復原口径10.0cm、器高4.8cm、底径3.9cm。削り出し高台から内弯気味に延び、体部上位で短かく直立する。染付は外面に草花文が黒褐色と薄い藍色で描かれている。胎土は灰白色。釉は全面で、色調は薄い緑灰色を呈する。

7は底部のみの破片。底径4.0cm。体部は削り出し高台から内弯気味に延びる。染付は濃淡の緑灰色。体部外面に草花文、外底部中央に3本組み合せの線文、高台周辺に3条の線文が描かれている。胎土は灰白色。釉は全面で、色調は薄い緑灰色を呈する。

8は約⅙の破片。復原口径9.6cm。体部は内弯気味に延び、口縁は丸くおわる。染付は濃淡

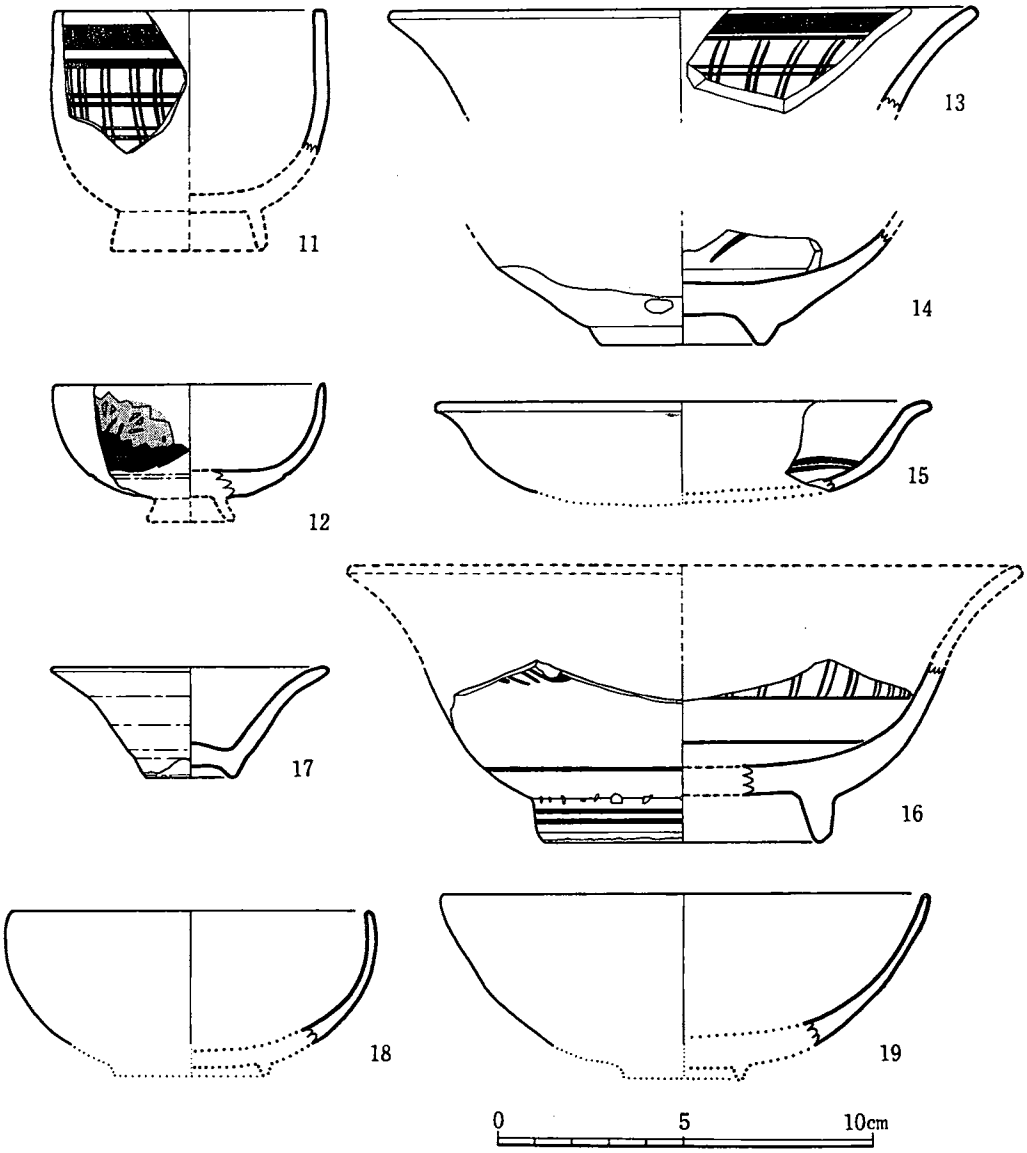


第20図　陶磁器実測図（波佐見系）

の藍色と薄い赤色で草花文が描かれている。胎土はやや黄色っぽい灰白色と部分的に赤味を呈する。釉は内外面で、色調はやや黄味をおびた緑灰色を呈する。

9は約⅙の破片。復原口径10.4cm。体部は下位で丸味をおび、中位以上は直に外傾する。染付は体部外面に薄い藍色で描かれた円文の一部分がみられる。胎土は灰白色。内外面の釉は薄い緑灰色を呈する。

10は底部のみの破片。底径4.4cm。底部は肉厚。削り出し高台の端部はやや幅広で、安定している。胎土は灰白色。全面の釉は薄い青灰色を呈する。内底部外周から体部に分けて幅広く重ね焼き痕が残る。畳付部に砂粒付着。



第21図　陶磁器実測図（波佐見系）

11は湯呑で、約⅕大の破片。復原口径7.2cm。体部下位は内弯気味に延び、中位以上は直延する。口縁は水平面を有する。染付は青灰色で外面に描かれている。縦横２条ずつ交叉させた格子目状の文様と口縁下の広狭の２条の横線文である。胎土は灰白色。内外面の釉は青味がかった灰白色を呈する。内外面に貫入がみられる。

12は盃で、約⅓の破片。復原口径7.2cm。体部は内弯して立ち上がる。底部に比して体部器壁は薄い。染付は外面に濃淡の藍色で草花文が描かれている。胎土は白に近い灰白色、色調は白色を呈する。

13・16は鉢である。**13**は約⅙の破片。復原口径15.8cm。体部は外反する。染付は濃淡の藍色。体部内面に縦横２条ずつを交叉させた格子目状の文様と、口縁下の広狭な線文が描かれている。胎土は白に近い灰白色、色調は薄い青灰色を呈する。**16**は約½の破片。復原口径7.8cm。体部は内弯気味に延びる。染付は薄い藍色。体部内面に縦位２条ずつの線文、内底部外周に１条の線文が描かれている。他に体部外面中位にもみられる。胎土は白に近い灰白色、色調は薄い青灰色を呈する。内外面に気泡痕がみられる。

14は碗で、約½の破片。復原底径4.4cm。削り出し高台の端部は平担面をなす。体部は内弯気味に延びる。底部に比して体部の器壁は薄い。染付は内面に薄い緑灰色の線文が１条みられる。胎土は白色。釉は内面と外面上半に施され、色調は青味がかった白色を呈する。内底部外周は2.0cm幅に夥しく砂粒が付着し、灰色を呈する。

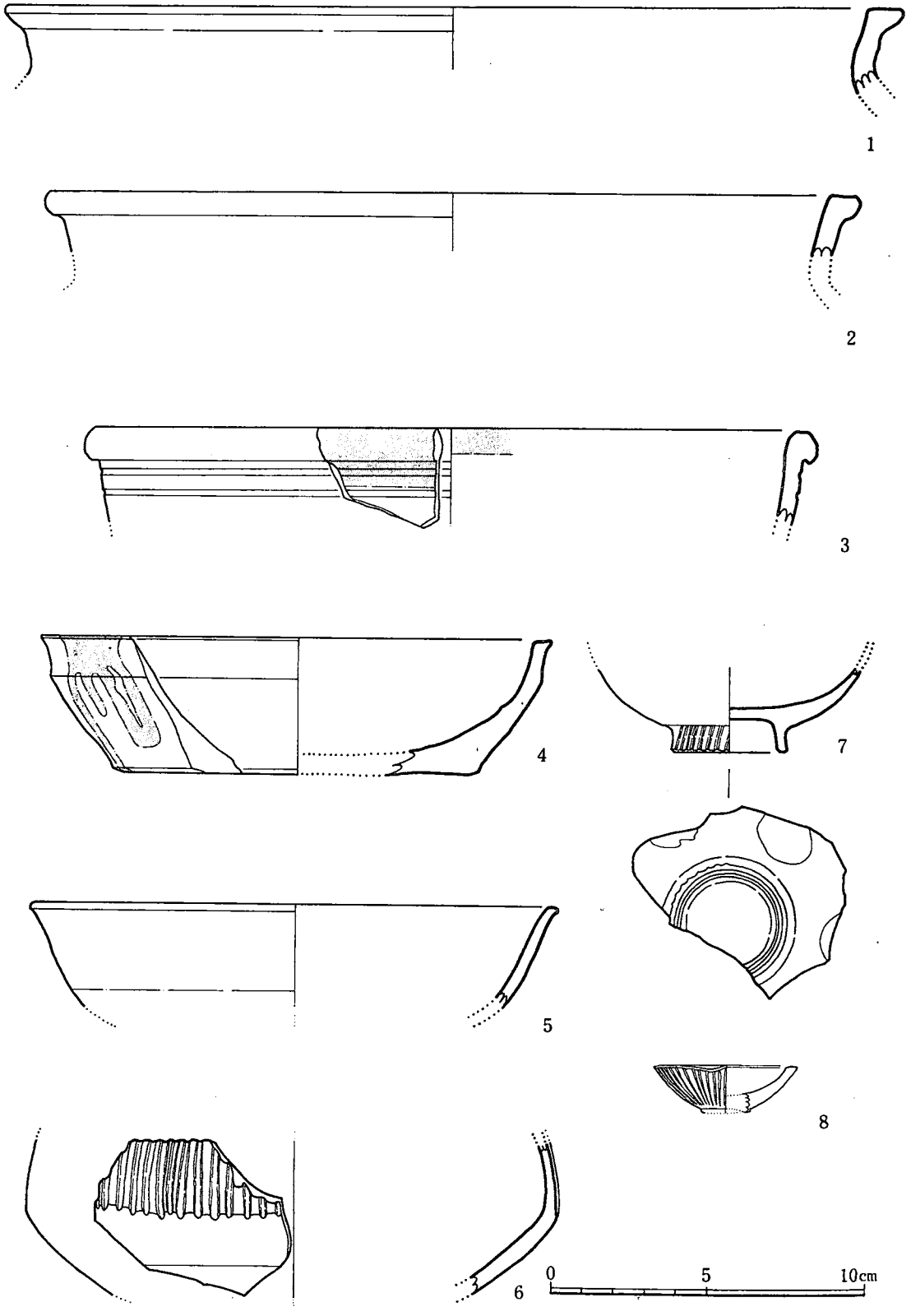
15は皿で、約⅙の破片。復原口径13.3cm。浅い体部は内弯気味に外傾し、上位で短かく外反する。胎土は灰白色。底部無釉。内底部外周と口縁内外面直下に濃い灰オリーブ色で線文を描く。釉は薄い灰オリーブ色を呈する。

17は盃で、約¾残存。復原口径7.3cm、器高2.9cm、底径2.4cm。削り出し高台は上げ底。体部は中位まで膨みを持ちながらも直延し、以上は大きく外反する。胎土は白に近い灰白色。釉は全面で、畳付部分は剝げて砂粒が付着している。色調は乳白色で、部分的に赤橙色を呈する。全面に貫入がみられる。

18・19は波佐見系青磁碗である。**18**は約⅒の破片。復原口径9.7cm。体部は内弯して立ち上がる。胎土は灰色、色調は光沢ある灰白色を呈する。**19**は約¼の破片。**18**に比して大型で、復原口径13.1cm。体部は内弯気味に延びる。胎土は内側灰色、外側鈍い赤褐色を呈する。色調は内面灰色、外面は上位薄い灰色、中位以下灰褐色を呈する。

その他（第22図１～８）

１～４は飯胴甕。うち**１・２**は武雄南部系弓野飯胴甕である。**１**は若干の破片。復原口径28.8cm。内傾する体部から頸部はほぼ直行し、口縁は外へ突き出て平担面をなす。胎土は暗灰色。内外面の釉は乳白色を呈する。**２**も若干の破片。復原口径26.2cm。頸部はやや外傾し、口縁は丸味をおび平担面を有する。胎土は灰赤色。内外面の釉は乳白色を呈する。**３**も若干の破片。復原口径23.6cm。口縁は外下方へ折り返され肥厚している。胎土は褐灰色。黒褐色の釉は



第22図　陶磁器実測図（武雄南部系その他）

内外面とも口縁周辺だけにみられる。 4は鉢で、約1/6の破片。復原口径16.4cm。平底。体部は直に外傾し、上位で屈曲して直立する。口縁はやや外へ突き出し、平担面をなす。胎土は暗青灰色、色調灰赤色を呈する。口縁平担面から体部へ黒褐色の釉が流れている。以上の他に武雄南部系弓野飯胴甕破片6点と、他の飯胴甕破片1点が出土した。

5・6は黒牟田焼である。5は黒牟田刷毛目鉢で、若干の破片。復原口径17.0cm。内弯気味に延びる体部は口縁下で短かく外反する。内外面には横位の刷毛目がみられる。胎土は暗赤灰色。色調は暗赤褐色と灰白色が混ざっており、全体的に外面は白っぽく、内面は茶色っぽい色調を呈する。底部無釉。6は香立で、約1/6の破片。胴部最大径17.1cm。底部から外傾する胴部は中位で強く屈曲して内傾する。中位以上に縦位の凹線が刻まれている。胎土は暗青灰色。外面の釉は黒褐色を呈し、底部無釉。内面は胴部下半に暗赤褐色の釉が施されている。内面に部分的に縁釉がみられる。他に黒牟田焼は徳利片3点・土瓶口片1点が出土した。

7は現川刷毛目螢手碗で、約1/3の破片。底径3.8cm。器壁は薄い。体部は内弯気味に延びる。高台外面に斜位の凹線が刻まれている。胎土は灰白色。外面は畳付き部を除いて黒褐色の釉を施し、その上に黄白色の釉を円文として施してある。内面は細い凸帯が放射状にひろがり、乳白色と黒褐色の釉がまばらに施されている。全面に貫入がみられる。他に破片1点が出土した。

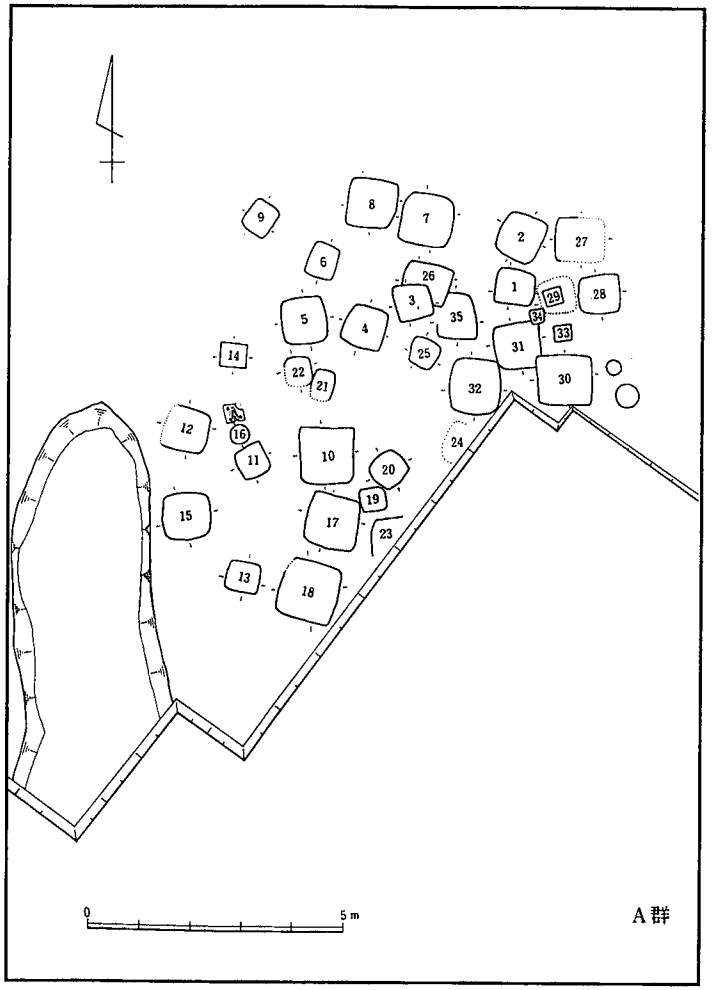
8は平戸焼白磁紅皿で、約1/2の破片。口径4.6cm、器高1.5cm、底径1.6cm。底部は上げ底気味。体部は内弯気味に延びる。口縁は平担面をなす。外面は菊花を形取っている。胎土は白色。色調は内面薄い緑灰色、外面白色を呈する。

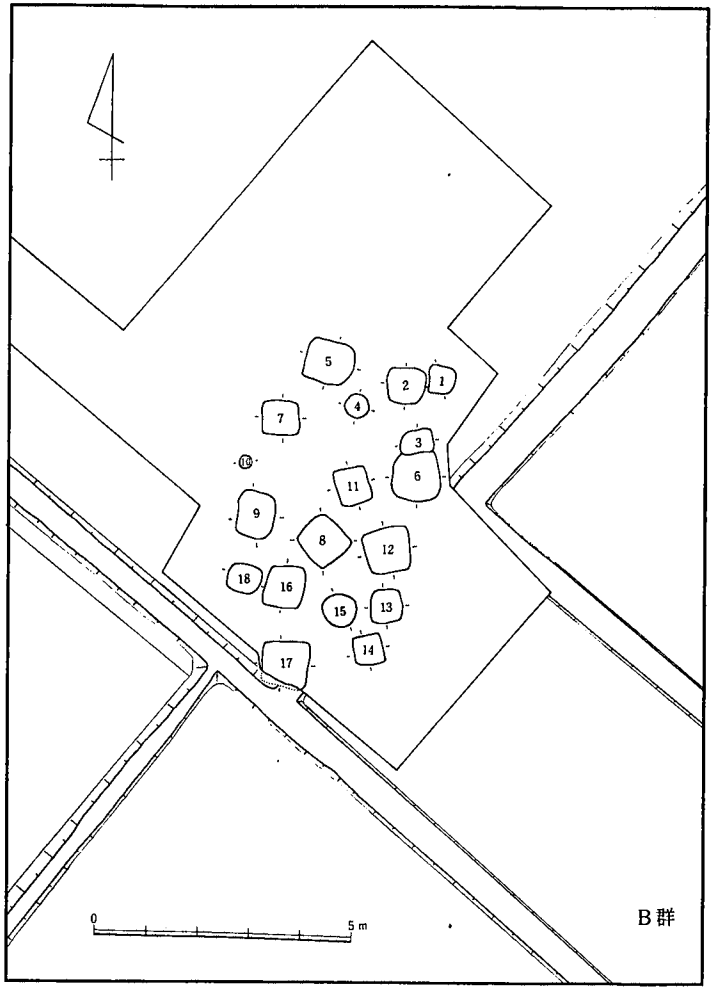
以上の他に、なまこ釉茶碗片2点、印判手陶磁器8点が出土した。

第3章　近世木棺土壙墓の調査

1. 概　　要

調査地区内のⅣ区およびⅤ区に近世のものと思われる墓地を検出した。Ⅳ区が35基、Ⅴ区が18基からなり、Ⅳ区のものをA群、Ⅴ区のものをB群と仮称した。A群では調査区（路線）外の未調査のものを考慮して想定すれば、ほぼ9m四方の墓域を形成していたものと考えられる。各墳墓の封土等は残存していなかったが、各土壙ともかなり深く掘り込まれ、土壙底面は湧水面に達していた。そのため木棺の保存は極めて良好であった。B群は18基を検出したが、さらに西側に続くと思われた。それらを想定すれば、墓域の規模は一辺約7m前後の方形をなしていたものと考えられる。なおA群・B群の各墳墓の主軸はおおむね南北方向をなし、また墓域の主軸方位も南北方向を指していた。





第23図 近 世 墓 配 置 図

以上2群の木棺土壙墓群のそれぞれの調査所見については、第1表に一覧表として掲げた。なお、本県においてもこのような墓についての調査は乏しく、またその報告例も見い出せないので、ここでは木棺およびこれらの土壙の形状や構造について、大まかな分類を行ない、今後の近世墳研究の一資料として紹介するにとどめる。

2. 木棺土壙墓の類別

53基の木棺土壙墓のうち、木棺自体が残存し、その構造が比較的明瞭なものは34基であった。これらは箱棺と桶棺とに分けられる。桶棺はいずれも大小の差はあるものの、構造上基本的な差異は認められない。しかしながら箱棺では、各種各様のものがあり、棺の部材の組み合せのちがいにより次の11に分類することができた。なお棺a～kの土壙はすべて方形である。

棺a　棺身は棺の底板より内側に取り付けられる点で棺bと共通する。棺外側部の底板は四枚の板で寄せ木造りされ、接合部の下部は対角線に組合せた板で補強している。四隅には二対の長方形のほぞが残っている。棺は隅柱横板型で、底板は三角形の板でうめている。

棺b．棺は隅柱横板型であるが、さらに棺の外側に横板を貼っている。すなわち棺の側板が二重になっているものである。

棺c．棺の台座を井桁に組み、交叉する部分はほぞ穴をあけ、隅木を立てている。棺底は2～3枚の板を並列させている。箱棺の中では最も類例が多い。

棺d．棺は隅柱横板式で、棺cに類似するが、台座の部分は井桁に組むものの、四隅が突出しない。

棺e．隅柱の外側に横板を貼る点で、棺f・棺gと共通する。棺底は一枚板。台座は棺底の両側面に設けている。

棺f．長方形の棺身で、長軸にそって通した2本の横木に細い板を狭間隔に数枚並べて棺底としている。

棺g．2本の横木の上に2枚の板を置き棺底とするものである。

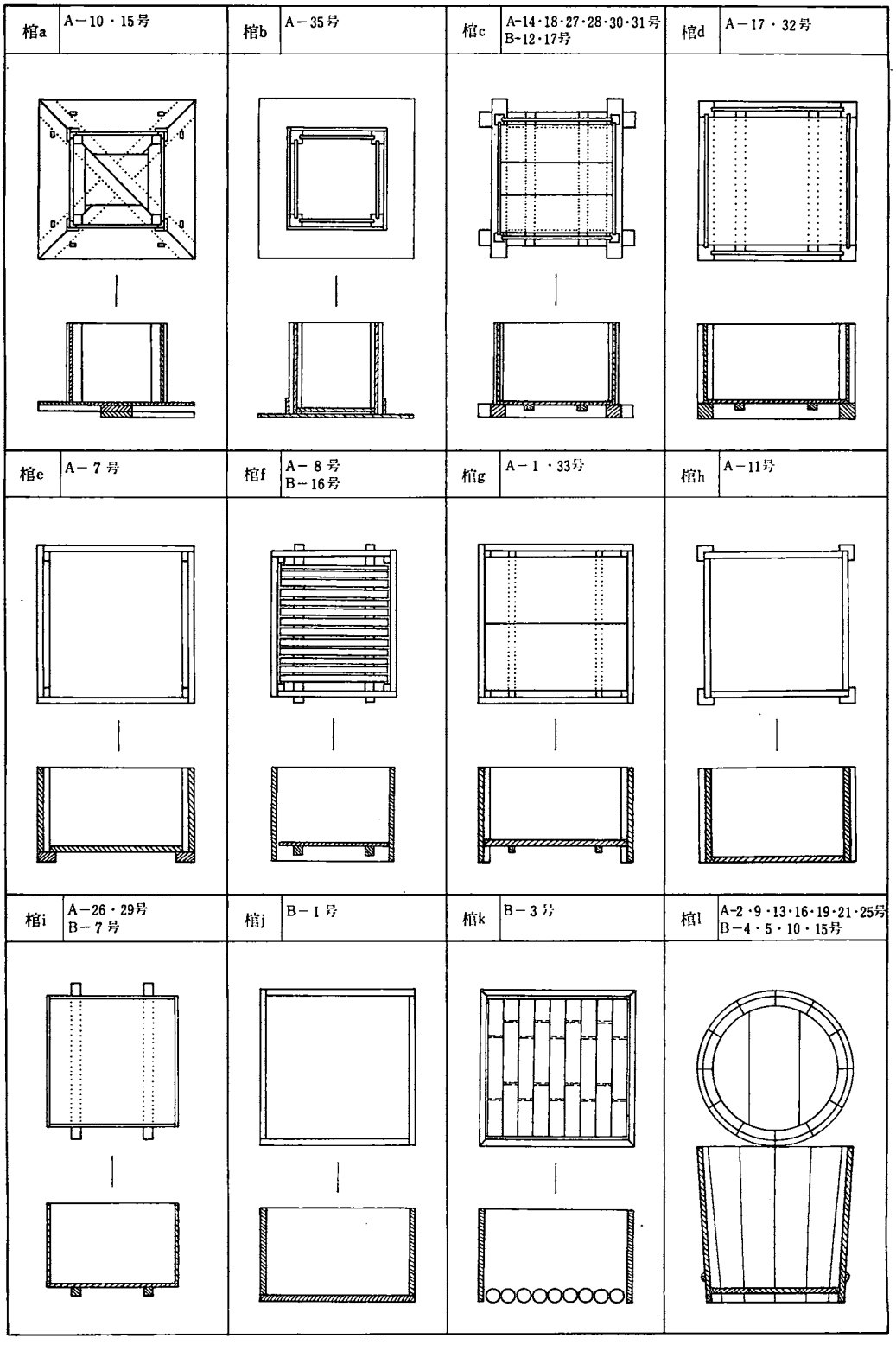
棺h．鍵形隅社の内側に棺側板を取り付けたもので、棺底は側板最下部内側に取り付けている。

棺i．側板が棺底の上に置くもので、棺底は横木で補強されている。

棺j．棺i同様、側板が棺底の上に置かれているが、その他の工夫がみられず、簡素なものである。

棺k．側板は接合面を斜めに切り組合せている。棺底には板のかわりに竹を敷いている。

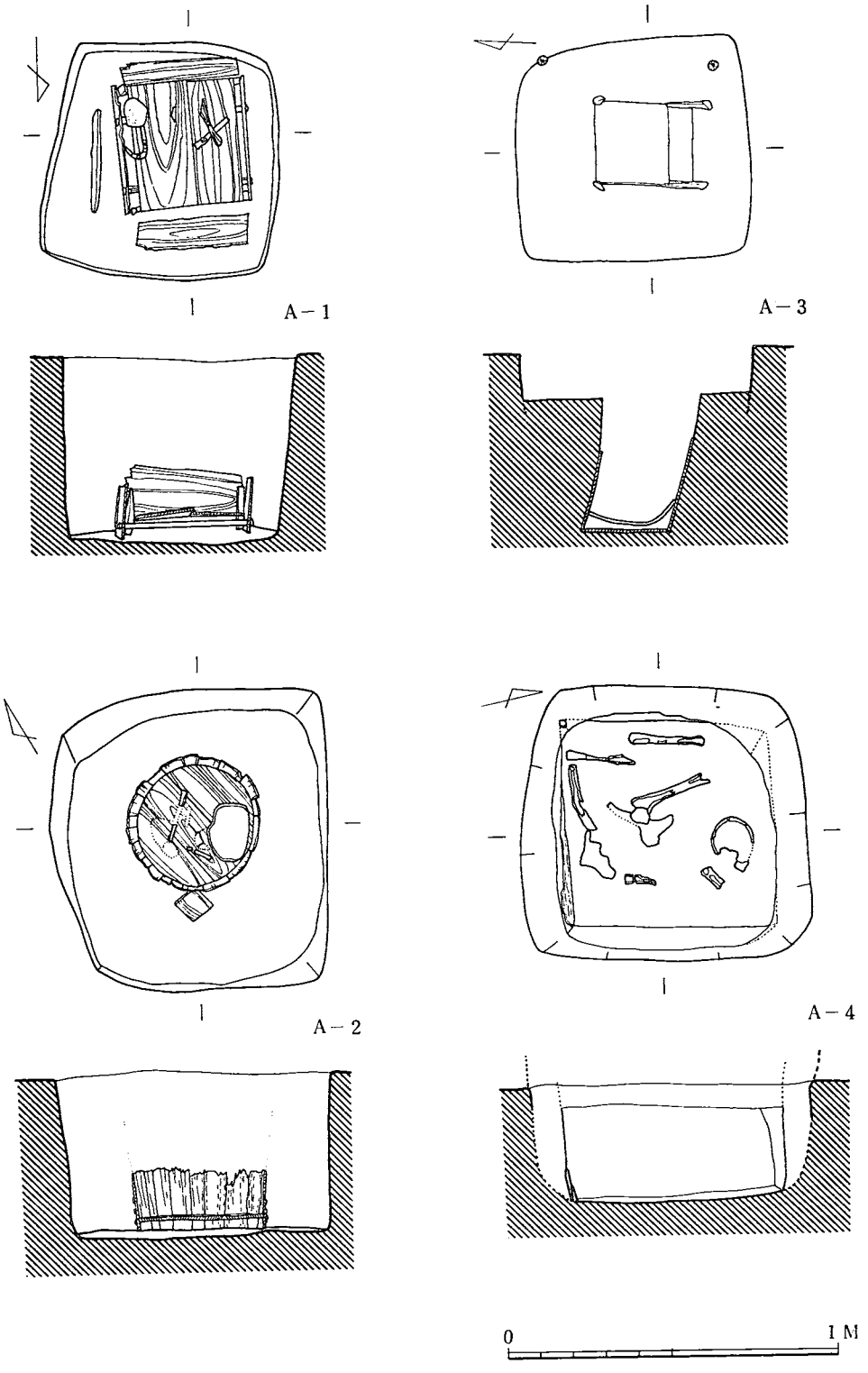
棺l．いわゆる桶棺のものであり、土壙は方形と円形とが認められる。



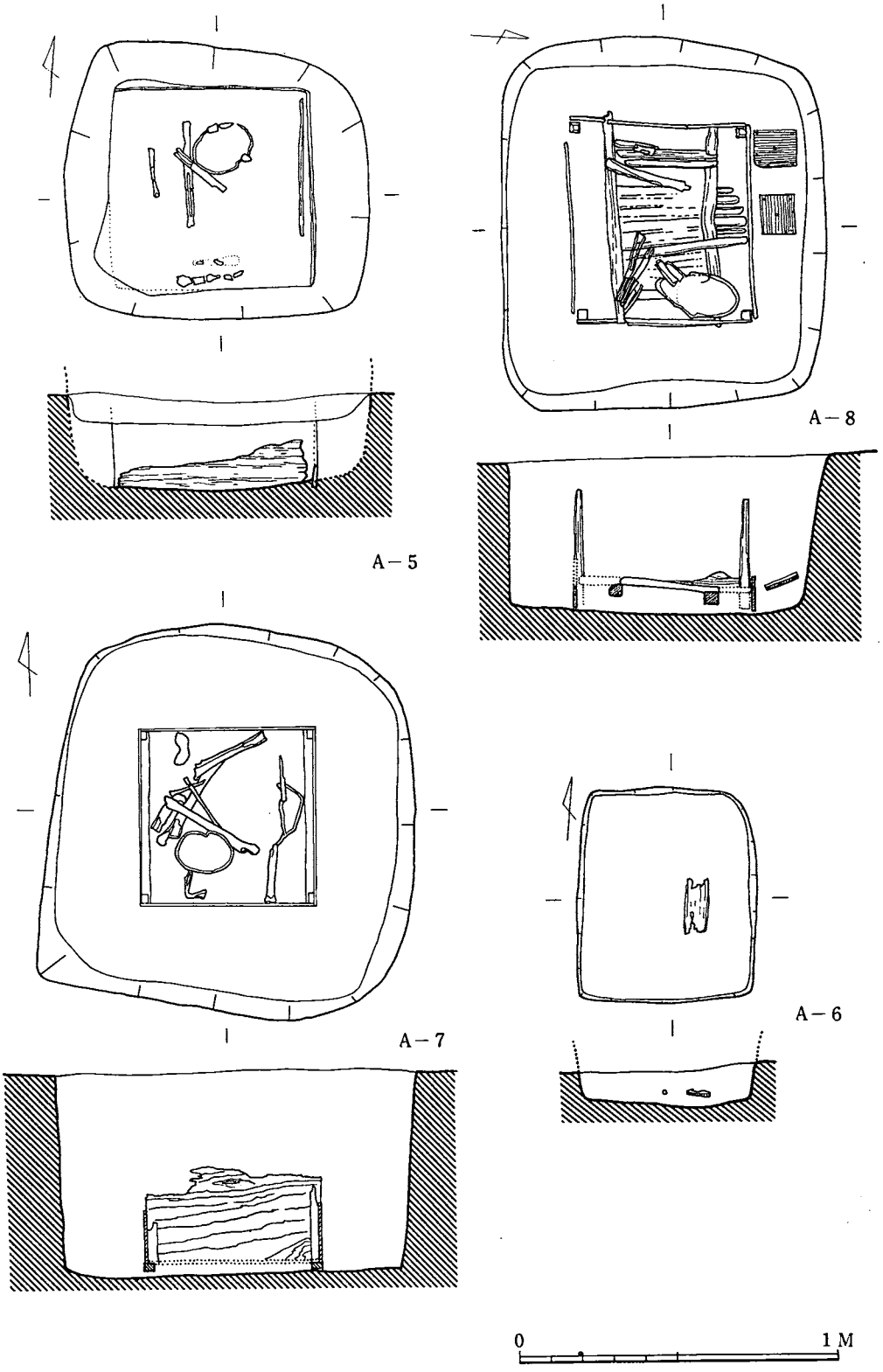
第24図　近世墓木棺模式図

番号	棺			土壙		人骨		備考
	種別	規模（cm）	主軸の方向	形状	規模（cm）	性別	年齢	
A群1号	棺g	37×37	N－4°－W	方形	72×69 55	—	幼児	
2号	棺1	37×36	———	方形	91×85 50	—	幼児	頭骨—棺南東部
3号	—	24×22	N－0°－W	方形	70×65 55			
4号	—	63×62	N－12°－E	方形	86×82 35	女性	熟年	頭骨—棺北東部
5号	—	63×62	N－6°－W	方形	95×84 29	男性	—	頭骨—棺北部
6号	—	———	———	方形	67×56 11	男性	壮年	
7号	棺e	54×54	N－1°－E	方形	121×115 64			頭骨—棺南西部
8号	棺f	60×55	N－3°－W	方形	115×102 49	—	—	頭骨—棺北東部
9号	棺1	推定34×34	———	方形	63×62 19	—	幼児	
10号	棺a	51×49	N－8°－W	方形	118×113 31	女性	壮年	頭骨—棺北東部
11号	棺h	21×20	N－26°－W	方形	66×64 22			
12号	—	———	N－15°－E	方形	110×93 17			
13号	棺1	推定47×46	———	方形	61×61 9			
14号	棺c	53×44	N－9°－E	方形	143×141 70	女性	壮年	頭骨—棺南東部
15号	棺a	54×49	N－16°－W	方形	114×108 29	—	熟年	頭骨—棺北西部
16号	棺1	———	———	円形	47×43 34			
17号	棺d	55×53	N－12°－E	方形	119×105 57	男性	熟年	頭骨—棺南東部
18号	棺c	52×52	N－6°－W	方形	117×113 53	男性	熟年	頭骨—棺北西部
19号	棺1	———	———	方形	50×48 8			
20号	—	40×33	N－42°－W	方形	68×63 29			
21号	棺1	29×28	———	方形	50×41 7			
22号	—	———	N－15°－W	方形	57×52 21			
23号								未発掘
24号								未発掘
25号	棺1	推定34×34	———	方形	59×56 16			
26号	棺i	46×—	N－3°－W	方形	93×74 48	—	熟年	頭骨—棺東部
27号	棺c	54×54	N－1°－W	方形	95×90 69	女性	熟年	頭骨—棺西部
28号	棺c	54×53	N－9°－W	方形	101×101 66	男性	壮年	頭骨—棺東部
29号	棺i	32×31	N－13°－W	方形	83×71 27			
30号	棺c	55×52	N－6°－W	方形	105×100 61	男性	壮年	頭骨—棺北西部
31号	棺c	51×49	N－14°－W	方形	115×94 65	男性	壮年	頭骨—棺北西部
32号	棺d	54×52	N－1°－W	方形	106×98 60	男性	壮年	頭骨—棺南部
33号	棺g	38×38	N－4°－W	方形	74×71 55			
34号	—	———	———	方形	31×29 4			
35号	棺b	31×29	N－2°－E	方形	91×75 50			

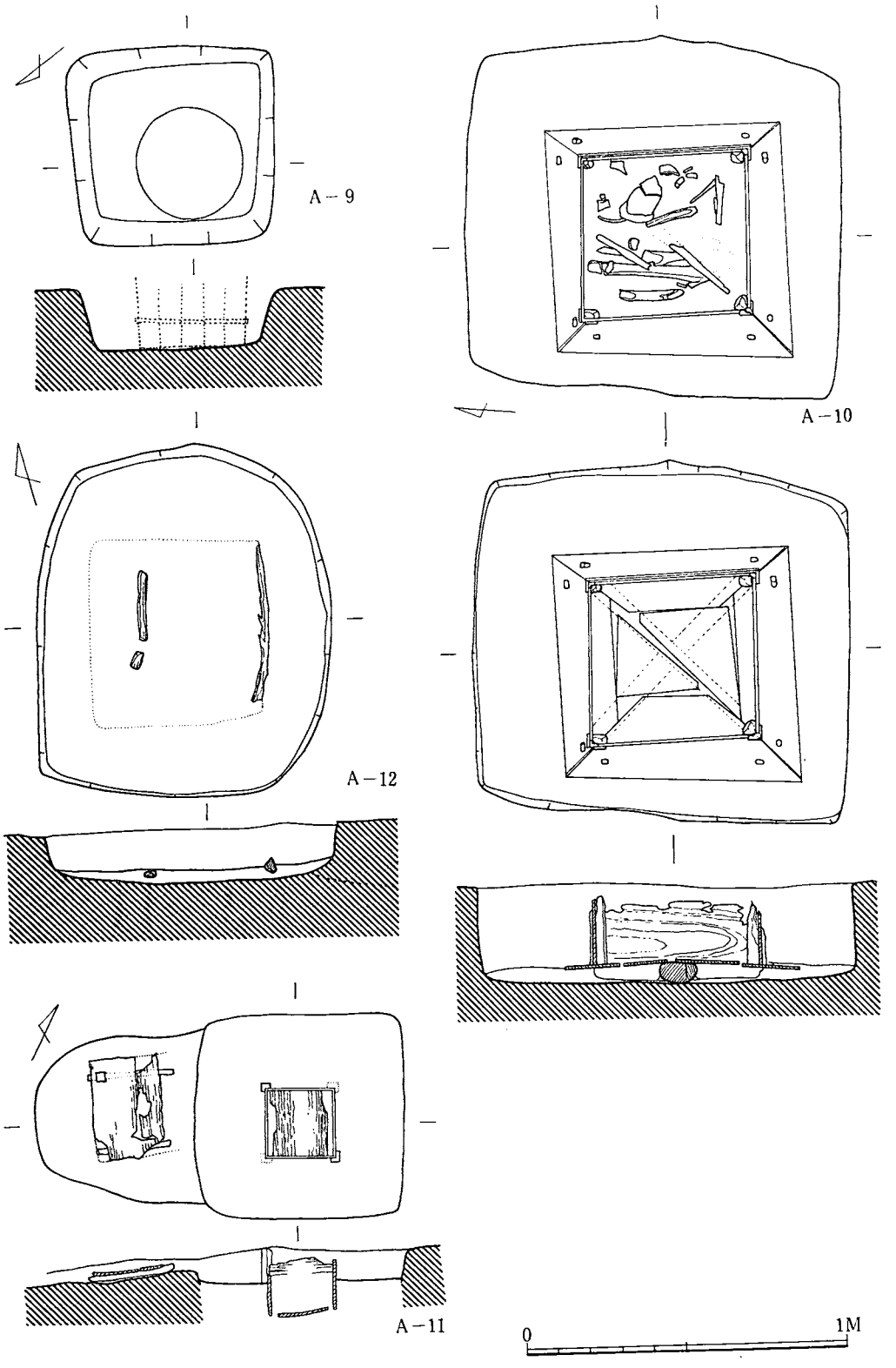
番号	棺			土壙		人骨		備考
	種別	規模(cm)	主軸の方向	形状	規模(cm)	性別	年齢	
B群1号	棺j	28×23	N−18°−W	方形	52×48 12			
2号	—	46×41	N−2°−E	方形	77×70 13	—	壮年	頭骨—棺南東部
3号	棺k	32×31	N−31°−W	方形	62×43 36			
4号	棺j	42×42	———	方形	98×92 34	—	小児	頭骨—棺北東部
5号	棺l	44×44	———	円形	78×74 7	女性	—	頭骨—棺南東部
6号	—	58×49	N−11°−W	方形	94×80 14			
7号	棺i	46×40	N−3°−E	方形	105×98 25	a — b —	a 成年 b 幼児	頭骨—棺北東部
8号	—	54×50	N−2°−W	方形	86×84 10	—	小児	
9号	—	45×45	N−4°−W	方形	85×82 25	女性	熟年	頭骨—棺北東部
10号	棺l	26×26	———	円形	40×38 3			
11号	—	———	———	方形	75×71 9			
12号	棺c	52×52	N−14°−W	方形	94×85 23	—	熟年	頭骨—棺東部
13号	—	———	———	方形	66×62 5	—	幼児	
14号	—	———	———	方形	59×57 4			
15号	棺l	42×41	———	円形	71×61 17	—	小児	頭骨—棺北東部
16号	棺f	46×44	N−6°−W	方形	86×77 12	—	熟年	頭骨—棺西部
17号	棺c	57×54	N−3°−E	方形	100×87 33	男性	熟年	頭西—棺南東部
18号	—	———	———	方形	66×65 10	—	—	



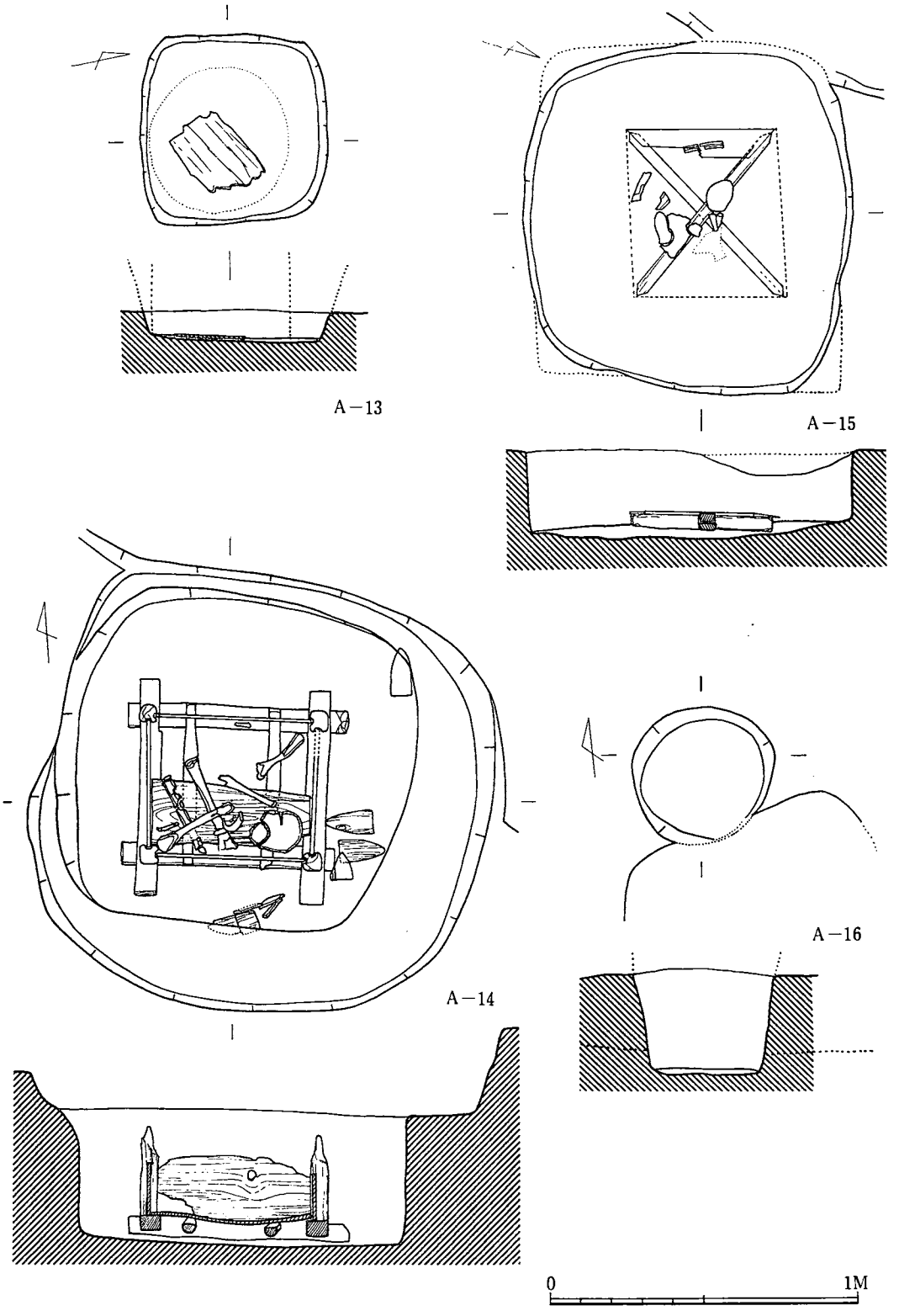
第25図 近 世 墓 実 測 図



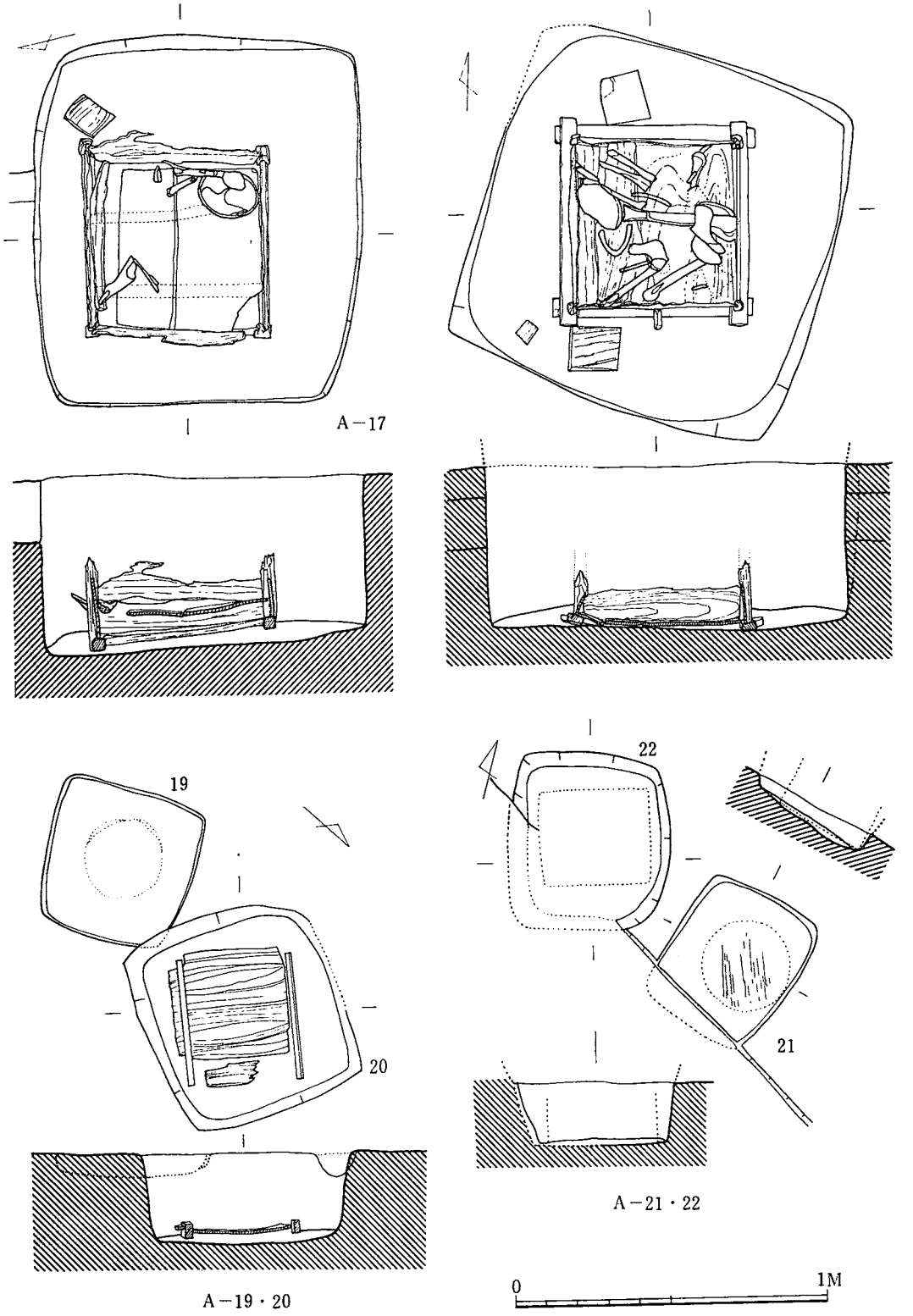
第26図 近 世 墓 実 測 図



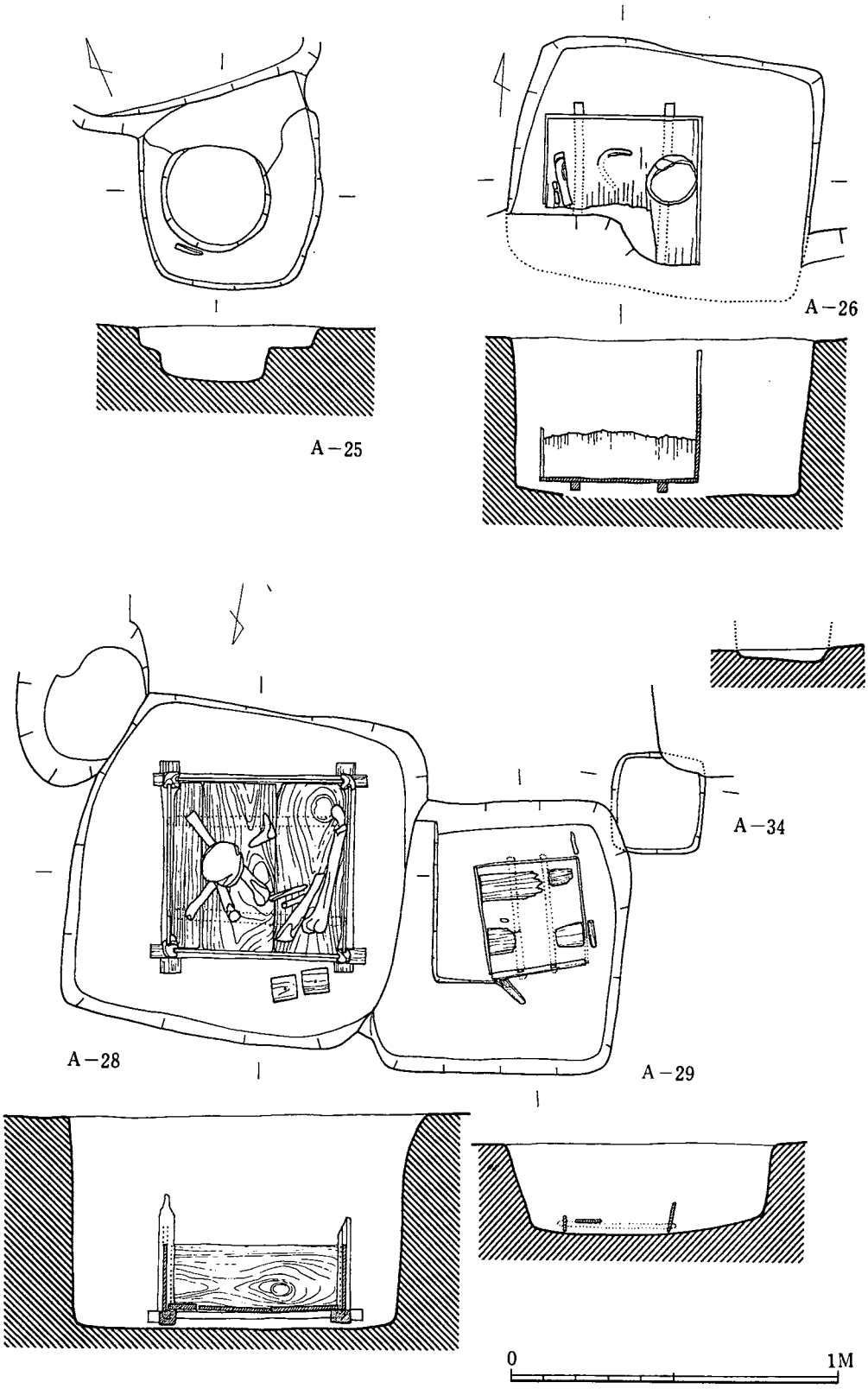
第27図 近 世 墓 実 測 図



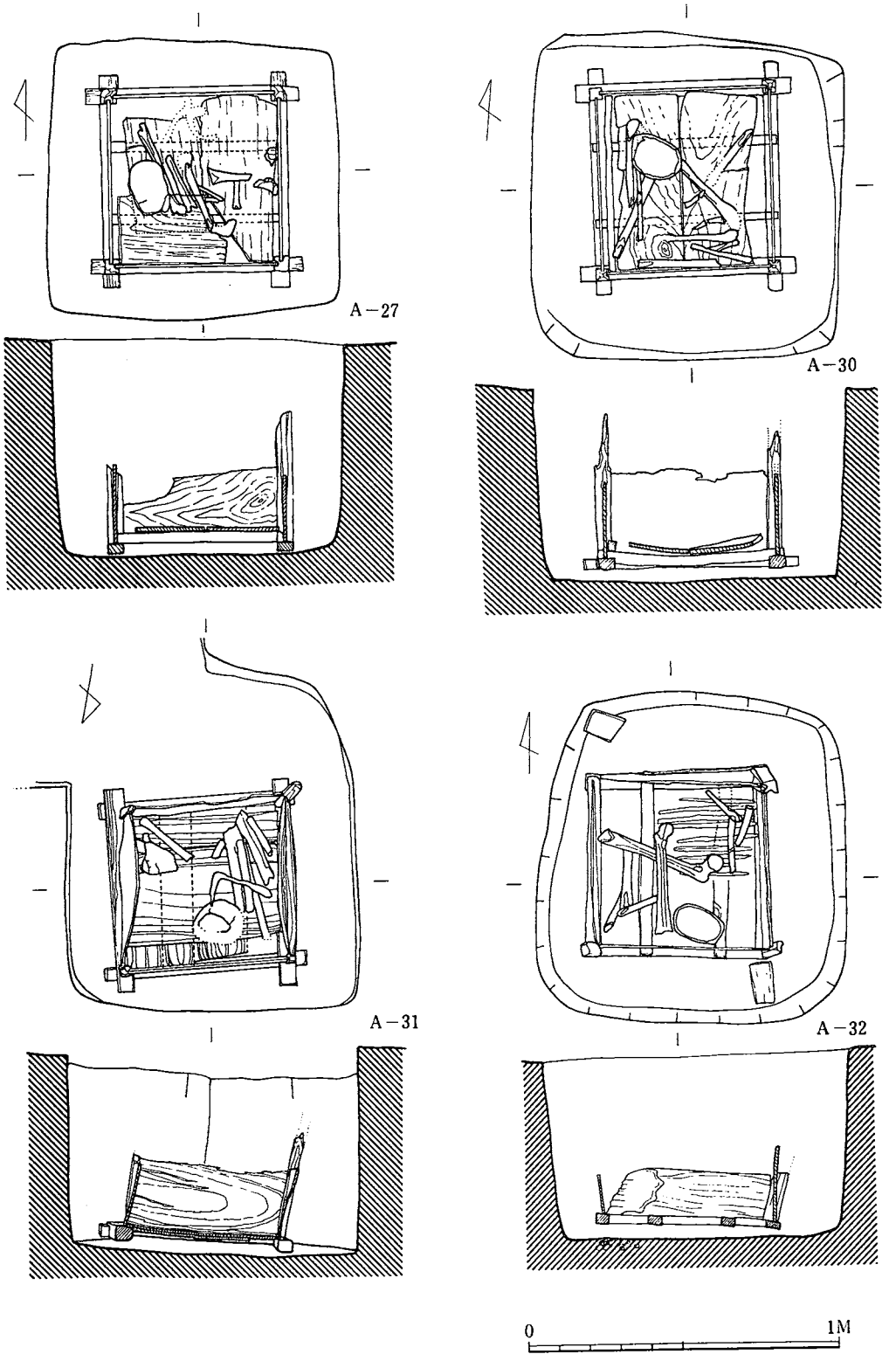
第28図 近 世 墓 実 測 図



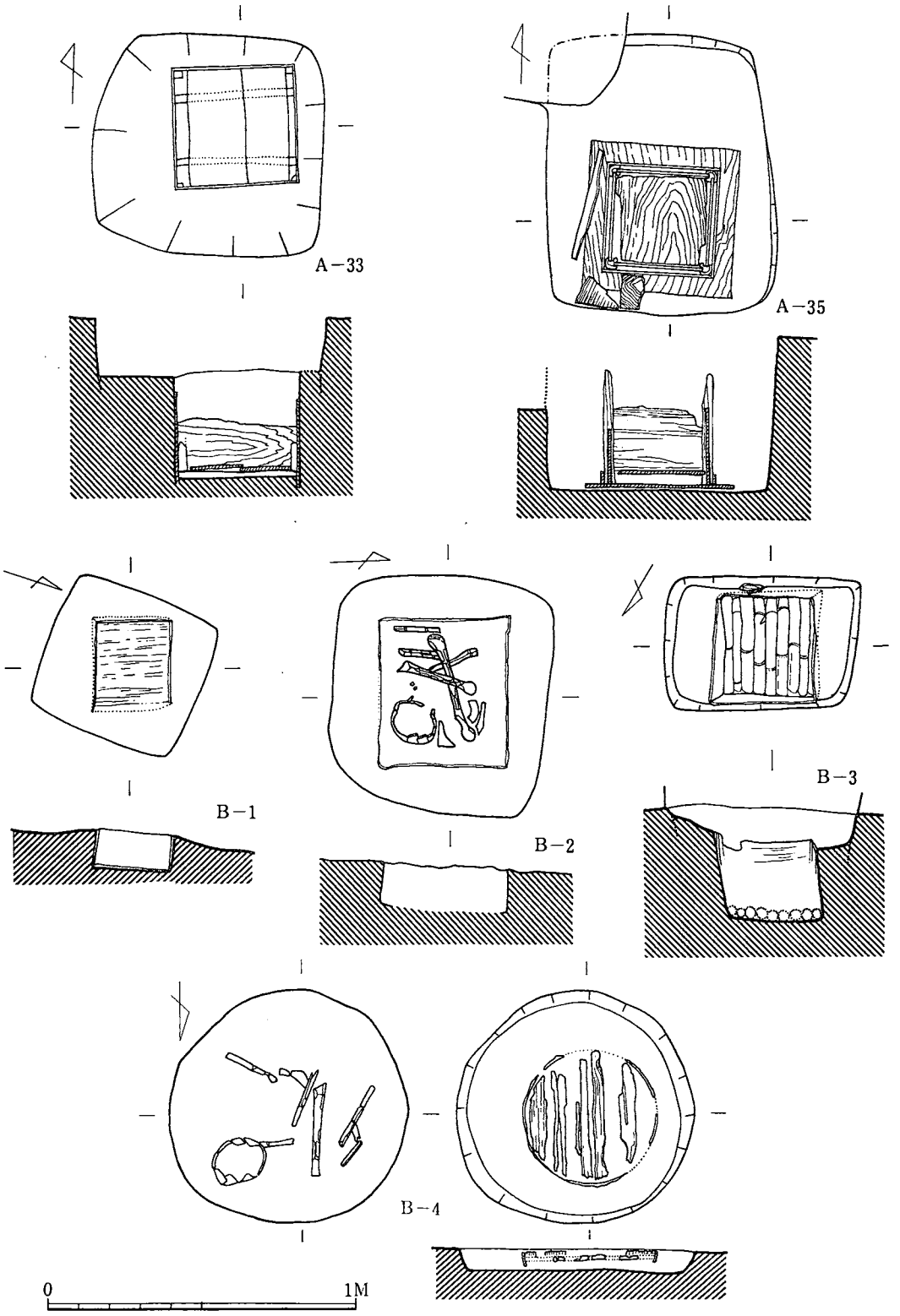
第29図　近　世　墓　実　測　図



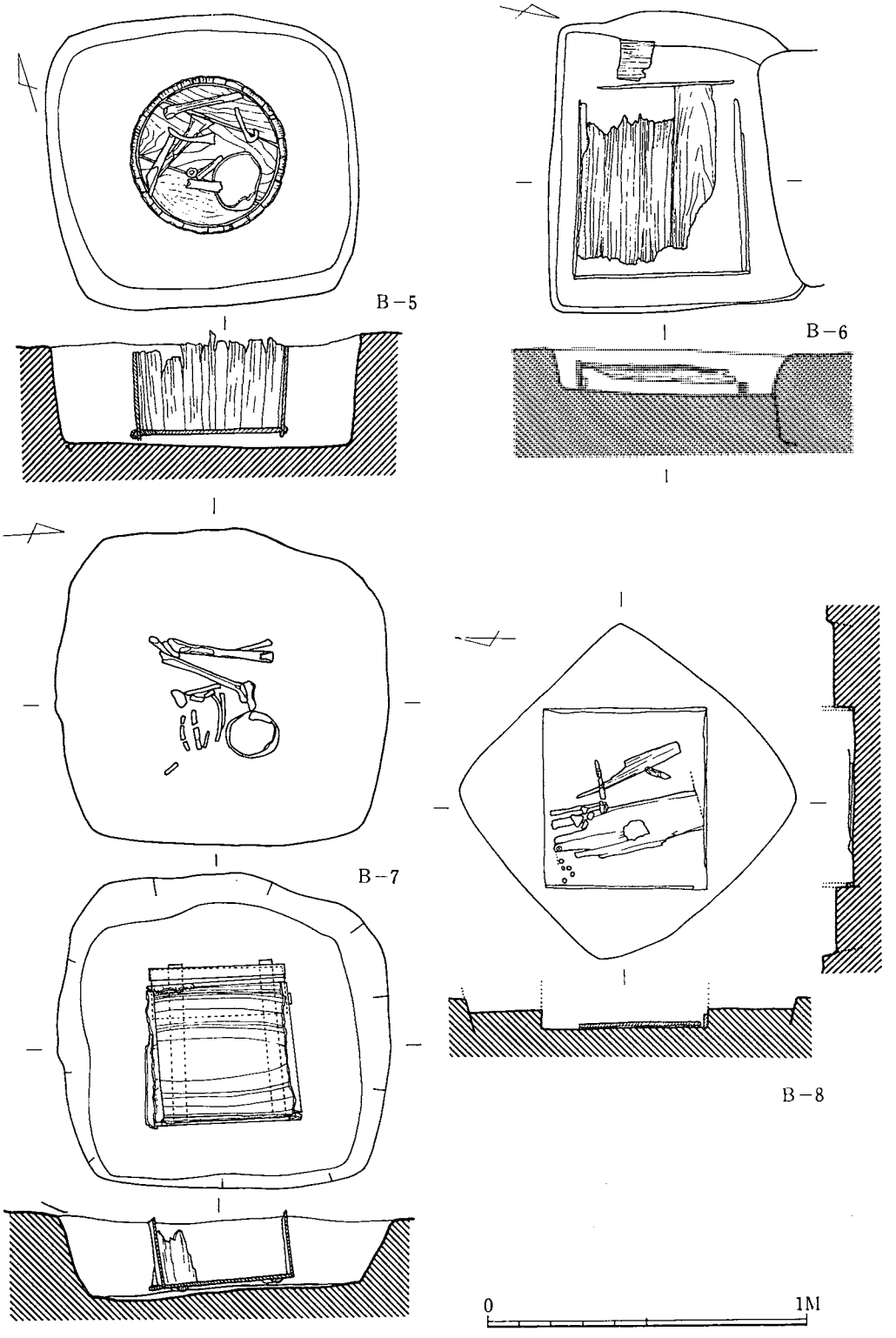
第30図 近 世 墓 実 測 図



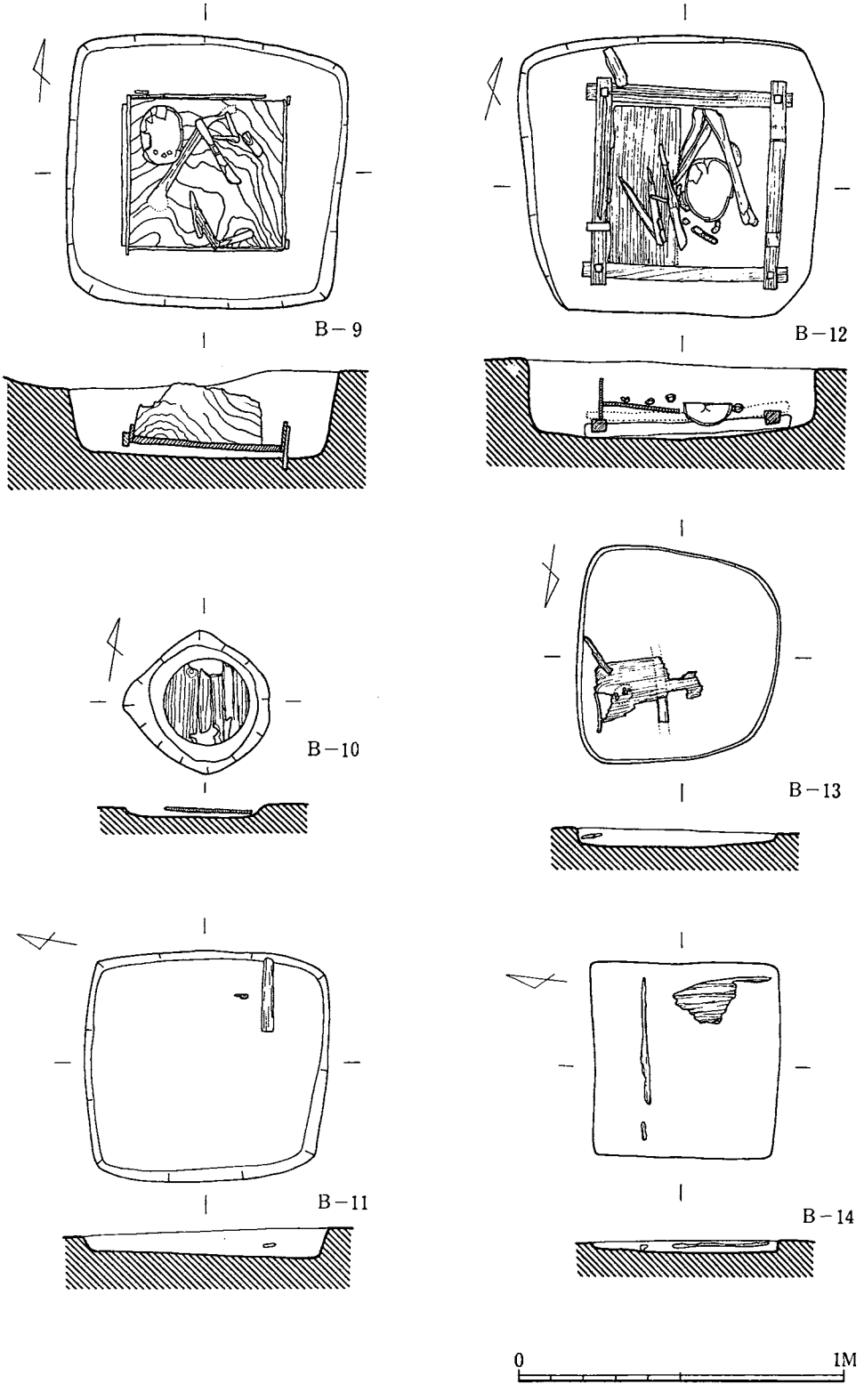
第31図 近 世 墓 実 測 図



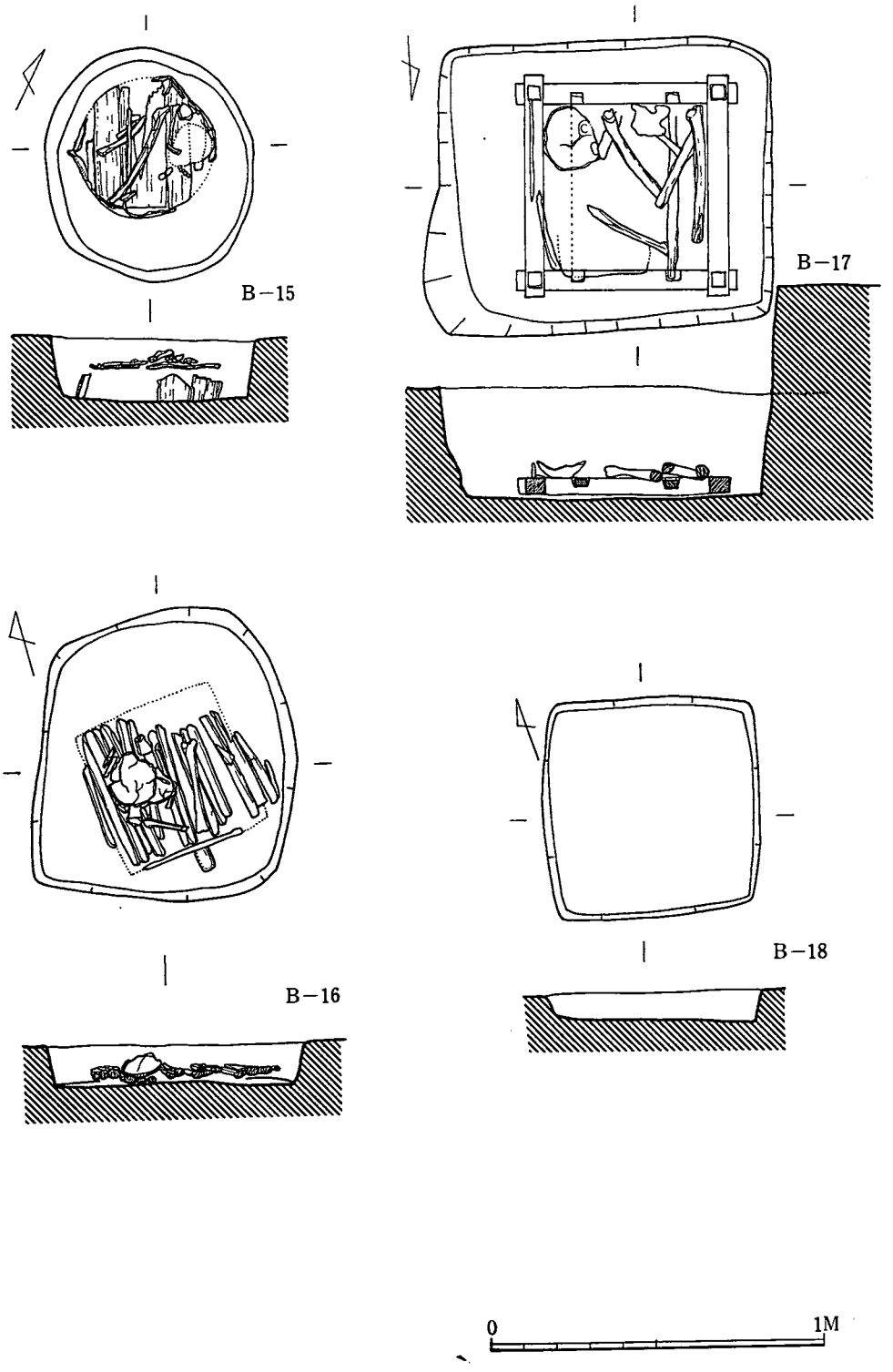
第32図 近 世 墓 実 測 図



第33図　近　世　墓　実　測　図



第34図　近　世　墓　実　測　図



第35図 近 世 墓 実 測 図

第4章 ま と め

今回の調査では、多種多様の遺物が出土したにもかかわらず、これらに伴う遺構そのものは何一つ発見することができなかった。結論的に言えば、九州自動車道の路線は、遺跡の縁辺を通過したものであり、遺跡に直接触れるものではなかったとしなければならない。それは埋蔵文化財の保護という観点からみれば、決して不幸なことではない。しかしながら、調査地に近接して存在したと推定される遺跡自体がもつ歴史的な意義については、前述した調査成果のどの一面をもってしても、卓越するものがあった。

ここでは、そうした問題のいくつかについて列記し、本報告のまとめとする。

1. 弥生式土器について

出土遺物の中では、極少量であるが弥生式土器がある。これらは前期末から中期前半に比定される。出土状態や遺物の保存状態から、調査区東側の現在の集落（京坪）の位置する微高地から移動してきたものであろう。

八代平野における弥生時代の遺跡分布をみると、平野を望む丘陵裾部から平野部の微高地上に立地する傾向にある。とくに竜峰山山麓から日置川流域にかけての一帯に分布密度が濃くなっている。鐘楼堂貝塚（八代市井上町鐘楼堂）、姫屋敷貝塚（八代市長田町字姫屋敷）、長田町遺跡（八代市長田町字一本橋）、西片町遺跡（八代市西片町）、東片町遺跡（八代市東片町）、さらに九州自動車道関連の調査においては、車塚古墳（八代市川田町東字車塚）、川田小筑遺跡（八代市川田町西字小筑）などをあげることができる。

このような弥生遺跡の分布状態は、球磨川が運ぶ大量の土砂による自然陸化現象、すなわち三角州の形成に深く結びついていたことを裏付けるものであり、日置川流域一帯の陸化が最も早く進行していたことの証明でもある。なお平野部への進出時期については、本遺跡出土例からすれば前期末頃に比定できる。前述した鐘楼堂貝塚では、夜臼式土器を伴出したという。したがってその上限はさらにさかのぼる可能性がある。それは陸化の進行速度のちがいによるものであるかもしれない。本遺跡周辺に点在する孤立した微高地および丘陵斜面には、数多くの弥生期の遺跡が存在するであろうし、また近い将来発見されるにちがいない。

2. 古墳時代の遺物

出土遺物のうち古墳時代の土師器・須恵器がかなりの量認められる。他の遺物同様原位置を

示すものでないことは言うまでもない。特に大部分を占める須恵器の年代は、多少の手法上の差異が認められるものの、一型式内を出るものではなく、おおむね6世紀後半〜末頃に位置づけることができる。

本遺跡の東側、すなわち丘陵部との間の水田地帯には、岡の坊（前方後円墳）、前塚をはじめ計5基の古墳が、ほぼ南北に一直線に並び、この北側には車塚（前方後円墳）をはじめとする東川田古墳群、南側には大塚古墳（前方後円墳）・茶臼塚古墳・上の山古墳（前方後円墳）など大小13基からなる東片町古墳群、さらに南の乙丸古墳群（計10基）、階下古墳群（計12基）に続いている。これらは一定のまとまりをもった古墳群を形成しながらも、山麓線に沿ってほぼ一列に並ぶという八代平野特有の分布形態を示している。しかしながら、これらの古墳は特に近世以降盛んに行なわれた干拓事業のため、封土等が削り取られたものが多いと聞く[註1]、出土した土器の多くは、このような古墳破壊により、散乱したものではなかろうか。

3. 歴史時代の遺物

本遺跡出土の遺物の中で、量的に最も多く出土したものは、歴史時代以降の遺物である。前章で述べたように、これらの遺物は遺構に伴って出土したものでは無く、当然のことながら、その資料的価値には限界がある。したがって個々の遺物の年代についても、まだ多くの問題点を残しているものの、ここではこうした点を前提としながらも一応の年代的な位置付けを行ないたい。

須恵器の中に、量的には少ないが比較的古い形態をもつ一群がある。第12図24〜28がそれで、おおむね7世紀後半に位置付けられる。この時期の生産遺跡としては、八代市敷川内町丸山窯址[註2]、また宇土郡不知火町長崎元米ノ山窯址[註3]などが知られているが、特に丸山窯址の場合は、生産地として結びつく可能性がある。また図示した中で、高台付坏の外底部の中央に円孔を穿ったもの（第12図28）があるが、類例としては球磨郡錦町下山窯址出土の中にあり、調査者の前田一洋氏は須恵器の生産過程で使用された窯道具の一種で、窯体内の土器の営成状態を観察するテストピースであろうとされている[註4]。いずれにせよ、生産地特有の遺物でもあり、注目される。

次に、最も数多く出土した土器群のうち、土師器では第7・9・10図、須恵器では第13・14・15（77,80〜84）・16図に示した。いずれも8世紀末〜9世紀前半代に位置付けられる。本遺跡の北約3.5kmに位置する。興善寺馬場[註5]・志水遺跡[註6]でも同時期の須恵器が出土しているが、本遺跡出土に比較するとやや先行する型式が主体となっている。

また一点のみ出土した軒平瓦については、未だ類例を見い出せないが、おそらく9世紀代以降に比定されるのではなかろうか。

土師器の外底部に「川大」と刻まれたものが7点、他に判読が不明なもの1点が出土した。いずれも9世紀前半代のものである。「川大」はカワダイあるいはカワダ、また高田郷のコオダに関連するものであろうか。いずれにしても墨書土器などとは異なり、生産段階で施される関係上、需用先の集落や、ある機関や機構を示すことが考えられる。いわゆる須恵器に多く認められ「ヘラ記号」と同じような目的をもつものであったのではなかろうか。この点については、次の項で若干の考察を試みたい。

4. 「川大」について

「川大」が何を意味する文字であるかについては、「川大」をコウダと読み古代の高田郷に関連するものであるとする説がある。[註7] ところがこのことを証明するには、解決しなければならないいくつかの問題がある。

平安時代中頃の八代郡（夜豆志呂）は、「和名抄」には五郷が記されている。すなわち北から小川郷・豊福郷・肥伊郷・木行郷・高田郷からなっていた。高田は「太加多（たかた）」と読ませている。高田をコオダと呼ぶようになったのは、江戸時代以降のことであり、現在の球磨川以南の地城に当っていたものと考えられる。そして、本遺跡の所在する一帯は「河田」にあたり、興善寺、片野川などとともに木行郷に属していたと思われる。

また平安末から鎌倉時代になると、八代郡は北より北郷・南郷・土北郷に編成されている。北郷は現在の砂川以上の地城、南郷は氷川流城、土北郷（土佐郷）は球磨川流城をさし、遺跡の一帯は、土北郷の一部に入っていたと考えられる。

さらに中世末頃の八代郡は、「和名抄」にある高田郷、太田郷、小犬（木行）郷に、三箇郷および、氷川流城以北を道前郷、道後郷に分け、またこれに下益城の四郷、すなわち甲佐郷、小隈野郷、守山郷、豊福郷を加えた十郷となっている。

以上のように、「和名抄」の平安時代中頃の段階から、中世末にいたる間、各郷が統合あるいは分離を重ねてきたのである。遺跡の位置する一帯についても、木行郷→土北郷→太田郷へ変化をたどっている。したがって、本遺跡を包む、現在の興善寺、川田、片町一帯が、古代の高田郷に属する地城であるとする見解には、これを裏付ける文献上の資料を見い出すことができない。いずれにせよ、古代高田郷は本地城に隣接していたことは確実であるが、その中心は球磨川流城以南の地城にあったように思われる。

また、『延喜式』・『和名抄』に記された駅名のうち、「片野駅」は、本遺跡の南約1kmの上片町・東片町・西片町付近に想定されている。「片野」は本来「片」であり、「野」は後に付されたとも考えられる。仮にこうした前提にたてば、「片」は「川太（かた）」と読むことができるのではなかろうか。すなわち、これら一群の「文字ある土器」が、駅ないしこれに関する機関

を刻んだものではなかろうか。

前項にも述べたように、「川大」の文字のある土師器についても、それが土器生産段階で刻まれたものである。遺跡が生産址に関するものであるか、あるいは生活址に伴うものであるかについて明らかにしえない現状では、前述した郷名比定とは別次元の限界性が存在するのである。

5. 近世墓について

前章で述べたとおり、調査地区の2ケ所に近世墓群を検出した。A群35基、B群18基、計53基検出した。両群とも墓域の範囲を完掘できなかったが、いずれも方形の区画に規制されて営造されていたと考えられる。各墓壙は数基に切り合いを生じてはいるが、墓壙の方位はほぼ一致している点などを考えれば、比較的短期間のうちにその営みを終えたものと考えられる。しかし前章で棺の構造について類別を試みたとおり、構造あるいは規模の面からも、多種多様のものが混在していて、こうした差異はどのような背景に起因するものであろうか。この点については、今後の課題であり、本報告では資料の提示に留めた。

両群とも方形に墓域が区画されていて、その方向もほぼ一致している。また墓域の主軸は現在の水田畷畔とは著しく異なっていて、おそらく水田化される以前の土地の地割に規制されたものであろう。遺跡周辺では「条里制」の復原[註8]が行なわれていて、この復原と墓域を比較した結果主軸方位はかなり異なっている。しかし「京坪」という遺跡名でも明らかのとおり条里に関する地名の残存することから、条里制の施行も遺跡付近にまで及んでいた可能性がある。

註1. 乙益重隆「肥後上代文化史」 日本談義社 1954.

註2. 「全国遺跡地図（熊本県）」文化財保護委員会 （調査者＝江上敏勝、三島 格）1966. 松本健郎「生産遺跡調査報告Ⅱ」 熊本県文化財調査報告第48集、熊本県教育委員会 1980.

註3. 『不知火町史』「通史」 宇土郡不知火町 1972. 松本健郎「生産遺跡基本調査報告Ⅱ」熊本県文化財調査報告等48集 熊本県教育委員会 1980.

註4. 前田一洋「須恵器管見—穴のあいた須恵器」『郷土』第8号免田郷土研究会、1980.

註5. 野田拓治他「興善寺馬場遺跡報告」『興善寺Ⅰ』 熊本県文化財調査報告第46集 1980.

註6. 江本直他「興善寺志水遺跡調査報告」『興善寺Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第46集 1980.

註7. 本遺跡の歴史的な背景については本報告付論3として、村上豊喜、「川田遺跡の歴史的背景—古代・中世前期の八代郡—」に述べられている。

註8. 日野尚志「熊本県の条里—八代平野の条里—」 熊本県文化財調査報告第25集 1677.

川 田 京 坪 遺 跡

—熊本県八代市川田町西所在川田京坪遺跡の調査—

熊 本 県 文 化 財 調 査 報 告 第 46 集

熊本県教育委員会発行　1980年3月

付論1　熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨

松下　孝幸*・分部　哲秋*・田代　和則**

は じ め に

熊本県八代市にある川田京坪遺跡から、1978年に53の埋葬施設から31体の人骨が出土した。人骨が出土した遺構はすべて水田中に立地していたため、骨の保存は良くなかったが、歯の歯冠の部分が比較的良く残っていた。

この人骨群は別項で述べられているように，考古学的所見から近世に属する人骨群である。

我が国における近世人骨の出土例は数少なく、保存もあまり良くない。本例の保存も良いものではなかったが、今後貴重な資料の１つになると考えられるので、できる限り詳細な観察と計測を行ない、二・三の興味ある結果を得たのでその結果を報告したい。

資　　料

川田京坪遺跡より発掘された人骨の性別、年齢は次のとおりである。

人骨番号	性別	年齢
A—１号人骨		幼児
A—２号人骨		幼児
A—４号人骨	女性	熟年
A—５号人骨	男性	不明
A—６号人骨	男性	壮年
A—８号人骨	不明	不明
A—９号人骨		幼児
A—10号人骨	女性	壮年
A—14号人骨	女性	壮年

*　長崎大学医学部解剖学第２教室

**　長崎大学医学部大学院

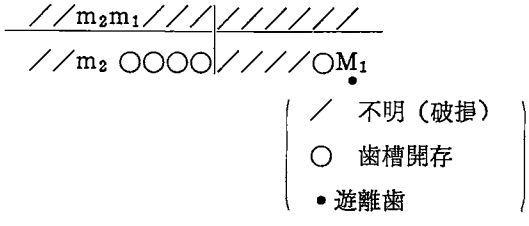
A—15号人骨	不明	熟年
A—17号人骨	男性	熟年
A—18号人骨	男性	熟年
A—26号人骨	不明	熟年
A—27号人骨	女性	熟年
A—28号人骨	男性	壮年
A—30号人骨	男性	壮年
A—31号人骨	男性	壮年
A—32号人骨	男性	壮年
B—2号人骨	不明	壮年
B—4号人骨		小児
B—5号人骨	女性	不明
B—7 a号人骨	不明	成年
B—7 b号人骨		幼児
B—8号人骨		小児
B—9号人骨	女性	熟年
B—12号人骨	不明	熟年
B—13号人骨		幼児
B—15号人骨		小児
B—16号人骨	不明	熟年
B—17号人骨	男性	熟年
B—18号人骨	不明	不明

31体のうち成人骨は23体で、そのうち男性は9体、女性は6体で残りの8体は性別不明である。なお、31体のうち8体は幼小児骨である。

所　　見

A—1号人骨

保存状態はきわめて悪く、四肢骨の小片が数個、下顎体の一部、歯が釘植した上顎骨のごく一部および遊離歯1本が残存するだけである。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。



乳歯の咬耗度は軽い。また$\overline{|M_1}$にも咬耗の跡が認められないことと歯槽の状態から、$\overline{|M_1}$は萌出したばかりと考えられる。従ってA－1号人骨は幼児と推定される。

A－2号人骨

保存状態は悪く、頭蓋片と右大腿骨骨体の近位部、右上腕骨骨体遠位部および右腸骨の一部が残存するのみである。大腿骨および上腕骨の大きさから幼児と推定される。

A－4号人骨

頭蓋冠と四肢骨の細片が残っているだけである。頭蓋冠は内板も外板も剥落しており、保存は良くない。計測は不可能であるが、諸径は大きいものではなく、また幅径が狭く、頭型は長頭へ傾いている。前頭骨がよく膨隆しているので女性骨と考えられ、縫合は外板も癒合しているので年齢は熟年と推定される。

A－5号人骨

頭蓋片４個と上腕骨頭、右大腿骨大転子、右脛骨遠位端、寛骨の一部および左距骨が残存していた。上腕骨頭は大きく、他の残存部も大きいので、男性骨と推定されるが、年齢は不明である。

A－6号人骨

頭蓋片、下顎体、左上腕骨骨体、右橈骨骨体、右大腿骨骨体、左大腿骨遠位部、左右の脛骨骨体および腓骨体が残存していた。いずれも表面の腐朽がひどく計測は不可能であるが、四肢骨はいずれも大きい。

下顎体の残りは良好で、また遊離歯も残存しており、それを歯式で示すと次のとおりである。

$$\begin{array}{r|l} /\;/\;/\;/\;/\;/\;/\;/ & /\;/\;\dot{C}\;/\;/\;\dot{M}_1\dot{M}_2\dot{M}_3 \\ \hline /\,M_2M_1P_2P_1\bigcirc\bigcirc I_1 & \bigcirc\underset{\bullet}{I_2}\bigcirc P_1P_2M_1M_2M_3 \end{array}$$

（／　不明（破損）
○　歯槽開存
•　遊離歯）

下顎体は厚く頑丈である。また咬耗度は Broca の１度である。

性別は四肢骨が大きく頑丈であることから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

A－8号人骨

頭蓋は前頭骨と左頬骨が残っているが、眉上弓の発達はあまり強くない。その他四肢骨が残っていたが、すべて破片である。

性別・年齢は不明である。

A－9号人骨

歯が１本だけで、下顎の右第１大臼歯の歯冠が残っていた。歯冠の咬合面には強いシワが存在し、咬耗も全くみられないことから、未萌出だったと考えられ、A－9号人骨は幼児と推定

される。

A—10号人骨

出土人骨群の中では比較的保存が良い。

(1) 頭　蓋

頭蓋骨は前頭骨、左右の頭頂骨が残存していたが、内外両板の剝落がひどい。歯は遊離歯が4本、いずれも歯冠のみが残存していた。歯式で示すと次のとおりである。

$$\begin{array}{c|c} & P_1P_2 \\ \hline & M_1M_2 \end{array}$$

咬耗度は Broca の1度である。

(2) 四肢骨

上肢骨は上腕骨骨体が残っていた。左右共径は大きいものではなく、計測が可能なのは右側のみで、その推定中央位での最大径は（21㎜、右)、最小径は(15㎜、右)、中央周は（62㎜、右）で、中央断面示数は（71.43）となり、扁平性が認められる。また前縁が高く隆起しており、骨体遠位の断面形はたけの高い三角形を呈している。

下肢骨は大腿骨と脛骨の骨体が残っていた。大腿骨は左右共やや小さく、右側のみが計測可能で、その推定中央位での矢状径が（24㎜、右)、横径が（25㎜、右)、中央周が（76㎜、右）で、中央断面示数は（96.00、右）となり、粗線の発達も悪く、柱状形成の像も全く認められないが、上骨体断面示数は67.74となり、強い扁平性が認められる。

脛骨は表面の剝落がひどく計測は不可能であるが、あまり大きいものではない。

その他、左右の距骨と左の膝蓋骨とが残存していた。

性別は四肢骨があまり大きくないことから女性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

A—14号人骨

比較的良く残っていたが、剝落がひどい。

(1) 頭　蓋

右頭頂骨が良く残っており、頭頂結節の発達は良い。その他前頭骨、後頭骨の一部が残存する。下顎骨は下顎体の一部が残存し、歯も2本の遊離歯の歯冠が残っており、歯式は$\overline{M_3}|$、$|\overline{M_1}$である。咬耗度はそれぞれ Broca の1度と3度である。

(2) 四肢骨

上肢骨は橈骨片と上腕骨骨体とが残存しており、上腕骨はやや細く三角筋粗面の発達も良くない。左側の計測が一部可能で、推定中央位での最大径は（20㎜）で、最小径は（14㎜)、断面示数は（70.00）となり、骨体はやや扁平である。また中央周は（56㎜）で、右側の最小径も48㎜を示し骨体は細い。

下肢骨は大腿骨および脛骨の骨体が残っており、大腿骨は右側は乾燥のため変形が著しい

が、左側は計測が可能である。推定中央位での矢状径および横径はともに（27㎜）で、中央断面示数は（100.00）となり、粗線の発達は悪い。また上骨体断面示数は77.33となり、 骨体上部はやや扁平である。

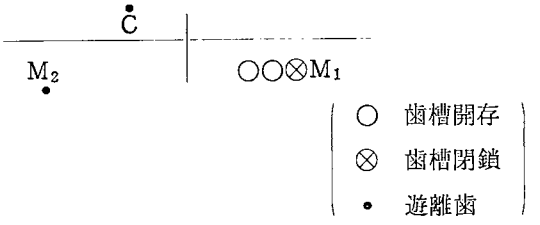
脛骨は表面の剝落がひどく、計測は不可能であるが、径は大きいものではない。

その他、左側の距骨が残存していた。

性別は四肢骨の諸径が小さいことから女性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

A－15号人骨

頭蓋片、左頬骨、下顎体の一部、四肢骨片のほか、３本の遊離歯が残存していた。歯は歯冠のみで、歯式で示すと次のとおりである。



咬耗度は Broca の２～３度である。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度から熟年と推定される。

A－17号人骨

(1) 頭　蓋

頭蓋骨は破片で、復元は不可能であるが、骨質は厚く頑丈である。下顎骨は下顎体が残存しているが、歯槽部が破損しているので、その部分を歯式で示すことはできない。オトガイ孔の位置から下顎体は骨の萎縮が進行しており、その結果、体高が低くなっているようである。歯は全く遺存していなかった。

(2) 四肢骨

上肢骨は左上腕骨骨体遠位部と右尺骨の骨体近位部が残っていたが、上腕骨はやや細く、尺骨はそれに比べるとやや大きく、骨間縁の発達も良い。

下肢骨は右大腿骨骨体の近位部が残っていたが剝離がひどく、詳しくは観察できないが、径はあまり大きくはないようである。

性別は頭蓋骨が厚いことから男性と考えられ、年齢は下顎骨に骨萎縮が認められることから熟年と推定される。

A－18号人骨

出土人骨の中では比較的保存が良かった。

(1) 頭　蓋

頭蓋骨は後頭骨の保存が良いほかは頭頂骨の一部が残っていただけである。下顎骨は下顎体

のみが残存しており、骨萎縮が認められ、下顎体は小さくて低い。歯槽部の状態から下顎の歯槽はほとんどすべて閉鎖していたものと考えられる。また歯は1本の遊離歯も残存していなかった。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 上腕骨

右側は骨体が残っているだけであるが、左側は近位端が破損しているほかは良く残存していた。径は大きく、三角筋粗面は強大で、縄文人骨のそれを思わせるものがある。

右側は剝落して計測は不可能であるが、左側の計測値は、推定中央位での最大径が（24㎜）、横径が（18㎜）で、骨体断面示数は（75.00）となりやや弱い扁平性が認められる。中央周は（72㎜）、最小周は67㎜で周径は大きい。

2. 橈骨

右側が残っており、遠位端を欠いているほかは完全であるが、表面の剝落は甚だしい。径は大きく、橈骨粗面の発達も良好である。

3. 尺骨

左右共よく残っていたが、保存状態は右側の方が良い。右側は遠位端を欠くほかは大部分が、左側は近位半が残っていた。両側とも大きく、頑丈で骨間縁もよく発達しており、前面は強く陥凹している。

2) 下肢骨

1. 大腿骨

右側は骨体近位部が、左側は近位部を除く大部分が残存していた。矢状径が大きく、骨体後面は粗線へ向けて後方へ大きく張り出し、柱状を形成している。

計測は左側のみが可能で、推定中央位での矢状径が（28㎜）、横径が（25㎜）、中央周は（83㎜）で、中央断面示数は（112.00）となり、柱状形成の像が認められる。

2. 脛骨

右側は骨体遠位部が、左側は骨体が残存していた。左側の計測が可能で、推定中央位での計測値は最大径が（25㎜）、最小径が（19㎜）、骨体周は（70㎜）で、径はあまり大きいものではなく、中央断面示数は（76.00）で扁平性も強いものではない。また中央断面形はヘリチカのⅡ型に属している。

その他寛骨の一部と足根骨の一部とが残っていた。

性別は四肢骨が大きく頑丈であることから男性と考えられ、年齢は下顎骨に強い骨萎縮が認められることから熟年と推定される。

A—26号人骨

保存は悪く、頭蓋は後頭骨と頭頂骨とが残っているだけで、その他は四肢骨の破片と歯が2

本残っていた。

頭蓋骨はやや厚く、歯は歯冠のみで、上顎左第1小臼歯（$\underline{|P_1}$）と下顎の側切歯で、咬耗度は Broca の3度である。

年齢は歯の咬耗度から熟年と推定されるが、性別は不明である。

A—27号人骨

出土人骨のうちでは比較的保存が良い。

(1) 頭　蓋

頭頂骨などが残っていたが、すべて破片である。骨質は比較的薄い。下顎骨は下顎体と右下顎枝とが残存しており、下顎体は高いが下顎枝は大きくなく、また下顎切痕も浅い。下顎骨には歯も残存していたが、その部分を歯式で示すと次のとおりである。

$$\frac{\bigcirc M_2 M_1 \bigcirc / \otimes\otimes\otimes}{\otimes\bigcirc\bigcirc P_1 P_2 M_1 \otimes /}$$

／	不明
○	歯槽開存
⊗	歯槽閉鎖

咬耗度は Broca の3度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

上肢骨は右肩甲骨の肩甲棘、右鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨の一部および手根骨の一部が残存していた。

1. 鎖骨

右側だけが残っており、胸骨端を大きく欠損しているが、やや細い傾向が認められる。

2. 上腕骨

左右共遠位半だけが残っているが、細くて小さく、三角筋粗面の発達も悪い。

計測値は、推定中央位での最大径が（18㎜、右）、（16㎜、左）、最小径が（15㎜、右）、（13㎜、左）で、断面示数は（83.33、右）、（81.25、左）となり、扁平性は弱い。また中央周は（54㎜、右）、（46㎜、左）で、最小周は52㎜（右）、46㎜（左）と細い。

3. 橈骨、尺骨

橈骨は骨体の前面の一部が残存するだけであった。尺骨も骨体の一部が残っており、その部分の径は小さいものではない。

2) 下肢骨

寛骨のごく一部、左右の大腿骨骨体、右脛骨骨体および足根骨の一部が残存していた。

1. 大腿骨

左右共骨体が残存しており、細くてきゃしゃで、粗線の発達もきわめて悪い。

推定中央位での計測値は、矢状径が（22㎜、右）、（20㎜、左）、横径が（26㎜、右）、（25㎜、左）で、径は小さく、中央断面示数は（80.62、右）、（80.00、左）となり、その断面形は横広ろの楕円形である。また中央周も（74㎜、右）、（71㎜、左）で細い。上骨体断面示数は67.86（右）、65.52（左）となり強い扁平性を示しているが、骨体全体は横径よりも矢状径の方が小さいので、示数値ほどの強い扁平性は感じられない。

2. 脛骨

右側の骨体が残存しているが、細くて小さい。

推定中央位での計測値は、最大径が（26㎜）、横径が（16㎜）で、中央断面示数は（61.54）となり、強い扁平性が認められる。また骨体周は（70㎜）で細い。

性別は四肢骨が細くて小さいことから女性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から熟年と推定される。

A－28号人骨

(1) 頭　蓋

頭蓋冠の一部が残存していたが、頭型を知ることができるものではない。頭頂骨の骨壁は厚くないが、外後頭隆起の発達はやや良好である。また、ラムダ縫合は内板にも癒着が見られない。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

肩甲棘の一部、尺骨と橈骨の一部および上腕骨が残存していた。

1. 上腕骨

右側は遠位半が、左側は骨体が残存していた。両側共太くて頑丈で、三角筋粗面の発達も良い。

計測値は推定中央位での最大径が（24㎜、右）、（22㎜、左）、横径は（18㎜、右）、（16㎜、左）で、中央断面示数は（75.00、右）、（72.73、左）となり、左側の方がやや扁平である。また中央周は（71㎜、右）、（64㎜、左）で、最小周は65㎜（右）、62㎜（左）と右側がやや太い。

2. 橈骨、尺骨

橈骨骨体の一部と右尺骨の一部とが残存していたが、いずれも表面の剝落がひどいものである。

2) 下肢骨

大腿骨、左脛骨、膝蓋骨および足根骨の一部が残存していた。

1. 大腿骨

両側共骨体が残存しており、径はやや大きいが、粗線の発達はあまり良くない。

計測値は推定中央位での矢状径が（30㎜、右）、（27㎜、左）、横径が（27㎜、右）、（26㎜、

左）で、中央断面示数は（111.11、右）、（103.85、左）である。中央周は（88㎜、右）、（84㎜、左）で、右側がやや大きい。また上骨体断面示数は90.00（右）、77.42（左）となり、左側がやや扁平である。

大腿骨は左右差がやや大きいが、右側は乾燥による変形が、左側は表面の剝落がその原因と考えられる。

2. 脛骨

右側骨体が残存していた。径は大きく、頑丈である。

計測値は推定中央位での最大径が（31㎜）、横径が（23㎜）で、中央断面示数は（74.19）となり扁平性は強くない。骨体周は（87㎜）で、周径はやや大きい。また断面形はヘリチカのV型である。

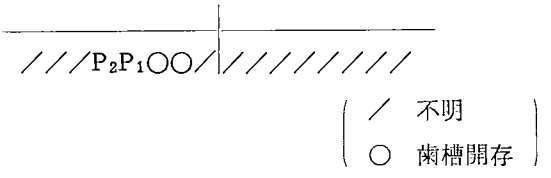
性別は四肢骨が大きく頑丈であることから男性と考えられ、年齢は縫合の癒着が内板にもみられないことから高齢とは考えられず、壮年と推定される。

A—30号人骨

(1) 頭 蓋

頭蓋冠が残っており、計測は不可能であるが、頭型をうかがうことはできる。長径が長くて、幅径が狭く、長頭に傾いている。また外後頭隆起の発達は良好である。縫合はやや密で、内板にも癒合がみられない。

下顎骨は下顎体が残存しているが、歯槽部が観察できるのは正中部のみで、その大きさはあまり大きいものではない。歯も残っており、歯式で示すと次のとおりである。



咬耗度は Broca の1度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

肩甲棘の一部、鎖骨の一部、橈骨および尺骨の骨体の一部と上腕骨骨体の一部とが残存していた。

1. 鎖骨

左右共中部の一部を残すだけであるが、その径はやや小さい。

2. 上腕骨

両側共骨体遠位が残存するだけで、右側の最小周のみが計測可能である。最小周は59㎜で小さい。

3. 橈骨

両側共骨体が残っており、径はあまり大きいものではないが、骨間縁は特異的な形態をしており、両側共近位部において、長さ約3cmにわたり、骨間縁が外側へ強く張り出している。

4. 尺骨

左右共骨体が残存しており、径は大きく頑丈で、骨間縁の発達もきわめて良好であり、前面の陥凹も強い。

2) 下肢骨

大腿骨と脛骨は左右の骨体が、腓骨は右側の骨体が残存しており、また足根骨の一部も残存していた。

1. 大腿骨

右は骨体の大部分が、左は骨体の近位半が残っていた。径はやや大きく、粗線の発達も良好で、弱い柱状形成が認められる。

計測値は推定中央位での矢状径が（28mm、右）、（27mm、左）、横径は（28mm、右）、（27mm、左）で、中央断面示数は左右共（100.00）である。中央周は（88mm、右）、（84mm、左）でやや大きい。また上骨体断面示数は80.00（右）となり、扁平性は強いものではない。

2. 脛骨

両側共骨体が残っており、その径はあまり大きいものではない。計測は右側のみが可能で、推定中央位での最大径は（29mm）、横径は（20mm）で、中央断面示数は（68.97）となり、やや強い扁平性がうかがえる。骨体周は（78mm）とやや細い。また右側の後面には一稜を形成しており、中央断面形はヘリチカのⅣ型に属している。

3. 腓骨

右側の骨体が残存しており、その径は大きく、稜の発達も良好である。

性別は外後頭隆起が良く発達していることや四肢骨が大きく頑丈であることから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗度と縫合の癒着程度から壮年と推定される。

A—31号人骨

(1) 頭　蓋

脳頭蓋の一部が破片となって残っているだけで、しかも剝落がひどいものである。

歯は遊離歯が5本残存しており、歯式で示すと次の通りである。

M_1	P_1
M_2M_1　P_1	

咬耗度は Broca の2度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

鎖骨中部のごく一部と上腕骨、橈骨、尺骨とが残存していた。

1. 上腕骨

左右共骨体が残存しているが、表面の剝落がひどい。両側共径は大きく、頑丈で、三角筋粗面の発達も良好であり、また骨体中央は扁平である。

右側だけが計測可能で、その推定中央位での計測値は最大径が（25㎜)、最小径が（17㎜)で、中央断面数は（68.00）となり、骨体中央部は扁平である。また中央周は（73㎜）で太い。

2. 橈骨、尺骨

橈骨も尺骨も右側の骨体の残りが良く、共に大きく頑丈で、骨間縁の発達も良好である。

2) 下肢骨

大腿骨、脛骨および足根骨の一部が残存していた。

1. 大腿骨

右側の骨体が残っていた。表面の剝落がひどく計測は不可能であるが、径は非常に大きいものではなく、粗線の発達も強いものではない。

2. 脛骨

左右共骨体が残っていた。表面の剝落がひどく計測は不可能であるが、径はやや大きいようである。

性別は上腕骨と脛骨とが大きいことから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

A—32号人骨

(1) 頭　蓋

頭蓋冠の一部が残っていた。計測は不可能であるが、頭型は長頭の傾向が認められる。外後頭隆起は良く発達しており、縫合はやや密で内板にも癒着はみられない。

下顎骨は下顎体のごく一部が残存しているだけで、しかも歯槽部は破損している。歯は7本の遊離歯が残っており、その部分を歯式で示すと次のとおりである。

$M_3M_2M_1P_2P_1C$	M_1

咬耗度は Broca の1～2度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

上腕骨と尺骨とは両側共，橈骨は右側のみが残存していた。

1. 上腕骨

両側共に骨体遠位が残存しており、その径は大きい。剝落がひどく計測は右側のみが可能で、推定中央位での最大径は（23㎜)、最小径は（17㎜）で、中央断面示数は（73.91）となり、やや扁平である。また中央周は（66㎜）で最小周は65㎜である。

2. 橈骨

右側の骨体が残存しており、径は大きく頑丈で、骨間縁の発達も良く、特に近位部は強く内

側へ張り出している。

3. 尺骨

左右共骨体近位部が残っており、径が大きく頑丈である。

2) 下肢骨

大腿骨と脛骨とは両側共、腓骨は右側のみが残存していた。

1. 大腿骨

出土人骨の中では最も保存が良かった。両側共遠位端を欠いているので最大長を測ることはできないが、長径はやや長いようである。また諸径は大きく頑丈であるが、粗線の発達はあまり良くない。

推定中央位での計測値は、矢状径が左右共（29㎜）、横径は左右共（30㎜）で、 中央断面示数は左右共（96.67）となり、 柱状形成の像は全く認められない。中央周は左右共（93㎜）で太い。また上骨体断面数は81.25（右）、75.76（左）となり、扁平性も強いものではない。

2. 脛骨

両側共骨体中央が残存していた。表面の剝落がひどく、計測は不可能であるが諸径は大きい。

3. 腓骨

右側の骨体のみが残存しているが、腐朽がひどく計測は不可能である。しかし諸径は大きく頑丈である。

性別は外後頭隆起の発達が良いことや四肢骨が大きく頑丈であることから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗度が弱いことと縫合の癒着がみられないことから壮年と推定される。

B－2号人骨

頭蓋骨は左右の頭頂骨、左側頭骨の一部および前頭骨の一部が残存していたが、いずれも内外両板が剝落して板間層が残っているだけである。

下顎骨の左の下顎角部と遊離歯とが残っており、その部分を歯式で示すと次のとおりである。

$\dot{I}_1 \mid \dot{I}_1 \dot{I}_2 \dot{C}$

$\underset{\bullet}{M_3}\underset{\bullet}{M_2}\underset{\bullet}{M_1}\underset{\bullet}{P_2}\underset{\bullet}{P_1} \quad \mid \quad \underset{\bullet}{I_2} \quad \bigcirc M_1 /$

／ 不明
○ 歯槽開存
• 遊離歯

咬耗度は Broca の１度である。

四肢骨は破片のみである。

年齢は歯の咬耗度から壮年と考えられるが、性別は不明である。

B－4号人骨

頭蓋骨は破片だけで、四肢骨も右大腿骨と上腕骨の一部とが残っているだけであった。

いずれも腐朽がひどく、詳細を観察することはできないが、四肢骨の大きさから小児と考え

られる。

B－5号人骨

頭蓋は頭蓋冠の一部と左頬骨とが残っていたが、骨壁は薄い。歯は1本だけで、左上顎の大臼歯の歯冠が残っていた。

上肢骨は左右の上腕骨の遠位端と右尺骨の近位端のみが残存しており、下肢骨は右大腿骨骨体の一部と左右の膝蓋骨および脛骨骨体の一部とが残っていた。四肢骨は一般に小さくて細い傾向が認められる。

性別は骨質が薄いことや四肢骨が小さいことから女性と考えられるが、年齢は不明である。

B－7 a号人骨

頭蓋は破片のみで、骨壁はきわめて薄く、縫合も開離している。歯は3個の歯冠が残っており、$\underline{M_3M_2|}$、$\underline{|M_3}$ で、咬耗度は Broca の1度である。

四肢骨は大部分が破片であるが、左上腕骨遠位端と左大腿骨近位部および足根部の一部の残りが比較的良い。上腕骨の遠位端は癒合しているが、左大腿骨は骨頭と骨体とがまだ分離していることから、年齢は比較的若く成年と推定される。性別は不明である。

B－7 b号人骨

残りはきわめて悪く、3本の遊離歯の歯冠と下顎体の一部、鎖骨、および肋骨の一部が残存していた。歯は $\overline{M_2M_1|}$、$\underline{M_3|}$ でいずれも未萌出だったと推測される。下顎体は正中部の一部が、鎖骨は左側の中部が残存しており、鎖骨の大きさから、2歳位の幼児と考えられる。

B－8号人骨

頭蓋骨片数個と四肢骨片および11本の歯冠が残存するだけである。

頭蓋骨片は薄く、残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$$\frac{(M_3)M_2M_1P_2}{M_2 \quad P_1} \Big| \frac{}{CP_1P_2M_1M_2}$$

〔（　）は未萌出〕

ほとんどの歯に咬耗の跡がみられず、強いものでも Broca の1度である。

頭蓋骨壁が薄いことや $\underline{M_3|}$ が未萌出であったと考えられることから、年令は非常に若く、小児の可能性が強い。

B－9号人骨

頭蓋冠の一部が残っていた。計測は不可能であるが、頭型は長頭傾向を示している。縫合はやや密で、部分的に癒合がみられる。

下顎骨は下顎体の一部が、歯は遊離歯が2本残っていた。その部分を歯式で示すと次のとおりである。なお、咬耗度は Broca の3度である。

$$\frac{\overset{\bullet}{P_1}}{} \Big| \frac{}{}$$

⊗○○////$\underset{\bullet}{I_1}$|//////○⊗⊗

／　不明（破損）
○　歯槽開存
⊗　歯槽閉鎖
•遊離歯

四肢骨は左の鎖骨と右の大腿骨の一部および骨片だけで、いずれも表面は剝落しているが、そのことを考慮しても径は小さいものである。

性別は四肢骨が小さいことから女性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から熟年と推定される。

B—12号人骨

頭蓋の一部が残存していたが、頭型が推測できる程ではない。内板の観察は不可能であるが、縫合の癒着は外板に部分的にみられる。下顎骨は下顎体の左半分が残存していたが、歯槽部は欠損している。

四肢骨は骨片のみである。

年齢は縫合の閉鎖程度から熟年と推定されるが、性別は不明である。

B—13号人骨

遊離した2本の乳歯が残存するだけである。それを歯式で示すと $\overline{m_2\ m_1|}$ となり、咬耗の跡がほとんどみられないことから、幼児と推定される。

B—15号人骨

歯と寛骨の一部のみが残存していた。

歯は14本の歯冠だけで、それを歯式で示すと次のとおりである。なお、咬耗度は Broca の1度である。

$$\frac{P_2P_1 \qquad |I_1 \qquad P_2M_1}{M_1m_2P_1 \quad I_2I_1| \quad CP_1 \quad M_1M_2}$$

寛骨は腸骨、坐骨、恥骨が分離しており、このことと残存歯の状態から小児と推定される。

B—16号人骨

頭蓋冠の一部が残存していた。縫合は密で内板は癒着している。下顎骨は下顎体の一部と遊離歯が残っており、歯式で示すと次のとおりである。なお、咬耗度は Broca の 2～3度である。

$$\frac{\qquad\qquad\qquad\qquad |\qquad\qquad\qquad\qquad}{\underset{\bullet}{M_3}\underset{\bullet}{M_2}\underset{\bullet}{M_1}//\underset{\bullet}{C}\bigcirc\bigcirc|\bigcirc\bigcirc\bigcirc P_1\bigcirc\bigcirc M_2M_3}$$

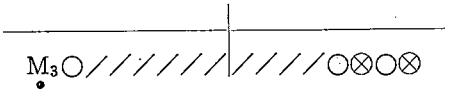
／　不明
○　歯槽開存
•　遊離歯

四肢骨の保存はきわめて悪く、大腿骨頭と脛骨の一部とが残存するのみである。

年齢は歯の咬耗度から熟年と推定されるが、性別は不明である。

B—17号人骨

頭蓋片と左頬骨とが残存しており、頬骨はやや大きい。下顎骨は正中部を欠く下顎体の大部分が残っており、その径はやや大きい。歯は$\overline{M_3|}$の歯冠が1本だけ残っており、歯槽と歯とを歯式で示すと次のとおりである。なお、$\overline{M_3|}$には咬耗の跡はみられない。



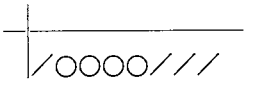
／	不明
○	歯槽開存
⊗	歯槽閉鎖
•	遊離歯

四肢骨は左右の膝蓋骨が完全に残っており、その径は大きい。その他左鎖骨の肩峰端½、上腕骨骨体の遠位部、大腿骨骨体の一部および大腿骨頭が残存しているが、その径はいずれも大きい。

性別は四肢骨が大きいことから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗度から、熟年と推定される。

B—18号人骨

頭蓋骨片、下顎体左側の一部、および、大腿骨頭の一部とが残存しているだけである。下顎体左側の一部は歯槽部も観察でき、その部分を歯式で示すと次のとおりである。



／	不明（破損）
○	歯槽開存

性別、年齢については不明である。

総　　括

熊本県八代市にある川田京坪遺跡の近世遺構から総数31体の人骨が出土した。保存はあまり良くなかったが、詳細な観察および計測を行なった。その結果、川田京坪近世人の特徴を次の様に要約することができる。

1. 合計31体の人骨のうち成人骨は23体で、残りの8体は幼小児骨であった。また成人骨のうち男性骨は9体、女性骨は6体、あとの8体は性別不明である。

2. 遺構が水田に立地していたため、骨の表面は剝落して、保存は悪かったが、歯の歯冠部分は比較的良く遺存していた。

3. 脳頭蓋の計測が可能なものは1例もなかったが、頭型の観察ができるものが数例あり、男女共に頭型については長頭へ傾いている。

4. 顔面頭蓋の保存はきわめて悪く、観察できるものは1例もなかった。

5. 歯は比較的良く残っていたが、遊離歯はいずれも歯冠が残存していたにすぎない。

6. 男性の上腕骨はやや大きく、頑丈であり、三角筋粗面の発達も良好で、なかには縄文人骨を思わせるものもあり、骨体はやや扁平である。右側の推定中央位での計測値の平均は、最大径が（24.00㎜、3例)、最小径が（17.33㎜、3例）で、骨体断面示数は（72.30、3例）となり、径は大きく、扁平性も強い。

7. 女性の上腕骨はやや小さくて細く、三角筋粗面の発達も良くなく、骨体の扁平性もあまり強いものではない。右側の推定中央位での計測値の平均は、最大径が（19.50㎜、2例)、最小径が（15.00㎜、2例）で、骨体断面示数は（77.38、2例）である。

8. 橈骨と尺骨は男性ではその径も大きく頑丈であり、特に橈骨には骨間縁の近位部に著明な突出を形成している例がみられた。

9. 男性の大腿骨は大きくて、頑丈であり、右側の推定中央位における計測値の平均は、矢状径が（29.00㎜、3例)、横径が（28.33㎜、3例)、中央周が（89.67㎜、3例）でいずれも大きい。また粗線の発達は良好なものと、そうでないものとがあり、中央断面示数の平均は（102.59、3例）である。また骨体上部の扁平性は弱い。

10. 女性の大腿骨は細くて、きゃしゃで、右側の推定中央位における計測値の平均は、矢状径が（23.00㎜、2例)、横径が（25.00㎜、2例）で、中央周は（75.00㎜、2例）である。粗線の発達は悪く、矢状径よりも横径が大きいので中央断面示数は（90.31、2例）となり、断面形は横広ろの楕円形を呈しているが、骨体上部は扁平である。

11. 男性脛骨は大きくて、頑丈で、左側の推定中央位における計測値の平均は、最大径が（28.00㎜、2例)、横径が（21.00㎜、2例)、骨体周が（78.50㎜、2例）である。また中央断面示数は（75.10、2例）で、扁平性は弱い。

12. 女性脛骨は細くて小さい。また強い扁平性を示すものが、1例みられた。

13. 以上のように、川田京坪近世人骨は、頭型については男女共長頭へ傾いており、近世人骨の特徴の1つを示している。四肢骨については、男性は全般に大きくて頑丈で、扁平性は上肢骨には認められるが、下肢骨ではごく弱いものである。一方女性は小さくて細く、扁平性も強いものではない。

14. 我が国における近世人骨の出土例は少なく、しかもある程度まとまった数を出土したのはほとんどが関東地方の遺跡からで、主に頭蓋について詳しく研究されている。その結果によれば、近世人頭蓋の形質は中世人と現代人との中間に位置している。

九州地方における近世人骨の出土例もきわめて少なく、著者らが報告した熊本県下の四郎丸遺跡出土の近世人骨も保存はきわめて悪いものであった。

川田京坪近世人骨も保存は不良で、計測値に基づいて中世人や現代人と比較し、統計的に検討することはできなかったが、主として観察所見より頭型は男女共明らかに長頭へ傾いてお

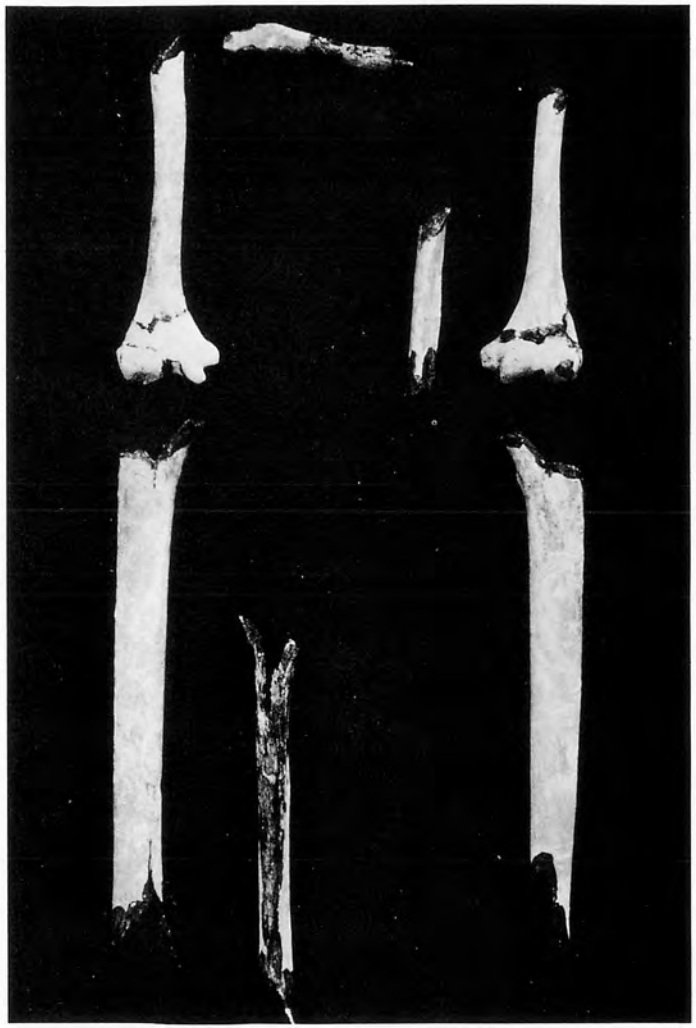
り、また男性の四肢骨は大きくて頑丈なものであった。

（擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課、ならびに人骨研究についてご指導いただいた内藤芳篤教授へ感謝致します。）

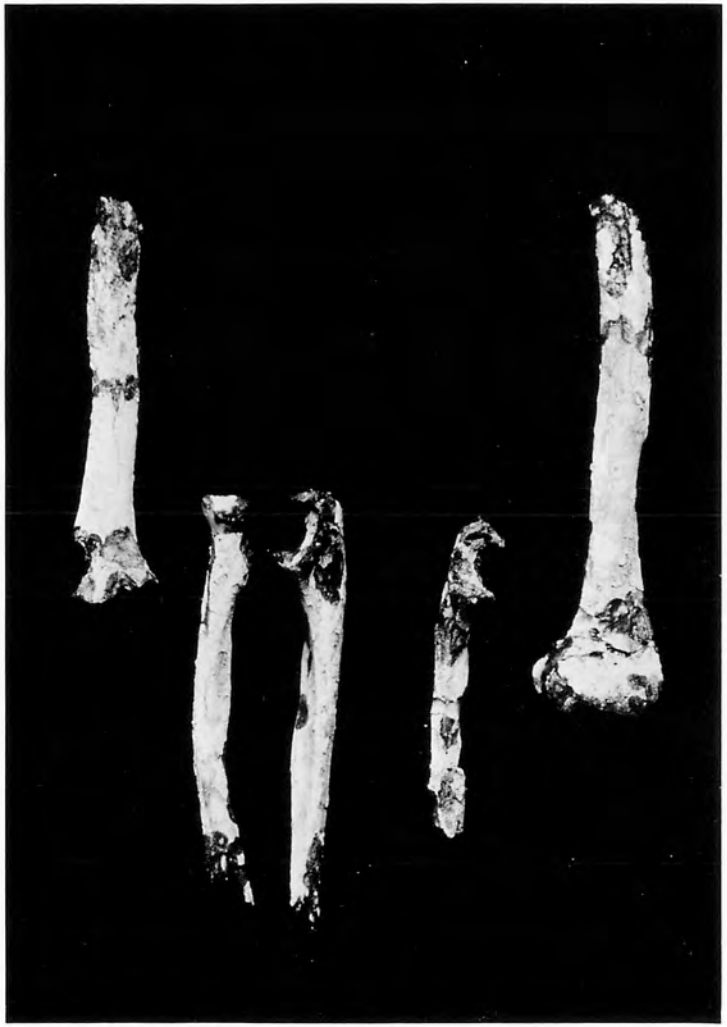
参考文献

1. 鈴木尚，他，1957：深川雲光院出土の江戸時代人頭骨について。日本人類学会日本民族学協会連合大会第11回紀事
2. 鈴木尚、1962：東京都芝白金、旧海軍墓地に埋葬された江戸末、明治初年の日本人頭骨、人類誌、70：105—120
3. 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。53—57。
4. 寺沢俊男、1975：東京都台東区下車坂町から出土した江戸時代人脛骨の形質人類学的研究。東京慈恵会医科大学雑誌、90（2）：231—238。
5. 内藤芳篤、1974：仁兵衛島出土の人骨。対馬：106—112。
6. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
7. 森田　茂、河越逸行、1960：湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋の人類学的研究補遺。人類誌、67（5）：278—295。
8. 森本岩太郎、他、1976：江戸時代における日本人形質の漸進的変化—東京都一橋高校遺跡出土頭蓋を中心に—人類誌、84（4）：317—318。
9. 松下孝幸、他、1980：熊本県四郎丸遺跡出土の近世人骨。

付論1の図版

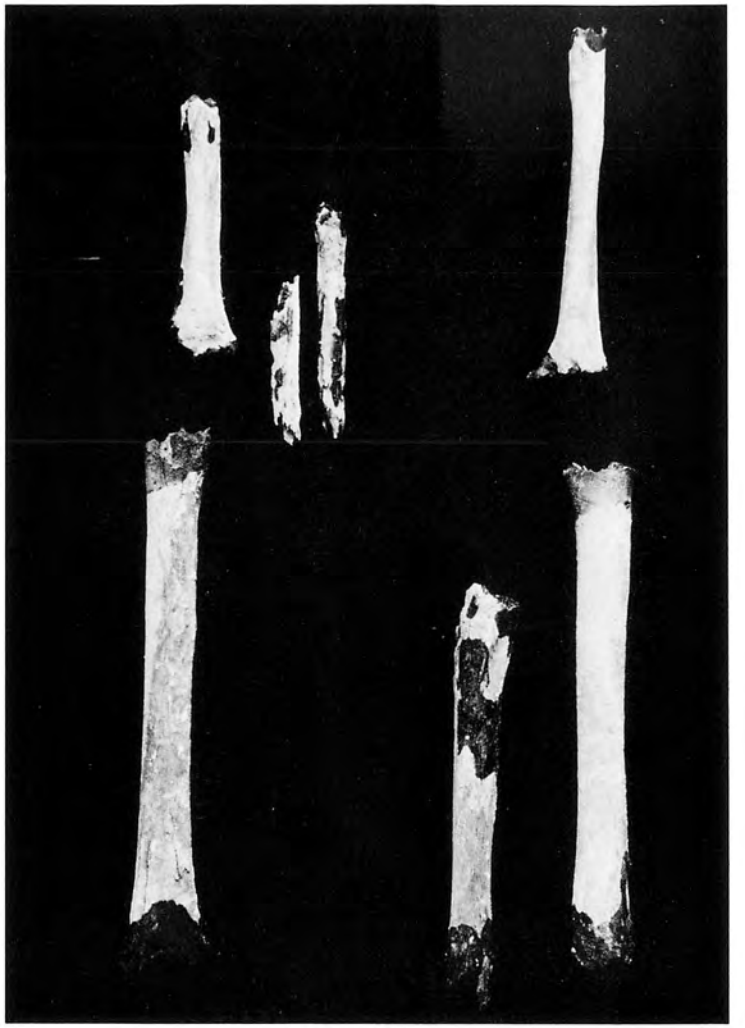


1—27号人骨・四肢骨（女性・熟年）

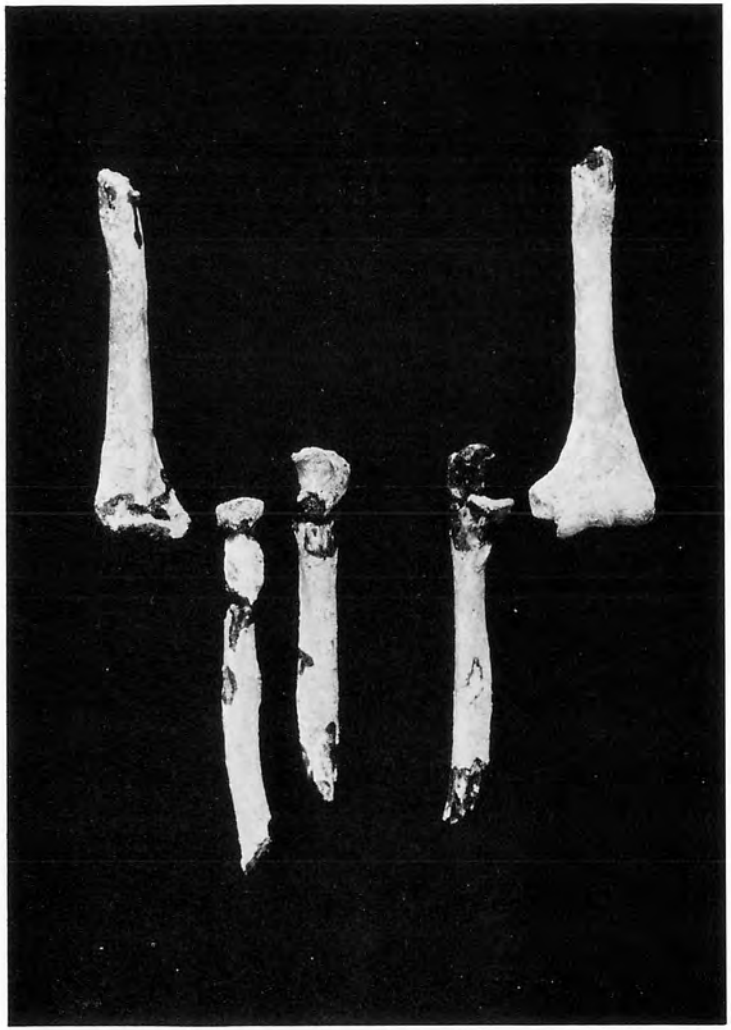


1—18号人骨・上肢骨（男性・熟年）

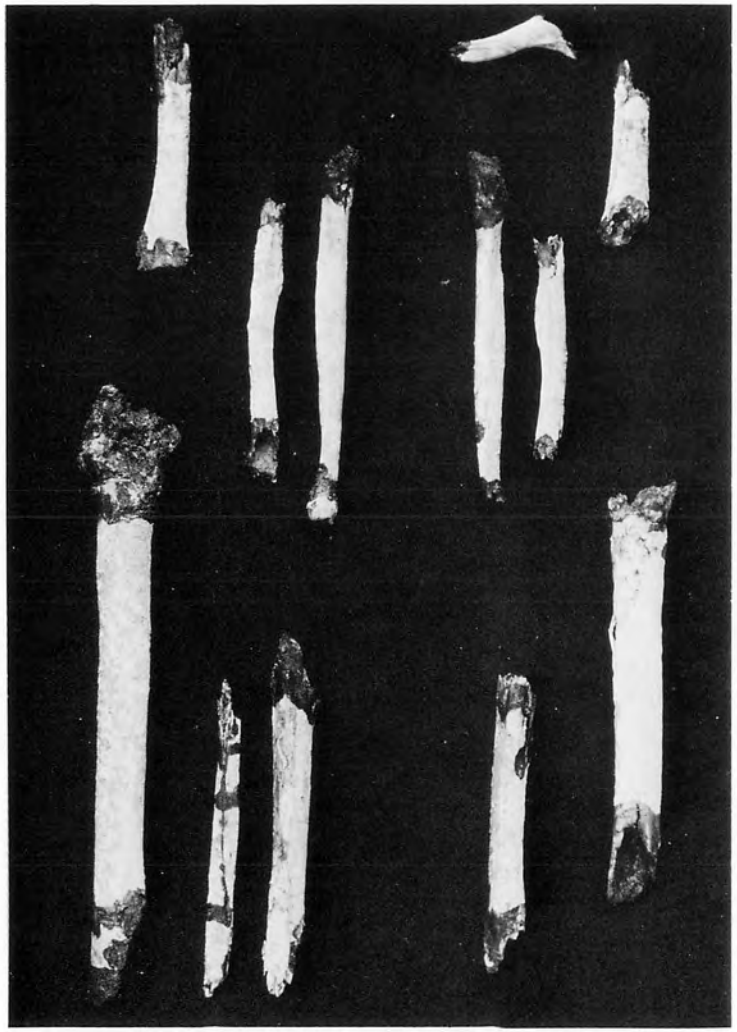
Ⅰ—30号人骨・頭蓋・上面観（男性・壮年）



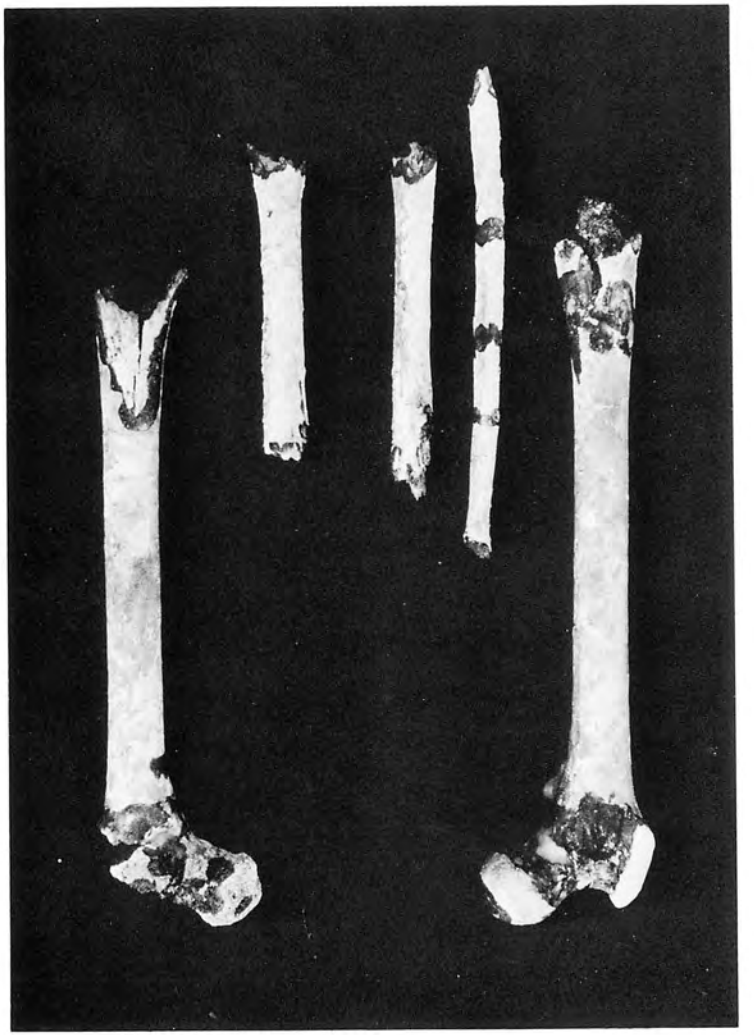
Ⅰ—28号人骨・四肢骨（男性・壮年）



Ⅰ—32号人骨・上肢骨（男性・壮年）



Ⅰ—30号人骨・四肢骨（男性・壮年）



Ⅰ—32号人骨・下肢骨（男性・壮年）

川 田 京 坪 遺 跡

—熊本県八代市川田町西所在川田京坪遺跡の調査—

熊本県文化財調査報告第46集

熊本県教育委員会発行 1980年3月

付論2 熊本地方人頭骨形態の時代的変化の概観

産業医科大学教授・解剖学 北 條 暉 幸

かって忽那将愛教授（現熊本大学名誉教授）は、日本人の起源を解明する上での九州人の人類学的研究の重要さ[1]とその地方差を[2]発表された。筆者は同教授門下の一人として、古代から現代に至る熊本（九州中部）地方人を研究して来た。今回は古代人骨の発掘と研究の意義および同地方の古代から現代に至る骨格の資料をもとに、頭部・顔面部の形態の時代的変化について若干の考察を行いたい。

ところで，かような学問は人類学とよばれている。人類学はヒトの進化、すなわち時間的な流れのなかで起るさまざまな身体的特徴の変化について、その実態と原因の解明に努力して来た。動物界の一員である人類は、野生動物にない特徴、すなわち家畜と共通する特徴をいろいろな面で持っており、人類自らがつくり出した文化によって、自らを家畜化しているという意味で、これを自己家畜化現象とよんでいる。

家畜は一般に野生動物とは異なり、その食物供給が安定していること、および外敵に襲われるなど生命が常におびやかされる危険が少なく闘争的な性格が失われていることや、感覚器官の鋭さが失われていることも多い。また、ブタなどに見られるように、皮下脂肪の増加、体毛の減少などもあり、さらに品種の多いこともその特徴である。

一体、人類はこの200万年とも300万年とも言われる間に、他の動物、たとえばゴリラ・チンパンジーなどの類人猿とは異なり、著しい進化をとげたものであることはよく知られた事実である。かような進化の原因は今なお十分に明らかにされたとは言い難いが、一つには人類がこれら類人猿とは異なって文化を創り出し、発展させて来た結果にほかならないと考えられている。人類は自ら創り出した文化という、自然環境とは異なった独特な生活環境の中ではぐくまれ、さらに高度な文化を発展させて来た。人類の特徴は哺乳動物の中でもとりわけ発育期（幼児期）が長く、成人に達するまで親の手厚い保護下にある。ここに家族の形成もみられ、さまざまな地域に集団をつくって通婚圏を形成し、遺伝的な隔離もみられ、さまざまな地方的変異型、あるいは家畜における多くの品種に相当する多くの人種を生ずることになり、人類独特の進化が形成されることになった。まさに自己家畜化現象とよばれる所以である。

かような意味で、古代から現代に至るさまざまな文化的環境（生活様式）の中で生きて来た人々の骨格の研究、特にその形態の比較研究にもとづく時代的変化を調べることは重要である。

もちろん、生物としてのヒトの身体的特徴は、親から子へ、子から孫へと世代から世代へと遺伝するものであるが、単に生物学的な角度からだけでは解決のつかぬ問題もある。たとえば、同じ日本人でも、第二次世界大戦後約30年間に10代後半の若者（男子）の身長が7cmも高くなったという研究がある。かって昭和27年、故西成甫東京大学名誉教授らの調査による日本人学生、工人の平均身長は163cm[3]であったが、最近昭和54年の高校生の平均身長は170cm（これは世界人類の身長分類の中で高身長群に属する値である）を示しており、日本人の身長は著しく高くなった。かような著しい変化は、遺伝的な差異というよりは、この30年間における高度成長とよばれる経済のめざましい発展にもとづく世代間の生活様式の差異によるところが大きいと考えられる。

さらに人類学では、短頭化現象ということがいわれる。これは頭部を上からみて、前後の最大長径、左右の最大幅径を計測し、前者に対する後者の比率を百分率で表わした頭骨長幅指数が時代とともに、あるいは世代間で短かくなる現象をいうのである。第二次世界大戦前の大学生に比べて戦後の大学生の短頭化、つまり上からみた頭部の形態が円形に近くなりつつあるという現象が、多くの学者によって指摘されている。また鈴木尚博士（現東京大学名誉教授）によって、中世鎌倉時代人が著しい長頭型を示し、その後、短頭化し、現代の短頭型へとつづくという指摘[4]もある。さらにヨーロッパでも同様なことが指摘されている。かような短頭化現象もまた身長の変化と同様に、生活様式の変化にその原因が求められることが多い。生活様式のうちで、まず第一に食生活の問題がある。端的に言って、固い食物を食べるか、柔らかい食物を食べるかによって、咀しゃく筋のはたらきに強弱の差が生じる。筋肉のはたらきの強弱は、同時に直接骨格、とりわけ発育期の人々の頭部、顔面部の骨格の発育、形態の形成に強い影響を与えるのであるから、生活様式の変化は、短頭化現象と密接な関係があることになる。

さて、熊本地方の古代人から現代人に至るまでの形態の変化、特に短頭化現象や顔面の形態の変化を概観してみよう。

熊本地方の古代人に関する研究は、故山崎春雄教授（当時熊本医学専門学校、のち北海道帝国大学医学部）による阿高貝塚人骨の報告[5]が最初であるが、上腕骨、大腿骨、脛骨などについてであった。その後、岡本辰之輔博士による同貝塚人頭骨[6]、大森浅吉教授（当時鹿児島大学医学部）による同貝塚人下顎骨[7]および頭骨[8]などに関する研究がある。しかし顔面部が保存不良のため、顔高、頬骨弓幅などの計測値は不明である。このほか御領貝塚人頭骨[9]については金関丈夫教授（当時九州大学医学部）らにより、また、かきわら貝塚人頭骨[10]および沖の原貝塚人頭骨[11]については、忽那教授門下の故松野茂博士らおよび筆者らによって、さらにその後も発掘された沖ノ原貝塚人[12]については内藤芳篤教授（長崎大学医学部）により報告されている。これらの

縄文時代人の特徴は長頭か中頭型で、顔面は高くなく、幅広く、鼻根部の隆起は顕著である。

つづいて、弥生時代人骨については、忽那教授（前出）門下の里一郎博士ら発表の玉名市立願寺発掘の１体[13]と内藤教授発表による沖ノ原貝塚出土弥生時代人[12]など少なく、同時代人の形質が明らかにされたとは言い難い。昭和55年３月になって、同門下の１人である筆者は、熊本市小山町で壮年とみられるほぼ完全な男性人骨１体（弥生時代中期の須玖式カメ棺中に埋葬）を同県文化課緒方勉氏および高谷和生氏らの協力で取り上げることができた。もちろん、この１例をもって熊本地方の弥生時代人の特徴を論ずることはできないが、頭骨長幅指数は76.2で長頭型に近い中頭型であり、熊本地方人（沖ノ原[12]、立願寺[13]）は他の地域の弥生時代人（三津[14]、大野原及び秋成[15]、土井ケ浜[16]、西北九州[17]など）に比べて、頬骨弓幅はかなり幅広く、顔高などはかなり低いので、顔面部は全体として低く幅広い。この時期の熊本地方人の研究の発展は、今後のカメ棺の考古学的発掘の増加にかかっており、期待するところが大きい。

さらに、古墳時代人骨は県内各地の石棺などから多数得られており、未発表のものが多い。このうち保存のよい個体の頭部、顔面部の形態についてみると、頭骨長幅指数（男子８例）の平均値は75.9で長頭型に極めて近い中頭型であり、中には頭骨長幅指数が71.9を示す個体があって、熊本を含む西日本各地出土の古墳時代人骨[18]の同指数平均値78.1（変異幅72.3～85.9）に比べてかなりの長頭の傾向を示している。また顔面部の形態のうち、顔高も眼窩高もともに低い傾向を示している。なお宇土市松山向野田の前方後円墳（４世紀末とみられる）から得られた１体の壮年女性[19]は、前記西日本出土古墳時代人骨の計測値に比べて、顔面部全体および眼窩高がともに高い。前方後円墳に埋葬された人の顔面が、他の形式の石棺人骨の顔面よりも高いことは注目すべきことである。このほか、天草下島妻鼻の地下式板石積石室墓から100体を超える古墳時代人が得られており、保存は全体として不良で、１例のみ計測可能（頭骨長幅指数81.6、短頭型）であった[20]。

つぎに中世から近世にかけてみると、宇土市緑川遺跡から中世人骨が、故松野茂博士（前出）らによってとり上げられており、同博士死去以後は筆者が中心となって研究し報告した[21]。また長崎大学医学部内藤芳篤教授による「尾窪の人骨」の報告[22]もある。このほか未発表であるが天正時代人骨[23]も筆者が研究中であり、男子の平均値は68.5で著しい長頭型を示すことが注目される。

江戸時代人骨に関しては、同時代末期に近く天草地方における天然痘患者の島流しの人骨が長頭型（平均値で男子72.7、女子74.4）で、顔面は狭く突顎が多いことが明らかにされた[24]。さらに筆者は、肥後藩主細川家一門朽木家の墓地改葬時に同家の許可を得て、累代の頭骨について調査し、徳川将軍家とよく似た特徴[25]、いわば貴族に共通する顔面の形態的特徴を認めることができた[26]。

さらに現代人頭骨についてみると、明治10年代から昭和30年代にかけての頭骨について、忽那教授門下の松元実義博士により報告されている[27]。この報告によると、頭骨長幅指数平均値

は男子78.08、女子79.07で、男女とも中頭型であることが注目される。

以上、熊本地方人について、特に頭部、顔面部の特徴を縄文時代から現代に至るまで、これまで得られた資料にもとづき概観して来た。頭部の形態は縄文、弥生、古墳の各時代では中頭型、中世および近世では著しい長頭型に傾き、指数の著しい減少をみるが、それ以後は指数が増加して中頭型へと移行し、顔面部の形態については狭く高くなる傾向も認められた。もちろん各個体間には変異があり、これら変化の原因の解明は、将来に亘る骨格の資料の増加によるところが大きいと考えられる。さらに遺伝的な考慮も必要であり、徳川将軍家ならびに細川家一門朽木家累代の当主の形態の特徴にみられるように、食生活など生活様式の変化、各世代間の文化の差異による形態変化の考察も重要である。

引 用 文 献

1) 忽那将愛（1962）：日本人種論を立てる上に於ける九州の位置。西海医報、137：3—4。

2) 忽那将愛（1970）：九州人の人類学とリンパ本幹に関する研究。熊本医学会雑誌、44：1017—1030。

3) 西成甫（1952）：日本人標準体格調査報告。解剖学雑誌、27：53—63。

4) 鈴木尚（1965）：日本人の骨。Ⅶ短頭化現象、82—107。岩波書店。

5) 山崎春雄（1918）：阿高貝塚人骨。熊本県史蹟調査報告、1：90—95、図版44—48。

6) 岡本辰之輔（1929）：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人々骨の人類学的研究（頭蓋骨に就て）第1報。人類学雑誌、44。付録3：3—26。

7) 大森浅吉・木野田章（1957）：阿高貝塚人の下顎骨について。鹿児島医学雑誌、30：408—421。

8) 大森浅吉（1960）：故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、Ⅶ。付：211—230。

9) 金関丈夫・原田忠昭・浅川清隆（1955）：熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究、2：93—163。図版Ⅰ—Ⅶ。

10) 松野茂・地後井泰弘・永田忠寿（1967）：肥後国上益城郡嘉島村六嘉かきわら貝塚出土人骨について。熊本医学会雑誌、41：41—52。

11) 北條暉幸・緒方勉（1971）：熊本県天草郡沖の原貝塚人骨とその遺物。人類学雑誌、79：70。

12) 内藤芳篤（1973）：沖ノ原遺跡の人骨。長崎大学医学部解剖学第二教室。

13) 里一郎・横手荘介・本田重明（1959）：熊本県玉名郡立願寺発掘の弥生式時代人骨について。熊本医学会雑誌、33：2483—2491。

14) 牛島陽一（1954）：佐賀県東背振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究、1：273—303。図版Ⅰ—Ⅱ。

15) 金関丈夫・甲斐庸禹（1955）：福岡県浮羽郡大野原及び秋成発掘の弥生式時代人骨に就いて。人類学研究、2：72—92、図版。

16) 金関丈夫・永井昌文・佐野一（1960）：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究、Ⅶ附：1—36。

17) 内藤芳篤（1971）：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、79：236—248。

18) 城一郎（1938）：古墳時代日本人人骨の人類学的研究。第一部　頭蓋骨、1：1—172。

19) 北條暉幸（1978）：向野田古墳の人骨について。向野田古墳（宇土市埋蔵文化財調査報告書第２集）、157。
20) 北條暉幸（1975）：熊本県本渡市（天草）妻鼻古墳時代墳墓群出土人骨の予備的研究。札幌医科大学医学進学課程紀要、16：25—32。
21) 故松野茂・北條暉幸・松田愛人・土生健二郎（1970）：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について、熊本医学会雑誌、44：999—1016。
22) 内藤芳篤（1973）：尾窪の人骨、尾窪（熊本県文化財調査報告第12集）、62—78。図版11—52。
23) 上野辰男・鈴木喬（1979）：御船塚、中近世墓地遺跡。おさき墓地古塔碑群（熊本県文化財調査報告第36集）、48—55。
24) 脇達也（1970）：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌、44：1031—1091。
25) 鈴木尚（1967）：増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体　Ⅵ頭骨。東京大学出版会。
26) 北條暉幸（1970）：肥後藩主細川家一門朽木家累代の頭骨について。人類学雑誌、78：64。
27) 松元実義（1956）：現代中部九州（肥後）人頭骨の人類学的研究。熊本医学会雑誌、30：834—879。

川 田 京 坪 遺 跡

—熊本県八代市川田町西川田所在川田京坪遺跡の調査—

熊本県文化財調査報告第46集

熊本県教育委員会発行 1980年3月

付論3 川田遺跡の歴史的背景

—古代・中世前期の八代郡—

村 上 豊 喜

〔I〕 はじめに

古代～中世前期の八代地方については，文献史学的に言えば史料不毛の地帯ということができる。したがって川田遺跡の性格規定に直接関与できるような史料はなく，類推の域を出ざるを得ない。本レポートのテーマにサブテーマをそえたのも，大まかな叙述にならざるを得ないからである。

〔II〕 古代の八代郡

『和名抄』によれば，古代の八代郡には肥伊・高田・豊福・木行・小河の五郷があったとされる。五郷のそれぞれの現在地は，肥伊郷が八代郡竜北町・宮原町付近，高田郷が八代市妙見町・川田町付近，豊福郷が下益城郡松橋町豊福付近，木行郷が八代郡鏡町付近，小河郷が下益城郡小川町付近に推定されてきた。したがって，古代の八代郡は下益城郡松橋町豊福から，八代市北東部にかけての地に相当しており，その意味で今日の八代郡市と若干の地域的相違を持っている。今回発掘の対象となった川田遺跡は「カワダ」と訓じているが，その音から言えば「コウダ」と読めるのであり，更に出土遺物の土師器（平安期と推定される）のヘラ書銘「川大」も「コウダ」と読めることから，この川田の地が古代の高田郷に属する地であることには疑問の余地が無くなったと言えよう。そしてこの地に条里制が施行されていたことも発掘地の字名が「京坪」であり，かつ方向が一致することからほぼ確実である。

ところで八代郡家・郡倉はどの郷に存在したのであろうか。従来八代郡家・郡倉の比定地は論者によってまちまちであり，例えば山口修氏は郡家を宮原町付近，郡倉を小川町付近に求められている。その根拠としては宮原町（肥伊郷）がいわゆる火の国の発祥地と考えられ，考古学的にみても古墳等が多く，郡の中心地となるにふさわしい，また小川町には正院の地名が残っていることを挙げている。(1) その後，いくつかの説が出ているが，現在では玉名郡家・郡倉・

郡寺の発掘調査例から，この三つはワンセットになっている可能性が強いとし，布目瓦の出土した小川町納野のいわゆる小川正院又は南部田正院を郡倉に比し，その近接地に郡家があったとする説（仮に小河郷説としておく）と，八代市興善寺町の興善寺廃寺を郡寺と考え，その近所に郡家があったとする説（興善寺説）の二説に集約してよかろう。

さて，川田遺跡から西南方向に数キロの八代市大村町に小早川家がある。同家は伝来の中世文書11通を有しているが，その他に系図一巻がある。その系図によれば，その祖は八代徳渕にあった正倉院長であり，平安末期には八代庄三箇郷八千把村を開発したとする。この三箇郷はいわゆる中世的郷で，その所在地から考えると旧来の高田郷の一部が独立したものと考えてよかろう。とすれば，同氏は平安期には八代郡家の役人であり，律令制の崩壊に従い在地領主への転進をはかったとすることができよう。南九州の在地領主層の殆どが古代律令制下の国衙・郡衙の官僚であったことは多くの論文により指摘されているところである。（小早川氏の祖の中世期の活動については〔Ⅲ〕参考）無論系図自体は新しいものであるので全面的に信用することはできないが，ただ同家の伝承にこのような郡家役人としての活動を記している点は注目すべきであろう。つまりこの点が正しいとすれば郡倉の役人が高田郷にいたとの類推が可能になるからである。真為の確定はできないが仮説として提示しておきたい。

次に問題としたいのは官物の輸送上の問題である。郡倉に集積された官物の運送手段として最も有効的なのは海上輸送である。当時の海岸線がどこまで及んでいたかは不明であるが，小川地域と比較して高田郷の地が港湾的に恵まれなかったとは思われない。特に小早川家の伝承に言う徳渕にこだわるつもりはないが，同地は中世には重要な港として機能している。臨海の郡である八代郡の郡倉はやはり港湾の近くであったとしていいであろう。また，古代の駅家として八代郡には片野があるが，これは現在の八代市の上・中・西片町であり，布目瓦も出土している。また前述の興善寺廃寺からも布目瓦が出土している。更に今回の川田遺跡からも少量ではあるが布目瓦や越州窯青磁が出土している。

以上のことからすると古代の八代郡の中心は川田・興善寺・片町の属する高田郷にあったとしてよいのではなかろうか。それがどの場所かを確定する作業は，もはや文献史学では及ばぬところであるので，今後の考古学の成果を待つしかないが，高田郷が八代郡の中心として考えられることのみを指摘しておきたい。

〔Ⅲ〕 中世前期の八代

中世前後期を通じて旧高田郷は八代庄という庄園に属していたと思われるが，その始期は仁安二年（1167）平清盛が「南郷・土北郷」を大功田として，領有したことに求められる。[(2)] この南郷・土北郷の現在地は不明であるが，この様に古代末期～中世初期にはすでに律令制下の郷の解体がみられ，『和名抄』には知られない郷や地域単位が成立したのである。つまり，旧八

代郡の郷体制の変化は前掲仁安二年以前の久安元年（1145）に知られており「八代北郷豊福保」の名が見える。それ以後〔Ⅱ〕で述べた三箇郷や太田郷等の中世的郷が次々に成立していったのであろう。(3) その中にあって高田郷の名は消えさっていったと思え，近世期の高田手永に属する高田郷の地は『和名抄』に言う芦北郡の「川田郷」であると考えるのが妥当であろう。この様に古代の郷の解体・中世的郷の成立は同時に武士団の発生をも意味するが八代郡で最も史料的に古い武士団は前述の久安元年の史料に登場する八代藤三重永である。彼はその名から八代住人であったことは違いないが，その活動は球磨郡まで及んでいる。(4) その後重永の動向は史料欠如のため全く判明しない。そしてようやく鎌倉中期にいたり小早川家の祖である源次郎丸名主の一族の動向が知れる。源次郎丸名は文永のころ（1264～75）源次郎宗守が経営し，鞆井樋の修固を役として荘園領主の安堵をうけていた。(5) ところが何か不都合があったらしく，宗頼の代になりそのうちの三杖の田地を八代庄小隈野村宮山（下益城郡豊野村下郷）の大百姓西仏に売脚したのである。そして西仏はそこに下人等を派遣して耕作せしめていたが，有名な永仁の徳政令の発布により，(6) 田地を源次郎丸宗頼に反却せざるを得ない状況になっている。そして正安三年（1301）三杖の田地は再び宗頼に安堵されている。この永仁の徳政令が宗頼の田地に適用されたことは，彼が単なる百姓ではなく，鎌倉幕府法によって統制される存在，つまり幕府御家人であったことを示している。そして今のところ，中世前期の八代郡において幕府御家人として考えられる人物は彼の一族のみである。

なお，八代庄は平家一族から源平内乱を経て一条能保室（源頼朝の実妹）の庄園となり，その後の承久の乱で一条信能が京方に加わったために収公され北条氏の所有となったものと思われる。

註(1) 山口修氏『熊本の歴史』

(2) 『公卿補任』

(3) 『平安遺文』補遺4719号

(4) 同上

(5) 小早川家文書，以下源次郎丸関係の記述はすべて同文書による。

(6) 西仏に関しては次の三論稿がある。

工藤敬一「肥後八代荘の大百姓徳王丸西仏」（『歴史公論』第四巻五号）

阿蘇品保夫「舛田家文書にみる中世農民像」（熊本市立高校誌『うぶゐ』第三号）

拙稿「肥後国八代庄についての覚書」（『熊本史学』50号記念特集号）

川田京坪遺跡

図版

図版1　遺跡の景観

川田京坪遺跡遠景（東より）

調査区全景（南より）

図版2　湿地の調査

Ⅰ区2Ｔ調査風景

Ⅰ区2Ｔピート層（流木）出土状態

図版3　遺物出土状態

Ⅲ区５Ｔ（北より）

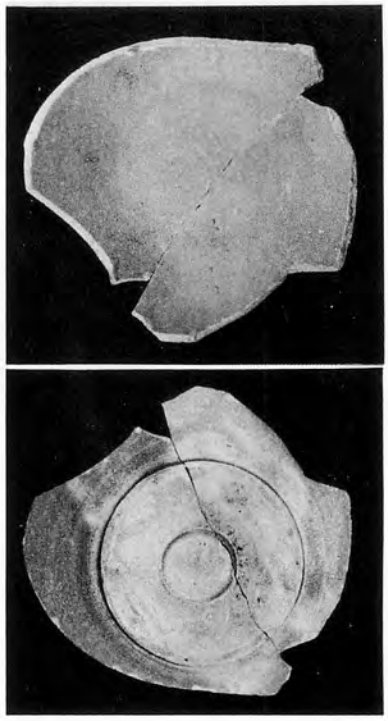
Ⅲ区５Ｔ（西より）

図版4

出土遺物（弥生式土器・土師器・須恵器）

出土遺物（須恵器）

図版6



出土遺物（軒平瓦・越州窯青磁）

1

2

3

4

5

6

7

8

（文字ある土師器）

近世墓A群全景（北より）

近世墓B群全景（西より）

図版9　近世墓出土状態（A群）

A－1号

A－11号

A－2号

A－14号

A－7号

A－17号

A－10号

A－18号

図版10　近世墓出土状態（A群）

A－26号

A－27号

A－29号

A－30号

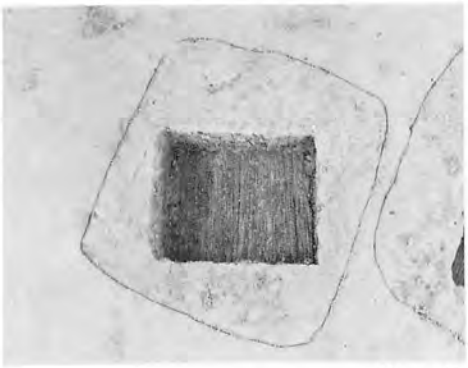
A－32号

A－33号

A－35号

A－37号

図版11　近世墓出土状態（B群）



B－1号

B－6号

B－2号

B－7号

B－3号

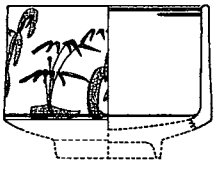
B－10号

B－5号

B－15号

川田小筑遺跡

——八代市川田町西所在近世遺跡の調査——



例　　言

1. 本稿は、日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査のうち、熊本県教育委員会が昭和52年度から昭和53年度にかけて実施した八代市川田町西小筑所在の川田小筑遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は高木正文があたったが、一時的に鶴嶋俊彦が助けた。
3. 遺跡・遺構の撮影は高木、遺物の撮影は白石巌があたり、焼付には上野辰男があたった。
4. 遺物のうち近世陶磁器鑑定で馬場強氏、植物遺体鑑定で吉田喜久子氏の手をわずらわし、結果は本文中で反映した。
5. 資料の整理および本稿の執筆・編集には高木があたった。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　　説……1
1　遺跡の位置……1
2　調査の経過……2
第Ⅱ章　調査の記録……5
1　調査区と層位……5
2　遺構と遺物……7
(1)　溝……7
(2)　土　壙……8
(3)　遺　物……13
第Ⅲ章　調査のまとめ……26

挿 図 目 次

第1図　川田小筑遺跡位置図……1
第2図　発掘前の遺跡全景測量図……3
第3図　土層断面図……6
第4図　遺構全景測量図……8
第5図　遺構断面図……9
第6図　遺構部分実測図(1)……10
第7図　遺構部分実測図(2)……11
第8図　遺構部分実測図(3)……12
第9図　1号溝出土木製品実測図……14
第10図　1号溝出土近世陶磁器実測図(1)……15
第11図　1号溝出土近世陶磁器実測図(2)……16
第12図　1号溝出土近世陶磁器実測図(3)……19
第13図　1号溝出土近世陶磁器実測図(4)……20
第14図　2、5、6号溝および7号土壙出土近世陶磁器実測図……22
第15図　Ⅰ層出土近世陶磁器実測図……24

図 版 目 次

PL. Ⅰ　1．2　川田小筑遺跡遠景

PL. Ⅱ　1．2　調査開始直後の遺跡全景

PL. Ⅲ　発見された遺構全景

PL. Ⅳ　1．調査中の遺跡全景

2．1号溝と5、6号溝

PL. Ⅴ　1．1号溝と石垣

2．横からみた1号溝の石垣

PL. Ⅵ　1．1号溝の第1堰

2．第1堰の木製品出土状態

PL. Ⅶ　1．1号溝の第2堰

2．第2堰と3号溝

PL. Ⅷ　1．2号溝と1号土壙

2．1号土壙

PL. Ⅸ　1．2号土壙

2．3号土壙

PL. Ⅹ　1．4号溝と4号土壙

2．4号土壙

PL. Ⅺ　1．5号土壙

2．6号土壙

3．7号土壙

PL. Ⅻ　1．8号土壙とその周辺

2．8号土壙

PL. XIII　1号溝出土木製品と杭

PL. XIV　1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）

PL. XV　1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）

PL. XVI　1号溝出土近世陶磁器（唐津、平戸、黒牟田）

PL. XVII　1号溝出土近世陶磁器（黒牟田）

PL. XVIII　1号溝出土近世陶磁器（黒牟田、嬉野）

PL. XIX　1号溝出土近世陶磁器（庭木、黒牟田？、網田？、高田？）

PL. XX　2、5、6号溝出土近世陶磁器（古伊万里、金石原？）

PL. XXI　1．1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）

2．1層出土近世陶磁器（古伊万里）

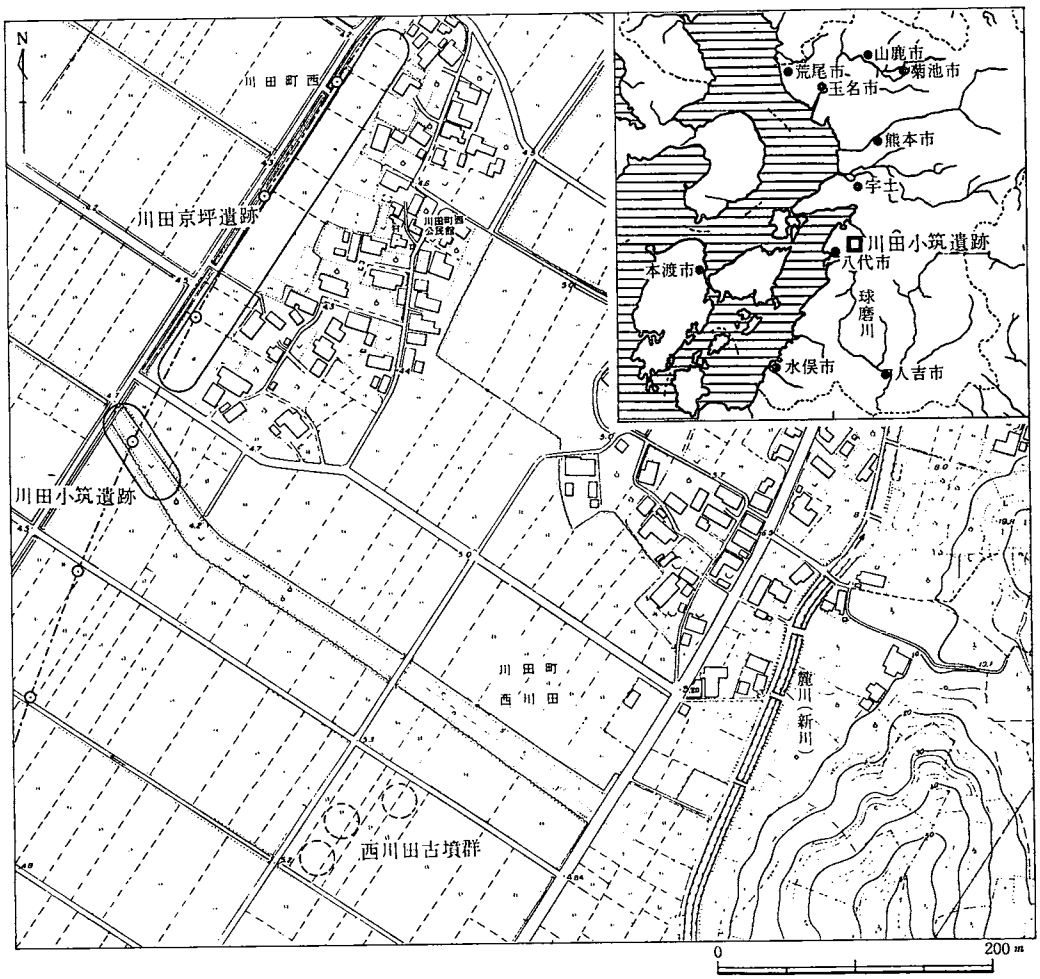
第Ⅰ章　序　　説

1. 遺跡の位置

川田小筑遺跡は八代市川田町西字京坪と字小筑にまたがっているが、川田京坪遺跡と区別する意味で、小筑の方をとって遺跡名とした。

八代平野は球磨川河口に位置する沖積層からなる広沃な穀倉地帯であるが、古くは海が山麓近くまで迫っていたとみられ，八代平野の歴史は球磨川の治水と沖積平野の干拓の歴史でもあり、本遺跡もその一端を語るものである。

八代平野の遺跡の分布については他の報告書に譲り、ここでは微視的に本遺跡の周辺に限っ



第１図　川田小筑遺跡位置図

て述べたい。（第１図参照）

本遺跡は球磨川の北側の平野部にあるが、すぐ東側には竜峰山（標高517ｍ）とそれに連なる九州山地がそびえている。山麓から遺跡まではわずか500ｍで、山麓部から延びて来た低い土塁状の畑の帯状地形の先端部、標高約４ｍのところに遺跡がある。この人為的に造られたとみられる帯状地形の成因をさぐることが、遺跡の性格を明らかにすることでもあるとみられた。なお、遺跡から現海岸線までは約８㎞離れている。

本遺跡の周辺では山麓から水田面に移行するあたりに古墳群が分布し、遺跡の南東約300ｍの地点にも以前は３基の古墳（西川田古墳群）があったが今は消滅してしまっている。（中田好則氏の御教示）

本遺跡の北方には平安時代の遺物を出土する川田小筑遺跡があり、さらにその北方には前方後円墳の車塚古墳などがある。

また、本遺跡の東方の山麓と水田の間には、江戸後期の文政５年に開かれた麓川（新川）用水路が北流し、この地域の水田灌漑に重要な役目を果している。

2. 調査の経過

遺跡の発掘調査は昭和53年３月から昭和53年７月までの約５カ月間行なった。

３月１日（水）　発掘調査事務所を建設。

３月３日（金）　発掘調査資材を運搬。

３月６日（月）　発掘調査開始。調査地に５ｍ方眼を組んで杭を打ち、各区画を東からＡ～Ｄ区、北から１～12区とした。

３月上旬　Ｂ・Ｃ―10区、Ｂ－６区、Ｂ－２区の北側幅２ｍを掘り下げ、土層を観察。層は６層に分けられ、Ｖ層に掘り込まれた遺構が確認された。

３月15日（水）　龍峰青年研修所で昨年度調査した境遺跡・境古墳群・平原野中遺跡・玉泉寺遺跡・清水古墳・興善寺遺跡の報告会を行なった。

３月下旬　遺構を覆っているⅠ・Ⅱ層の除去を始めた。周辺の地形測量も行なった。

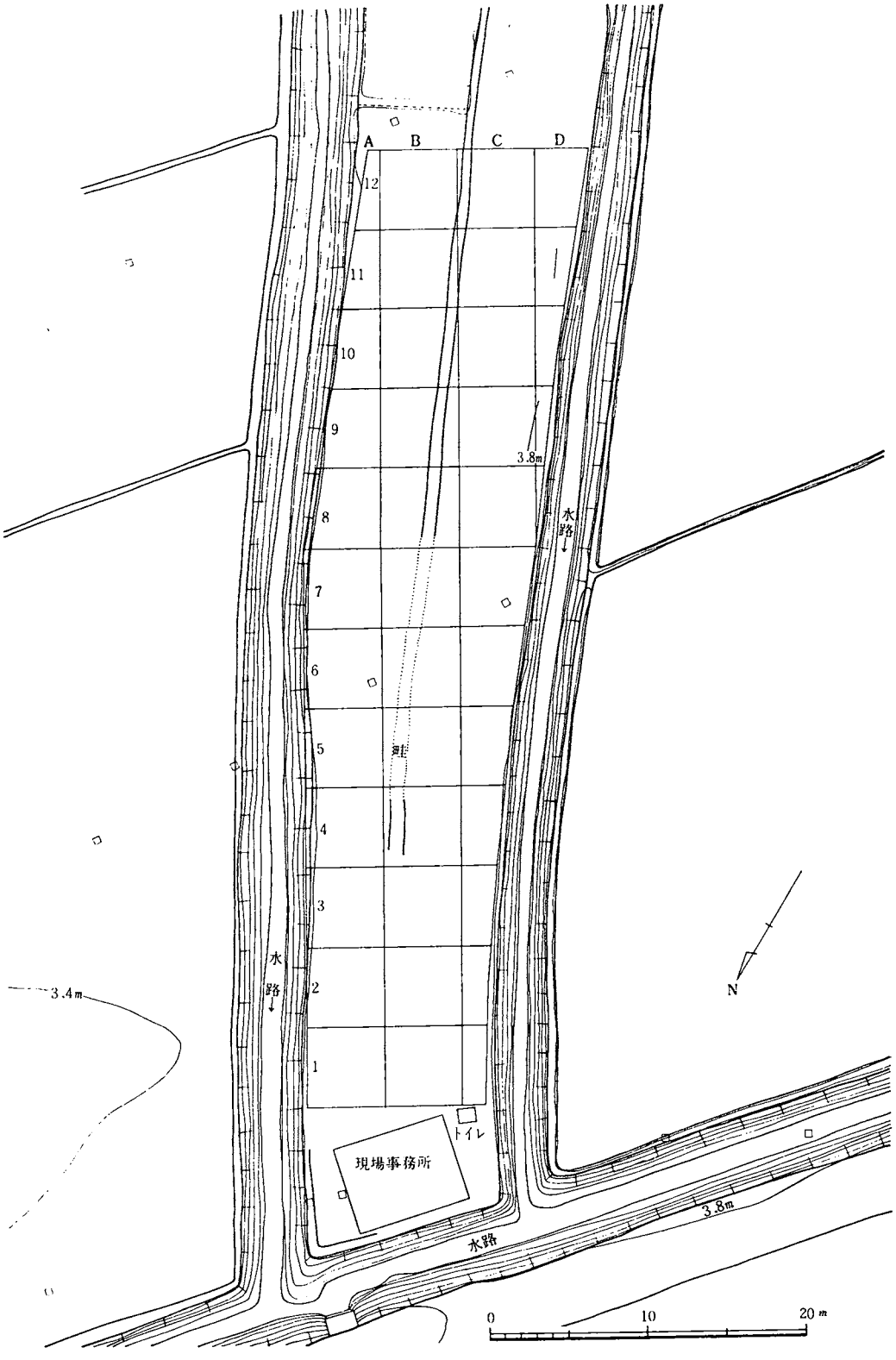
４月上旬　調査地の中央を貫いているとみられる１号溝の発掘を開始。溝の中から流木やシダとともに近世陶磁器や桶の底が出土。Ｂ－８～12区では溝の縁石が検出され、Ｃ―12区とＢ－８区では堪の跡とみられるものが発見された。

Ｃ－８区では１号溝の支溝（３号溝）も検出された。

４月下旬～５月下旬　Ａ・Ｂ―11・12区で１号溝の支溝（２号溝）を検出。

１号溝より東側で１～３号土壙が検出された。

１号溝の西側で、１号溝と平行した５号溝と６号溝が検出された。また７号土壙、８号土壙



第２図　発掘前の遺跡全景測量図（等高線間隔は20cm）

も検出された。

5月9日(火)　道路公団および工事関係者と調査と工事工程について調整の打ち合わせ。

6月上旬　1号溝をさらに北側まで掘り進めた。

1号溝の東側で4～6号土壙が検出された。またA－5区では1号溝の支溝（4号溝）が検出された。

5号溝、6号溝も北へ延びていることを確認。

6月8日(木)　調査区の南端、A～D－11・12区に工事用道路が造られた。

6月10日(土)　文化課文化財調査係の現地検討会が行われた。

6月下旬　遺構の実測を急ぐが、雨が多く調査が進まない。

7月上旬～7月下旬　弥生～古代の遺物包含層であるV層の上部を発掘。遺物は弥生式土器・土師器・須恵器の細片が出土。

7月25日(火)　発掘調査・実測・写真撮影を終了した。

7月26日(水)　発掘調査資材および出土遺物の撤収をした。

なお、この遺跡の発掘調査は高木が当ったが、周辺測量等について鶴嶋俊彦の助力を得た。作業には八代市片町と岡町および八代郡宮原町の人達に協力いただいた。

第Ⅱ章　調査の記録

1.　調査区と層位

山麓から幅15mで帯状に北西にのびて、水田中に残された畑がある。この畑の先端部、長さ70mが高速自動車道工事にかかることになった。帯状の畑の両側の水田は数年前に圃場整備が行なわれ、その際、畑との間に水路が掘られている。

調査はこの帯状地形のうち工事にかかる部分のほぼ全域に5m方眼を組んで東からA～D、北から1～12とした。この調査区域の中央に一本の畦が通っており、畦から東側が字京坪、西側が字小筑となっている。

調査区のB・C—10区、B—6区、B—2区の南側から幅2mを掘り下げて土層観察を行なった。このうちB—2区は湧水が激しいため実測できなかったが、他の2カ所と同じような層位であった。

第3図はB・C—10区とB—6区の南側断面図である。層位を5層に分けた。

Ⅰ層—暗褐色砂質土層。Ⅱ層と同じ山砂であるが、耕作や腐植のため変色したものである。蜜柑の木のあったところはこの層が部分的に落ち込んでいる。この層から近世・近代の陶磁器片などが出土している。

Ⅱ層—茶褐色砂質土層。この層は自然堆積土ではなく、人為的に持って来られた山砂である。

Ⅲ層—砂層。遺構の中に堆積している層で、U字状に縞模様ができており、水が運んで来た砂が次第に堆積したとみることができる。この層の上部は淡褐色であるが、下部は鉄分を多く含んで赤褐色を呈している。この層中から近世の陶磁器片などが出土している。

Ⅳ層—暗灰色粘質土層。Ⅴ層と同じ土であり、Ⅴ層に掘り込まれた遺構の上げ土である。

Ⅴ層—粘土質層。この層は色調によりさらに3層に分かれる。

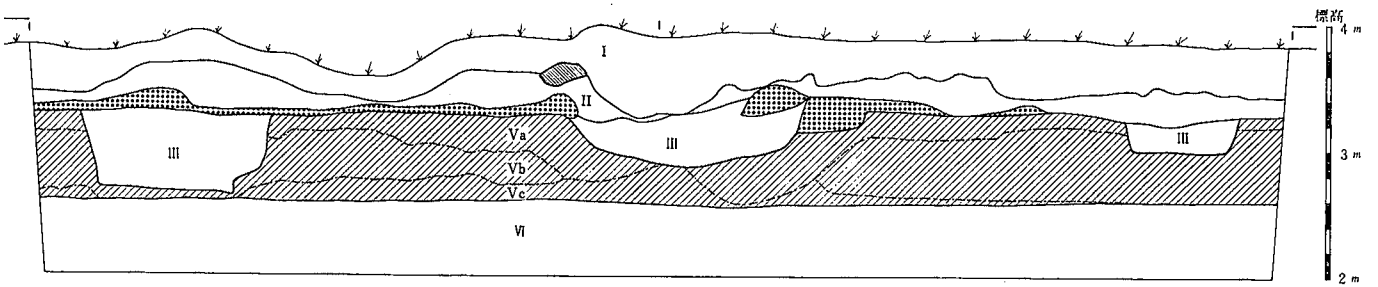
Va 層—灰色粘質土層。この層には磨滅した弥生式土器、土師器、須恵器の細片が含まれている。

Vb 層—黄灰色粘質土層。この層には殆んど遺物を含んでいない。

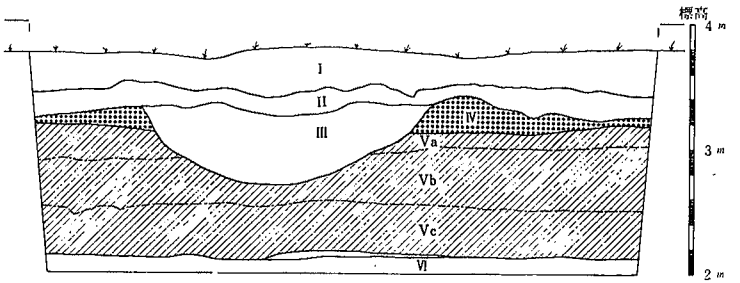
Vc 層—緑灰色粘質土層。この層には自然の流木などがいくぶん含まれている。

Ⅵ層—砂礫層。部分によって青灰色を呈したり、鉄分を含んで茶色を呈したりしている。礫は円礫である。この層（B—10区）から縄文晩期土器の磨滅した破片が1点出土した。この層の上面はB・C—10区で標高約2.5m、B—6区で標高2mを測り、B—2区ではさらに下がっている。

第3図 土層断面図



1．〔B・C—10区南側土層断面図〕



2．〔B—6区南側土層断面図〕

I	層	暗褐色砂質土層
II	層	茶褐色砂質土層
III	層	砂　層
IV	層	暗灰色粘質土層
Va	層	灰色粘質土層
Vb	層	黄灰色粘質土層
Vc	層	緑灰色粘質土層
VI	層	砂礫層

以上の土層観察からⅥ層は少なくとも縄文晩期までは表面に露出していたとみられ、Ⅴ層はそれ以後次第に堆積し、Ⅴ層の上部の遺物包含層は二次堆積とみることができる。また遺構はⅤ層に掘り込まれた近世のものが確認された。

2. 遺構と遺物

遺構は溝と土壙が検出され、先述のようにⅤ層に掘り込まれていた。

(1) 溝

遺構の中心をなすものは、調査区の中央を貫いている幅2.2～2.8ｍで、深さ0.4～0.9ｍを測る溝である。この溝を１号溝とする。おもしろいことにこの溝は京坪と小筑の字堺の畦のあった位置と一致している。１号溝は山側（南東側）から海側（北西側）へと延びており、埋土の状態などから水路とみることができる。

１号溝の２カ所で堰の跡とみられるものが検出された。上流のものを第１堰とする。

第１堰はＣ―12区にあり、溝の西側から底にかけて幅約0.5ｍ、長さ約2.0ｍにわたり溝と直角方向に抉られた跡（第５図１）がある。ここで一時的に水を堰止めたものとみられる。この抉り込み部から桶の底とみられるものの一部が出土した。

調査区外になるが、第１堰より約６ｍ上流で、東側に１号溝の支溝が分かれているらしく、その支溝がＢ―12区・Ａ―12区・Ａ―11区に斜めに続いている。この溝を２号溝とする。この溝は幅約1.0ｍ、深さ約0.4ｍを測り、一部にはさらにその支溝らしいものもみられる。

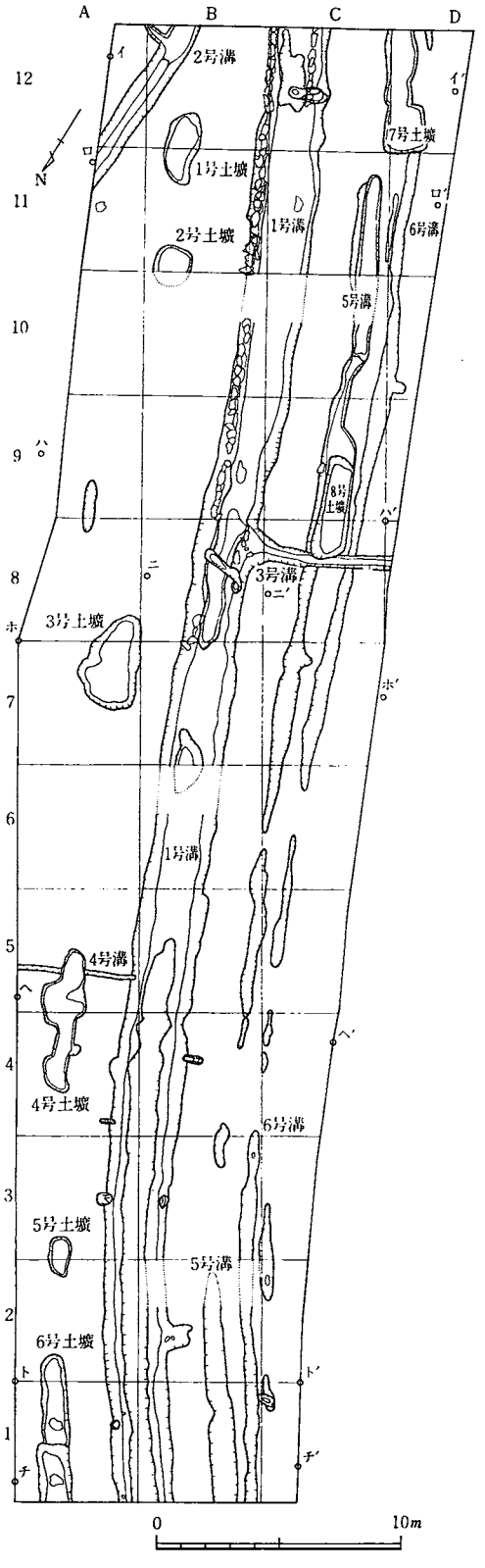
１号溝の第２堰はＢ－８区にあり、第１堰から19ｍ下流にある。この堰の部分は幅0.3～0.5ｍ、長さ2.0ｍにわたって抉り込み（第５図４）があり、やや溝に対して斜めに設けられている。抉り込みの端には石が置かれている。

第２堰の１ｍ上流に、１号溝と直角方向の西側に溝が掘られている。この溝を３号溝とする。幅約0.6ｍで、深さは15cm程である。第２堰で堰止めた水を流したものとみられる。

また、さらに下流のＡ－５区でも東側に分かれた小さな支溝を確認できた。この溝を４号溝とする。幅0.2ｍで、深さ0.1ｍ足らずであった。

１号溝の縁にあたる位置に石垣状に石灰岩を積んだところがある。Ｃ―12区とＢ―12～７区にかけてみられる。断面的にみると第Ⅱ層中にあり、ある時期に第Ⅱ層（山砂）を１号溝の両側に積み上げて土塁をつくり、その土止めとして石を並べたものと解釈される。

１号溝の西側に、１号溝と平行してほぼ二条の溝がみられる。（部分的に三条のところもある。）これらの溝はとぎれとぎれに確認でき、内側の溝を５号溝、外側の溝を６号溝とする。５号溝は１号溝から２ｍ離れた位置にある。最も幅広いところで1.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。とぎれとぎれであることからさらに上面から掘られた溝とみることができる。Ｃ－９区では石灰岩の礫があったので、土塁の外側の溝と推定される。



第4図 遺構全景測量

6号溝は5号溝から0.5〜1.0m離れて掘られており、最も幅広いところで0.8m、深さ0.15mを測る。5号溝と同じく、さらに上面から掘られた溝である。5号溝と同時に掘られたものとすれば、土塁と水田の間に畦をつくり、畦の両側に5号溝と6号溝が掘られたものとみることができる。また、二つの溝の時期が異なるとすれば、ある時期土塁の拡張が行なわれて6号溝が掘られたとみることができよう。

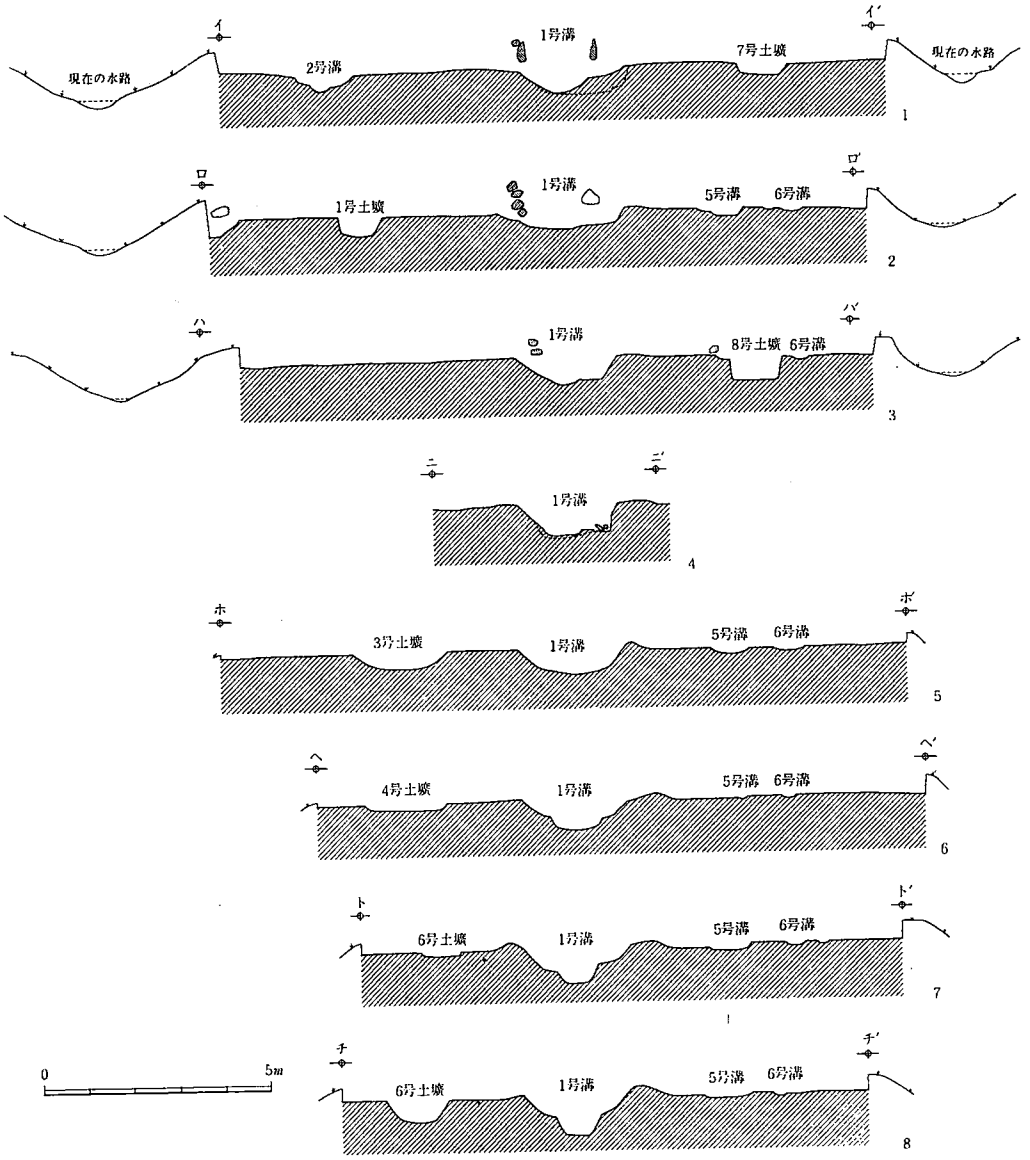
これらの溝から出土した遺物については後述するが、1、2、5、6号の各溝から出土しており、遺物からこれらの溝が江戸時代になってから掘られたものと推定され、埋没した時期は江戸後期とみることができる。

(2) 土壙

1号溝の両側に多数の土壙がみられる。それらは1号溝から同じくらい離れて掘ってあり、1号溝と密接な関係があり、おそらく貯水用に掘られたもの（水留）であろう。このことから1号溝の時期より逆のぼるものではなく、1号溝に続いて掘られ、断面的な観察（第3図）では、土塁の築造時にはすでに埋まっていたとみられる。この種の土壙は調査区内の8カ所で検出された。

1号土壙は1号溝の東側2.2m、B—11、12区の境にある。幅1.35m、長さ2.9m、深さ0.4mを測る、ややひずんだ楕円形を成している。

2号土壙も1号溝の東側2.2mのところにあり、1号土壙から北側2.5mの位置、



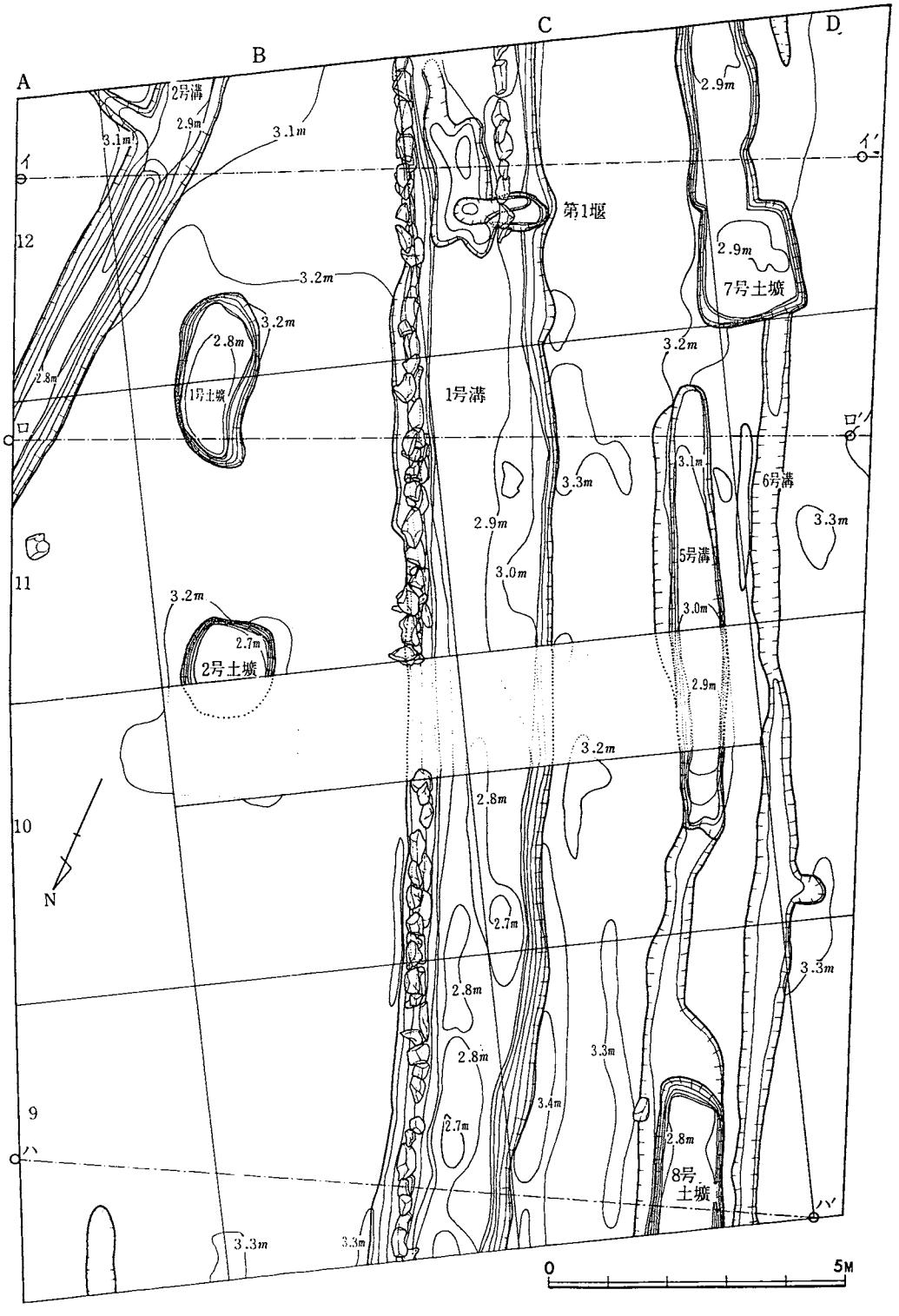
第5図 遺 構 断 面 図

B—10、11区の境にある。土層観察のため設定したトレンチのため、一部破壊してしまったが、円形に近い土壙とみられ、直径1.55m、深さ0.5mを測る。

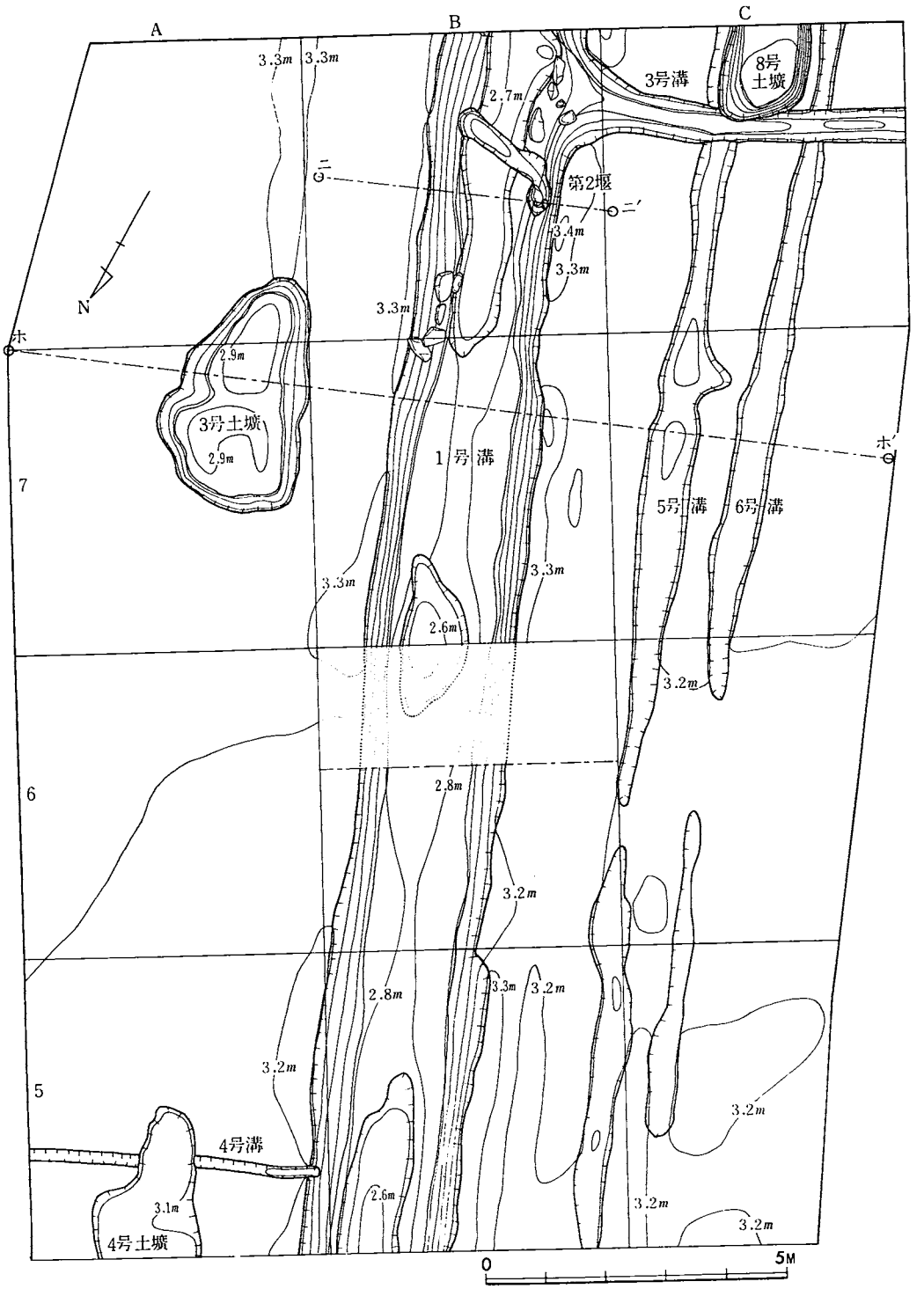
3号土壙は1号溝の東側1.4m、A—7、8区の境にある。不整形であるが楕円形に近く、幅2.4m、長さ3.95m、深さ0.4mを測る。

4号土壙は1号溝の東側1.6m、A—4、5区の境にある。不整形で、最大幅1.75m、長さ5.85m、深さ0.15mを測る。

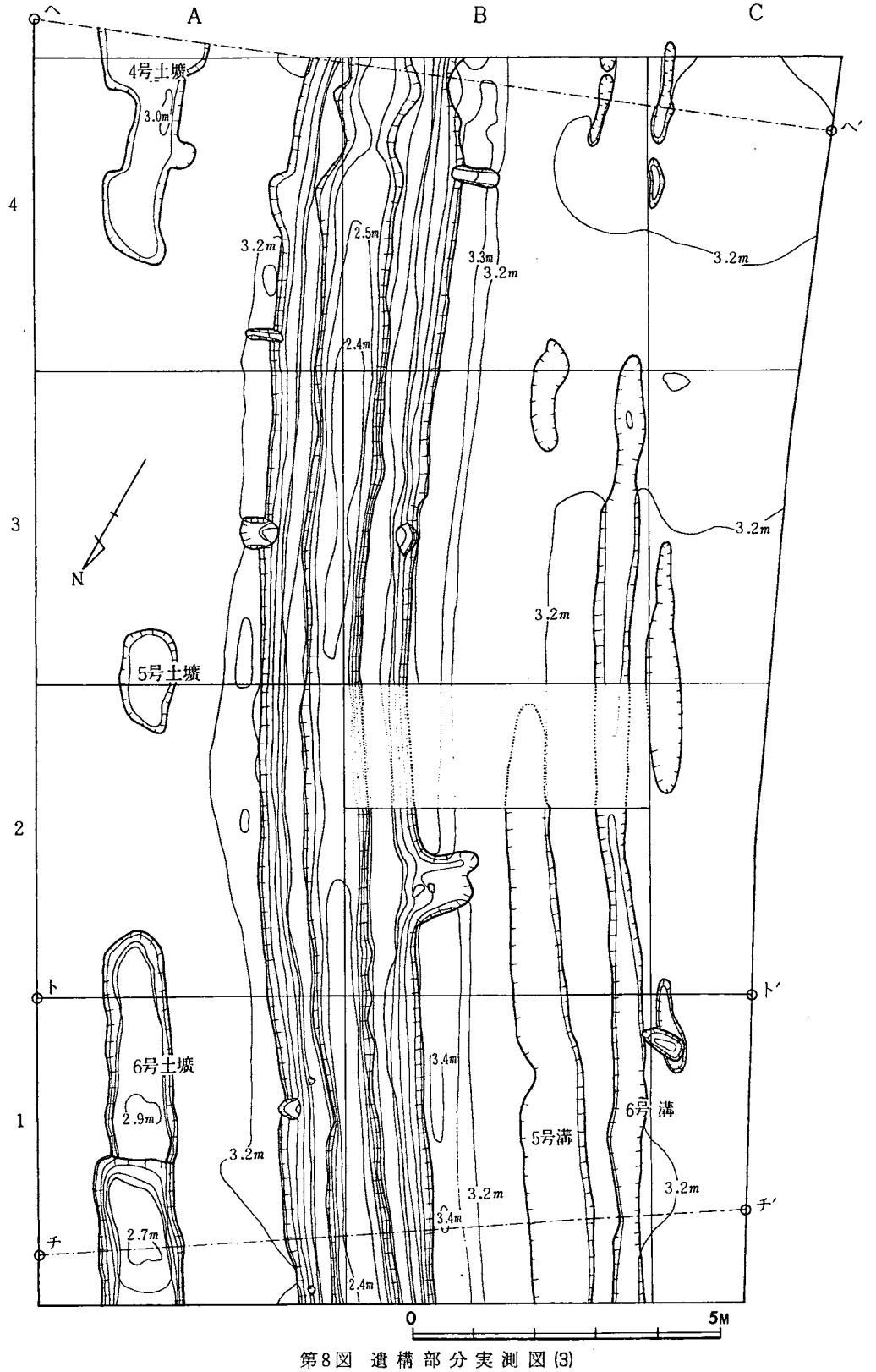
5号土壙は1号溝の東側1.35m、A—2、3区の境にある。幅0.9m、長さ1.65m、深さ0.1



第6図　遺構部分実測図(1)



第7図　遺構部分実測図(2)



第8図 遺構部分実測図(3)

mを測り、楕円形に近い。

6号土壙は1号溝の東側1.6m、A－1、2区にあるが、さらに調査区外の北側へ続いている。この土壙は途中で幅が広くなり、段がついているので、二つの土壙が切り合っている可能性もある。南側は幅1.15m、長さ2.75m、深さ0.25mを測る長楕円形で、それに続く北側は幅1.4m、長さ2.45m以上、深さ0.45mを測る長方形である。

7号土壙は1号溝の西側2.35m、C、D－12区にあるが、さらに南側の調査区外へ続いている。この土壙も途中で切り合っているものとみられる。南側は幅1.35m、長さ3.1m以上、深さ0.3mを測り、細長く、それに続いた北側はややずれて、幅1.85m、長さ1.95m、深さ0.3mを測り、台形に近い。

8号土壙は1号溝の西側2.15m、C－8、9区の境にある。幅1.4m、長さ4.25m、深さ0.55mを測り、長方形に近い土壙である。

これらの土壙は遺物等から江戸時代に掘られたものとみられる。

(3) 遺　物

ここでは溝および土壙から出土した主要な遺物と、I層から出土した主要な遺物について述べる。

第9図1～4は1号溝内から出土した木製品である。

1は桶の底かとみられるもので、復原すると直径約53cmになり、現存部は厚さ2.2cm、幅12cmである。接合面には2カ所に孔があけられ、孔の直径は0.4cmと0.5cmを測り、いずれも竹釘がささっている。杉板製である。C－12区の第1堰の抉り込み部から出土した。

2は周辺が磨滅しており半分に割れているが、小形の桶の底かとみられる。杉板製で、もとは一枚の板で円形を成していたとみられ、厚さ0.6cmで、復原直径は10.4cmを測る。B－4区の1号溝上部から出土した。

3は割れた半分以下の破片であるが、やはり桶の底かと推定され、厚さ0.4cmで、復原直径9.5cmを測る。杉板製で、両面とも漆が塗られている。B－8区の1号溝下部から出土した。

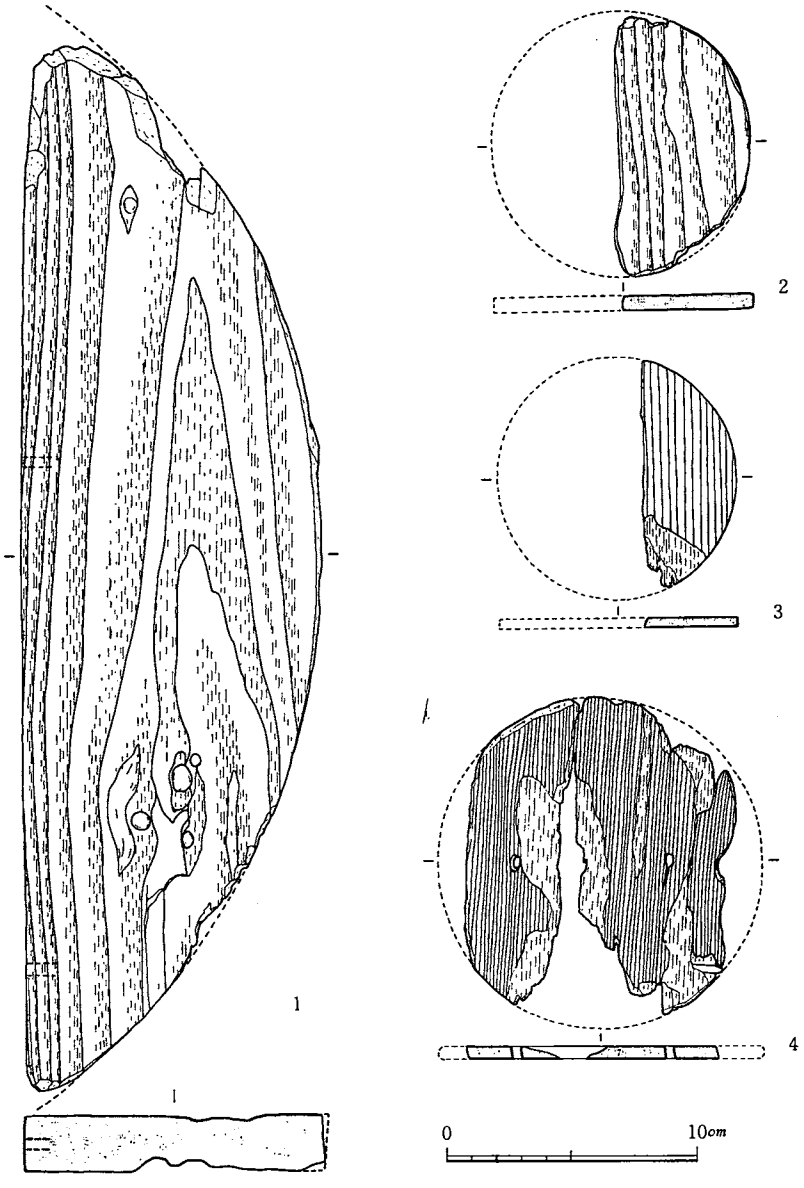
4は欠損が激しいが、厚さ0.5cm、復原直径13.0cmを測る。杉の1枚板で作られており、二カ所に直径0.3cmと0.4cmの小孔があけられている。また一カ所には外側から直径0.3cm、現存長2.3cmの竹釘がささっている。図示した面にのみ漆が塗られている。桶の底あるいは孔があいていることから蓋ともみられる。B－3区の1号溝下部から出土した。

このほか1号溝からは榎（？）の杭や、竹、シダなどの植物遺体も出土した。

第10図～第13図の1～36は1号溝内から出土した近世陶磁器である。

1は古伊万里染付徳利で波佐見窯のものであり、肩部付近の破片である。胎土は灰色で、紺黒色の染付がみられ、透明の釉薬が外面にのみかけられている。江戸中期の作である、A－4区から出土した。

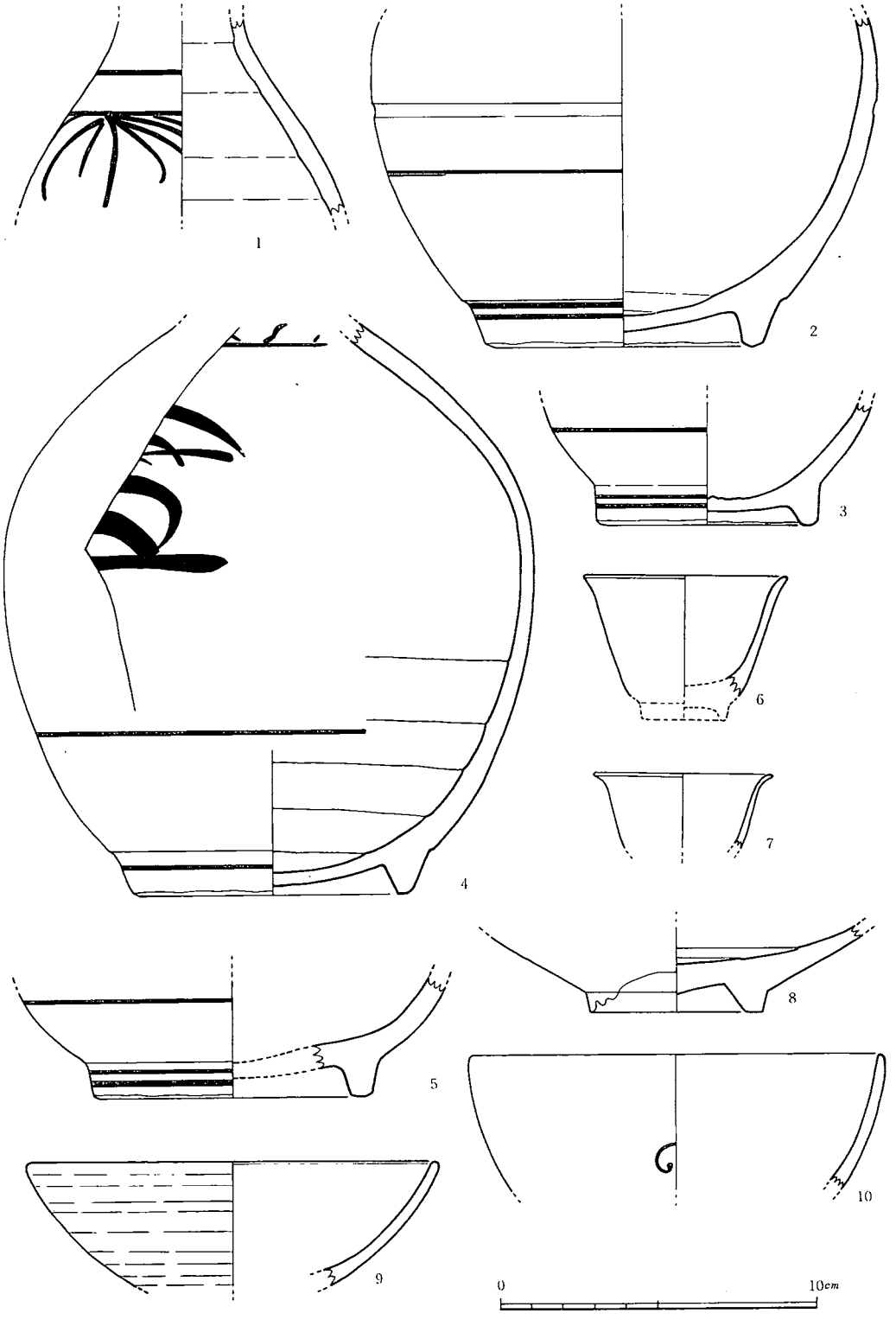
2は古伊万里で大外山波佐見窯の染付徳利で、波佐見徳利とよばれ、三ツ股の土が使われて



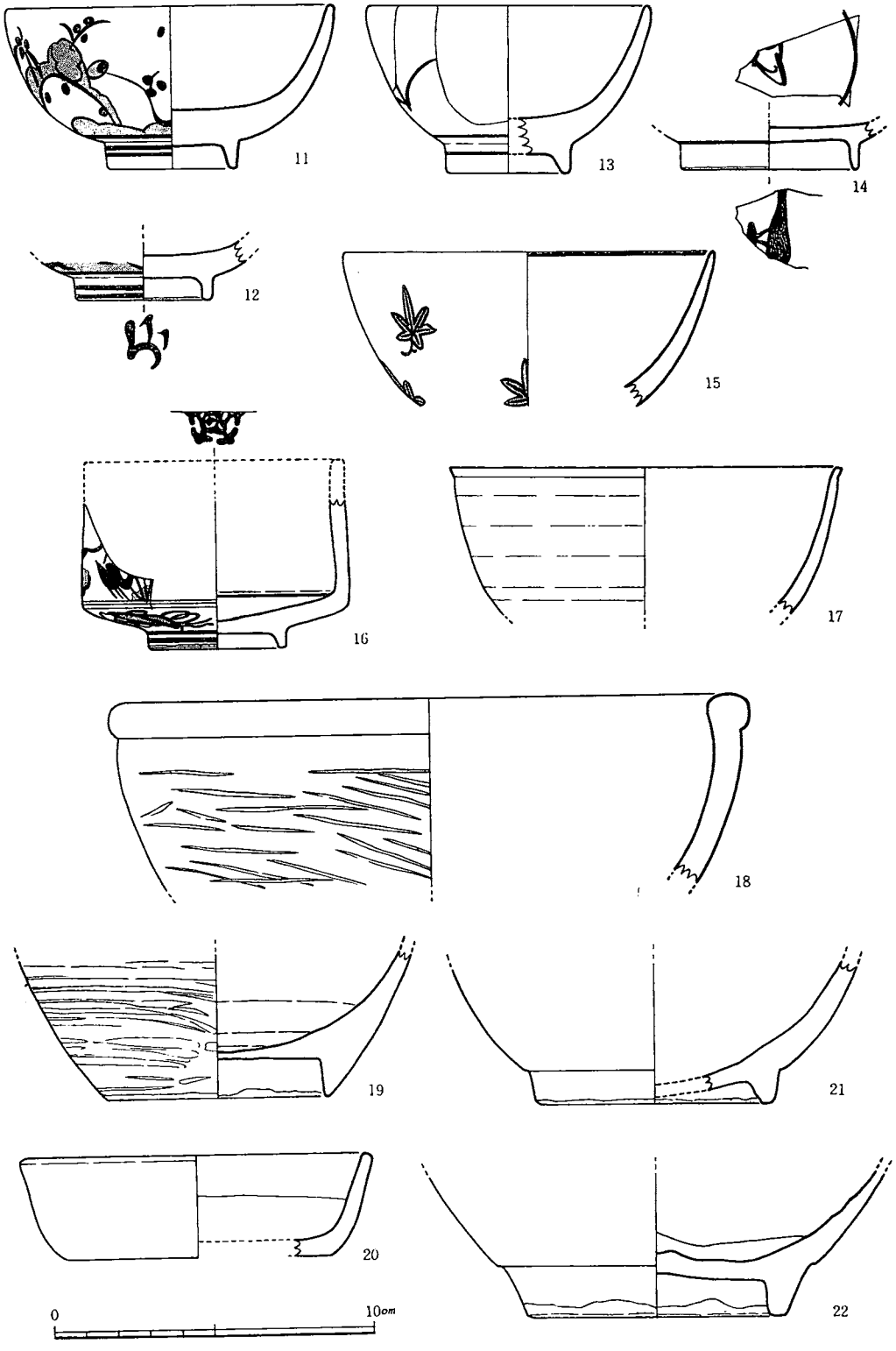
第9図　1号溝出土木製品実測図

いるため三ツ股徳利ともよばれるものである。体部以下の破片で、体部は丸く、高台がつく。胎土は白色であるが、やや灰色を帯びており、内面の底部付近には渦巻状の整形痕がみられる。体部中程には凹線状に若干くぼみがあり、その下方と高台部には淡青色の染付がみられる。釉薬は幾分青みを帯びた透明で外面全体にかけられるが、高台の畳付の部分のみはみられない。江戸中期の作である。B－9区から出土した。

3は2と同じく古伊万里波佐見徳利で、高台部付近の破片である。2より幾分小さく、胎土は白色で、染付は紺色をしている。釉薬はわずかに青みを帯びた透明である。江戸中期ないし



第10図　1号溝出土近世陶磁器実測図(1)



第11図　1号溝出土近世陶磁器実測図(2)

後期頃の作である。C—12区から出土した。

4も古伊万里波佐見徳利である。肩部以下の破片で、胴部最大径は16.4cmを測る。胎土は白色で、内面の底部付近には渦巻状の整形痕が残っている。外面には紺色に近い青色の笹絵の染付がみられ、笹絵徳利ともいうことができる。また肩部と胴部下方および高台部には一条ずつの横線がひかれている。外面全体にやや青みを帯びた透明の釉薬がかけられているが、高台の畳付のみは釉薬がみられない。江戸後期の作である。B—5区から出土した。

5も古伊万里波佐見徳利で高台付近の破片である。胎土は白色で、外面の胴部下方に一条、高台部に二条の横線の染付がある。染付は薄藍色で、淡青色を帯びた透明の釉薬がかけられている。江戸後期の作とみられる。A—3区から出土した。

6は古伊万里酒盃である。高台部はないが、口縁は端部近くで幾分外反し、口径6.4mを測り、高さは4.5cm程度と推定される。胎土は白色で、透明の釉薬がかけられており、細かい嵌入がみられる。江戸前期の作で、17世紀中ばから後半にかけての頃のものとみられる。B—4区から出土した。

7は古伊万里白磁酒盃の口縁部付近の破片である。口径5.6cmを測り、薄手で口縁部は外反し、端部は丸くなって終わり、美しい形をしている。胎土は白色、釉薬は透明で美しく光っている。江戸前期の作である。B—9区から出土した。

8は古伊万里青白磁の鉢で、波佐見窯で焼かれたものである。高台部付近の破片で、削り出し高台である。胎土は白色で、薄いみず色の釉薬が内外面にかけられているが、高台部にはかけられず、また内面の見込み部は蛇の目剝ぎされている。江戸中期の作がある。B—5区から出土した。

9は古伊万里白磁碗の破片で無文とみられる。窯は波佐見窯で、口径13.2cmを測る。胎土は波佐見三ツ股陶石が使われ、緑灰色を呈している。外はへら削りの成形で、薄作りの精作である。内外面とも透明の釉薬がかけられている。波佐見焼の江戸前期のものである。

10は古伊万里染付碗の口縁部付近の破片である。胎土は白色で、体部は半球形に近く、初期伊万里かとみられる。口縁部は直口し、口径は13.2cmを測る。体部に紺色の染付があり、内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸前期の作である。B—5区から出土した。

11は古伊万里の波佐見窯で焼かれた草花文染付のいわゆるくらわんか手茶碗である。口径10.3cm、高さ5.0cmを測り、肩手で浅く、口縁部は直口ぎみである。胎土は白色で、外面に紺色で濃淡をつけた染付がみられる。内外ともわずかに青みを帯びた透明の釉薬がかけられているが、高台部の畳付のみはみられない。高台は削り込んでおらず高台部中央に染付窯印があり、欠損しているが「人」と書いてあったものと推定される。江戸中期の作である。A—3区から出土した。

12は高台部付近の破片であるが、古伊万里の茶碗である。胎土は白色で、紺色の染付があり、高台部中央にも「山」と書かれた染付の窯印がみられる。釉薬は透明であるがわずかに青

みを帯びており、内外ともかけられ、高台部の畳付のみは釉薬がみられず、離れ砂が付着している。江戸中期の作である。B－9区から出土した。

13は古伊万里染付くらわんか手茶碗である。大外山の波佐見窯周辺で焼かれたもので、口径9.0cm、高さ5.2cmを測る。厚手で、口縁部は直口する。胎土は灰色を帯びた白色で、外面に紺色の線がきの染付がみられる。釉薬は透明であるがやや青みを帯びている。江戸後期の作である。B－6区から出土した。

14は古伊万里染付鉢とみられる高台部の破片である。高台は薄いが高い。胎土は白色で、見込み部に紺色の染付があり、高台部中央にも染付がある。全面にやや青みを帯びた透明の釉薬がかけられている。江戸中期をやや下がった頃の作である。B－6区から出土した。

15は古伊万里染付かえで文碗である。口径は11.8cmを計る。口縁部は直口ぎみに立ちあがり口唇部内側には焦茶色の口紅がみられる。外面に紺色のかえでの葉の染付文を配している。釉薬は透明で全面にかけられている。江戸後期の作である。B—10区から出土した。

16は古伊万里染付草花文向付である。破片であるが復原すると口径8.2cm、高さ5.8cm程度と推定される。器形は高台は小さく低く、高台部から横に開き、胴部下方で折れて口縁部までまっすぐ立ちあがっている。胎土は白色で、外面に紺色で濃淡をつけた染付の草花文が描かれ、見込みにも一条の線と中央に宝珠のような突起のついた五角形の染付文がみられる。釉薬はやや青みを帯びた透明である。江戸中期の作である。C—11区から出土した。

17は唐津茶碗の破片である。口径12.3cmを測り、口縁部はしだいに薄くなり、端部近くで小さく外折している。胎土は肌色で、外面にはへら調整の痕がみられ、内外とも乳白色を帯びた透明の釉薬がかけられている。江戸前期の作である。B－4区から出土した。

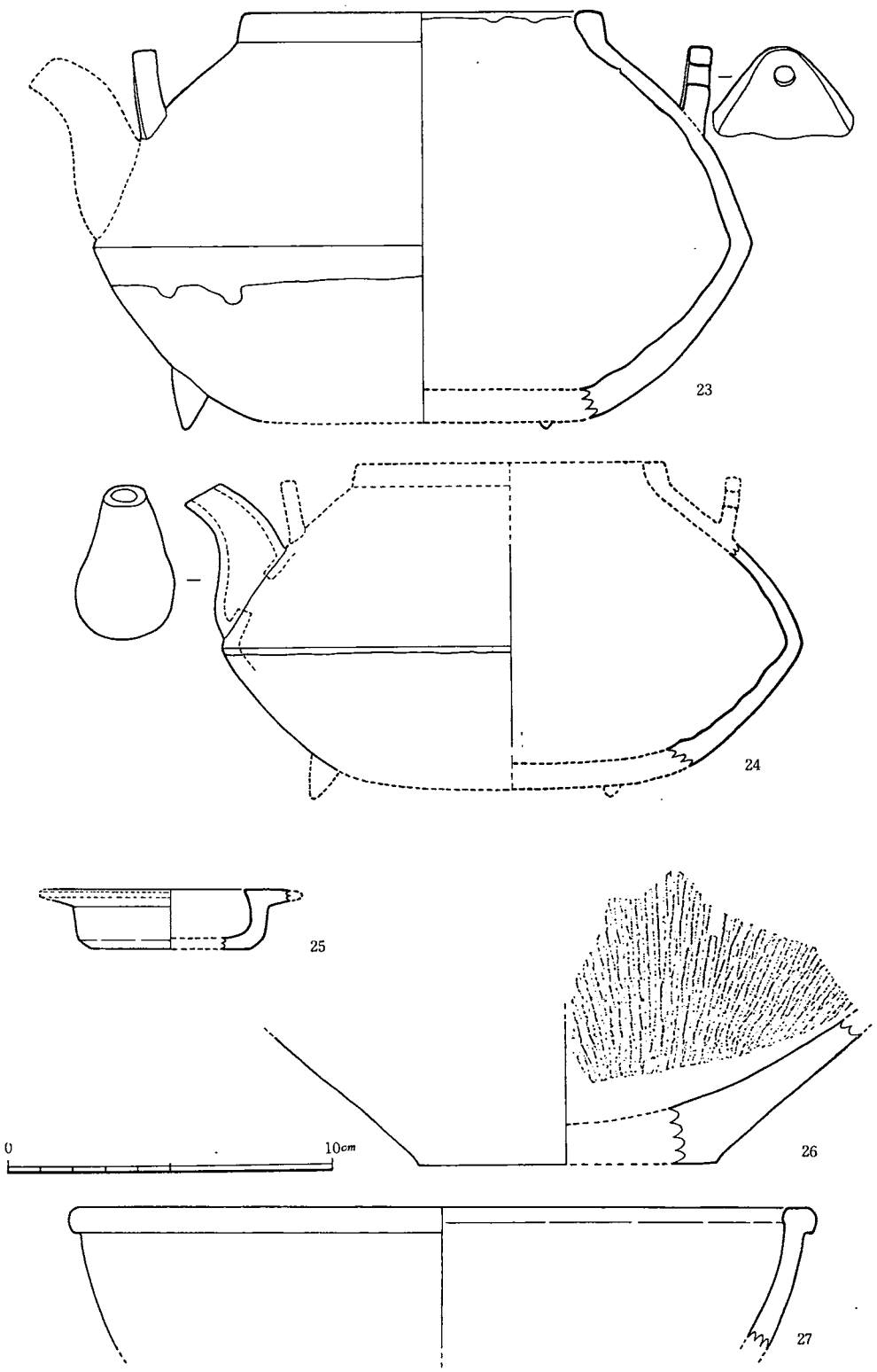
18は唐津の片口の破片で、口縁部は玉縁になっている。口径は20.2cmを測る。胎土は灰褐色で、緑を帯びた茶色の釉薬がかけられ外面には白いすじがみられる。なお口唇部のみは釉薬がかかっていない。江戸前期～中期の作である。A－3区から出土した。

19は刷毛目化粧瓶（徳利）で、平戸藩の木原系窯で焼かれたものである。底部は碁筒（ごけ）底である。胎土は肌色で、灰色と白色の刷毛目がつけられ、黄色を帯びた透明の釉薬が塗られている。江戸中期あるいはややのぼる時期の作である。A－3区から出土した。

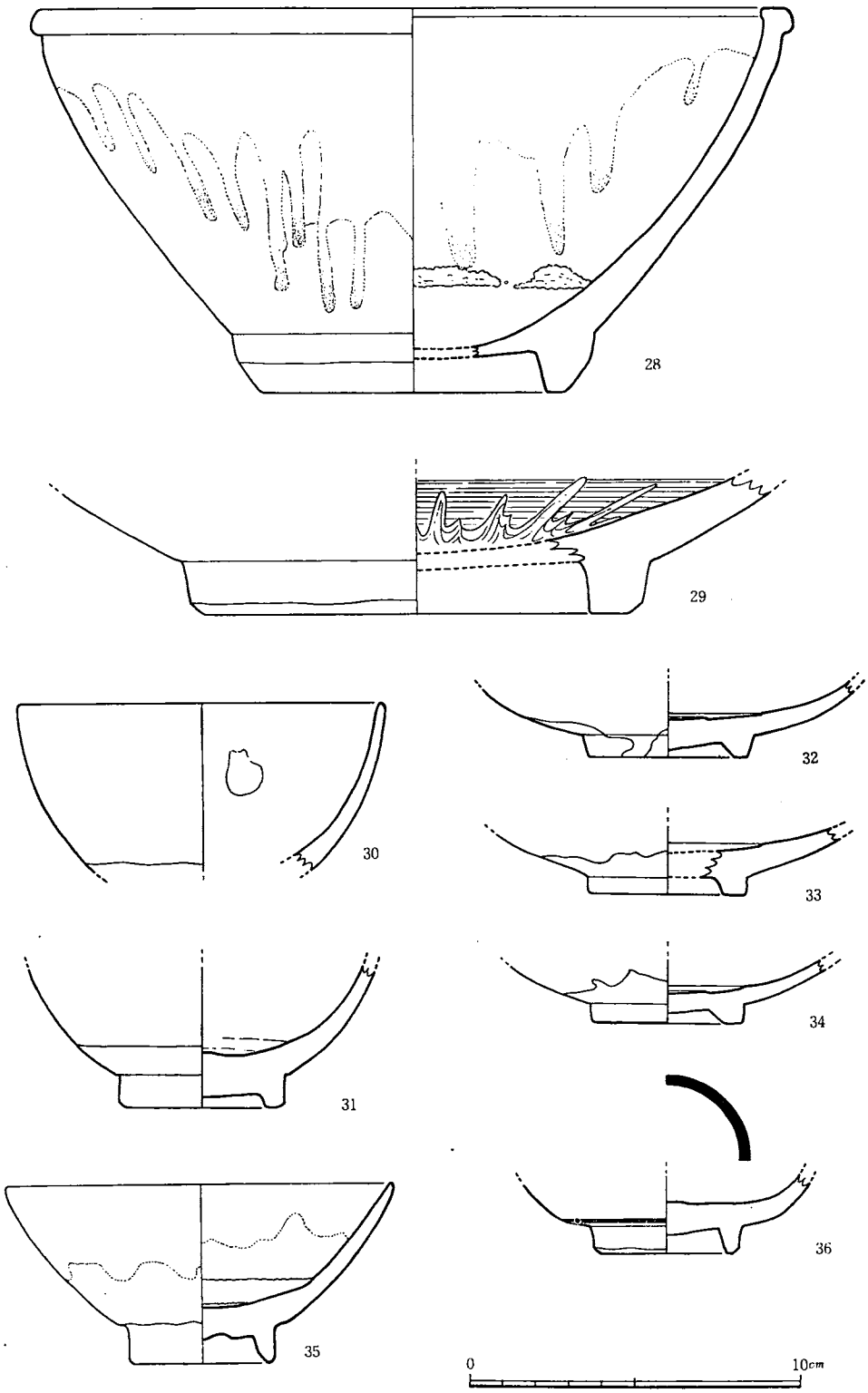
20は香立の破片で、唐津系の黒牟田窯のものと思われる。口径11.0cmを測り、底部には高台がつくものとみられる。胎土は肌色で、外面と内面の上半部には茶肌色透明の釉薬がかけられ、細かい嵌入がみられる。B－4区とB－9区から同一個体が出土した。

21は黒牟田白化粧瓶の高台部付近の破片である。胎土は黒色を呈し、外面にのみ緑灰白色の釉薬がかけられている。高台部畳付には離れ砂が付着している。江戸中期の作である。B－5区から出土した。

22も21と同じく黒牟田白化粧瓶である。胎土は黒褐色で、緑灰白色の釉薬がかけられ、内部の底にも釉薬が流れ落ちている。高台部畳付には離れ砂がついている。江戸中期の作である。



第12図　1号溝出土近世陶磁器実測図(3)



第13図　1号溝出土近世陶磁器実測図(4)

B－6から出土した。

23は黒牟田の足付土瓶である。口径11.2cm、高さ12.7cmを測り、足は3カ所についている。胎土は肌色で胴部上半におうど色の釉薬がかけられている。江戸中期～後期の作とみられる。なお、胴部下半には使用によるすすが付着している。A－3区から出土した。

24も黒牟田土瓶であるが23より小型である。器面は風化しているが、23は胎土は同じで、釉茶も同じであったと推定される。江戸中期～後期の作で、すすが付着している。B－5区から出土した。

25は黒牟田灯明皿の破片である。胎土は褐色で、内面にのみ黒色の釉薬がかけてある。江戸中期～後期の作である。C－12区から出土した。

26は擂り鉢の底部で黒牟田窯のものと思われるが、県内の窯で焼いた可能性もある。胎土は茶褐色で、内面の目は密である。B－4区から出土した。

27は片口の破片で唐津系で黒牟田窯で焼かれたとみられる。口径は23.2cmを測り玉縁である。胎土は茶褐色で、内外とも暗茶色の釉薬がかかっている。B－6区から出土した。

28も27と同じく黒牟田焼の片口とみられ、口径23.2cm、高さ11.4cmを測る。胎土は赤褐色で、暗焦茶色ないし茶白色の釉薬がかかっている。内面には重ね焼きの目あとがみられる。C－14区から出土した。

29は庭木窯の白化粧櫛描色釉流し大鉢の高台部付近の破片である。胎土は赤褐色で、内面の釉ははがれている。江戸後期の作である。B－4区から出土した。

30は嬉野焼で内野山窯の碗である。口径は11.2cmを測り、体部は半球形である。胎土は白色で内面は灰釉がかけられ白色で、外面は銅釉がかけられ深緑色を呈している。内面の一部に銅釉が付着している。江戸中期あるいはやや下がった頃の作である。C－11区から出土した。

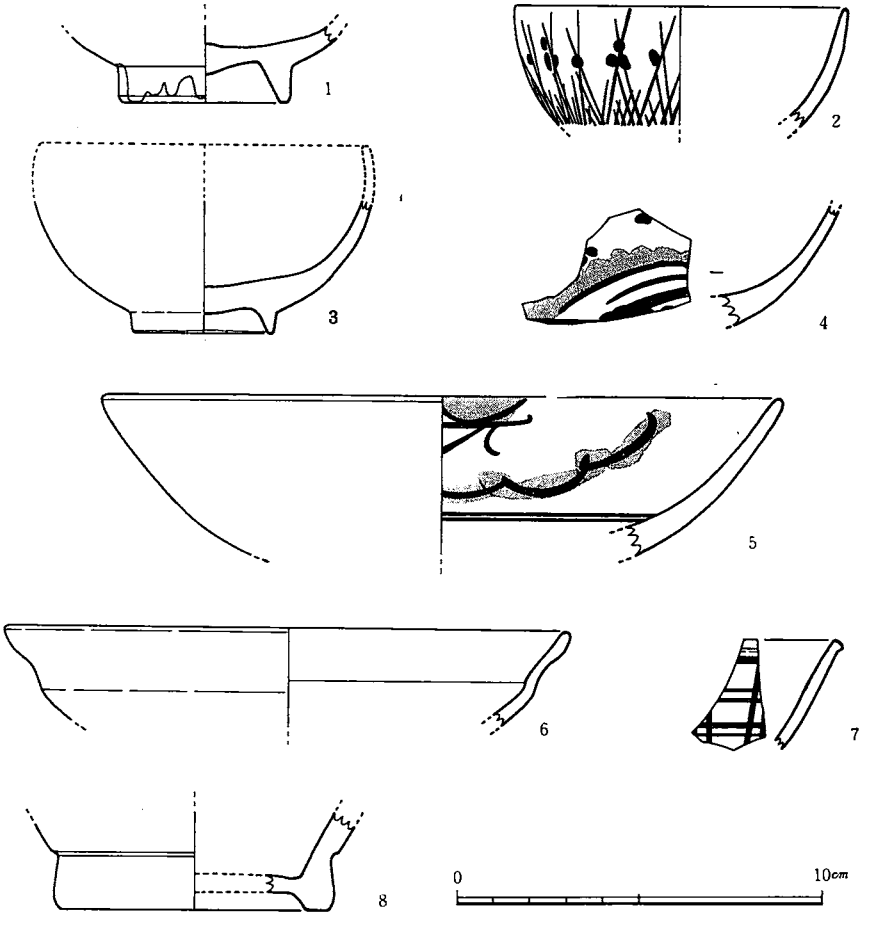
31も30と同じく嬉野焼内野山窯の碗で、釉薬も同じである。高台部は削り出され、釉がかかっていない。江戸中期ないしやや下がった頃のものである。B－4区から出土した。

32は嬉野焼で内野山窯で焼かれた皿の高台部付近の破片である。胎土は灰色で、内外とも鉄釉がかけられ茶褐色ないし黒褐色を呈している。見込み部は蛇の目剝ぎされている。高台は削り出しで、釉薬がかかっていない。B－8区から出土した。

33も嬉野焼で内野山窯の皿の高台部破片である。胎土は白色で、内面は鉄釉がかけられ茶褐色を呈し、外面は灰釉がかけられ白色を呈している。見込み部には蛇の目剝ぎがみられる。B－8区から出土した。

34も32、33と同じく嬉野焼内野山窯の皿の高台部付近の破片である。内面は銅釉がかけられ青緑色を呈し、外面は灰釉がかけられ黄緑色を呈している。見込み部には蛇の目剝ぎがみられる。B－4区から出土した。

35は上野系の茶碗で、高田焼と思われる。口径11.8cm、高さ5.4cmを測る。高台は割合高く高台部中央は右巻きの渦巻がみられる。胎土は粗く灰色を呈する。体部は内外とも鉄釉の上に



第14図　2，5，6号溝および7号土壙出土近世陶磁器実測図

灰釉を重ねてかけており、暗茶色あるいは緑灰色を呈する。見込み部は蛇の目剝ぎがみられる。江戸中期の作である。B--5区から出土した。

36は網田焼かと思われる碗の高台部付近の破片である。胎土は白色で、内外とも紺色の一条の線の染付がみられる。釉薬は透明で全面にかけられているが高台の畳付のみはみられない。全体にやや粗い造りである。江戸後期の作とみられる。A—3区から出土した。

第14図1は2号溝内のA—12区から出土した磁器である。古伊万里の波佐見青磁碗の高台部付近の破片で、胎土は白色、高台は削り出している。釉薬は薄青緑色を呈し、内外ともかけられているが、高台部は外側にかかっているのみである。江戸中期の作である。

第14図2～6は5号溝内から出土した磁器である。

2は古伊万里染付草花文茶碗の破片である。口縁部は立ち上がり、口径9.2cmを測る。胎土は白色、染付は紺色で、内外面ともやや灰色をおびた透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。C—7区から出土した。

3は古伊万里無文碗で、波佐見窯で焼かれたものである。口縁部を欠損しているが、口径9cm、高さ5cm程度と推定される。胎土は白色で、釉薬は薄緑をおびており、内外ともかけられているが、畳付部のみはみられない。江戸前期〜中期の作である。C—7区から出土した。

4は古伊万里染付草花文茶碗の破片で、波佐見窯で焼かれたものである。胎土は白色、染付は紺色で、内外ともやや青みをおびた透明の釉薬がかけられている。くらわんか茶碗で、江戸中期の作である。B—1区から出土した。

5は古伊万里染付草花文鉢の破片である。口径は18.8cmを測る。胎土は白色で、内面に紺色の染付がみられ、釉薬は透明で内外ともかけられている。絵がくずれているところから江戸後期の作とみられる。C—7区から出土した。

6は唐津系の金石原で焼かれたものかとみられる鉢の口縁部で、口縁部近くに段をもち、口径15.6cmを測る。胎土は白色で、釉薬も白っぽい。部分的に細かい嵌入がみられ、気泡も入っている。江戸中期の作である。C—9区から出土した。

第14図7は6号溝のC—7区から出土した。古伊万里染付縞文（格子文）茶碗の口縁部破片である。胎土は白色で、外面に暗緑色の染付がみられ、内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。なお、6号溝からは擂り鉢の破片も出土している。

第14図8はD—12区の7号土壙から出土したもので、徳利の底部とみられ、胎土は灰白色を呈し、釉薬はかけられていない。窯、時期とも不明である。

第15図1〜8はI層から出土した近世陶磁器である。

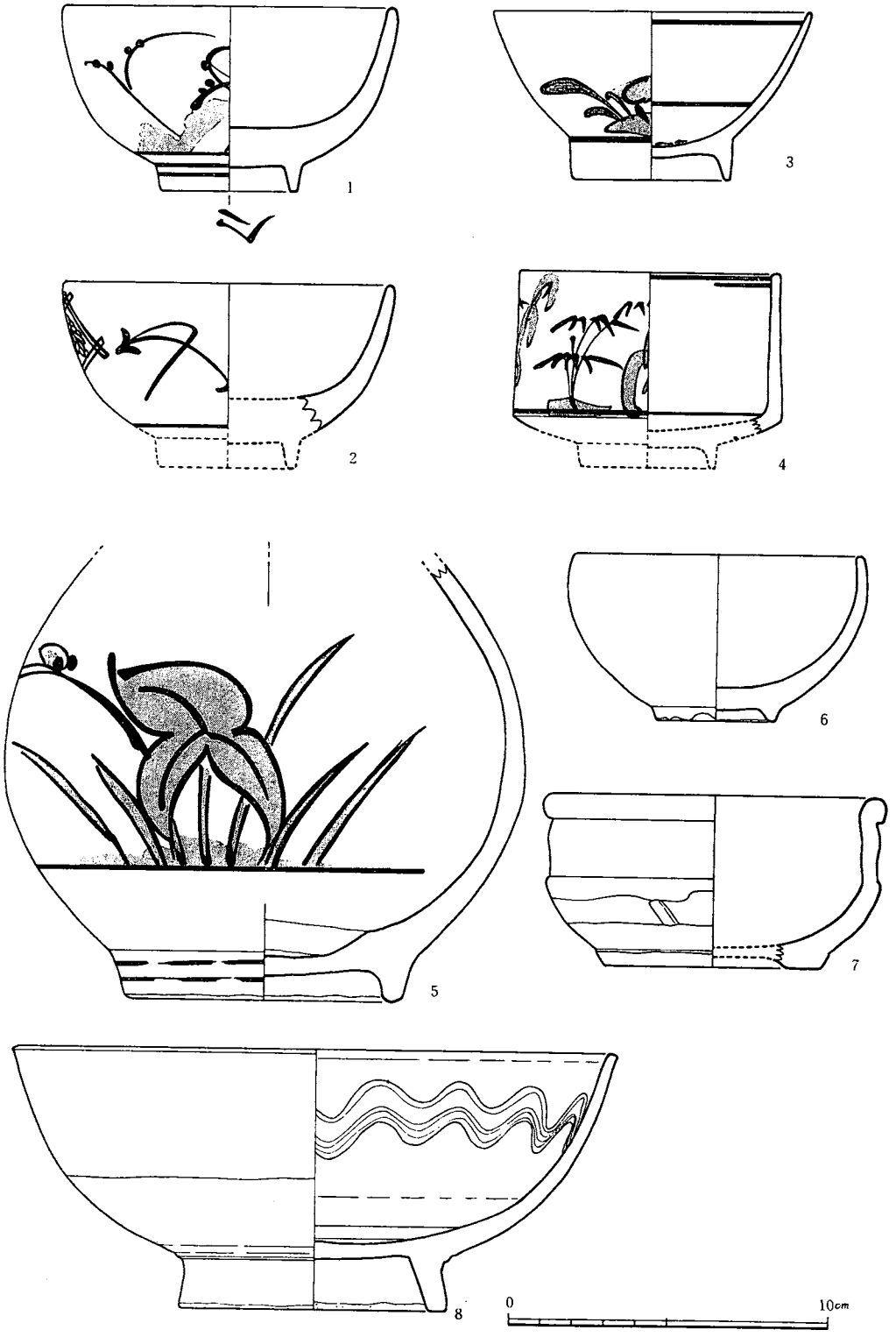
1は古伊万里染付草花文茶碗で、波佐見窯のくらわんか茶碗である。厚手で、口径10.5cm、高さ5.7cmを測る。胎土は白色、染付は紺色で、高台部内側には窯印もみられる。釉薬はいくぶん青みをおびた透明で、内外面ともかけられているが、畳付のみはみられない。江戸中期の作である。C—10区から出土した。

2は古伊万里染付松葉文茶碗の破片で、やはり波佐見窯のものである。厚手で、口径は10.4cmを測る。胎土は白色で、染付は薄紺色、釉薬はいくぶん青みをおびた透明を呈する。江戸中期の作である。C—10区から出土した。

3は古伊万里染付草花文広東茶碗（高高台碗）である。やや薄手で、高台は垂直に立ち、体部も直線的にのびており、口径10.0cm、高さ5.2cmを測る。胎土は白色で、染付は紺色で、見込中央部にも染付がみられる。釉薬は青みをおびた透明で、畳付をのぞいて内外ともかかっている。江戸中期をやや下がった明和〜安永年間頃の作である。A—5区から出土した。

4は古伊万里染付岩竹文向付である。底部を欠くが、口縁部は垂直に立ち、口径8.2cmを測り、高さは5.9cm程度と推定される。胎土は白色で、紺色の染付が施され、青っぽい透明の釉薬が内外面ともかけられている。江戸中期の作である。A—5区から出土した。

5は古伊万里染付あやめ文徳利である。口縁部を欠き、胴部の最大径は16.3cmを測る。胎土は白色で、紺色の染付がみられる。釉薬は透明で、外面のほぼ全体にかけられているが、畳付



第15図　Ⅰ層出土近世陶磁器実測図

のみはヘラ削りされ、かかっていない。江戸中期の作である。C－8区から出土した。

6は古伊万里白磁無文碗で、波佐見窯のものである。器形は半球形に近い精作で、口径9.0㎝、高さ5.1㎝を測る。胎土は波佐見三ツ股陶石が使われ白色を呈し、畳付を除く全面に薄緑色をおびた釉薬がかけられている。江戸前期の作である。A－7区から出土した。

7は黒牟田焼の香立かと思われ、口縁部は玉縁になり、口径10.8㎝、高さ5.3㎝を測る。胴部下方から高台部にかけてはヘラ削りされている。胎土は赤褐色を呈し、口縁部から胴部中程にかけては暗茶色の釉薬がかかっている。A－5区から出土した。

8は黒牟田刷毛目蛇目釉中鉢である。口径19.0㎝、高さ8.1㎝を測る。胎土は茶黒色で、釉薬は内面から外面の上半部にかけられ、黒緑色ないし黄灰色を呈している。江戸後期の作である。C－18区から出土した。

第Ⅲ章　調査のまとめ

川田小筑遺跡は球磨川の北側、八代平野のやや山寄りのところにある。

川田小筑遺跡の下部の砂利層から縄文時代晩期の土器片が出土したので、少なくとも縄文時代晩期まではこの付近は海または海岸近くであったとみることができる。

その後、おそらく弥生時代頃から沖積層の堆積が始まったとみられ、川田小筑遺跡周辺では平安時代頃までにすでに現水田面近くまで堆積したようである。

中世になると球磨川に杭瀬（くいぜ）という大仕掛けな用水堰（遙拝堰（ようはいぜき））がつくられ、この堰から水田に水を引くために、宮地側（北側）に太田の井手、高田側（南側）に奈良木井手、豊原（ぶいはら）・高下（こうげ）井手が開かれた。この水利灌漑事業は全国的にも注目される土木工事である。

加藤清正は慶長五年（1600年）以来、小西氏のあとをうけて八代をも領し、杭瀬を大形の自然石や割り石の大石堰に改造した。これは太田の井手の通水能力を増大させるための大工事で、球磨川口南北低地の米の画期的増産を企画したものである。

しかしこの頃、川田小筑遺跡の周辺までは灌漑用水は及んでいなかったので、小規模な湧水と天水に瀬らざるを得なかったとみられる。川田小筑遺跡の中央を貫いている幅約2.5m、深さ約0.5mの水路も、このような事情で、近くの竜峰山からの湧水を集めて灌漑に利用するため掘られたものとみられ、それに伴って貯水用の土壙も掘られたようである。この水路の掘られた時期ははっきりしないが、江戸時代に入ってからであろうか。その後、この水路は機能を増すため、山から土砂を運んで土手が築かれ、部分的には補強のため石垣も積まれた。また板で支切る程度の小さな堰と、水田に水を引き入れる支溝も掘られたとみることができる。

加藤家は干拓によって新地をふやし、細川家は開墾に力をそそいだが、細川斉茲（なりしげ）は、再び海の開拓に方針をかえて有明・八代の両海面にばく大な新地をつくった。八代郡だけでも、百町開（文化二年―1805年、鏡町）、四百町（文政二年―1819年、千丁町）、七百町（文政三年―1820年、鏡町）の三大新地が干拓された。また七百町新地の用水路として麓川（新川）が掘られた。

麓川用水路は川田小筑遺跡の東方600mを通っており、氷川以南の一部も灌漑している。川田小筑遺跡で発見された水路は出土遺物から江戸後期に埋められたとみることができる。おそらく麓川用水路の完成によりその機能をなくしたものとみられる。従って、それが埋められた時期は麓川用水路が掘られた文政五年（1822年）頃と推定される。

土塁を崩して水路を埋める時、さらに外側へも土塁を崩してならして畑としている。この地域では畑が少ないため、畑地化に際しても大変神経を使ったようで、水路の中心線はそのまま畦の線として残し、各々の畑も細かく区切って分配している。

その後、このような状況が近年まで続き、数年前の圃場整備に際して、帯状の畑の両側に水路が掘られて、現状のようになったものとみることができる。

以上のように川田小筑遺跡では八代平野の農業史の一端を知ることができた。また、近世の交易と食生活の一面を知るという上で、陶磁器の出土も重要な成果であった。

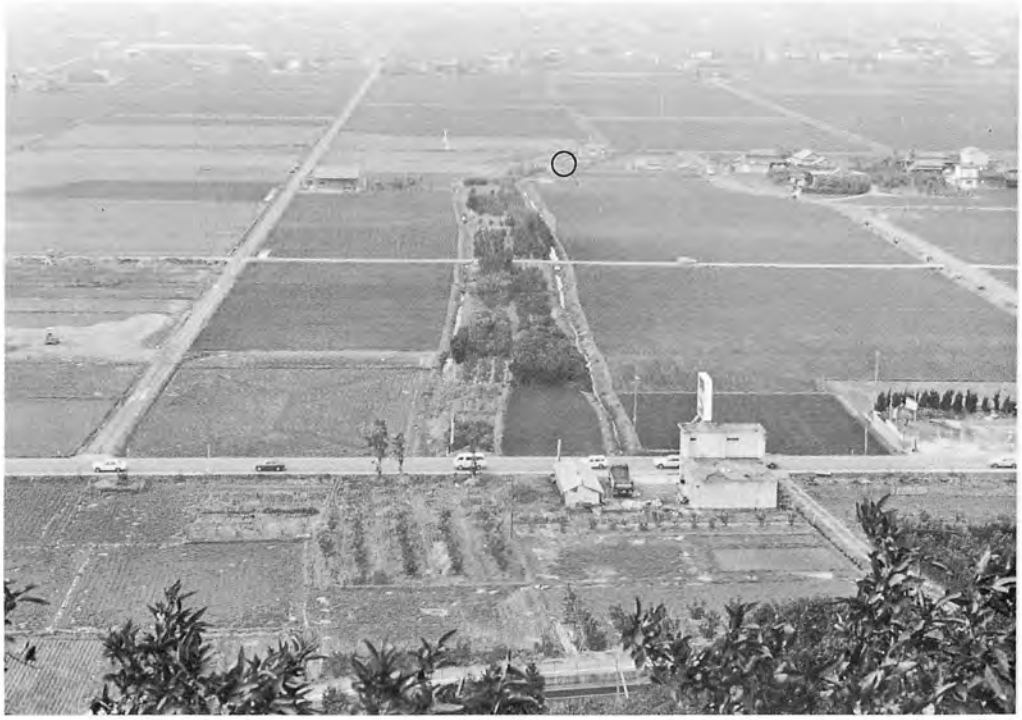
参考文献

○松本雅明・乙益重隆・花岡興輝ほか、(1961年)「竜峰村史」

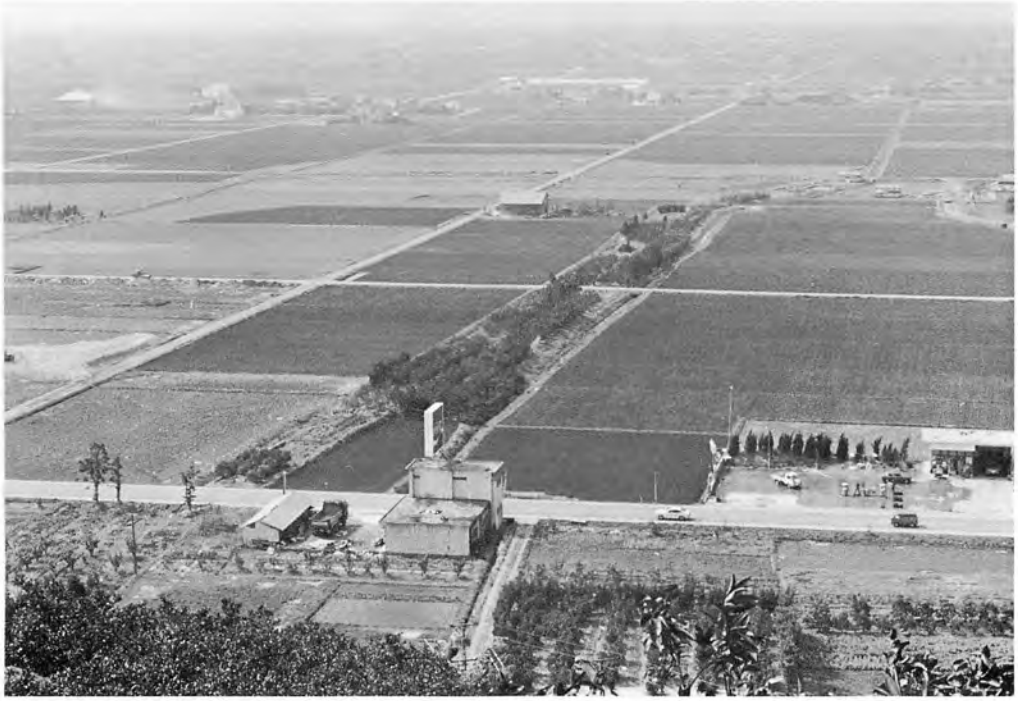
○蓑田田鶴男、(1972年)「八代市史」第三巻

川田小筑遺跡

図版



1．川田小筑遺跡遠景（南東から）



2．川田小筑遺跡遠景（東から）

1．調査開始直後の遺跡全景（南東から）

2．調査開始直後の遺跡全景（北西から）

発見された遺構全景（南東から）

1．調査中の遺跡全景（北西から）

2．1号溝と5，6号溝（北西から）

1．1号溝と石垣（北西から）

2．横からみた1号溝の石垣

1．1号溝の第1堰（北から）

2．第1堰の木製品出土状態（北から）

1．1号溝の第2堰（北から）

2．第2堰と3号溝（東から）

1．2号溝と1号土壙（南から）

2．1号土壙（北から）

1．2号土壙（北から）

2．3号土壙（北から）

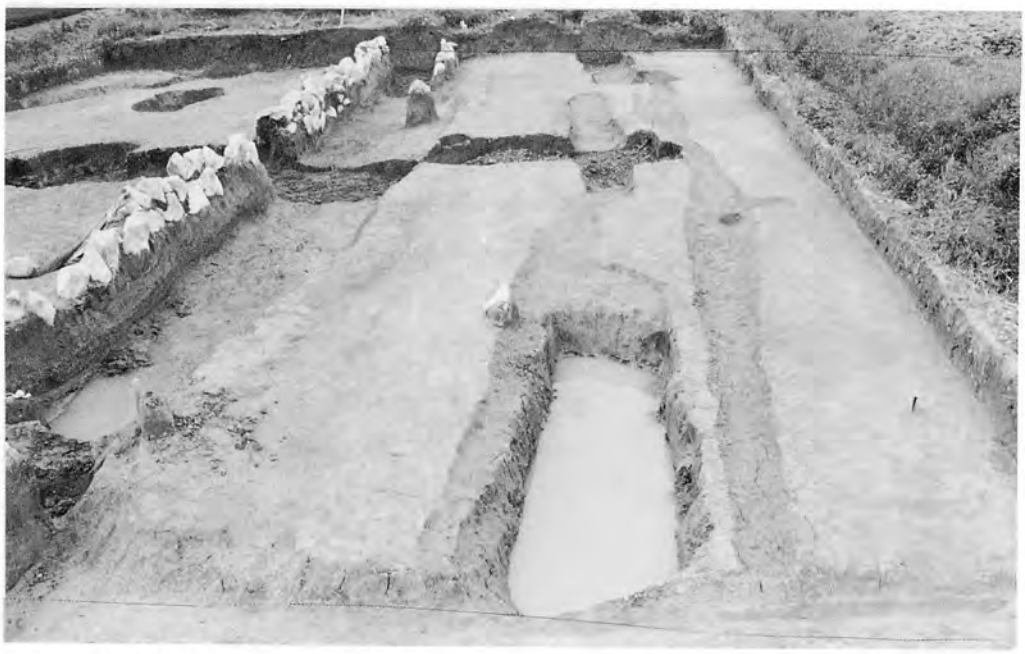
1．4号溝と4号土壙（西から）

2．4号土壙（北から）

1．5号土壙（北から）

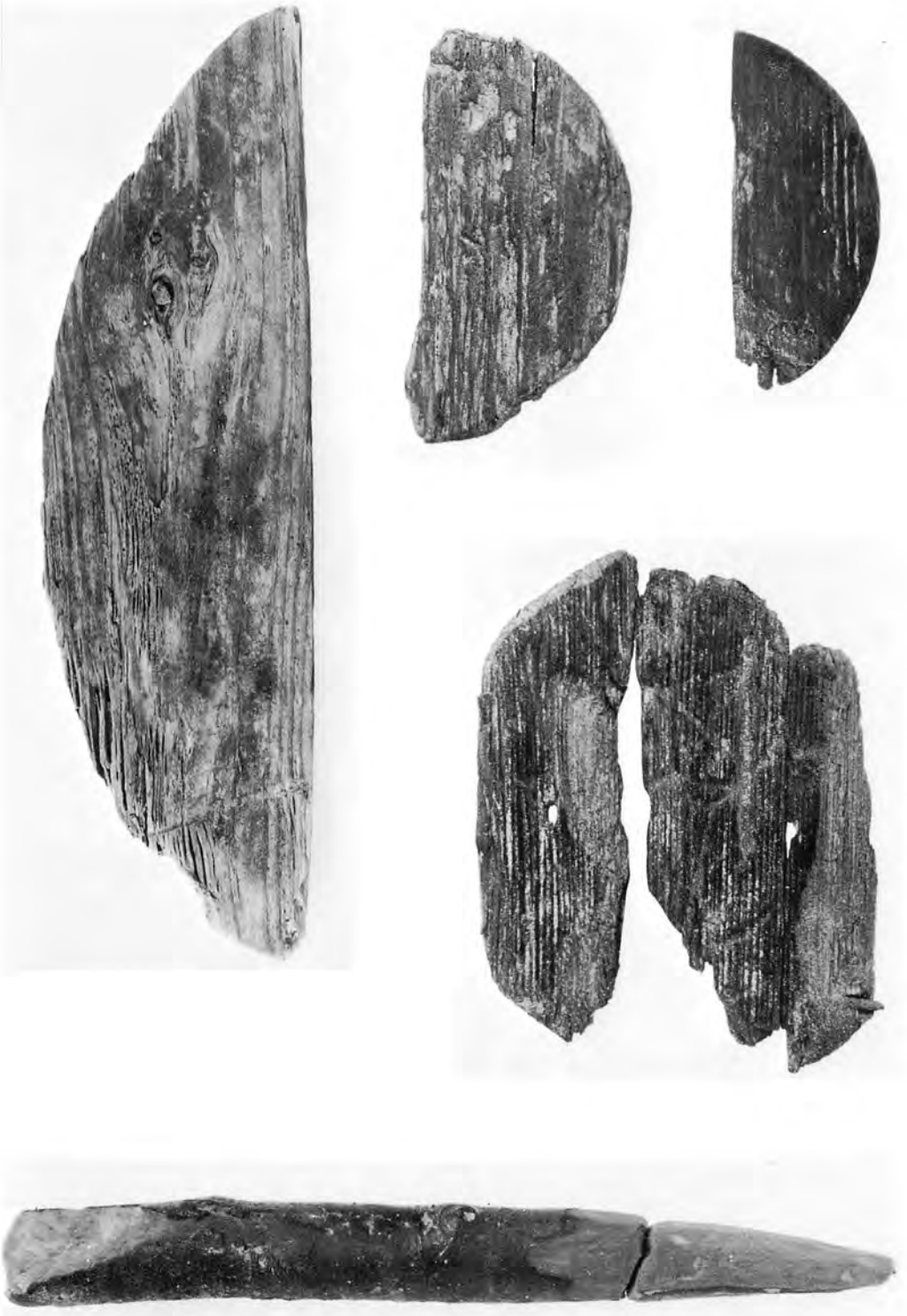
2．6号土壙（南から）

3．7号土壙（北から）

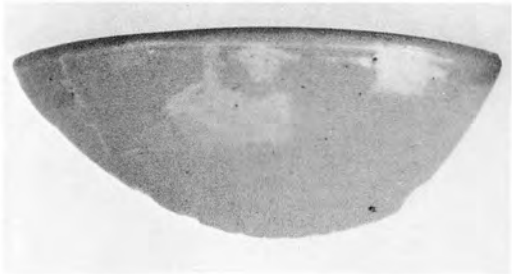


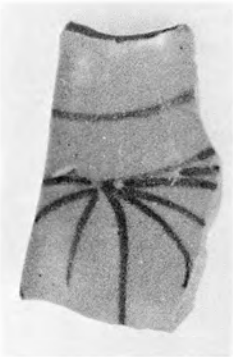
1．8号土壙とその周辺（北から）

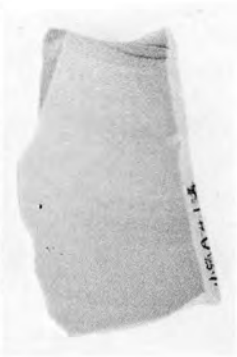
2．8号土壙（北から）

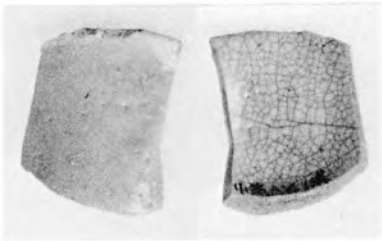


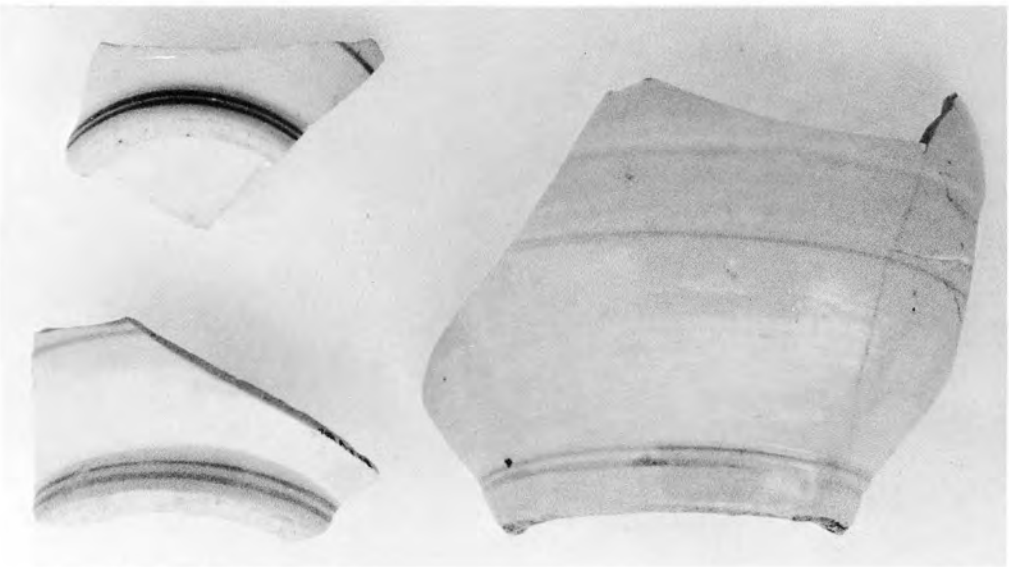
1号溝出土木製品と杭



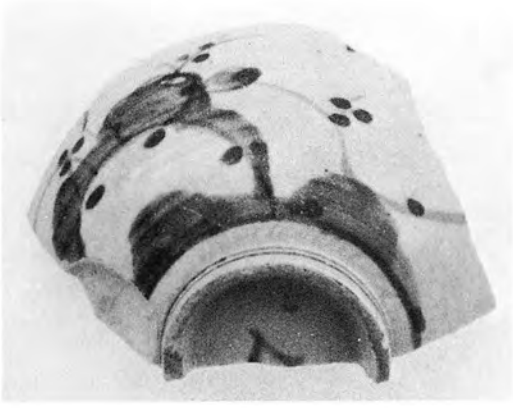


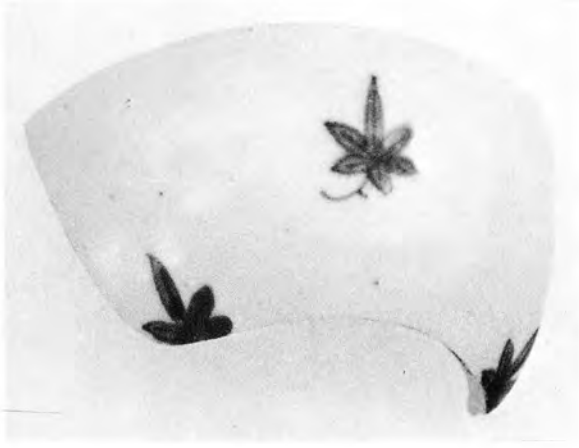


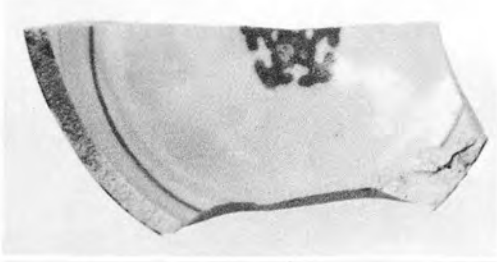




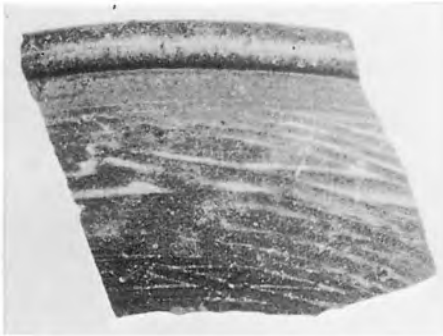
1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）







1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）

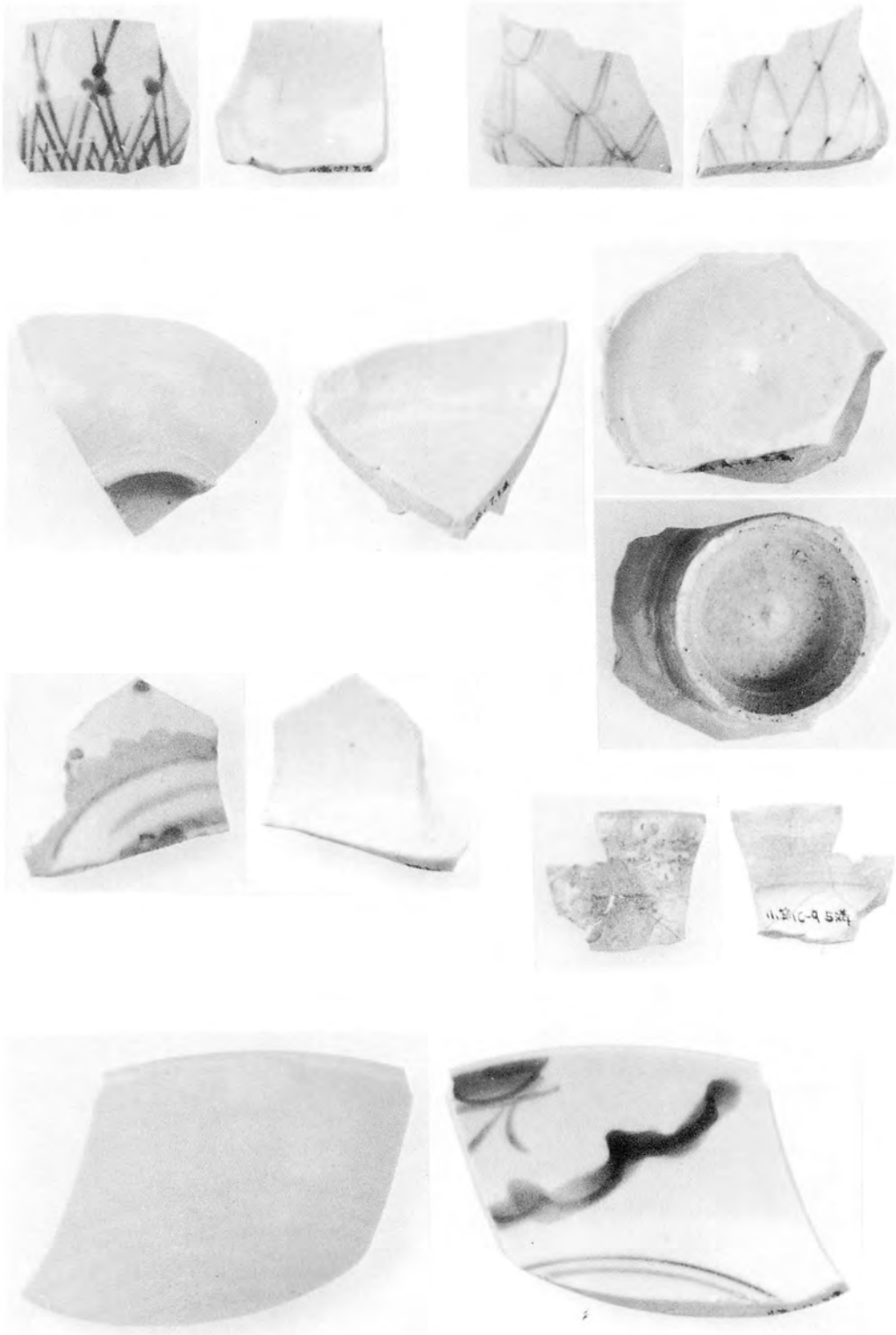


1号溝出土近世陶磁器（唐津、平戸、黒牟田）

1 号溝出土近世陶磁器（黒牟田）

1号溝出土近世陶磁器（黒牟田、嬉野）

1号溝出土近世陶磁器（庭木、黒牟田？、網田？、高田？）



2，5，6号溝出土近世陶磁器（古伊万里、金石原？）

1．1号溝出土近世陶磁器（古伊万里）

2．Ⅰ層出土近世陶磁器（古伊万里）

塩　塚　古　墳

阿蘇郡一の宮町大字宮地字塩塚
所在古墳の調査報告および阿蘇
谷の古墳関連資料の紹介

塩 塚 古 墳

目　　次

第Ⅰ章　序　　説……1

A　調査に至るまで……1

B　調調査組織……1

C　本報告書の作成……2

第Ⅱ章　調査と出土の遺物……3

1　現 地 調 査……3

2　出 土 遺 物……5

第Ⅲ章　考　　察……11

1　塩塚古墳の立地・規模・石室構造……11

2　塩塚古墳の年代……11

第Ⅳ章　阿蘇谷の古墳(関連資料の紹介)……12

1　迎平古墳出土の鏡……12

2　阿蘇神社所蔵の須恵器・土師器……14

3　番出一号墳……16

4　阿蘇谷の古墳一覧……21

資　　料

1　本村石棺……24

挿　　図

Fig. 1　塩塚古墳周辺の地形とトレンチ……3
2　塩塚古墳周辺の古墳の分布……4
3　Ｂトレンチ東側断面図……4
4　塩塚古墳出土須恵器実測図（勢田広行原図・製図）……6
5　塩塚古墳出土馬具実測図（勢田広行原図・製図）……7
6　塩塚古墳出土武器実測図……8
7　塩塚古墳出土玉類実測図（勢田広行原図・製図）……9
8　塩塚古墳石材実測図（勢田広行原図・製図）……10
9　手野小字名……12
10　迎平６号墳出土画文帯環状乳神獣鏡……13
11　阿蘇神社所蔵須恵器・土師器（勢田広行原図・製図）……15
12　番出古墳の分布……16
13　石棺実測図……17
14　鏡の拓影と実測図……17
15　鉄刀・鉄剣実測図……18

表

1　玉類計測表……18

図　　面

ＰＬＡＮ．１　塩塚古墳周辺地形図
２　阿蘇谷の古墳分布図
３　本村石棺実測図　（西健一郎氏原図・製図）
本村石棺副葬土師器（西健一郎氏原図・製図）

図　　版

ＰＬ．１　塩塚古墳出土馬具
２　塩塚古墳出土馬具
３　塩塚古墳出土須恵器・玉・鉄鏃
４　塩塚古墳と周辺の景観
５　中通古墳群風景
６　迎平６号墳出土鏡
７　迎平古墳群の現状
８　須恵器・土師器
９　本村石棺（上野辰男氏　撮影）
10　本村古墳よりみた景観（上野辰男氏　撮影）

第I章　序　　説

A　調査の契機と経過

阿蘇郡一の宮町大字宮地塩塚4108番地は、山部友久氏外41名の所有地であるが、現在地は圃場内の行き来に不便な飛地であるので、進行中の圃場整備事業に際し、約250 m南側にある公民館の横と土地交換を行うことになり昭和54年9月28日から10月4日にかけ、伐開および塚の上にある、石碑の移動がおこなわれた。碑の取崩中、棺材らしい片平な石が出てその間から副葬品が出土した。出土品は公民館前に新設される碑の土台に収められる手はずになっていた。ところがこれらの経逆知った県文化課では昭和54年10月23日、文化課学芸員島津義昭、高木正文を現地に派遣し出土品が古墳の副葬品であり、塩塚が古墳であることを確認した。文化課では直に文化財保護法上の措置を行うとともに、圃場整備事業の主管課、耕地一課、阿蘇土地改良事務所および地元一の宮町教育委員会と協議をおこない①圃場整備事業を一時中止して現地調査を実施すること②出土遺物が散逸しないようにすること③以上の事を報告書として刊行すること等が決せられた。現地の調査は昭和54年11月8日におこなった。

B　調 査 組 織

調 査 責 任 者	文化課長　岩崎辰喜
	文化課長補佐　田辺宗弘
	文化財調査係長　隈　昭志
調査事務担当者	文化財管理係長　村上孝司
	阿蘇土地改良事務所所長　原口　定
	耕地一課
調 査 担 当 者	文化課学芸員　島津義昭
調査の助言・協力者	一の宮町教育委員会・一の宮町文化財保護委員会
	教育長　佐藤哲了
	主事　　林　宏峰・主事補　岩永信一
	石田則夫・高橋　恵・森田修二・塩塚地区の皆さん

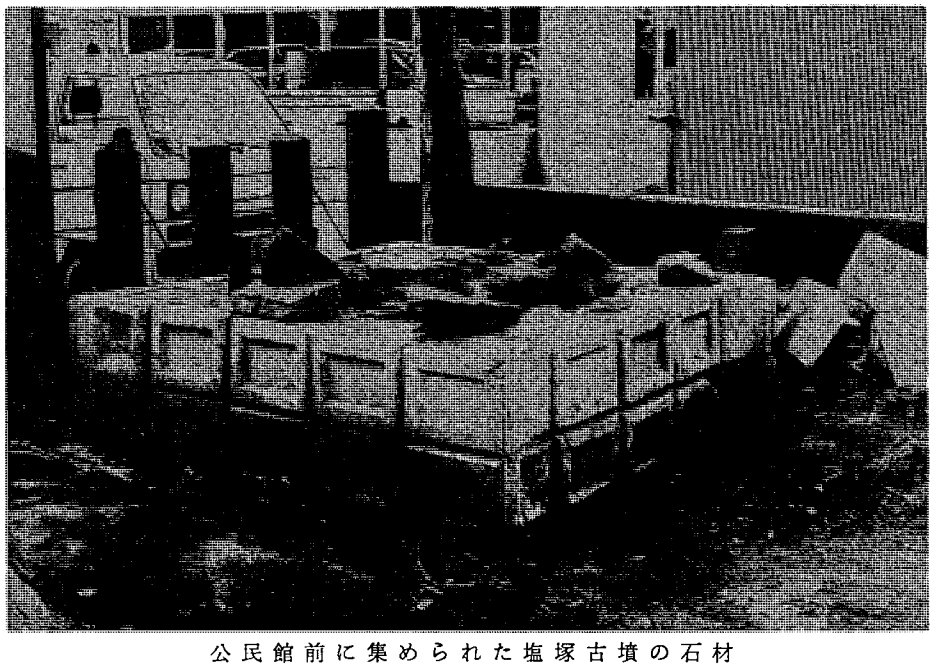
C　本報告の作成

出土資料は熊本県文化財収蔵庫にて整理、記録類の作成をおこなった。塩塚古墳の現地調査時に一の宮町教育委員会から各家で保管の古墳資料の所在について教示を得たので、本報告で紹介する。また付論の本村古墳の図面は未発表のものであったが、阿蘇谷で最も古式の石棺であり阿蘇谷の古墳を考察するうえで欠せないものであるので関係者の了承を得て収録する。

また番出一号石棺は「九州考古学」53号に発表のものであるが、鏡出土の重要な古墳の調査記録であるので九州考古学会の許可を得て再録した。

以上の関連資料の収録にあたり、本村石棺は西健一郎氏、迎平古墳群については阿蘇惟友・宮川幸生氏の諸氏より資料および図面類の提供をいただいた。また鏡について熊本大学教授、白木原和美氏　国学院大学教授、乙益重隆氏より教示をいただいた。なお整理中に熊本大学助教授　甲元眞之氏から関連資料についての教示を得た。以上の方々に感謝の意を表す。

本報告書の執筆はⅠ、Ⅱの１・２、Ⅲを島津義昭、Ⅱの２を勢田広行が担当した。なお図面の原図作成者と製図については前記のとおりであるが、作図について清田純一・鶴島俊彦氏の多大の協力があった。なお掲載の現地写真は島津、遺物については白石巌氏が撮影した。本報告書の編集は島津がこれをおこなった。



公民館前に集められた塩塚古墳の石材

第Ⅱ章　調査と出土の遺物

1　現地調査

遺跡の所在地　熊本県阿蘇郡一の宮町大字宮地字塩塚（くまもとけん　あそぐん　いちのみやまち　おおあざみやじ　あざしおづか）に位置する。東経131°16′16″、北緯32°57′05″の地点である。仙酔峡に源を発し、黒川に合流する東岳川の左岸の水田中に位置する。内牧と一の宮を結ぶ道沿いにある塩塚集落の北側にあたる。標高504ｍをはかる。

現状と現地調査　進行中の圃場整備事業によって既に墳丘は削平されていた。周溝および残存墳丘の有無を確認するため、墳丘が存した箇所に３本のトレンチを入れた。

Ａトレンチ　南北に入れたトレンチである。長さ35ｍ。耕作土30～40㎝のすぐ下は黄色粘土質土である。遺物の出土はなかった。

Ｂトレンチ　№１トレンチに直交するように入れた東西トレンチで長さ31ｍ。西側部分ではＡトレンチと同様であるが、東になると地山が急に落ちる。落込みの中は黒色の水気を多く含んだ粘土層がみられる。

Ｃトレンチ　Ｂトレンチに並行して落込みの状態を調べるために長さ９ｍのトレンチを入れた。落込みの状態はＢトレンチと同様であり東の端を明らかにするに至らなかった。

３本のトレンチからみると概に墳丘は削平されて残っていない。トレンチの東側の落込みは自然の溝だとみられる。

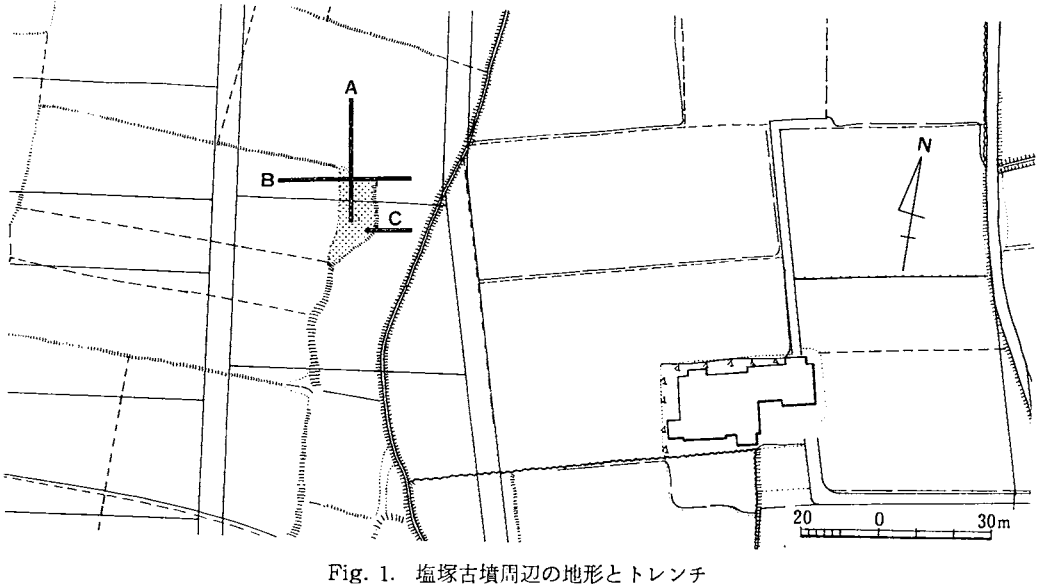


Fig. 1.　塩塚古墳周辺の地形とトレンチ

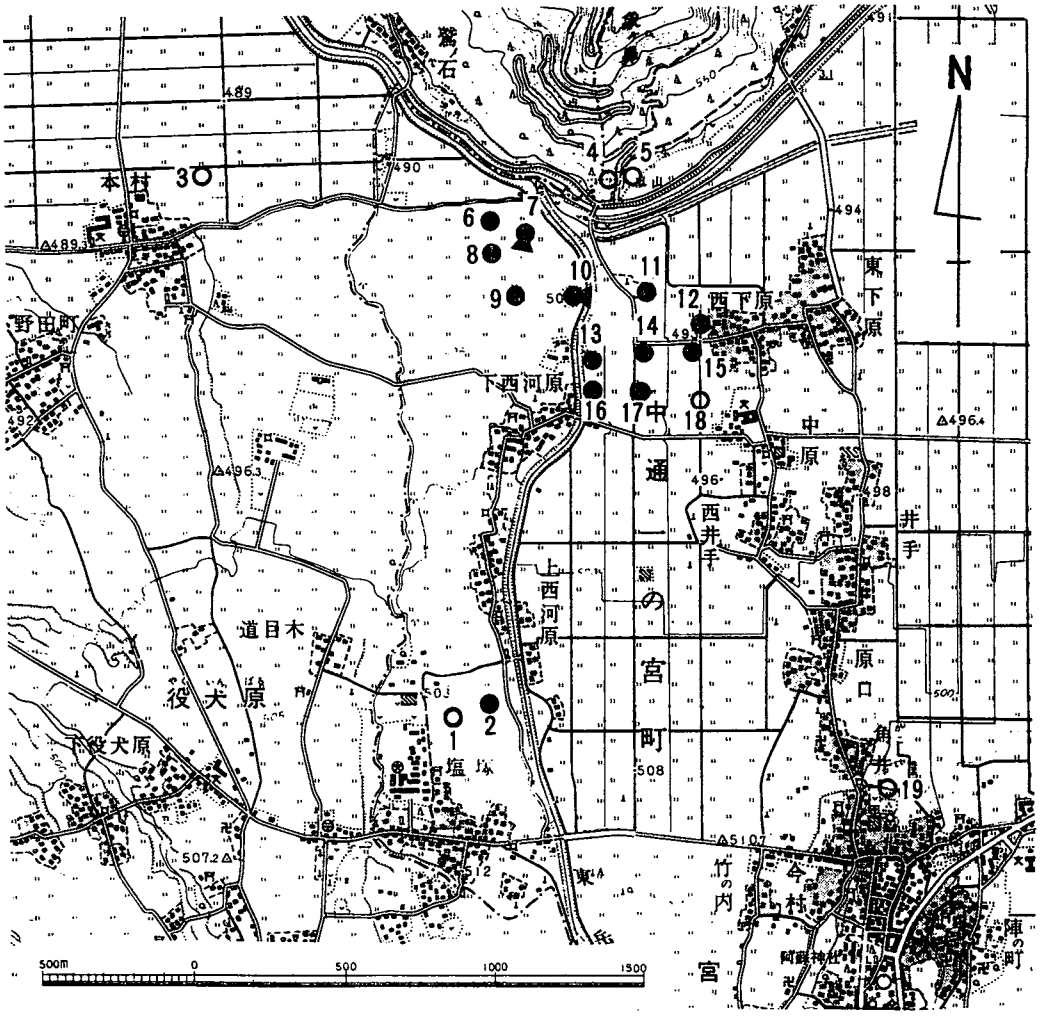


Fig. 2. 塩塚古墳周辺の分布（○は消滅した古墳を示す）

1. 塩塚　2. 不動　3. 本村　4. 大石平　5. 小嵐山　6. 鞍掛塚A　7. 上鞍掛塚A
8. 鞍掛塚B　9. 上鞍掛塚B　10. 長目塚　11. 勝負塚　12. 薬師の藪　13. 乳母塚
14. 車塚A　15. 入道塚　16. 銭亀塚　17. 車塚B　18. 休塚　19. 勇子石棺

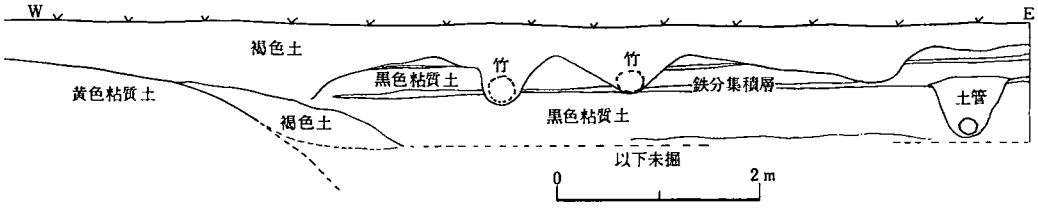


Fig. 3. Bトレンチ東側断面図

2　出土遺物

出土遺物の種類　現地の調査では遺物は出土しなかった。しかし先述のように塩塚古墳出土遺物は、現地から約250 m離れた公民館前に寄せてあったのでその大略を知る事ができる。ここに報告するのは、10月23日公民館前の土台石の中から採集したものとその後一の宮町の人が採集されていたものである。

轡　1組（銜1式分、鏡板2個）	雲珠　1個
杏葉　1個	鉄矛　1個
鉄矛　1個	管玉　4個
勾玉　1個	水晶玉　1個
鉄鏃　多数（鋒5片　身13片　茎14本分）	
須恵器　小形壺1個　甕1個分	提瓶　1個分

A　土器

提瓶（Fig 4－1）

提瓶の体部の残存である。体部には丈夫な鉤状の貼付吊手を有する。体部前面にはヘラ削によるシャープな稜を持つ。さらに吊手部にかけて縦方向のカキ目が施されている。体部前面から吊手部にかけて縁色の自然釉の付着が観察される。

壺（Fig 4－2）

壺の底部をわずかに欠損する。法量は口径；15.7、最大胴径；22.0cmを測る。頸部で屈曲し、口頸部は「く」字状に立ち上がる。口縁部を上方にひねるため外面に稜を残し、端部は丸く収る。最大胴部は胴部の中央よりやや上方にあり、球形を呈する。底部は欠損するが丸底を呈するものと思われる。胴部から底部にかけては縦、斜方向の格子タタキで器壁を成形した後ち、横方向の丁寧なカキ目により調整されている。内面胴～底部にかけては比較的端整な同心円タタキが施されている。色調は内外面とも青灰色を呈し、焼成にもムラがない。

短頸壺（Fig 4－3）

法量は口径；7.2、最大胴径；11.4、器高；7.6cmを測る完形品である。頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は直に上方に立ち上がる。胴部から底部にかけては偏球形を帯びる。頸部のやや下方には重ね焼きによる蓋の口縁部がわずかに壺の胴部に付着して残る。底部はヘラ削り（ロクロの回転を利用せず、手持ちによるヘラ削りと推察される）が施されている。重ね焼き部から底部にかけては濁緑色の自然釉が付着している

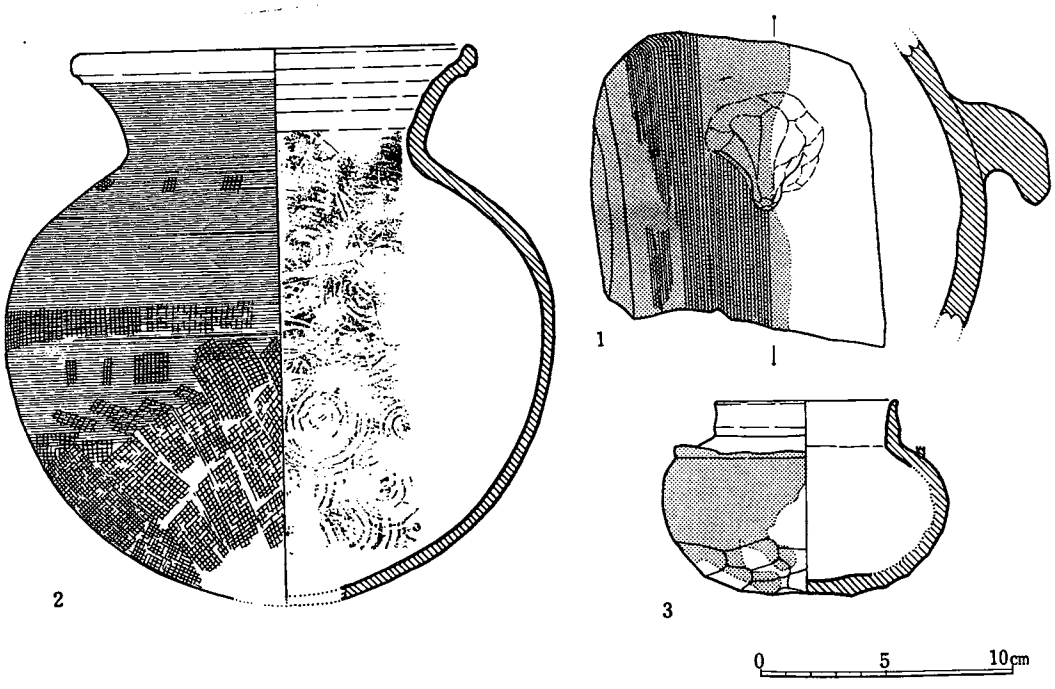


Fig. 4. 塩塚古墳出土須恵器実測図

B 馬具

鏡板（Fig. 5－1・3）鉄地金胴張の鏡板である。3は半欠している。1、3で一対になるとみられる。平面形は横広の楕円形をなし、中心部の穴に銜金具の一部が残る。釉と鏡板の間はU字状の金具で接合しているが、両端を欠失している。凸帯の上から直径4.5㎝前後の鋲を打つが、鋲の間隔は一定していない。1は上下長9.6㎝、左右長10.5㎝、厚さ0.6㎝をはかる。2も復原すればほぼ同大とみられるが1に比し鋲の数が少い。

杏葉（Fig. 5－2）力革掛みの張り出部を欠失する。楕円形で鉄地金胴張。中心に三葉文を持つが三葉文は小さくまとまっている。三葉文および周縁に鋲が打たれている。その数37個である。左右幅8.8㎝、厚さ0.5㎝をはかる。

雲珠（Fig. 5－4）鉄地金胴長で円形をなし、3本しか残存していないが、8本の足金具が復原される。足金具の先端には鉄製の鋲が残る、中空の円形部中央には二本の沈線に挟まれて破線をめぐらす。外側の沈線から外向に8個宝珠形の文様をもつ。さらに外側にも二条の破線をめぐらす。円形座の径は6.2㎝、足金具の長さ1.6㎝、幅1.2～1.4㎝をはかる。

轡（Fig. 5－5・9）5は円形の素環の鏡板で、兵庫鎖の一部が残っている。径0.6㎝の丸捧を用いている。9は銜身で、一端を欠失しているがおそらく二連式になるとみられる。鏡板を欠失しているが一端に環状金具の一部が残っている。径0.6～0.8㎝の丸捧を用いている。

留金具・その他（Fig. 3－6～8）鋲および鋲穴を持つ鉄製品である。6は一方が丸味を帯びる。2個の鋲がみられる。その間に鉄金具が巻いているが、一部しか残っていない。左右幅

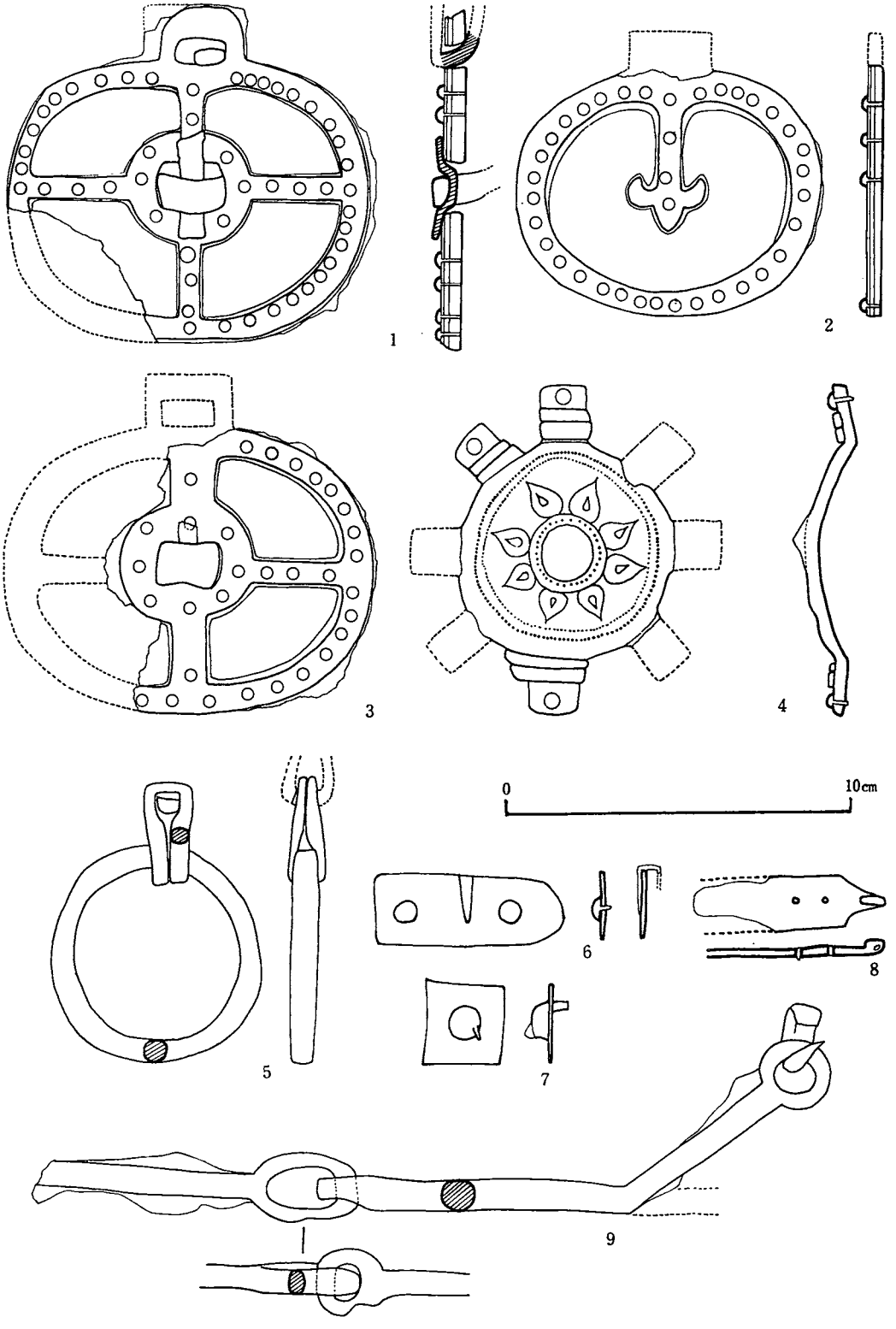


Fig. 5. 塩塚古墳出土馬具実測図

5.6cm、上下幅2.1cm、厚さ0.2cmをはかる。 8は一端を欠失する。一方は巻き一穴をもつ。また中心部にこ個の小穴をもつ。恐らく鋲穴であろう。左右現在長5.5cm、上下幅1.5cm、幅さ0.25cmをはかる。 7は四辺形をなし、中央部に1個の鋲をもつ。四辺形は2.2×2.5cm 厚さ0.1cmをはかる。以上の金具は鞍金具の一種だとみられる。

C 武器

銑鏃（Fig. 6 ・ 2～15） 33片が出土しているが身の部分破片が多く、鋒および茎の残存しているものは鋒5片、茎14本分である。全て有茎式の鉄鏃をみられるが鋒の形状で2型式にわかれる。

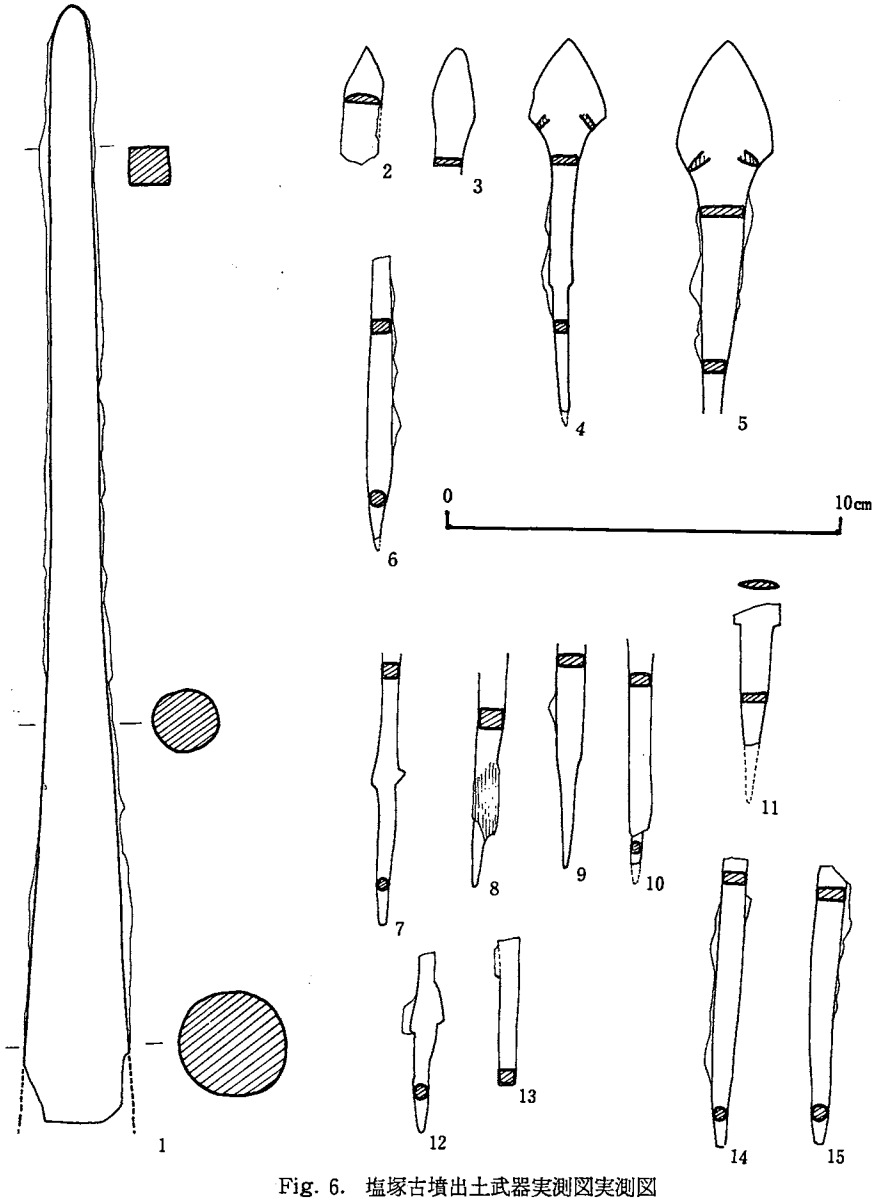


Fig. 6. 塩塚古墳出土武器実測図実測図

(1) 棘箆被鑿箭式（２・３・11）この式は２・３の片丸造のものと11の両丸造にわかれる。

(2) 有茎三角形式（４・５）この式は４がほぼ完形で復原全長10cmをはかる。

鉄矛（Fig. 6・1）基部の筒状の部分を欠失する。先端部は断面方形で身の中位から基部にかけて円形をなす。尖端はやや丸味を帯びている。現在長29cm、先端部付近では一辺1.0cmの四辺形、基部付近では直径2.8cmをはかる。

D 玉類

管玉（Fig. 7・1～4・6）全て碧玉製品。穴の縁には磨耗痕がある。

水晶玉（Fig. 7・5）水晶製で六角に面取りしている。頭部は敲打のままで平滑化されていない。下端は欠失している。上部に一方からの穿孔がみられる。また下方にも未通の穴跡がみられる。

勾玉（Fig. 7・7）水晶製。頭と尾がほぼ同大で、背は丸いが腹部にはやや稜がつく。

図番号	全長	断面形	穴径	図番号	全長	断面形	穴径
1	24.8	7.9×8.25	3.4・1.8	5	28.0	10.4×8.6	3.8・3.0
2	22.1	9.4×9.35	3.3・2.2	6	27.9	8.4×8.0	3.9・2.2
3	23.2	8.1×8.0	2.7・2.4	7	20.2	8.45×7.8	3.2・1.2
4	22.2	8.0×7.9	2.8・4.5				

Tab. 1 玉類計測表（単位mm）

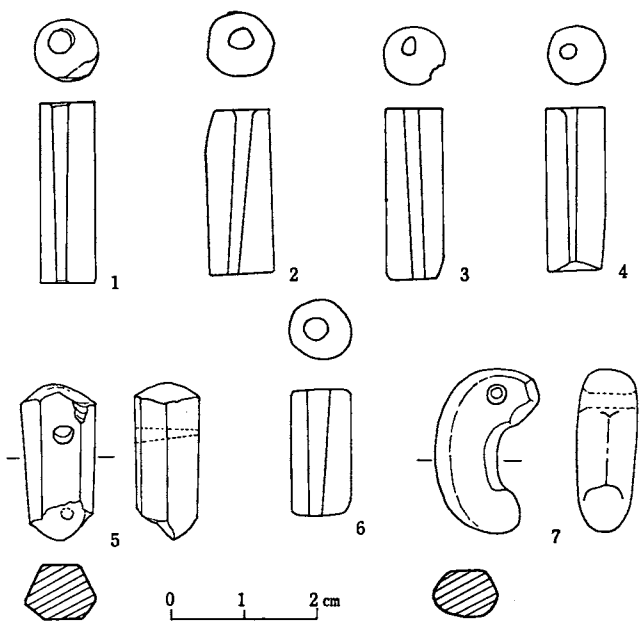


Fig. 7. 塩塚古墳出土玉類実測図

E　石材

公民館前に移動してある古墳の石材は、記録碑の台座とするべく既にコンクリートで覆われていたが、少数の石材はそのような処置がなされていなかったので記録を行った（Fig. 8）。すべて安山岩の扁平の礫で一面に赤色顔料が残っている。最大のものは長さは約1.2 mをはかる。節理面を利用して古墳の用材となしたものであろう。側辺にはさらに細い打撃調整が加えられているものもある。塩塚古墳の他の石材も大部分がこの位のものであったという。

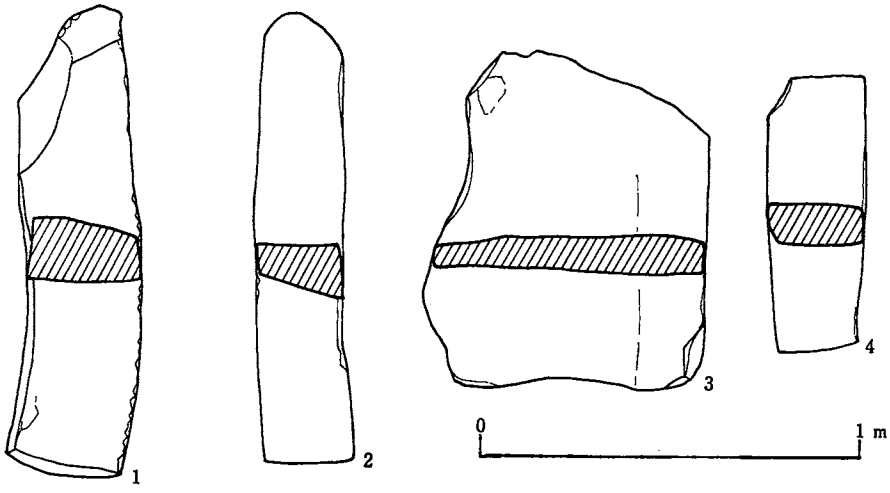
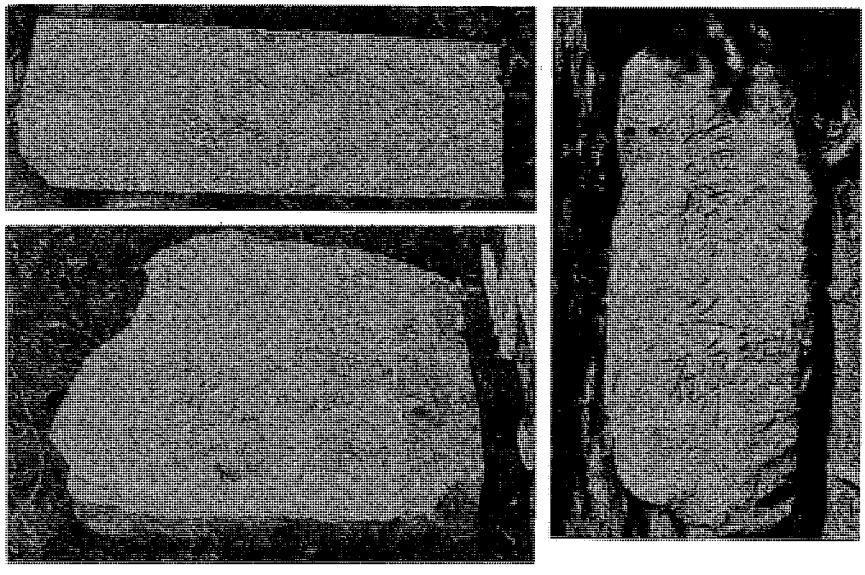


Fig. 8.　塩塚古墳石材実測図



左上は4　左下は3　塩塚古塚の上に立てられていた石碑

第Ⅲ章　考　　察

1　塩塚古墳の立地および規模

立地　阿蘇カルデラの平坦面に位置する。削平された塩塚古墳の墳丘で標高504 mであった。近年の水田化に伴い現在は水田となっているが、明治期から昭和初期にかけては古墳を含めた周辺は牛馬の飼料を刈った草地であったと伝えられている。このことから古墳自体が大規模であったか、又は周辺が小高い草地であったことが推定される。古墳の東側は一段低くなって沼状になってたことがトレンチの断面より観察された。塩塚の集落全体が東岳川の形成した微高地上に立地しているとみられる。塩塚古墳は、この微高地の最北部に位置していたとみられる。この点、中通古墳群の長目塚、乳母塚、銭亀塚などと共通の立地をもつ。

規模　トレンチによって規模の確認は出来なかった。しかし圃場整備前の図面によると、南北25 m、東北10 mの高地があり、この地点が石材や遺物の出土地点と一致するので、この高地が塩塚古墳の墳丘である可能性が強い。墳形については手懸を欠くが、古墳の周辺が水田化した昭和初期以降大規模な地形の変更は行われていないので、墳丘は旧状を残していたとみられる。前方後円墳だとするには小規模過ぎるきらいがある。むしろ円墳であったと推定されよう。

石室構造　残された石材は扁平な安山岩で、いずれも扁平な面に赤色顔料が付着している。したがって竪穴式石室とはみられない。石棺だとすれば、当然長さ幅ともより扁平な石材が出土しているはずであるが、そのような事実はない。以上の事からみれば扁平石を組み合せた小さな横穴式石室であった可能性が強い。削平に立会った人々の話しを総合しても南方に小さな入口があったと言う。このことは塩塚古墳が横穴式石室であったと考えるに矛盾を生じない。

2　塩塚古墳の年代

出土遺物のうち馬具は、楕円形の鏡板および円形の杏葉で特徴付けられる。鏡板の表面に十字形の飾りをもち四分したり、杏葉に三葉文があらわれるのは、5世紀末から6世紀前半にかけて表われる馬具の形式である。次に土器についてみると、出土した提瓶、壺、短形壺の年代を表徴する点を列記すると次のようになる。

1　提瓶の把手は鉤手状を呈し、吊手の退化は認められない。

2　壺の口縁部についてみると端部は丸味を帯びシャープさに欠けるが、壺内面の同心円タタキは端整であり、既して器の製作は丁寧である。以上の馬具の形式と須恵器の特徴から、塩塚古墳の年代を6世紀中葉に位置付けておく。

第Ⅳ章　阿蘇谷の古墳（関連資料の紹介）

1　迎平古墳群と出土鏡

迎平古墳群　一の宮町大字手野字迎平・橋詰・的場に分布する古墳である。墳丘は旧状を留めぬものもあるが、かっては８基以上の古墳が分布していた。今日５基が存する。昭和54年10月一の宮町文化財保護委員会の諸氏と現地踏査を行い古墳の確認とともに番号を付した。尾篭と手野を結ぶ道を接にして西側が小字迎平であるが、ここに１～３号墳が位置する。外輪の山麓斜面にあたり、一帯は「塚ン園」（つかんその）と呼ばれている。道の縁に直径約10ｍ、高さ約３ｍの円墳がある（５号）。さらに道から下った水田中に直径4.3ｍ高さ約1.5ｍの封土がみられる（４号）。以上が墳丘の残存するものであるが、南側に明治年間に朱のついた平石が出土したという箇所がある（７号）が、道路拡幅によって石材は失われた。また４号の北側の三城高氏宅からは昭和28年畑を耕作中石棺が出土、直刀を伴出したという（８号）、さらに５号墳の南の畑の縁に石材が寄せてある（６号）。この古墳は圃場整備にともない昭和50年に破壊され、石材が旧位置に集められている。安山岩質の扁平礫がみられ、奥壁とみられる大石が南

1	宮　後	15	杭　木
2	宮の前	16	灰　取
3	神宮司	17	桑の元
4	橋　詰	18	三竹寺
5	迎　平	19	平　井
6	年の神	20	中　園
7	堀　田	21	平　園
8	的　場	22	河原田
9	八反田	23	土　井
10	盤名木	24	土井平
11	川久保	25	外　園
12	一の生婦	26	北湯の口
13	当の木	27	湯の口
14	迎　田	28	尾龍田

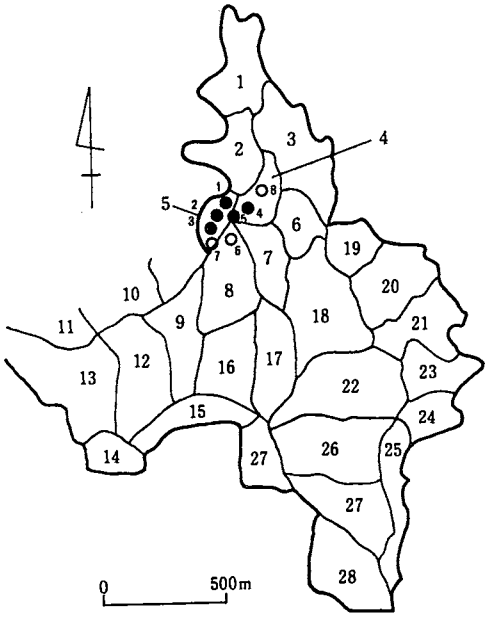


Fig.9. 手野小字名

面してあり、この部分は旧状を保っているとみられる。これらの石材から推定すれば、南に入口をもつ横穴式石室墳であったとみられる。なお、この古墳の破壊時に鏡が出土して地元に保管されている。

鏡　環状乳神獣鏡で半分を欠失する。破れ口は古い。鋳上りは良好であるが、鏡面は取りあげた後の鑢痕がある。文様の間には赤色顔料がわずかに残っている。

平縁は二区に別れて外側は交互して連続する波状文が描かれているが、鋳上りが悪く不鮮明な箇所がある。内側は外帯よりやや低くなり逆時計廻りに飛鳥走獣がみられる。湯廻りが悪く盛上り内側の圏線と接続している箇所がある。内区への移行部は外行する鋸歯文帯をめぐらす。内区は半截円と方格を交互に配しているが、方格の中に文字はない。内区は復原すれば8個の乳を持つとみられるが4個が現在する。環状乳を腰部とする右向の獣は頭部が虎形をなし口に巨を銜える。紐座は扁平で頂部がやや平担化している。

面径14.0cm、紐高0.85cm、紐径3.05cm、紐穴の最大幅1.0cm、紐穴の高さ0.6cmをはかる。

この鏡は宇土郡不知火町国越古墳出土のものと同型である。この古墳は1966年に乙益重隆氏等によって調査された全長62.5mの前方後円墳で、石室の屍床および石棺から多量の遺物が出土した。鏡は、石棺内から画文帯神獣鏡一面、東屍床内から四獣鏡一面、西屍床内から獣帯文鏡一面が出土している。

国越古墳出土のものは迎平鏡に比し径がわずかに小形であるが文様間の寸法等は同一である。とくに違るのは、紐の頂部の形状が迎平鏡が扁平であるのに対し、国越のものは半円球状をなす点である。このような差は踏返しによって生じた違いとみてよい。なお塩塚古墳出土の画文帯環状乳神獣鏡と同型の例は上記の国越古墳の外に次の4ケ所のものが知られている。

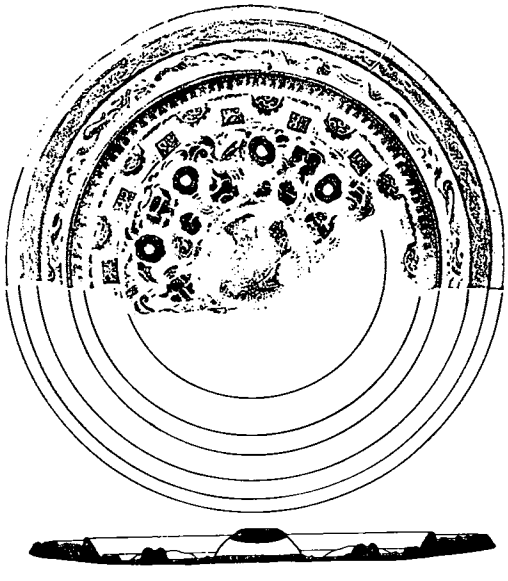


Fig. 10.　迎平6号墳出土　環状乳　神獣鏡

(1)　福岡県嘉穂郡穂波町技国・石ケ坪・山ノ神古墳　(2)　宮崎県児湯郡高鍋町・持田20号墳

(3)　熊本県玉名郡菊水町江田・船山古墳　(4)　香川県綾南町羽床小郡・蛇塚古墳

主に九州地方に分布している点が注目される。地域的にみても独立した阿蘇盆地の小古墳から出土した鏡が北・中九州に一連の繋りを持つことの意味は重い。

2　阿蘇神社所蔵の須恵器・土師器

提瓶（Fig.11、1・2）　1、法量は口径；5.9、器高；18.5cmを測る。頸部にはヨコナデによる稜を有する。口頸部は外上方に立ち上がり、口縁部でやや内傾させる。体部・前面の張り出しはあまり大きくなく、ゆるやかな丸味をもって底部へ続く。肩部には左右にハリツケの把手を有する。体部前面はヘラ削り後ヨコナデ、背面はカキ目が施されている。体部中央には、前・背面ともヘラ状工具による「×」印を有する。

2、提瓶の口縁部をわずかに欠損する。体部前面はほぼ球形を呈する。体部背背面、後部はヘラ削りを行なっているため明瞭な稜を残し平担面を有する。一方、背面前部は偏球形を帯び底部へいたる。肩部には左右に貼付の吊手を有するが端部はいずれも欠損する。口頸部には横方向のカキ目が施されている。体部には幅2～3㎜の5条の同心円状の凹線が施されている。それらの凹線の間には櫛状工具による列点文を配する。この列点文は時計回り方向に粘土が動いているため、ロクロの回転を利用して、左右向より軽く突いたものである。さらに底部には部分的ではあるが列点文と同様な工具によるひつかき痕が観察され、その後ナデ調整が施されている。部分的ではあるが焼成時における気泡を有する。

高坏（Fig.11・3）　脚部に比べて坏部の占める割合が大きい、短脚の無蓋高坏である。法量は口径；11.5、器高；9.6、底径；9.4cm（復原）を測る・口縁部と体部はヨコナデによる稜をもつて分れ、受け部を意識している。立ち上がりは長く3.2cmを測り、直に上方に立ち上がり口縁部でやや外反させる。脚部は短く外下方に「ハ」字状に開く。脚、端部は短く、外下方につまみ出され外面を軽くナデているため端部外面はやや窪む。さらに脚部内面にわずかな粘土の降起痕が観察され、坏部と脚部は接合されたものと推定される。口縁部から受け部にかけてはヨコナデ、体部から底部にかけては回転ヘラ削り、脚部はヨコナデが施されている。内面は全体的にヨコナデが施されているが、坏・底部には部分的に指圧痕が残りその後不定方向のナデにより調整されている。

高坏（Fig.11・4、土師器）　高坏の坏部から脚部の一部にかけての残存である。法量は口径；23.7cmを測る。坏部は技法上の稜をもって上半部と下半部に分かれる。下半部は内弯気味に外上方に、上半部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。坏部と脚部は明瞭な痕跡は残さないが接合によるものと推定される。器の調整は全体的に非常に丁寧である。外面、口縁部下方は荒い縦方向のハケが施されその後斜、横方向のヘラ研磨により調整されている。坏部から脚部への移行部は指圧痕と部分的にハケ目が観察される。脚部は坏部と同様に緻密な縦方向のヘラ研磨を施す。内面の上半部も外面と同様に横、斜方のヘラ研磨が、下半部はやや荒い斜方向のヘラ研磨を施す。脚部はヘラ状工具の先端で刺突させながら回転させたような削り痕を残す。色調は内面、茶褐色、外面；暗茶褐色を呈する。

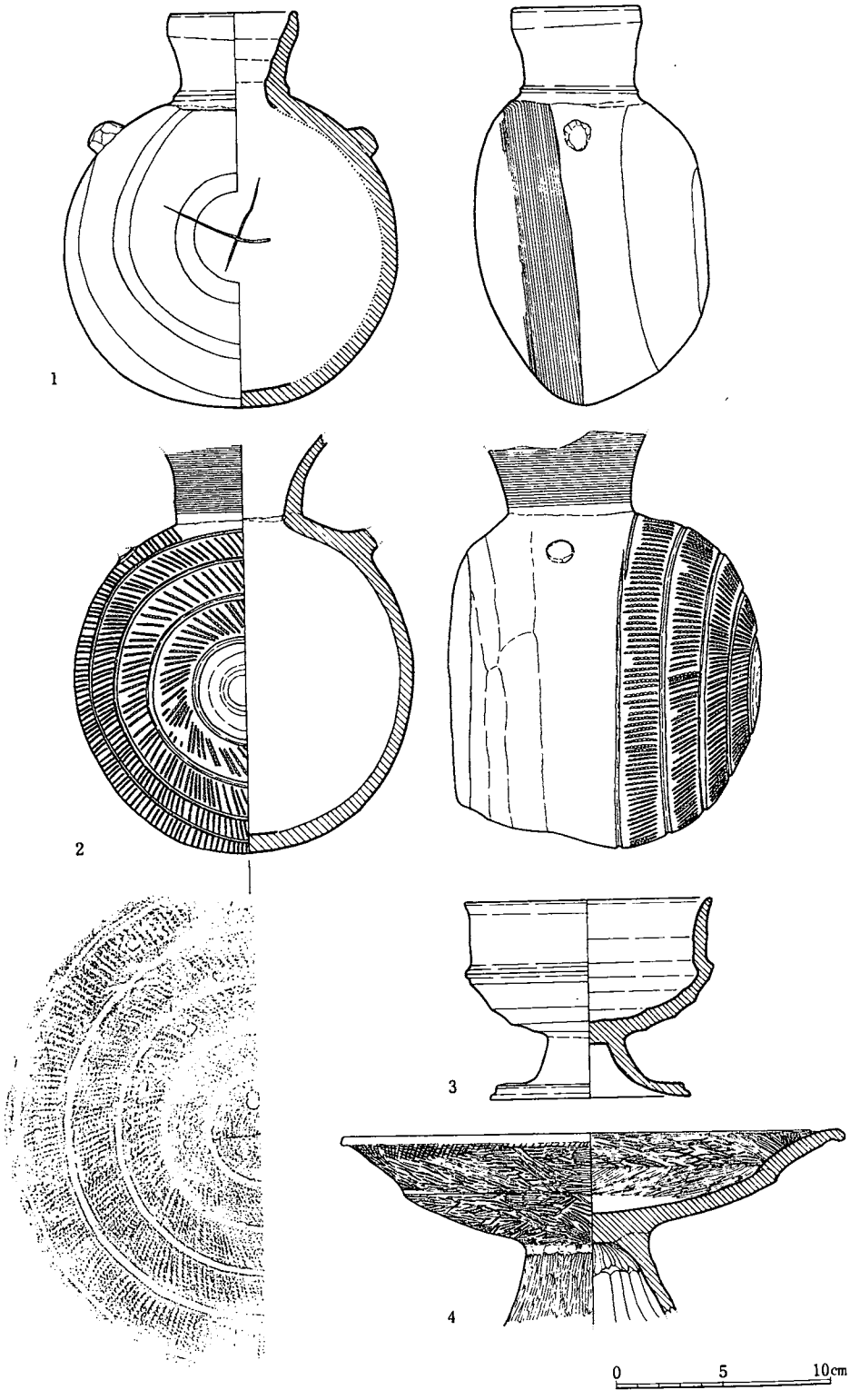


Fig. 11. 阿蘇神社所蔵須恵器(1～3)・土師器(4)

3. 番出一号墳

1. はじめに

阿蘇谷に分布する古墳としては、中通古墳群が著名である。この古墳群は長目塚古墳（前方後円墳・全長111m）を主墳として14基以上の古墳が知られており、阿蘇谷最大の古墳を形成している。さらに、この中通古墳群から北東方向、手野地区には4カ所の古墳群が知られており、それらの分布と年代については既に乙益重隆氏により詳細な考察が加えられている[1]。

今回紹介するのは、従来より石棺の存することは知られていたが調査が充分でなく、内容の明らかでなかった坂梨地区の石棺の一例である。

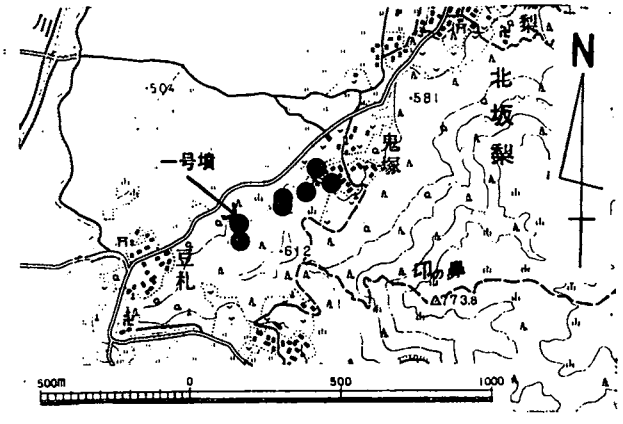


Fig. 12. 番出古墳群の分布

2. 石棺の構造

石棺は一の宮町大字中坂梨字番出（132番地）に所在する。場所は阿蘇谷全体を一望することの出来る外輪山の中腹傾斜面で標高約500m、豆札の集落の北東部あたり、水田面との比高差は約30mをはかる。凝灰岩のバラスを採取する石切場の削平中に発見されたもので、調査時には既に棺身の周辺は削布され、石棺の東小口部と南壁は取りはずされており、遺物は発見者により棺外に持出されていた。主体部は板状節理の安山岩を使用した組合せ式石棺で、大略長軸は東西を示す（Fig. 13)。側壁には大きな平石を2枚組み合わせているが南側壁はさらに小平石を用い、合わせ部の補充となしている。棺底には細長い平石を三枚組み合わせ並置している。蓋石は扁平な大型の一枚石を用いる。棺材の端部の要所には丁寧な敲打痕が見られる。また棺の内面には赤色顔料が厚く塗布されている。棺内は土砂等の流入もなく旧状を保っていた。石棺は赤褐色の地山に土壙を作り、さらに小口部、両側壁部を据え固定させるため溝状に一段深く掘り下げている。土壙は方形で東西長約4m、南北長約2m、深さ約0.9mで二段に作られていた。また棺底から地表面まで約1.5mで、0.5mの黒色土による低い封土が認められた。

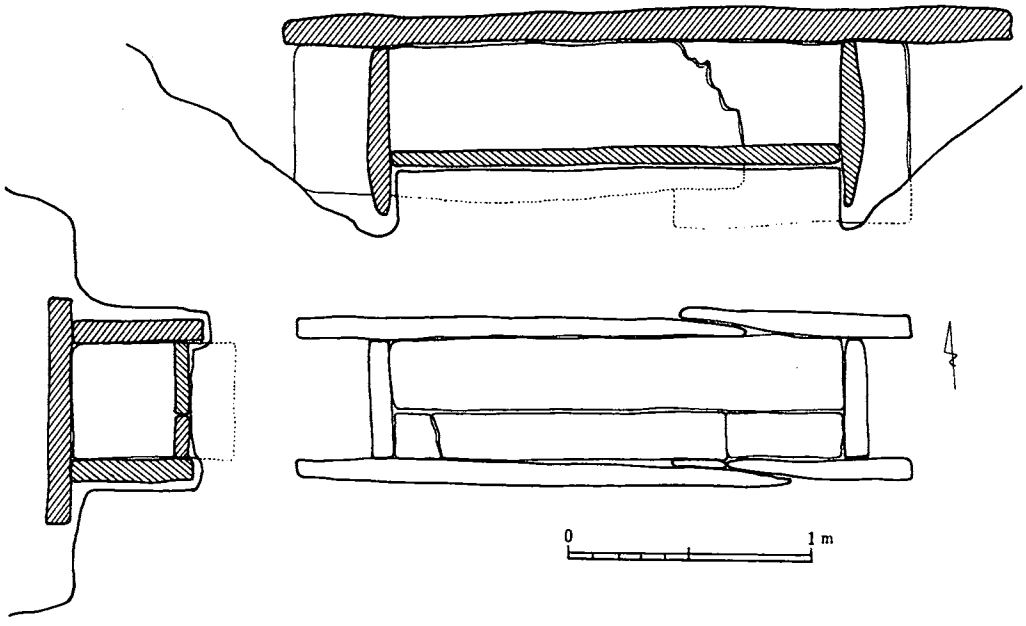


Fig. 13. 石棺実測図（東小口部・南側壁は復元した）

3. 遺物

発見者の言によると、東側の小口部を取り除き、そこから鉄棒を挿入し遺物を取り出したとのことである。遺物の配置状態を聞取りにより復原すると、頭骨が東にあり、その南に鏡、中央部に鉄刀、鉄剣があったという。なお蓋石を除去した後、棺内を観察したところ、櫛の破片が見られた。

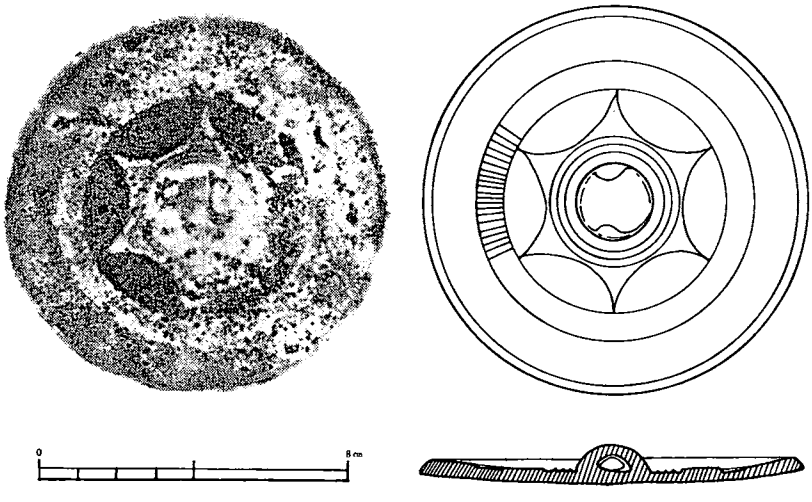


Fig. 14. 鏡の拓影（左）と実測図（右）（1：2）

鉄刀 (Fig. 15・1) やや内彎気味の細味の刀で全長82cm、刀身長62cm、茎長20cm、刀幅は茎が2cm、刀中央部で2.2cmをはかる。茎には2カ所の目釘孔がある。茎にわずかに木質が残っている。

鉄剣 (Fig. 15・2) 茎の先端を欠くが、現存長46cm刃わたり39.8cm、刃幅は茎が1.4cm、関部が3.4cm、刃中中部で2.8cmをはかる。

鏡 (Fig. 14) 内行花文鏡で、背面は銹がつよく細部を明らかに観察しえない。鏡面からかるく傾斜して背面につづく外縁の最大厚は0.4cm、幅1.4cmの外縁は内に向って、しだいに薄くなり、その内側の幅0.6cmの外帯には紐部から放射状に配置した斜行の櫛歯文をめぐらす。内区は2孤の内行花文を配し、その内側に3条の円圏をめぐらし紐へとつづく。紐は径2.1cm、高さ0.8cmをはかる。面径10cm、反りは0.2cmをはかる。銹間からみえる鏡面は白銅質で保存は良好。

櫛 竪櫛の破片とみられるもので、1個体分。細い植物性材料を用いたもので、かがりより上の部分が残っていた。発見時に撹乱したために細片となっている。

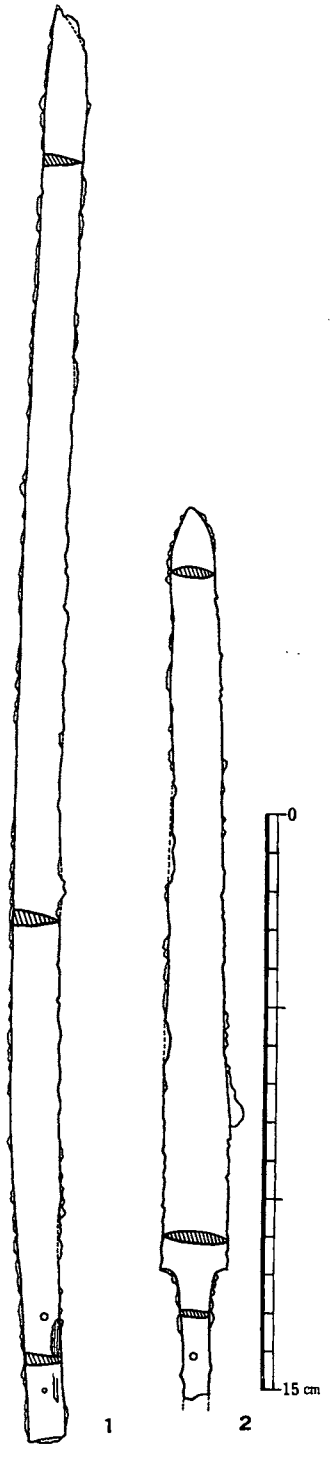


Fig. 15. 鉄刀 (左) 鉄剣 (右) 実測図

4. 出土人骨

人骨は調査前に取り出されていたため埋葬状態は明らかでないが、発見者によれば頭蓋骨が東側にあったとのことであり、東向の伸展葬であったと推定される。副葬品の鏡は肩の部分、鉄刀・剣は体側部に置かれていたと考えられる。

1) 保存状態 骨の保存は全体的に悪く、採集されていた骨も、頭蓋骨、下顎骨、上肢・下肢骨の一部で、風化がはげしい。骨の全面に赤色顔料が付着している。

・骨蓋骨 前頭骨・頭頂骨・側頭骨・後頭骨のいずれも右半部が残存し、顔面も右半部のみが残る。眉上

弓は強く隆起し、乳様突起が大きく突出する。冠状・矢状・人字縫合は、内・外板とも明瞭である。

・下顎骨　右半部の骨体部が残存し、PM^1・M^1・M^2・M^3 が残存植立する。M^3 は萠出途中で、ほとんどが骨体内に埋まる。PM はいずれも遠近側にねじれ、特に PM^2 が強い。C より近位の歯槽部がくずれており、抜歯（風習的とは限らない）あるいは他の原因によるものか明らかでない。

上・下顎骨の残存歯式は $\frac{6\ 5\ |}{8\ 7\ 6\ \ 4|}$ で、$\overline{8|}$ を除いて、いずれも咬耗度は Broca 1° である。

四肢骨　保存悪く、左側上腕骨・橈骨・尺骨（いずれも近位部欠）と、右側橈骨骨体部、左側寛骨・大腿骨・脛骨が残存する。

恥骨の恥骨結合面の平行隆線は明瞭であり、背側縁が明らかになっているが、腹側縁・上結節は明瞭でない。

2）性別　寛骨が残存するも、大座骨切痕部・恥骨下枝が欠失しており、判定に困難を感じるが、頭骨の特徴から男性であると推定される。

3）年令　M^3 は萠中途中であり、歯の咬耗度が Broca 1° で、また恥骨結合面の特長よりして、若年あるいは、成年初期（20才代）であると推定される。

5. まとめ

石棺は上述のように破壊の途中の調査であったので細部を明らかにしえないうらみがあるが、問題点をまとめてみる。

1）坂梨地区の石棺群　この石棺の周辺に6基の石棺が存することが確認出来た。したがって、これらの石棺を番出古墳群とよび、今回調査のものを一号石棺と呼ぶ。

2）石棺の年代　底板を有する石棺は類例は多くないが、阿蘇谷では東手野古墳群のうち丸山の石棺（第1号）にみられる[2]。番出と同様安山岩の石棺である。出土遺物のうち内彎気味の鉄刀は、長目塚古墳前方部の竪穴石室の副葬品にも2例が知られている[3]。また玉名市大坊古墳の鉄刀も同例1振がある[4]。鏡は、長目塚古墳前方部の竪穴石室の副葬品と同様の内行花文鏡であるが、これは鏡径8.4㎝で、番出のものに比してやや小型である。共に仿製鏡とみられる。以上の点から、番出第一号石棺の時期を長目塚古墳と近似の時期、すなわち5世紀代のものと想定する。さらに、剣、櫛の出土も石棺が新らしい時期のものでないことを示すものであろう。

3）阿蘇谷の石棺　番出第1号石棺は、現在阿蘇谷で知られている多くの石棺のうち、最古のものの1つである。長目塚古墳等にみられる大型の前方後円墳と同期に、地区を異にして、

このような小封土を有した石棺群の存することは注目される。阿蘇谷には、石棺を主体とする小古墳群が、阿蘇町西湯浦地区（二本松石棺群）、同湯浦（源太が塚石棺群）、同山田地区（山田古墳群）、高森町色見地区、白水町吉田地区などにみられる。調査が充分でなく明らかな点が少ないが、これ等のうち中通古墳群に先行する石棺、換言すれば、阿蘇谷の弥生時代から自己発展をとげて古墳を築造するに至った階層の墳墓が存在するのではないかと予測する。今後の調査が期待されるのである。

〔註〕

1）乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集　1952（熊本）

2）同上

3）坂本経堯「阿蘇長目塚」『熊本県文告財調査報告』第3集　1952（熊本）

4）田添夏喜「熊本県玉名郡大坊古墳調査報告」『熊本史学』第32号　1967（熊本）

〔追記〕　この報告は1978年、九州考古学53号に江本直氏・木村幾多郎氏および島津の連名で発表したものである。今回の再録にあたっては新らたに番出古墳群分布図を追加した。なお、調査にあたっては一の宮町教育委員会主事林　宏峰氏の協力を得た。石棺は現在一の宮町教育委員会の前庭に復原されている。

4. 阿蘇谷の古墳一覧

阿蘇谷の古墳についてははじめに、古く江戸時代から注目されるところであったが、明治から大正にかけてこれを踏査し学界に紹介されたのは中山徳五郎氏である（「阿蘇中部の旧跡及び古墳について」歴史地理第43巻第6号1925年）。その後、中通古墳中、最大の規模をもつ長目塚古墳の前方部が東岳川の改修により切断されることになり、それに伴い発掘調査が実施され、阿蘇谷の古墳について最初の学術的なメスが入れられた（坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第3集1962年）。この調査に際して乙益重隆氏を中心に中通古墳および下御倉・上御倉古墳の実測図が作成され、阿蘇谷の古墳の全体像が初めて明らかになった（乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」熊本県文化財調査報告第三集1962年）。一方、阿蘇郡内の小学校に勤務されていた平岡勝昭氏は内牧地区にも古墳群が存することに注目され、その概要を発表された（「阿蘇谷の先史文化」熊本日々新聞1967年）。これ等の成果の上に立って、九州学院高等学校考古学部は阿蘇谷の野外調査を1967年以降開始したがその活動は熊本商科大学文化財問題研究会に引継れ今日に至っている。また1970年には熊本大学考古学研究室によって阿蘇町御塚横穴の発掘調査も行われている。今回の一覧は以上の成果を集約したものである。今後の調査によって更にその内容を豊にしていかなくてはならない。一覧表を作成するにあたり下記の方々から御教示をいただいた。御芳名を記して謝意を表する。

乙益重隆　平岡勝昭　中村耕作　清田純一　上野辰男　北窓正一　宮川　進　三島　格

	古墳（群）名	所在地	墳形	規模（単位はm）	主体部	出土品	備考
1	塔の木　1	阿蘇町大字小里字原口	円墳	—	—	—	墓地　1(1～9)
2	2	〃	円墳	—	—	—	墓地
3	3	〃	円墳	22×11　高4	—	—	草地
4	4	〃	円墳	—	—	—	茶畑
5	5	〃	円墳	5×1.5	—	—	
6	6	〃	円墳	—	—	—	消滅
7	7	〃	円墳	—	—	—	
8	8	〃	円墳	—	横穴式石室？	—	盛土なし、副葬品出土の伝承あり
9	9	〃	円墳	—	—	—	
10	浜川　(1)	阿蘇町大字三久保字前浜川上浜川	円墳	—	—	—	墓地　9(10～12)
11	(2)	〃	円墳	—	—	—	墓地
12	(3)	〃	円墳	—	—	—	墓地

	古墳（群）名	所　在　地	墳形	規　模（単位は m）	主体部	出土品	備　考
13	御塚	阿蘇町大字宮原字前田	円墳	—	—	—	墳頂に記念碑あり 3(10～18)
14	1	〃	横穴	—	横穴	ガラス玉・刀子	1974年熊大考古学研究室調査
15	2	〃	横穴	—	横穴	—	杉山
16	3	〃	横穴	—	横穴	—	〃
17	4	〃	横穴	—	横穴	—	〃
18	5	〃	横穴	—	横穴	—	〃
19	源太ガ塚（1）	阿蘇町大字南宮原村上	—	—	石棺	—	標高620m 4(19～21)
20	（2）	〃	—	—	〃	—	原野
21	（3）	〃	—	—	〃	—	〃
22	二本松（1）	阿蘇町大字西湯浦字二本松	—	—	〃	—	5(22～26)
23	（2）	〃	—	—	〃	—	消滅
24	（3）	〃	—	—	〃	—	棺材は橋などに使用
25	（4）	〃	—	—	〃	—	
26	（5）	〃	—	—	〃	—	
27	番　出（＋2）	阿蘇町大字内牧字番出	—	—	〃	—	石材の一部は内牧小学校に保管 6
28	宮山	阿蘇町大字的石字楢山	—	—	〃	—	付近に弥生後期の竪穴住居址2基あり 7
29	古園　（1）	阿蘇町大字狩尾字古園	—	—	〃	—	8(29～31)
30	（2）	〃	—	—	〃	—	
31	（3）	〃	—	—	〃	—	
32	古園	阿蘇町大字狩尾字古園	円墳	径4 高2	—	—	
33	村下　（＋2）	阿蘇町大字小野田字村下	—	—	石棺	石棺の外に土師壷	石棺は長さ1.7m、幅0.75m安山岩10
34	今古閑	阿蘇町大字山田字今古閑	横穴	—	横穴？	—	11
35	勝負塚	一の宮町大字中通字勝負塚	円墳	径58.7高11.4	—	—	墓地　12(35～48)
36	車塚A	〃	円墳	径47　高8	—	—	中通古墳群
37	B	〃	円墳	径17　高2.3	—	—	
38	入道塚A	〃	円墳	径25　高4.5	—	—	
39	銭亀塚	〃	円墳	径13　高2.5	—	—	
40	ウバガ塚	〃	円墳	—	—	—	
41	休塚	〃	円墳	—	—	—	
42	薬師の薮	〃	円墳	—	—	—	
43	上鞍掛塚A	〃	前方後円墳	全長65.5高6.5	—	—	旧状は全長約71m
44	上鞍掛塚B	〃	円墳	径25.5　高3.8	—	—	復元すれば径35m以上
45	鞍掛塚B	〃	円墳	径21.5高4.15	—	(伝)勾玉1・小玉330	
46	鞍掛塚A	〃	円墳	径33　高4.4	—	—	
47	長目塚	〃	前方後円墳	全長111.5 高9.2	前方部に竪穴式石室	鏡1・玉類・直刀・刀子・鉄鏃・鉄斧・ハニワ他	1949・1950年調査
48	中通古墳群（る）	〃	円墳	—	—	—	消滅

	古墳（群）名	所　在　地	墳形	規　模	主体部	出土品	備　考
				(単位はm)			
49	上御倉	一の宮町大字手野字西手野	円墳	径33　高5.28	横穴式石室	—	13(49・50) 石室は複室
50	下御倉	〃	円墳	径30　高4	横穴式石室	—	
51	迎平古墳　1	一の宮町大字手野字迎平	円墳	—	—	—	14(51～58)
52	2	〃	円墳	—	—	—	
53	3	〃	円墳	—	—	—	
54	4	一の宮町大字手野字橋詰	円墳	—	石棺	—	
55	5	〃	円墳	—	—	—	
56	6	一の宮町大字手野字的場	円墳		横穴式石室	鏡1	
57	7	〃	—	—	石棺？	—	明治年間消滅
58	8	一の宮町大字手野字橋詰	—	—	石棺	直刀	1963年発見、消滅
59	平井　（1）	一の宮町大字手野字平井	円墳	—	横穴式石室	剣2・短刀2・鬣3 鏃10・水晶玉4 曲玉9・青玉管8 鉄2・土焼徳利3 土焼瓶2・同腰 高菓子台1・桃実3	15 1844年発見(59～61)
60	（2）	〃	横穴		横穴		
61	（3）	〃	横穴		〃		16(62～69)
62	東手野古墳群 和田家墓地内	一の宮町大字手野	円墳？	—	石棺	—	
63	丸山1	〃	円墳？	—	〃	—	
64	丸山2	〃	—	—	〃	—	棺材のみ
65	秋葉権現塚	〃	円墳？	—	〃	—	石棺近くに秋葉大権現の石碑あり
66	観音堂前	〃	—	—	〃	—	
67	武田勘吾氏宅	〃	円墳	—	〃	—	1948年発見、消滅
68	小嵐山				磐棺	鉄剣2・鉄鏃 土師器・甕	17
69	大石平	一の宮町大字中通大石平	—	—	石棺	剣・玉・提瓶	1948年発見、消滅18
70	番出　1	一の宮町大字中坂梨字番出	円墳	—	〃	鏡・直刀・剣・櫛	1979年調査移転19
71	2	〃	—	—	〃	—	
72	3	〃	—	—	〃	—	
73	4	〃	—	—	〃	—	
74	5	〃	—	—	〃	—	
75	生出　（＋2）	一の宮町大字三野字生出	—	—	〃	—	
76	古城鼻（＋2）	一の宮町古城・古城鼻	横穴	—	横穴	—	5基以上20
77	勇子	一の宮町大字宮地字勇子	—	—	石棺	(伝)朱塊・銀環	21
78	阿蘇神社福陵 1	一の宮町大字宮地	円墳	—	—	—	22
79	2	〃	円墳	—	—	—	
80	三閑	一の宮町大字古城字三閑	—	—	石棺	なし	九州横断道路工事中に発見、埋めもどす 23
81	三久保	阿蘇町大字三久保	横穴？	—	横穴？	—	
82		阿蘇町			磐棺	なし	
83		一の宮町大字中通	円墳		竪穴式石室	—	移転復原
84	不動塚	一の宮町大字宮地字塩塚	円墳	—	—	—	不動が祀られている 24
85	尾篭	一の宮町尾篭	円墳	—	—	—	外輪山頂25
86	塩塚	一の宮町大字宮地字塩塚	円墳		横穴式石室	馬具・鉄矛・小玉・勾玉	1974年消滅 26

古墳（群）名番号の（　）付は呼称が確定していない事を示す。—は不明。（＋α）は複数存するが基数が不明な事を示す。備考のゴチの数字はＰＬＡＮ２と対応する。

塩　塚　古　墳

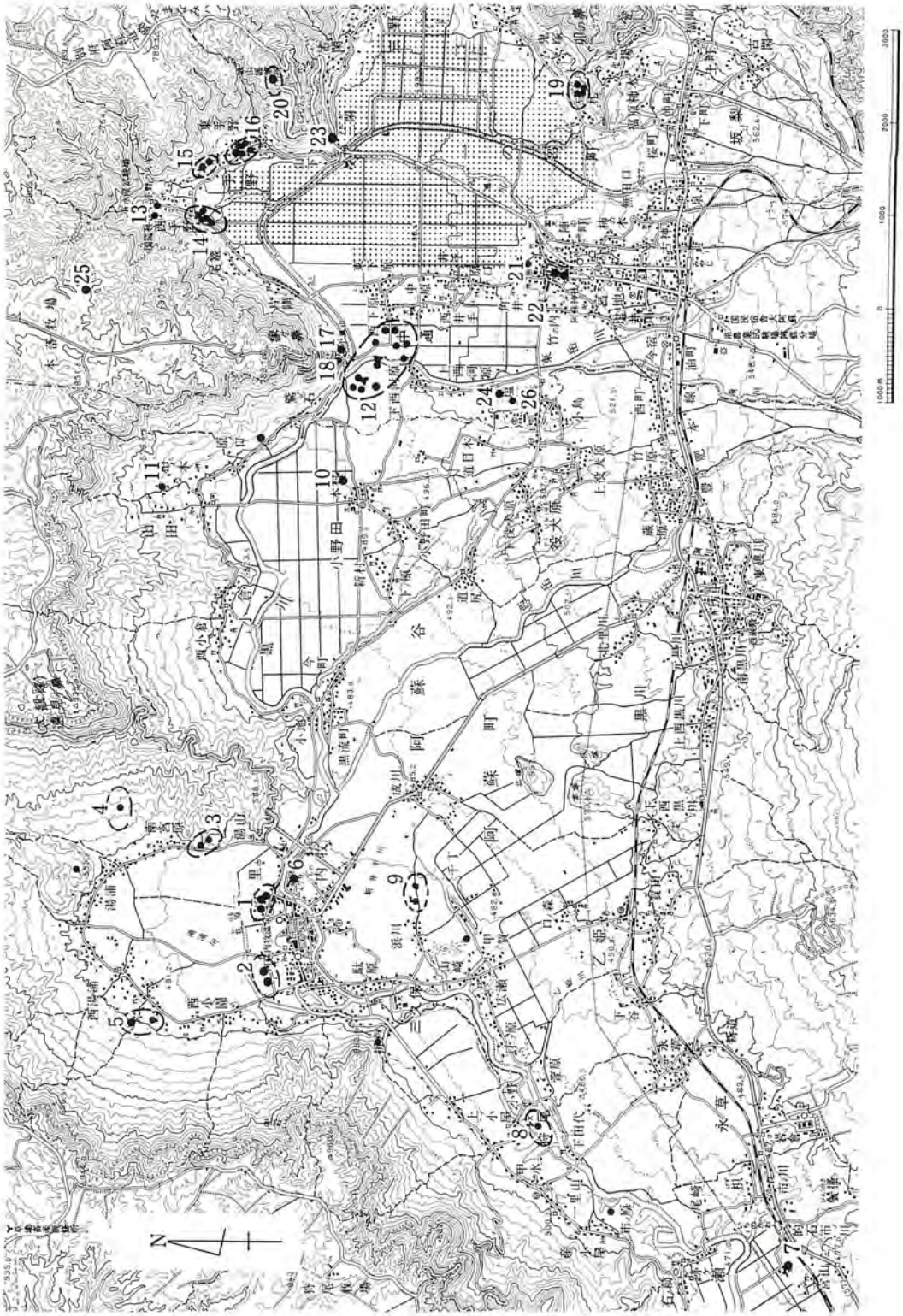
図　版

塩塚古墳周辺地形図

PLAN 1

PLAN　2

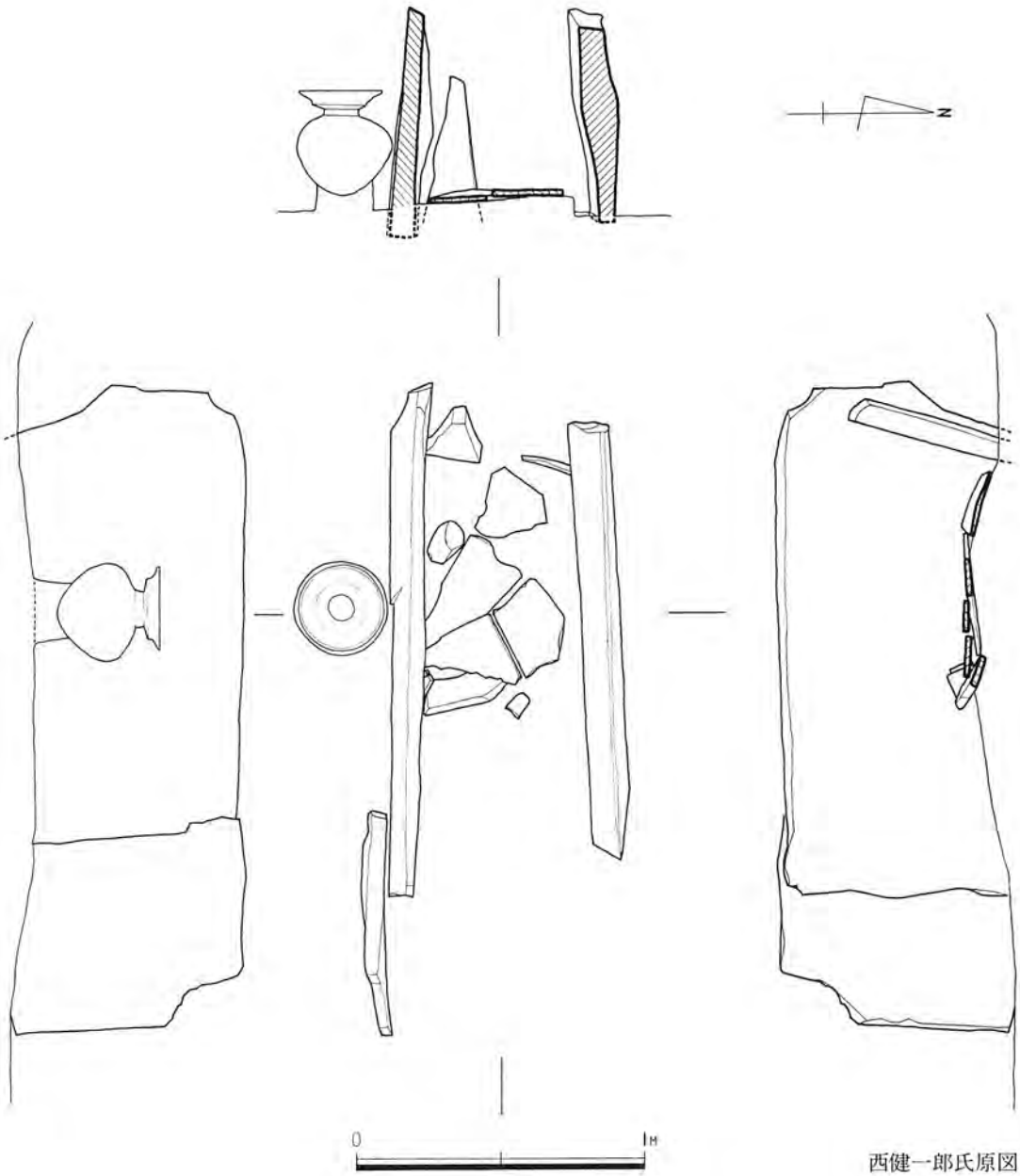
阿蘇谷の古墳分布図



※ 地図中のアミの部分は条里地割分布地区

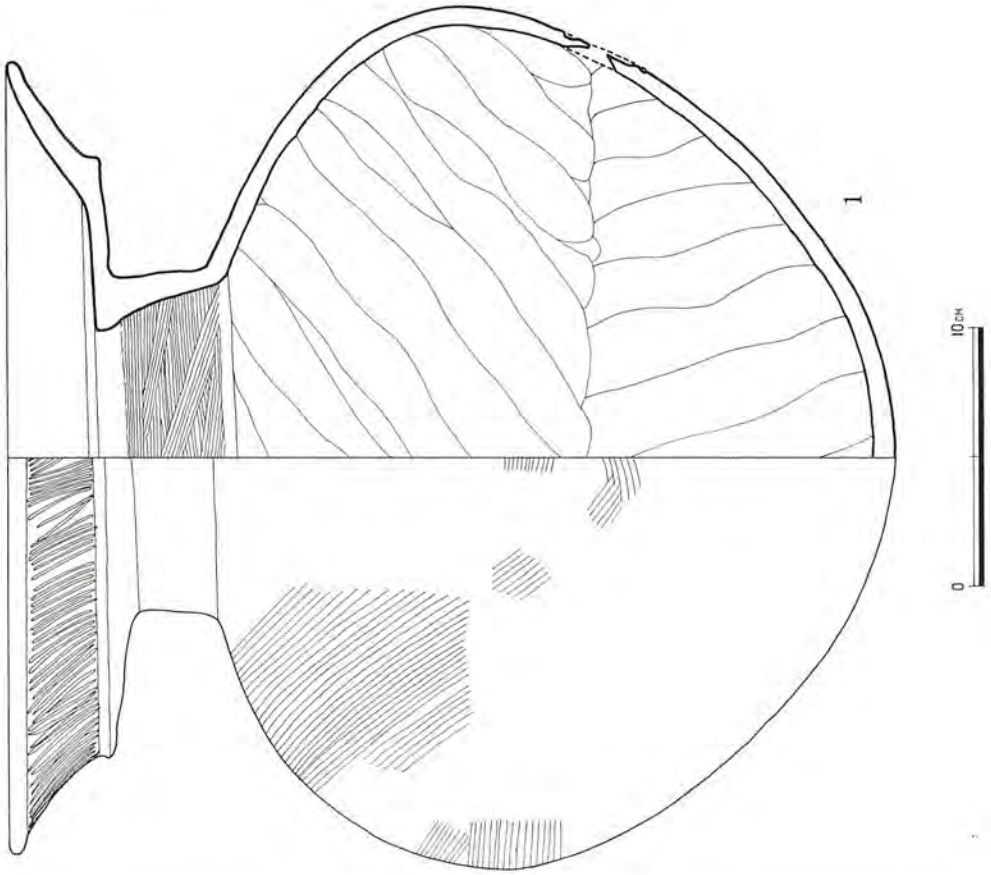
本村石棺実測図

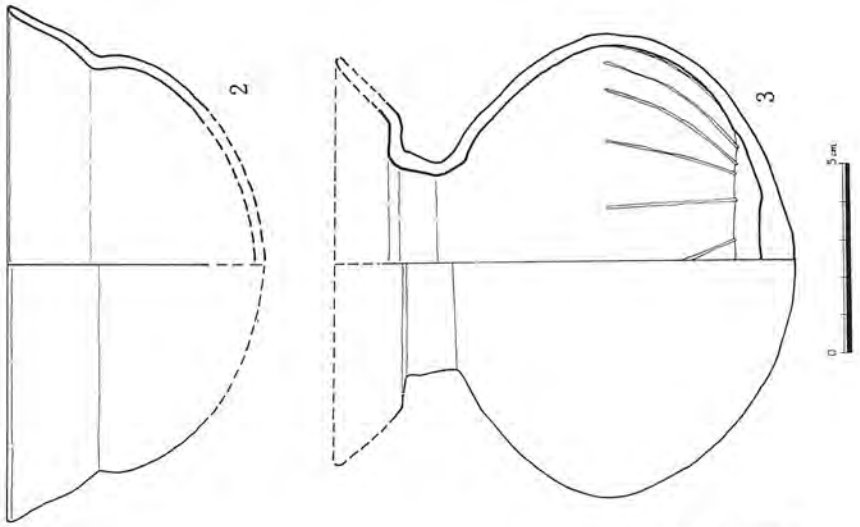
PLAN 3



西健一郎氏原図

木村石棺副葬土師器





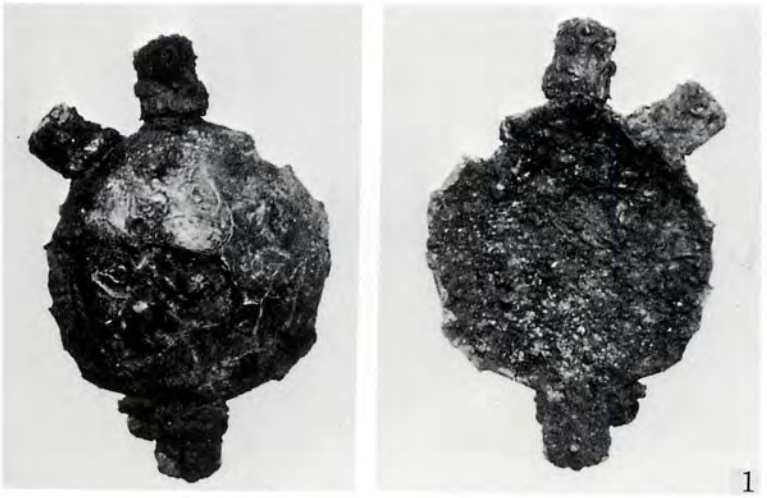
西健一郎氏原図

1．石棺棺外副葬品　2．出土地点不明　3．第2号墳出土

1

2

3

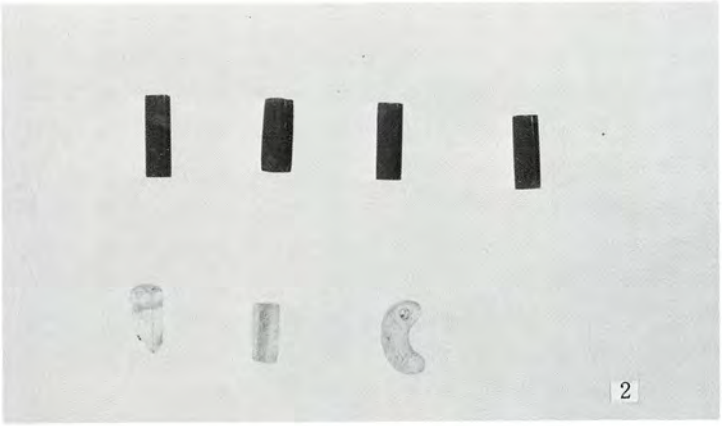


1

2

3

1


2

3

塩塚古墳と周辺の景観

1．塩塚の旧位置

2．試掘穴（縄張りの範囲が墳丘推定地）

3．石材が移された公民館

1．中通古墳群と塩塚（煙の立っている箇所）

2．上鞍掛A古墳遠景

迎平6号墳出土鏡

1

2

1．迎平4号墳

2．迎平6号墳（南からみる）

3．迎平6号墳（東からみる）

1・2・4．阿蘇神社保管　　3．本村古墳棺外副葬品 (PLAN 4の1)

1．石棺全景

2．棺外土師器副葬状況

3．石棺内の状況

本村古墳よりみた景観

1．西側　内牧・小倉地区

2．北側　象ケ鼻と山田の集落

3．東側　阿蘇五岳

4・5．調査風景

熊本県文化財調査報告　第46集

車　塚　古　墳
川田京坪遺跡
川田小筑遺跡
塩　塚　古　墳

昭和55年3月31日

発行　熊本県教育委員会
〒861　熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通2—1—82
電気ビル別館5階
☎（092）771—2161

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 46 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：車塚古墳 川田京坪遺跡 川田小筑遺跡 塩塚古墳
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日